

前書

菅野道明著『和漢名詩選類評釈』は、大正三年十月に初版が発行されて以来、平成十年十一月改訂第百五冊まで発行された「古今の名著」である。

この本の著作権は満了しているので、そのうち中国の詩について電子化を目的とした「復刻」を行った。完全な復刻ではなく、詩の紹介と言うべきかも知れない。

正本は文語体で書かれており、通釈と評釈が混同しており、語釈が少ない等、現在の解説本とは異なる部分があるので、語釈を追加する一方、通釈は割愛し、その代わりに、現在図書館等で利用できるものを「参考文献」として記載した。

読み下しは、出来るだけ原文に従うようにしたが、人口に膾炙し、先に記載した「名句を含む漢詩 名作の漢詩」に有るような物は、僭越ながら置き換え、かつ、現代の学者の大多数が一致しているような物は、置き換えた。

トップページ

<http://sankyokanjin2.jp/>

「復刻」に当たっては、中国データベース「搜韻」を使用し、詩文、詩題の異なる部分は、正本に従って改めた。

語釈の補充に当たっては、調査、転記の手間を省くために、多くのブログからの引用を行った。その中で、特に多く多用したのが、左記のブログであ

る。これらのブログには、詳細な語釈が記載されており、これらを引用した
ものと、調査に依ったもので、粗密が生じたが、正本よりは、多くしたつ
もりである。

(2022年1月30日)

★「詩詞世界」

<http://www5a.biglobe.ne.jp/~shici/index.htm>

★「Web 漢文大系」

<https://kanbun.info/>

★「漢文委員会」

<http://kanbuninkai7.dousetsu.com/>

★「漢詩の朗読」

<https://kanshi.roudokus.com/>

◆ 勸学類

清夜吟

清夜の吟 せいや

北宋

邵 しょう

雍 よう

月到天心處

月の天心てんしんに到る処

風來水面時

風の水面すゐめんに來たる時

一般清意味

一般清意せいゐの味

料得少人知

料得りやくたり人ひとの知ることしるごと 少まなるを

【語釈】

天心…：天空の中心。処…：「頃」「時」。一般…：このような、一種の。清意味…：清らかな心の味わい。料得…：推量することができる。

書院

書院

北宋

趙ちやう

抃う

雨久藏書蠹

雨久しくして蔵書蠹とし

風高老屋斜

風高くして老屋斜なり

鄰居盡金碧

隣居りんきょ 尽ことごとく 金碧きんへき

一一梵王家

一々ほんおう 梵王の家

【語釈】

蠹…むしばむ。金碧…金色や碧色で飾ったさま。梵王家…寺院。

觀書有感

書を観みて感有り

南宋

朱熹しゆき

昨夜江邊春水生

昨夜江辺春水生ず

蒙衝巨艦一毛輕

蒙衝もうしやう 巨艦きょかん 一毛かろ 輕かろし

向來枉費推移力

向來きやうらい 枉ま 費ひ 推おし 移ひ 力ちから

此日中流自在行

此の日 中流自在に 行く

【語釈】

蒙衝…戦いに用いる細長の舟。向來…これまで（春水で川の水かさが増す前）。枉…いたずらに。

秋日偶成

しゅうじつぐうせい

北宋

程顥

閑来無事不從容

かんらい 無事として 従容ならざるは無し

睡覺東窗日已紅

ねむり 覚むれば 東窓 日は已に紅なり

萬物靜觀皆自得

ばんぶつ 静観すれば 皆 自得す

四時佳興與人同

しじ 四時の佳興は 人と同じ

道通天地有形外

道は通ず天地 有形の外

思入風雲變態中

思いは入る風雲 変態の中

富貴不淫貧賤樂

富貴にして淫せず 貧賤にして楽しむ

男兒到此是豪雄

男兒此に到らば 是れ豪雄

【語釈】

偶成…偶然の思いつきで作った詩。閑来…暇になってから。従容…ゆったりと落ち着いたさま。静見…心静かに物事を見極める。自得…処を得て納得する。四時…四季。佳興…よい趣。有形外…形の無いもの。變態…ここでは世相の移り変わりの定まらないさま。富貴…富んで身分の高いこと。淫…むさぼる。貧賤…貧しく身分が低いこと。到此…このような状況に達すれば。豪雄…すぐれた人物

(漢詩大系 16 宋詩選)

四時讀書樂（春）

四時讀書の楽しみ（春）

南宋

朱熹

山光照檻水遶廊

山光かんは檻かんを照らして 水は廊めぐを遶る

舞雩歸詠春風香

舞雩ぶうより歸詠きえいすれば 春花かん香かばし

好鳥枝頭亦朋友

好鳥しとう 枝頭ま 亦た朋友

落花水面皆文章

落花さた 水面しやうこう 皆文章

蹉跎莫遣韶光老

蹉跎さた 韶光しやうこうをして 老いしむ莫かれ

人生唯有讀書好

人生 唯だ 讀書の好きよ有り

讀書之樂樂何如

讀書の楽しみ 楽しみいかん 何如

綠滿窗前草不除

綠そうぜん 窓前そうぜんに満ちて 草除かず

【語釈】

舞雩：天に雨乞いをする場所。歸詠：詩を吟じつつ帰る。蹉跎：つまずいて時を失う。韶光：陽春の光景。

四時讀書樂(夏)

四時讀書の楽しみ(夏)

南宋

朱熹

新竹壓簷桑四圍

新竹簷を^{えん}圧して桑四圍

小齋幽敞明朱曦

小齋^{しょうさい}幽敞^{ゆうしょう}にして朱曦^{しゆき}明らかなり

晝長吟罷蟬鳴樹

晝長く吟^や罷めば蟬樹に鳴き

夜深燼落螢入幃

夜深く燼^{じん}落ちて螢^{てい}幃^{とばり}に入る

北窗高臥羲皇侶

北窓に高臥す羲皇^{ぎわう}の侶

只因素稔讀書趣

只讀書の趣きを素稔^{そじん}するに^お因る

讀書之樂樂無窮

讀書の楽しみ^ひ楽しみ窮まり無し

援琴一奏來薰風

琴を^ひ援きて一曲^き薰風^{きた}来る

【語釈】

簷…のきば。四圍…四方を囲む。小齋…小さな書齋。幽敞…静かで趣のあるさま。曦…太陽の光。燼…灯心残りかす。羲皇侶…羲は伏羲、皇は三皇帝、その友達、陶淵明が、自ら羲皇上人と称したことから、それに倣うこと。素稔…熟知。

四時讀書樂（秋）

四時讀書の楽しみ（秋）

南宋

朱熹 しゆき

昨夜庭前葉有聲

昨夜庭前葉に声有り

籬豆花開蟋蟀鳴

りとう 籬豆 花開きて ししつ 蟋蟀 鳴く

不覺商意滿林薄

覺えず 商意の林薄に満つるを

蕭然萬籟涵虛清

しょうぜん 蕭然 ばんらい きよせい 萬籟 虚清を涵す

近牀賴有短檠在

しょう 牀に近づきて さいわい 賴に たんけい 短檠の在る有り

逐此讀書功更倍

これ 此を逐いて書を読めば お 功更に倍す

讀書之樂樂陶陶

讀書の楽しみ たうたう 楽しみ陶々

起弄明月霜天高

起きて 明月を もてあそ 弄べば 霜天高し

【語釈】

籬豆…籬に纏い付いている豆の木。蟋蟀…こおろぎ。商意…秋気、秋の気配。林薄…林と草叢。蕭然…物寂しいさま。萬籟…万物の声。虚清…澄み渡った空。短檠…短い燭台。陶陶…和らぎ楽しむさま。

四時讀書樂（冬）

四時讀書の楽しみ（冬）

南宋

朱熹

木落水盡千崖枯

木落ち 水尽きて 千崖 枯る

迴然吾亦見真吾

けいぜん 吾も亦た 真吾を見る

坐對韋編燈動壁

坐して 韋編いへんに對すれば 灯壁しんごに動き

高歌夜半雪壓廬

高歌 夜半 雪 廬ろを圧す

地爐烹泉燃活火

地炉 泉を烹て 活火を燃やし

一清足稱讀書者

一清 稱かなうに足る 讀書の者

讀書之樂何處尋

讀書の楽しみ 何れの処にか尋ねん

數點梅花天地心

数点の梅花 天地の心

【語釈】

迴然…遙かなさま、遠いさま。真吾…飾らない天真の悟り。韋編…書簡。地爐…床下や地中を通した暖炉。活火…盛んな火。一清…茶の清見。稱…適合する。

符讀書城南

符書を城南に読む

唐

韓

愈

木之就規矩
在梓匠輪輿
人之能爲人
由腹有詩書
詩書勤乃有
不勤腹空虛
欲知學之力
賢愚同一初
由其不能學
所入遂異間
兩家各生子
提孩巧相如
少長聚嬉戲
不殊同隊魚
年至十二三
頭角稍相疎
二十漸乖張
清溝映汗渠
三十骨體成
乃一龍一豬
飛黃騰踏去

木の規矩に就くは
梓匠輪輿に在り
人の能く人たるは
腹に詩書有るに由る
詩書勤むれば乃ち有り
勤めざれば腹空虚なり
学の力を知らんと欲すれば
賢愚 同に初めを一にするも
其の学ぶこと能わざるに由りて
入る所 遂に間を異にす
兩家各々子を生めり
提孩にして巧は相い如けり
少く長じて 聚りて嬉戲す
同隊の魚に 殊ならず
年 十二三に至つて
頭角 稍や相い疎なり
二十にして漸く乖張し
清溝 汗渠に映ず
三十にして骨體成り
乃ち一は龍 一は猪
飛黃 騰踏して去りて

不能顧蟾蜍

蟾蜍せんじよを顧かえりみること能あたわず

一爲馬前卒

一は馬前の卒と為りて

鞭背生蟲蛆

背はいに鞭むちたれて虫ちゆうちよ蛆よを生ず

一爲公與相

一は公と相と為り

潭潭府中居

潭たん々たんたり府中の居

問之何因爾

之を問う 何よに因よりて爾しかると

學與不學歟

學まなぶふと學まなぶばざるとか

金壁雖重寶

金壁きんぺきは重宝いんたうなりと雖も

費用難貯儲

費ついやし用ちよちよいて貯儲いすどし難し

學問藏之身

學問は之を身に藏するも

身在則有餘

身在れば則ち余り有り

君子與小人

君子と小人と

不繫父母且

父母かかに繫かかわらず

不見公與相

見みずや公と相とは

起身自犁鋤

身みを起たげすこと犁鋤れいじよ自よりす

不見三公後

見みずや三公の後

寒饑出無驢

寒饑かんが出でるに驢ろ無なきを

文章豈不貴

文章ぶんしょう豈あに貴たかからざるらん

經訓乃苗裔

經訓けいくん乃しよち苗裔しよ

潢潦無根源

潢潦こうらうは根源こんげん無なく

朝滿夕已除

朝あしたに滿みち夕ゆふには已いに除はらかる

人不通古今

人古今に通とじざるは

馬牛而襟裾

馬牛まぎうにして襟裾きんきよす

行身陷不義

身を行ないて不義に陥る

況望多名譽

況んや 名譽の多からんことを望まんをや

時秋積雨霽

時 秋にして積雨 霽れ

新涼入郊墟

新涼 郊墟に入る

燈火稍可親

燈火 稍や親しむべく

簡編可卷舒

簡編 卷舒すべし

豈不旦夕念

豈に 旦夕に念わざらんや

爲爾惜居諸

爾が爲に 居諸を惜しむ

恩義有相奪

恩義 相奪つこと有り

作詩勸躊躇

詩を作りて 躊躇を勸む

【語釈】

符：韓愈の子の名。城南：韓愈の別荘のある所。規矩：コンパスと定規。在梓：建具師と大工。就規矩：法度に叶うわしむ意。輪輿：車や車の輪を作る工人。閭：家の門。提孩：幼い子供。稍：少し、僅かに。乖張：背き異なること。清溝：澄んだ溝。汗渠：汚れ濁った溝。飛黃駿馬。騰踏：跳ね踊る。蟪蛄：ヒキガエル。蟲蛆：ウジ虫。潭潭：奥深いさま。府中居：官邸。犁鉏：耕作、農夫。寒饑：飢え凍える。豈：反語。經訓：經書の字の解釈。菑畚：荒れ地を開拓する。潢潦：水たまり。襟裾：衣服をつけ着る。積雨：ながさめ。郊墟：野や丘、田舎。稍：いささか。簡編：書籍。卷舒：巻いたり伸ばしたりする。居諸：光陰。

大人

大人 だいじん

南宋

陸九淵 りくくえん

從來膽大胸膈寬

從來胆大なれば胸膈寛なり

虎豹億萬虬龍千

虎豹は億万虬龍は千

從頭收拾一口吞

從頭收拾して一口に吞む

有時此輩未妥恬

時有りて此の輩未だ妥恬ならず

哮吼大嚼無毫全

哮吼大嚼毫も全き無し

朝飲渤海水

朝に飲む渤海の水

暮宿崑崙嶺

暮に宿す崑崙の嶺

連山以爲琴

連山以って琴と為し

長河爲之絃

長河之れが絃と為す

萬古不傳音

万古不伝の音

吾當爲君宣

吾應に君が為に宣ぶべし

【語釈】

胸膈…むね。虬龍…龍。妥恬…やすらか。哮吼…吠える、大声を出す。大嚼…大食する。渤海…渤海。

◆ 彝倫類

九月九日憶山東兄弟

唐

王維

九月九日 山東の兄弟を憶う

独在異郷為異客

ひとり異郷に在って 異客と為り

每逢佳節倍思親

佳節に逢う毎に 倍ます親を思ふ

遥知兄弟登高処

遥かに知る 兄弟高きに登る処

遍插茱萸少一人

遍く茱萸を挿して 一人を少くを

【語釈】

異客…旅人。佳節…祝い事の日。遥知…（これ以下の内容を）遠くから察する。遍あまねく、みんな。茱萸…ハジカミ、山椒の葉。

（唐詩選）

聞樂天授江州司馬

らくてん じゅうしゅうしば
樂天の江州司馬を授けられしを聞く

唐

元稹

15

残燈無焰影憧憧

ざんとうほのお
残燈 焰無く影憧々

此夕聞君謫九江

此の夕べ 君が九江に謫せられしを聞く

垂死病中驚坐起

すいし
垂死の病中 驚きて坐起すれば

暗風吹雨入寒窓

あんふう
暗風 雨を吹いて寒窓に入る

【語釈】

残燈：燃え尽きようとしている灯火。憧憧：揺れ動くさま。謫：流刑に処される。九江：江州（江西省北部に位置する地級市）。垂死：瀕死。坐起：起きて坐る。暗風：暗闇の中を吹く風。寒窓：冷たい冬の窓。

（唐詩選）

夜雨寄北

夜雨北に寄す

唐

李商隱
りしやういん

君問歸期未有期

君 帰期を問えども 未だ期有らず

巴山夜雨漲秋池

巴山の夜雨 秋池に漲る

何當共剪西窗燭

何か当に 共に西窓の燭を剪りて

卻話巴山夜雨時

却って 巴山夜雨を話す時なるべき

【語釈】

歸期…家に帰る時。巴山…陝西省西郷県の南西にある山、寂しい所を指す場合が多い。西窓…西の窓、女性の部屋の窓。「卻」…振り返る

題青泥市寺壁

青泥市の寺壁に題す

宋

岳飛
がく ひ

雄氣堂堂貫斗牛

雄氣堂々として 斗牛を貫ぬく

誓將眞節報君讐

誓って 眞節を將って 君讐を報ぜん

斬除頑惡還車駕

頑惡を斬除して 車駕を還さん

不問登壇萬戶侯

問わず 登壇の万戸侯

【語釈】

堂堂…調って盛んなさま。斗牛…北斗と牽牛の二つの星。君讐…皇帝の仇（金族）。報…刑罰を下す。頑惡…頑強で猛悪な敵。斬除…切り捨てる。車駕…皇帝の馬車。登壇…大將を拜する式壇に登ること。

寄子

子に寄す

清

徐じよ
氏し

家内平安報爾知

家内平安にして 爾なんじに報じて知らしむ

田園歳入有餘資

田園の歳入 余資よし 有り

絲毫不用南中物

糸毫しごうも用いず 南中の物

好作清官答聖時

好し 清官と作りて 聖時なに答えよ

【語釈】

餘資…余りの資財。絲毫…極めて僅か。南中物…南方の地、作者の子の居る地の産物。聖時…聖明の天子の御世。

春日憶李白

春日李白を憶う

唐 杜甫

白也詩無敵

白や詩に敵無し

飄然思不羣

飄然として 思いは群ならず

清新庾開府

清新なるは 庾開府

俊逸鮑參軍

俊逸なるは 鮑參軍

渭北春天樹

渭北 春天の樹

江東日暮雲

江東 日暮の雲

何時一尊酒

何れの時か 一尊の酒もて

重與細論文

重ねて与に 細やかに文を論ぜん

【語釈】

飄然：俗事にこだわらないさま。思不羣：詩の着想が非凡。清新：新しい趣。庾開府：庾信のこと。南北朝時代の文学者、開府は、地方長官の総督・巡撫などのこと。俊逸：才気がほとばしるような闊達さ。鮑參軍：鮑照のこと。南朝の宋の文学者、參軍は刺史の属官で、事務長にあたる。渭北：杜甫のいる長安一帯。江東：長江の下流、安徽省東南部・江浙省一帯、李白のいるところ。

（新釈漢文大系 詩人編 杜甫 （上））

八月十五日夜禁中獨直對月憶元九

唐 白居易

八月十五日夜 禁中に独り直し 月に対して元九を憶う

銀臺金闕夕沈沈

銀台金闕 夕べ沈々

獨宿相思在翰林

独宿 相い思いて 翰林に在り

三五夜中新月色

三五夜中 新月の色

二千里外故人心

二千里外 故人の心

渚宮東面煙波冷

渚宮の東面には 煙波冷ややかに

浴殿西頭鐘漏深

浴殿の西頭には 鐘漏深し

猶恐清光不同見

猶お恐る 清光 同じくは見ざらんことを

江陵卑湿足秋陰

江陵は卑湿にして 秋陰足る

【語釈】

八月十五日夜…旧曆、仲秋の名月の夜。禁中…宮中。直…宿直する。元九…中唐の詩人、元稹（779～831）を指す。銀台…「宮殿全体の美称・総称」とする説と、「宮殿の門の名、銀台門ないし、その北にあった翰林院」とする説との、二つに解釈が分かれる。金闕…天子の宮殿、「闕」は宮殿の門のこと。夕…ここでは夜、夕方ではない。沈沈…夜が静かにふけていくさま。独宿…独りで宿直する。相思…相手を思つ。「相」は「互いに」という意味ではない。翰林…翰林院、詔勅等を司る役所、白居易は翰林学士であった。三五夜…十五夜。新月…「空にのぼったばかりの月」とする説と、「中天にのぼった清新な輝きをもつ月」とする説との、二つに解釈が分かれる。二千里外…長安と江陵との距離を指す。故人…昔なじみの友人、元稹を指す。渚宮…湖北省江陵の東南にあった古跡。戦国時代、楚の襄王の離宮、また、これを長安城中の実景とする説もある。煙波…もやの立ちこめた水面。浴殿…翰林院のすぐそばにあった浴室を指す。西頭…西のあたり。鐘漏…時を知らせる鐘と、漏刻（水時計）の音。深…夜が更ふけていくことを表す。猶…「なお」と読み、「やはり」「それでもなお」と訳す。恐…心配だ。気にかかる。清光…澄み切った月の光。不同見…白居易が長安で見ている月は、江陵にいる元稹には同じように美しく見えなだろう。江陵…湖北省江陵県。一名、荊けい州しゅう。卑湿…地が低く、じめじめしている。秋陰…秋のくもり空。足…ここでは多い。

歸省

歸省

唐

狄仁傑
てきじんけつ

幾度天涯望白雲

幾度いくたびか天涯 白雲を望む

今朝歸省見雙親

今朝こんちょう 歸省して 双親に見ゆ

春秋雖富朱顏在

春秋富みて朱顏在りと 雖も

歲月無憑白髮新

歲月憑る無くして白髮新たなり

美味調羹呈玉筍

美味 羹を調して 玉筍を呈し

佳肴入饌膾冰鱗

佳肴 饌に入つて 氷鱗を膾にす

人生百行無如孝

人生の百行孝に如くは無し

此志拳拳慕古人

此の志 拳々として 古人を慕う

【語釈】

天涯：故郷を遠く離れた地。春秋：年齢。朱顔：少年の顔。無憑：思うままに。されない。憑……するに任せる。調：調理する。羹：あつもの。呈：さし上げる。玉筍：たけのこ、孟宗の孝行の故事に基づく。佳肴：おいしい料理。入饌：膳の用意をする意。・膾：細かく切った生の肉。氷鱗：氷の下魚、特に鯉をいう、晋の王祥の故事による。無如……に及ばない。拳拳……奉持するさま。古人：昔の世の人、ここでは、孟宗や王祥を指す。

左遷至藍關示姪孫湘

唐

韓愈

左遷せられて藍關に至り姪孫湘に示す

一封朝奏九重天

一封朝に奏す九重の天

夕貶潮州路八千

夕べに潮州に貶せらる路八千

欲爲聖明除弊事

聖明の為に弊事を除かんと欲す

肯將衰朽惜殘年

肯て衰朽を將て殘年を惜しまんや

雲橫秦嶺家何在

雲は秦嶺に横たわりて家何くにか在る

雪擁藍關馬不前

雪は藍關を擁して馬前まず

知汝遠來應有意

知る汝の遠く來たる應に意有るべし

好收吾骨瘴江邊

好し吾が骨を収めよ瘴江の辺に

【語釈】

藍關：藍田関、陝西省の藍田県の南にある。姪孫：自分の兄弟の孫。一封：一通の上奏文。「論佛骨表」を奉り、憲宗が仏舍利を宮中に迎えようとしたことに反対した上奏文。封：上奏文、黒い袋に入れて封をしたことからいう。朝：あさ。奏：皇帝に具申する。九重天：ここでは、王宮をいう。夕：夕べに、その日の中。貶：落とす、潮州刺史に左遷されたことをいう。潮州：広東省の東北の沿岸部に位置する。路八千：長安から潮州への道のり、八千里の道程、極めて離れていることをいう。欲爲……のために……したいと思つて。聖明：聖明な皇帝をいう。弊事：好くない事がら、仏舍利を宮中に迎えることを指す。肯：あえて……か。反語的に使う。將……をもって。衰朽：老衰する。殘年：余命。秦嶺：長安の南側にあつて、東西に横たわる大山脈。家何在……人家がどこにあるのか。瘴江：包み込む。馬不前：馬は（降り積もった雪のために）進まない。應……きつと……だろう。有意：意図がある。瘴江：毒気の漂う川。

(唐詩選)

予以事繫御史臺獄 獄吏稍見侵 自度不能堪 死獄中 不得一別子由 故作
二詩授獄卒梁成 以遺子由 北宋 蘇軾

22

予事を以つて御史台の獄に繋がる、獄吏稍見侵さる、自ら度るに堪うる能わず、獄中に死し、子由に一別するを得ざらんと、故に二詩を作り獄卒梁成に授け、以つて子由に遺る、二首 其一

聖主如天萬物春

聖主 天の如く 万物春なるに

小臣愚暗自亡身

小臣は 愚暗にして 自ら身を亡ぼす

百年未滿先償債

百年 未だ満たず 先ず債を償い

十口無歸更累人

十口 帰る無く 更に人を累せん

是處青山可埋骨

是の処 青山骨を埋すむ可し

他時夜雨獨傷神

他時 夜雨 独り 神を傷ましめん

與君今世為兄弟

君と 今世 兄弟と為り

又結來生未了因

又 結ばん 來生 未了の因を

【語釈】

禦史臺…高級官僚を監督する役所。稍見侵…ことさら過酷に扱うように指示をうける。獄卒梁成…樑成問烏なの獄吏。聖主…聖明なる天子。天…恵みをもたらす天。償債…過去の罪を消すこと。十口…十人の家族。累…迷惑をかけること。青山…青緑の山。神…ころ。未了因…この世では尽きることがなかった因縁。

(漢詩大系 17)

初秋寄子由

初秋子由に寄す

北宋

蘇軾

百川日夜逝	百川 日夜に逝き
物我相隨去	物我 相い従いて去る
惟有宿昔心	惟だ 宿昔の心有り
依然守故處	依然として故処を守る
憶在懷遠驛	憶う 懷遠驛に在り
閉門秋暑中	門を閉ざす 秋暑の中
藜羹對書史	藜羹 書史に對し
揮汗與子同	汗を揮いて 子と同じくす
西風忽淒厲	西風 忽ち 淒厲
落葉穿戶牖	落葉 戸 牖を穿つ
子起尋袂衣	子 起ちて 袂衣を尋ね
感歎執我手	感歎 我が手を執る
朱顏不可恃	朱顏 恃むべからず
此語君莫疑	此の語 君 疑がう莫かれ
別離恐不免	別離 恐らくは 免がれず
功名定難期	功名 定めて 期し難し
當時已悽斷	當時 已に悽斷
況此兩衰老	況んや 此れ 兩衰老
失途既難追	途を失いて 既に追ひ難し
學道恨不早	道を學ぶ 早からざるを恨む
買田秋已議	田をかう秋 已に議す

築室春當成 室を築く春 応に成るべし

雪堂風雨夜 雪堂 風雨の夜

已作對床聲 已に 對床の声を作す

【語釈】

子由…弟の蘇轍。物我…万物と自分。宿昔…昔。懷遠驛…宋の都である汴京の近くにある宿場。物我…自分以外の物。宿昔…前夜、少し遠い昔。秋暑…残暑。藜羹…粗末な食事。書史…歴史書。淒厲…肌寒い。穿戸牖…窓や戸をとおり抜ける。袂衣…あわせの衣。朱顔…青年の顔色、青春。對床…床を並べる。

(漢詩大系 17)

初到建寧賦詩

初めて建寧に到り詩を賦す

南宋

謝枋得
しゃひょうとく

雪中松柏愈青青

雪中の松柏 愈 青々たり
いしよしま

扶植綱常在此行

綱常を扶植するは此の行に在り
こうじょうみち

天下久無龔勝潔

天下久しく 龔勝の潔 無し
きやうしやう けつ

人間何獨伯夷清

人間 何んぞ独り 伯夷のみ清からんや
にんげん はくい

義高便覺生堪捨

義高くして 便ち覺る 生の捨つるに堪えたるを
すなわ さと

禮重方知死甚輕

礼重くして方を知る 死の輕きに甚えたるを
まね かろ

南八男兒終不屈

南八男兒 終いに屈せず
つ

皇天上帝眼分明

皇天上帝 眼分明

【語釈】

雪中松柏：松柏の寒さに耐えること。節を守ること。綱常：人の守るべき大道、三綱五常のこと。扶植：助けたてる。隨勝：人名、王莽の招きに応ぜず、蜀を断つて死んだ。伯夷：周の武王が紂王征伐したとき、臣が君を弑しするのは人の道に反するといさめたが聞かれず、首陽山に隠れ、やがて餓死した。清廉な人間の代表とされる。南八男兒：雨声雲のこと、安祿山の乱の時、雌陽（河南省商邱県）を死守し、討ち死にした。皇天：天帝。上帝：天帝。

慈烏夜啼

慈烏失其母

啞啞吐哀音

晝夜不飛去

經年守故林

夜夜夜半啼

聞者為霑襟

聲中如告訴

未晝反哺心

百鳥豈無母

爾獨哀怨深

應是母慈重

使爾悲不任

昔有吳起者

母歿喪不臨

哀哉如此輩

其心不如禽

慈烏復慈烏

鳥中之曾參

慈烏夜啼く

慈烏 其の母を失い

「啞啞」として 哀音を吐く

晝夜 飛び去らず

年を経て 故林を守る

夜々 夜半に鳴き

聞く者 為に 襟を霑す

声中 告訴するが如し

未だ 反哺の心を 尽さざるを

百鳥 豈に 母無からんや

爾 独り 哀怨 深し

応に 是れ 母の慈 重く

爾をして 悲しみて 任えざらしむるべし

昔 吳起なる者 有り

母 没して 喪に臨まず

哀しい哉 此の如き輩

其の心 禽にだにも如かず

慈烏 復た 慈烏

鳥中の 曾参たり

唐

白居易

【語釈】

慈烏：カラスの別名、カラスは成長後、自分の親に餌を与えて、養育の恩を返すという。啞啞：カラスの鳴く声。故林：むかしなじみの林。襟：えり。反哺：子が親の恩に報いること。哀怨：悲しみうらむ。応是：きつと…だと思ふ。曾参：孔子の弟子、親孝行の人として知られる。

燕詩示劉叟

燕の詩 劉叟に示す

唐

白居易

梁上有雙燕

梁上に双燕有り

翩翩雄與雌

翩翩たり雄と雌と

銜泥兩椽間

泥を銜む 兩椽の間

一巢生四兒

一巢 四兒を生ず

四兒日夜長

四兒 日夜長じ

索食聲孜孜

食を策めて 声は孜孜たり

青蟲不易捕

青虫 捕らえ易からず

黃口無飽期

黃口 飽く期無し

嘴爪雖欲敝

嘴爪 敝れんとす欲すと 雖も

心力不知疲

心力 疲かるるを知らず

須臾千來往

須臾にして 千來往

猶恐巢中飢

猶お恐る 巢中に飢えんことを

辛勤三十日

辛勤 三十日

母瘦雛漸肥

母は瘦せて 雛は漸く肥ゆ

喃喃教言語

喃喃として 言語を教え

一一刷毛衣

一々 毛衣を刷う

一旦羽翼成

一旦 羽翼成り

引上庭樹枝

引きて 庭樹の枝に上る

舉翅不回顧

翅を挙げて 回顧せずして

隨風四散飛

風に隨いて 四に散飛す

雌雄空中鳴

雌雄 空中に鳴き

聲盡呼不歸

声尽くるまで 呼べども帰らず

卻入空巢裏

却かえつて 空巢くうそうの裏うちに入りて

啾啾終夜悲

啾啾ちゅうしゅうとして 終夜悲しむ

燕燕爾勿悲

燕えん々えん 爾なんじ 悲しむこと勿なかれ

爾當返自思

爾なんじ 當まさに返つて 自らを思おもうべし

思爾爲雛日

爾なんじ の 雛た為りし日

高飛背母時

高飛して 母そむに背きし時を思え

當時父母念

當時の 父母の念

今日爾應知

今日 爾なんじ 応たに知るべし

【語釈】

<http://www.5a.biglobe.ne.jp/~shichi/rs42.htm>

参照

正氣歌

正氣の歌

南宋

文天祥
ぶんてんしやう

天地有正氣

天地 正氣有り

雜然賦流形

雜然として 流形を賦す

下則爲河嶽

下は 則ち河嶽と為り

上則爲日星

上は 則ち日星と為る

於人曰浩然

人に於ては 浩然と曰い

沛乎塞蒼冥

沛乎として 蒼冥に塞がる

皇路當清夷

皇路 清夷なるに当たりては

含和吐明庭

和を含みて 明庭に吐く

時窮節乃見

時窮して 節 乃ち見れ

一一垂丹青

一一 丹青に垂る

在齊太史簡

齊に在りては 太史の簡

在晉董狐筆

晋に在りては 董狐の筆

在秦張良椎

秦に在りては 張良の椎

在漢蘇武節

漢に在りては 蘇武の節

爲嚴將軍頭

嚴將軍の 頭と為り

爲嵇侍中血

嵇侍中の 血と為る

爲張睢陽齒

張睢陽の 齒と為り

爲顏常山舌

顏常山の 舌と為る

或爲遼東帽

或いは 遼東の帽と為り

清操厲冰雪

清操 冰雪よりも厲し

或爲出師表

或いは 出師の表と為り

鬼神泣壯烈
或爲渡江楫
慷慨吞胡羯
或爲擊賊笏
逆豎頭破裂
是氣所磅礴
凜烈萬古存
當其貫日月
生死安足論
地維賴以立
天柱賴以尊
三綱實係命
道義爲之根
嗟予遘陽九
隸也實不力
楚囚纓其冠
傳車送窮北
鼎鑊甘如飴
求之不可得
陰房闐鬼火
春院闕天黑
牛驥同一皁
鷄棲鳳凰食

鬼神も 壯烈に泣く
或いは 江を渡る楫と爲り
慷慨 胡羯を呑む
或いは 賊を撃つ笏と爲り
逆豎 頭 破裂す
是の氣の磅礴する所
凜烈として 万古に存す
其の 日月を貫くに当りては
生死 安んぞ 論ずるに足らん
地維 頼つて 立ち
天柱は 頼つて 以つて 尊し
三綱 實に命を係け
道義 之が根と爲る
嗟 予 陽九に遘う
隸や 實に 力めず
楚囚 其の冠に纓し
伝車 窮北に送らる
鼎鑊 甘きこと飴の如し
之を求めて 得べからず
陰房 鬼火 闐たり
春院 天黒に闕す
牛驥 一皁を同じくし
鷄棲 鳳凰 食す

一朝蒙霧露	一朝 霧露を蒙り
分作溝中瘠	溝中の瘠作るを 分とす
如此再暑寒	此の如きこと 再暑寒
百沴自辟易	ひやくれい 自ら辟易す
嗟哉沮洳場	かな 沮洳の場
爲我安樂國	我が安樂國と為る
豈有他繆巧	あに 他の繆巧 有らんや
陰陽不能賊	陰陽 賊する能わず
顧此耿耿在	此を顧みて 耿耿として在り
仰視浮雲白	仰いで 浮雲の白きを視る
悠悠我心悲	悠悠たる 我が心の悲しみ
蒼天曷有極	蒼天 曷んぞ極まり有らん
哲人日已遠	哲人 日に 已に遠く
典刑在夙昔	典刑 夙昔に在り
風簷展書讀	風簷 書を展べて読めば
古道照顏色	古道 顔色を照らす

【語釈】

<http://www.5a.biglobe.ne.jp/~shici/p20.htm>

参照

辛丑十一月十九日 既與子由別於鄭州西門之外 馬上賦詩一篇寄
之 北宋 蘇軾

辛丑十一月十九日 既しゅう與子由ていしゅう別於鄭州西門の外にしもんに別れ 馬上ばじやうにて詩一篇を賦して之これに寄す

不飲胡為醉兀兀	飲まざるに 胡 <small>なんすれ</small> 為ぞ 醉 <small>こつこつ</small> うて兀々たる
此心已逐歸鞍發	此の心 已 <small>きあん</small> に 歸鞍 <small>お</small> を逐 <small>お</small> うて発す
歸人猶自念庭闈	歸人 <small>な</small> 猶 <small>みずか</small> お 自 <small>てい</small> ら庭闈 <small>おも</small> を念 <small>おも</small> う
今我何以慰寂寞	今 我 何を以てか 寂寞 <small>せきばく</small> を慰 <small>なぐさ</small> めん
登高回首坡壠隔	高 <small>たか</small> きに登 <small>のぼ</small> り 首 <small>こゝへ</small> を回 <small>まわ</small> らせば 坡壠 <small>はろう</small> 隔 <small>へ</small> たる
但見烏帽出復沒	但 <small>ただ</small> 見 <small>み</small> る 烏帽 <small>うぼう</small> の 出 <small>い</small> でて 復 <small>また</small> た 沒 <small>な</small> するを
苦寒念爾衣裘薄	苦寒 <small>おも</small> 念 <small>おも</small> う 爾 <small>なんじ</small> の 衣裘 <small>いきゆう</small> 薄 <small>うす</small> くして
獨騎瘦馬踏殘月	獨 <small>ひとり</small> 騎 <small>ま</small> に 踏 <small>ふ</small> りて 殘月 <small>そうげつ</small> を踏 <small>ふ</small> むを
路人行歌居人樂	路人は行歌し 居人は樂 <small>たの</small> しむ
童僕怪我苦悽惻	童僕 <small>わらわ</small> 怪 <small>あや</small> しむ 我 <small>われ</small> が 苦 <small>はなは</small> だ悽惻 <small>せいてく</small> たるを
亦知人生要有別	亦 <small>また</small> 知 <small>し</small> る 人生 <small>じんじやう</small> 要 <small>ひ</small> するに 別 <small>わか</small> れ有 <small>あ</small> るを
但恐歲月去飄忽	但 <small>ただ</small> 恐 <small>おそ</small> る 歲月 <small>じやうげつ</small> の 去 <small>い</small> って 飄忽 <small>ひようこつ</small> たるを
寒燈相對記疇昔	寒燈 <small>あいたい</small> 相 <small>あ</small> い 對 <small>たい</small> して 疇昔 <small>ちゆうせき</small> を記 <small>し</small> す
夜雨何時聽蕭瑟	夜雨 <small>しやうしゅう</small> 何 <small>なん</small> れの時 <small>とき</small> か 蕭瑟 <small>しやうせき</small> たるを聽 <small>き</small> かん
君知此意不可忘	君 此の意 忘 <small>わす</small> るべからざるを <small>し</small> らば
慎勿苦愛高官職	慎 <small>しん</small> んで 高官 <small>こうかん</small> の職 <small>しやく</small> を 苦愛 <small>くあい</small> すること勿 <small>な</small> れ

【語釈】

子由：蘇軾の弟の蘇轍。兀兀：よろよろするさま。歸鞍：蘇轍の載った馬。歸人：蘇軾。

庭園：親の居る家。寂寞：ひっそりとして物寂しいさま。坡壠：田畑の中の小高い丘。烏帽：黒い帽子、官吏が平服の時被る。苦寒：激しい寒さ。衣裘：上着と外套。悽惻：悲しむ様。飄忽：慌ただしい様。疇昔：前日、近い昔。蕭瑟：しめやか。

◆ 感懷類

照鏡見白髮

鏡に照らして白髪を見る

唐

張九齡 ちやうきゅうれい

宿昔青雲志

宿昔 しやくせき 青雲 せいうん の志

蹉跎白髮年

蹉跎 さた たり 白髮 はくはつ の年

誰知明鏡裏

誰 たれ か 知らん 明鏡 めいけう の裏 うら

形影自相憐

形影 けいえい 自 おの ずから 相憐 あい れまんとは

【語釈】

宿昔…昔、以前。青雲志…立身出世の志。蹉跎…つまづいて思い通りにならないこと。挫折を重ねているうちに。形影…「形」は自分の姿、「影」は鏡に映った像。

(唐詩選)

秋浦歌

秋浦の歌

唐

李白

白髮三千丈

白髮三千丈

緣愁似箇長

愁いに縁つて箇くの似く長し

不知明鏡裏

知らず明鏡の裏

何處得秋霜

何れの処にか秋霜を得たる

【語釈】

秋浦…安徽省貴池県にある貴池という池の入江の名。縁…「〜によりて」「〜によつて」と読み、「〜のために」「〜が原因で」と訳す。「因」と同じ。似箇…このように。「箇」は「これ」の意。「似」は「〜ように」の意。明鏡…一点の曇りもない鏡。秋霜…秋の霜、白髪のとえ。(漢詩大系 8)

題灞池

灞池に題す

唐

王昌齡

腰鎌欲何之

鎌を腰にして 何くか之かんと欲する

東園刈秋韭

東園 秋 韭を刈かる

世事不復論

世事 復た論ぜずして

悲歌和樵叟

悲歌 樵叟に和す

【語釈】

灞池…長安にある池の名、転じて、長安。東園…東の畑。韭…にら。世事…俗世間の出来事。樵叟…樵夫(きこり)のおやじ。

復愁

復また愁まう

唐

杜と甫ほ

萬國尚戎馬

万国尚じゆうばお戎馬

故園今若何

故園今いかん若何

昔歸相識少

昔歸るに相識そうしき少く

早已戰場多

早くも已に戰場多かりき

【語釈】

万国…すべての国々で。天下いたるところ。尚…今なお。戎馬…戦乱。故園故郷、洛陽の旧居を指す。若何…どうなっているだろうか。相識…顔見知りの人。少…ほとんどない。早已…その時すでに。

(唐詩選)

感事

事に感ず

唐

于う漬ふん

花開蝶滿枝

花開けば蝶枝に満つ

花謝蝶還稀

花謝しゃすれば蝶還また稀なり

惟有舊巢燕

惟ただ旧巢きゆうそうの燕あり

主人貧亦歸

主人貧しきも亦また歸る

【語釈】

謝…散って無くなる。

憫農

農を憫れむ

唐

李紳

37

鋤禾日當午
汗滴禾下土
誰知盤中飧
粒粒皆辛苦

禾を鋤きて日午に当たる
汗は滴たる禾下の土
誰か知らん盤中の飧
粒々皆辛苦なるを

【語釈】

憫農…農民をあわれむ。鋤禾…稲の生育の邪魔になる雑草を鋤で取り除く。午…正午。禾…稲。飧…食事。
(漢詩鑑賞事典)

蠶婦

蚕婦

北宋

張俞

昨日到城廓
歸來淚滿巾
徧身綺羅者
不是養蠶人

昨日城郭に到り
帰来涙巾に満つ
徧身綺羅の者
是れ蚕を養う人にあらず

【語釈】

城廓…都市。巾…ハンカチ。徧身綺羅者…全身を綺麗に着飾った人々。

商山路有感

商山の路 感有り

唐

白居易

萬里路長在

万里路 長とくしんに在り

六年身始歸

六年身始めて歸る

所經多舊館

経る所旧館多く

大半主人非

大半主人非なり

【語釈】

商山…長安から秦嶺山脈を南に越える路。

舊館…六年前に泊まった旅館。非…死去す

懊懐歌

懊懐おうのうの歌

明

劉基

白鷓養雛時

白鷓はくあ雛を養う時

夜夜啼達曙

夜々啼きて 曙あけぼのに達す

如何羽翼成

如何いかにぞ羽翼うよく成りて

各自東西去

各自おのおのみずか東西に去る

【語釈】

懊懐歌…悔んで悩み悶える歌。白鷓…白いカラス。如何…どのようであるか。羽翼成…羽が生えそろう。

覽鏡詞

鏡を覽るの詞

清

毛奇齡

漸覺鉛華盡

漸く覺ゆ 鉛華の尽くるを

誰憐顚頼新

誰か憐われむ 顚頼の新たなるを

與余同下淚

余と同じく涙を下すは

只有鏡中人

只鏡中の人有り

【語釈】

鉛華…おしろい、華やかな顔色。顚頼…やせ衰えた顔貌。鏡中人…鏡に映った自分。

菩提寺禁裴迪來相看説逆賊等凝碧池上作音樂供奉人等舉聲便一時淚下私成口

號誦示裴迪

唐 王維

菩提寺に禁せらる。裴迪ばいだい来りて相あひ看る。説く、逆賊等、凝碧池上ぎやうへきちじょうに音樂を作す。供奉の人等、声を挙げて、便ち一時に涙下ると。私ひそかに口号を成し、誦して裴迪に示す。

萬戸傷心生野煙

万戸 心を傷ましむ 野煙を生ずるに

百僚何日更朝天

百官 何れの日か 更に天に朝せん

秋槐葉落空宮裏

秋槐しゅうかい 葉は落つ 空宮うちの裏

凝碧池頭奏管弦

凝碧池頭ぎやうへきちとうに 管絃を奏す

【語釈】

凝碧詩：洛陽にある御苑内の池の名。裴迪：王維の友人。凝碧池：洛陽にある池の名。供奉：皇帝の側遣。口號：紙に書かないで作った即興の詩。萬戸：多くの家々。野煙：野のもや。朝天：宮廷に参内する。秋槐：秋になって葉が散り始めたエンジュ。空宮裏：主がいなくなつて、空しくなつた宮中。

(註：賊軍に仕えて、重刑を免れないところ、無実とされた曰く付きの詩)

題長安主人壁

長安主人の壁に題す

唐

張謂

世人結交須黃金

世人 交わりを結ぶに 黄金を須う

黃金不多交不深

黄金 多からざれば 交わり深からず

縱令然諾暫相許

縱令 然諾して 暫く相許すとも

終是悠悠行路心

終に是れ 悠悠たる 行路の心

【語釈】

主人…宿の主人。世人…世間の人。結交…交際するのに。黄金…金錢。金の力。須…「もちう」「もちいる」と読み、「を必要とする」と訳す。縱令…「たといつとも」と読み、「たとえつとも」と訳す。然諾…よろしいと引き受けること。相…「こころ」では「互いに」という意味ではなく、動作に対象があることを示す言葉。「相手に対して」の意。許…心を許す、ここでは親しく交際すること。終…結局は。悠悠…はるかに隔たること、ここでは疎遠で無関心な態度を形容する言葉。行路心…道を行く通りすがりの人の気持ち、冷淡で無関心な気持ちをいう。

(唐詩選)

秋思

しゆうし

唐

許 渾
きよ こん

琪樹西風枕簟秋

琪樹きじゆの西風せいふう 枕簟ちんでんの秋

楚雲湘水憶同遊

楚雲そいうん 湘水しやうすい 同遊どうゆうを憶う

高歌一曲掩明鏡

高歌こうか一曲 明鏡めいけうを掩う

昨日少年今白頭

昨日の少年 今は白頭

【語釈】

琪樹：美しい木々、琪は玉の名。西風：秋風。枕簟：枕と簟（竹で編んだむしろ）、転じて夏の寝具。楚雲：楚の空に浮かぶ雲、楚は、湖北・湖南省一帯を指す。湘水：湘江。同遊：昔いつしよに遊んだ友人。憶：思い出す。高歌一曲：声高らかに一節ひとふし歌うこと。

(唐詩選)

春行寄興

しゆんこう

唐

李 華
り か

宜陽城下草萋萋

宜陽城下いようじやうか 草萋萋さいさいたり

澗水東流復向西

澗水かんすい 東に流れて復た西に向う

芳樹無人花自落

芳樹ほうじゆ 人無く花 自ら落ち

春山一路鳥空啼

春山しゆんざん 一路鳥空しく啼く

【語釈】

春行：春の行楽。寄興：感興を詩に託して述べる。宜陽：河南省宜陽県。城下：城壁の外、町の郊外。萋萋：草が盛んに茂っているさま。澗水：谷川の水。芳樹：芳しい花の咲いている春の木。無人：見る人もなく。花自落：花は独りではらはらと散っている。春山：春の山道。一路：一すじに。

(唐詩選)

感春

春を感ず

唐

張ちやう

籍せき

遠客悠悠任病身

遠客えんかく 悠々として 病身に任す

誰家池上又逢春

誰が家の池上にか 又春に逢わん

明年各自東西去

明年各自 東西に去らば

此地看花是別人

此の地 花を見るは 是れ別人ならん

【語釈】

遠客…故郷を遠く離れた旅人。悠悠…うれえるさま。池上…池のほとり。

(三体詩)

歎春風

春風を歎く

唐

白居易

樹根雪盡催花發
池岸冰消放草生
唯有鬢霜依舊白
春風於我獨無情

樹根雪尽きて花を催して発く
池岸氷消えて草を放つて生ず
唯鬢霜の旧に依つて白きあり
春風我に於いて独り無情

【語釈】

催：せきたてる、促す。鬢霜：髪が雪のように白いこと。

閑居雜興

閑居雜興

唐

陳陶

一顧成周力有餘
白雲閒釣五溪魚
中原莫道無麟鳳
自是皇家結網疎

一顧周を成して力余り有り
白雲閑に釣る五溪の魚
中原道うこと莫かれ麟鳳無しと
自ずから是れ皇家網を結ぶ疎なり

【語釈】

一顧：人に対してちよつと世話をすること。周：殷に次ぐ王朝。起句、承句…：太公望のことと述べる。中原…：中国本土、黄河流域。麟鳳…：優れた人物。皇家…：朝廷

秋懷

秋懷 しゅうがかい

北宋

蘇舜欽 そしゆんきん

年華冉冉催人老

年華 ぜんげん 冉冉として 人を催 もよお して老しむ

風物蕭蕭又變秋

風物 しやうしやう 蕭々として 又 秋を變ず

家在鳳皇城闕下

家は ほうおうじやうけつ 鳳凰城闕の下に在り

江山何事苦相留

江山 ねんごろ 何事か 苦に相留む

【語釈】

年華…年月。冉冉…年月が早く移りゆくさま。催…せきたてる、促す。蕭々…物寂しい。

雨夜

雨夜

北宋

張詠 ちやう えい

四簷寒雨滴秋聲

四簷 しえん の寒雨 秋声 したた 滴たる

醉起重挑背壁燈

醉起 すいき 重ねて挑ぐ 壁 かか に背く そむ の灯

世事不窮身不定

世事 きわま 窮らず 身 定まらず

令人閒憶虎谿僧

人をして しずか 閑に 虎谿 こけい の僧 おも を憶わしむ

【語釈】

四簷…四方の軒端。秋聲…秋の気配がする物音。不窮…果てしない。

自作壽堂因書一絶以誌之

北宋 林逋

自ら壽堂を作る 因りて一絶を書し以つて之を誌す

湖上青山對結廬

湖上の青山 対して廬を結ぶ

墳前修竹亦蕭疏

墳前の修竹も 亦た蕭疏

茂陵他日求遺稿

茂陵 他日 遺稿を求む

猶喜曾無封禪書

猶お喜ぶ 曾て 封禪の書無きを

【語釈】

壽堂…生前に作る墓。修竹…長い竹。蕭疏…寂しくまばらなこと。茂陵…漢の武帝の墓。
封禪…皇帝が天と地を祭る儀式。

示兒

兒に示す

南宋

陸游

死去元知萬事空

死に去らば 元知る 万事空なるを

但悲不見九州同

但だ悲しむ 九州の同じきを見ざるを

王師北定中原日

王師^{おうし}北のかた中原を定むるの日

家祭無忘告乃翁

家祭^{かさい} 忘るること無かれ 乃翁^{だいのう}に告ぐるを

【語釈】

元…元来。もともと。九州…中国全土。王師…皇帝の軍隊。定…平定する。中原…漢民族の故地である黄河中下流域の平原のこと。家祭…先祖を祭る儀式。乃翁…おやじさま。目上の者が目下の者に対して使う自称、陸游自身のこと。

(漢詩大系 19)

再到洛陽

再び洛陽に到る

北宋

邵雍

當年曾是青春客

当年^{かつ} 曾て是れ 青春^{かく}の客

今日重來白雪翁

今日 重ねて来たる 白雪の翁

今日當年成一世

今日 当年 一世を成す

幾多興替在其中

幾多の興替^{こうてい} 其の中に在り

【語釈】

當年…その昔。興替…起こって盛んである事と衰えて亡ぶこと。

天津感事

天津事に感ず

北宋

邵雍

前朝無限責公卿

前朝限り無き責公卿

後世徒能記姓名

後世徒に能く姓名を記す

唯有天津橋下水

唯だ天津橋下の水のみ有りて

年年唯作一般聲

年々唯だ一般の声を作す

【語釈】

前朝…以前の王朝。天津橋…洛陽の西南にある橋の名。一般聲…今も昔も変わらぬ尋常一般の声。

春日偶成

春日偶成

南宋

鄭思肖

百萬胡兒犯大朝

百万の胡兒 大朝を犯す

奔南狩北恨迢迢

奔南狩北 恨み迢々

我非辦得中興事

我 中興の事を 弁じ得るに非らずんば

一點英靈死不消

一点の英靈 死すとも 消せず

【語釈】

胡兒…元の兵士。大朝…南宋。奔南狩北…天子が禍を避けて南北に逃れること。中興…元を亡ぼし宋を回復する。辦…成就する

憶昔

昔を憶う

明

劉

基

憶昔揚州看月華

憶う昔揚州にて月華げっかを見る

滿城絃管滿人家

滿城の絃管 人家に滿つ

可憐今夜中秋月

憐れむべし今夜 中秋の月

獨照寒蛩泣細沙

独り照らす寒蛩かんきようの細沙さいさに泣くを

【語釈】

憶昔…昔のことを追想する。月華…月の光、月。寒蛩…寂しいこおろぎ。細沙…薄絹の窓のカーテン。

夜雨江館寫懷

夜雨江館かいに懷かいを写す

明

高

啓

漠漠春寒水遶村

漠々はくはくたる春寒 水村めくを遶る

有愁無酒不開門

愁い有りて 酒無く 門を開かず

青燈畫角黄昏雨

青灯 画角 黄昏の雨

客共梅花併斷魂

客かくは梅花と共に併せて断魂

【語釈】

漠漠…広々として果てしないさま。畫角…美しい模様のある角笛、胡人の用いる物。斷魂…魂が断たれるような気持。

閑居感懐

閑居感懐

明

陸徳蘊 りくとくうん

白鶴沙頭水自波

白鶴沙頭水はくかくさとう 自おのずから波だつ

扁舟曾載夕暘過

扁舟曾せきようて夕暘を載せて過ぐ

東風一路靡蕪綠

東風一路ひな靡蕪綠なり

添得春愁別後多

春愁を添え得て 別後に多し

【語釈】

白鶴沙：作者の家の近くにある洲の名。靡蕪…ここでは芳草一般。春愁…春のもの悲し
み。

感舊

感旧

清

吳偉業 ごいぎよう

赤欄橋護上陽花

赤欄橋せきらんきやうは護ごす上陽の花

翠羽雕籠語絳紗

翠羽すいいう雕籠りやう絳紗こうしやに語る

羨殺江州白司馬

羨殺えんさつす江州の白司馬はくしほ

月明亭畔聽琵琶

月明亭畔げつめいていはん 琵琶を聽く

【語釈】

翠羽：カワセミ。雕籠：彫刻した美しい鳥かご。絳紗：赤色の薄絹。羨殺：非常に羨まし
がらせる、殺は強調の助字。江州白司馬：江州司馬に左遷された白居易。月明亭畔聽琵琶
…「琵琶行」のこと。

舟中見獵犬有感作

舟中 獵犬を見て 感じて作る

清 宋 琬

秋水蘆花一片明

秋水蘆花 一片 明かなり

難同鷹隼共功名

鷹隼と同じく 功名を共にし難し

檣邊飽飯垂頭睡

檣邊 飯に飽きて 頭を垂れて睡る

也似英雄髀肉生

也た 似たり 英雄に髀肉の生ずるに

【語釈】

鷹隼…鷹とはやぶさ。起句、承句は、獵犬も、秋水蘆花のきれいな船中に養われては、鷹や隼のごとく、獲物を捕る功名を建てる事が出来ないことを言う。英雄髀肉生…髀肉の嘆。

有客問余問近況者詩以答之

清 王 樞

客に余の近況を問う者有り 詩 以つて 之に答う

豪氣於今尚未餘

豪氣 今に於いて 尚お 未だ余かず

難將壯志付樵漁

壯志を將つて 樵漁に付し難し

短衣射虎南山下

短衣 虎を射る 南山の下

帶月歸來夜讀書

月を帯びて 歸來し 夜 書を読む

【語釈】

豪氣…優れて盛んな意気込み。壯志…盛んな志。樵漁…樵と漁夫で隠棲生活を送る者。南山…長安の南にある終南山、虎が多かった。

春望

春望

唐

杜

甫

52

國破山河在

國破れて 山河在り

城春草木深

城春にして 草木深し

感時花濺淚

時に感じては 花にも涙を濺ぎ

恨別鳥驚心

別れを恨んでは 鳥にも心を驚かす

烽火連三月

烽火 三月に連なり

家書抵萬金

家書 萬金に抵る

白頭搔更短

白頭 搔けば 更に短かく

渾欲不勝簪

渾て 簪に勝えざらんと欲す

【語釈】

国…国都長安。破…(戦乱により)破壊される。山河…山や川など、自然の佇たたすま

い。驚…はっと驚く。烽火…合図ののろし、ここでは戦乱のたとえ。

三月…何ヶ月も。連…続いている。家書…家族からの手紙。萬金…非常に多額の金銭。

貴重なこと。抵…相当する。白頭…しらが頭。搔…髪をかきむしる。短…少なくなる。渾

…すべて。まったく。簪…冠を髪に止めるピン。不勝…うしきれない。…うしようにと

(唐詩三百首)

四十五

四十五

唐

白居易

行年四十五

こうねん
行年 四十五

兩鬢半蒼蒼

りょうびん
兩鬢 半ば蒼々たり

清瘦詩成癖

せいそう
清瘦 詩癖を成し

粗豪酒放狂

そごう
粗豪 酒狂を放 にくす

老來尤委命

ららい
老來 尤も命に委ね

安處即爲郷

あんしょ
安處 即ち郷と為す

或擬廬山下

ろふざん
或は擬う 廬山の下

來春結草堂

らいしゅん
來春 草堂を結ばんことを

【語釈】

蒼蒼…青く茂るさま、ここでは白くなること。清瘦…清く瘦せること。粗豪…荒々しく強い。老來…老いて後。命…天命。安處…安樂に居る所。廬山…江西省九江詩にある山、陶淵明隱棲の地に近い。

感事

事に感ず

金

元好問
げんこうもん

壯事本無取

壯事そうじ 本もと 取る無し

老謀何所成

老謀ろうぼう 何の成る所ぞ

人皆傳已死

人皆已に死せりと伝う

吾亦厭餘生

吾も亦た余生いとを厭う

潦倒封侯骨

潦倒ろうとうす 封侯の骨

淹留混俗情

淹留えんりゅうす 俗に混ざるの情

百年堪一笑

百年 一笑するに堪え

辛苦惜虛名

辛苦しんくして 虛名きよめいを惜む

【語釈】

壯事…壮年の時。本…もとより。老謀…老後のはかりこと。潦倒…老いぼれやつれること。淹留…ぐずぐず留まっていること。

感慨

感慨

明

劉

基

結髮事遠遊

結髮けつぱつ 遠遊を事とし

逍遙觀四方

逍遙して 四方を觀る

天地一何闊

天地ひと 一えに 何ぞ闊なる

山川杳茫茫

山川はる 杳かに茫茫

衆鳥各自飛

衆鳥しゅうちよう 各おのおの 自みずから飛かび

喬木空蒼涼

喬木きようぼく 空しく 蒼涼せいりようたり

登高見萬里

高いきに登りて 万いにしえ里を見

懷古使心傷

古いにしえを懷こいて 心こころをして傷やましむ

佇立望浮雲

佇立ちよりつして 浮雲を望のぞみ

安得凌風翔

安いずくんぞ 風を凌かいで翔かけるを得えん

【語釈】

結髮…少壯の頃。遠遊…修行等のために他郷に行くこと。闊…広大なこと。茫茫…広大なさま。喬木…高い木。蒼涼…物寂しいこと。

酌酒與裴迪

酒を酌んで裴迪に与う

唐

王維

酌酒與君君自寬

酒を酌んで君に与う 君自く寛うせよ

人情翻覆似波瀾

人情の翻覆 波瀾に似たり

白首相知猶按劍

白首の相知 猶お劍を按じ

朱門先達笑彈冠

朱門の先達 彈冠を笑う

草色全經細雨濕

草色全く 細雨を経て湿おい

花枝欲動春風寒

花枝動かんと欲して 春風寒し

世事浮雲何足問

世事浮雲 何んぞ問うに足らん

不如高臥且加餐

如かず 高臥して 且つ餐を加えんには

【語釈】

裴迪：…王維の詩友。寬：気分をゆったりとさせる。翻覆：変わりやすいこと。波瀾：…波。白首：しらがあたま。相知：友人。按劍：刀の柄つかに手をかけてかまえる。朱門：朱塗りの門。先達：先に栄達した人。彈冠：冠のほこりをはらって仕官の準備をすること。草色：若草の色、つまらぬ人間・小人しようじんにたとえる。細雨：きりさめ。春雨。花枝：花の枝、君子にたとえる、ここではとくに不遇な裴迪を指す。欲動：花のつぼみが開こうとする。世事：世の中のこと。浮雲：はかないこと。のたとえ。何足問：とやかく問題にするほどのこともない。不如：「くにかず」と読み、「くには及ばない」「くの方がよい」と訳す。高臥：世を避けて悠々と暮らす。且：ひとまず。加餐：食事をたくさん食べる。

(唐詩選)

曲江

曲江

唐

杜甫

朝回日日典春衣

朝ちやうより回かえりて 日々に 春衣てんを典てんし

每日江頭盡醉歸

毎日 江頭かうとうに 醉よを尽きくして帰かへる

酒債尋常行處有

酒債しゆさいは 尋常じんじやう 行く処ところに有あり

人生七十古來稀

人生七十 古來こらい稀まれなり

穿花蛺蝶深深見

花はなを穿うつ 蛺蝶てうてつは 深々しんしんとして見え

點水蜻蜓款款飛

水みづに点てする 蜻蜓せいていは 款々かんかんとして飛とぶ

傳語風光共流轉

風光ふうこうに伝語でんごす 共ともに流轉りうてんして

暫時相賞莫相違

暫時せんじ 相賞あいしやうし 相違あいたがうこと莫なれと

【語釈】

曲江：長安中心部より東南東数キロのところにある池の名、地名。朝回：朝廷からかえつてくる。典：質に入れる。春衣：春の衣服。江頭：川の畔。酒債：酒代の借り。尋常：つねに。穿花：花の間を行き来する。蛺蝶：アゲハチョウ。深々：奥深くかすかなさま。點水：水につける。蜻蜓：とんぼ。款款：ゆるやかなさま。傳語：言葉を寄せる。風光：風景、天地自然の意。流轉：絶え間なく移り変わる事。暫時：少しの間、しばし。相：お互いに。賞：めでたのしむ。莫：…なかれ。違：たがう。

(注)「尋常」は「尋」…八尺、常…十六尺、とする数値の単位になり、「七十」と対になる。「借対」という。

(唐詩選)

返照

返照

唐

杜

甫

楚王宮北正黄昏

楚王宮北 正に黄昏

白帝城西過雨昏

白帝城西 過雨の昏

返照入江翻石壁

返照 江に入りて 石壁に 翻り

歸雲擁樹失山邨

歸雲 樹を擁して 山邨を失す

垂年病肺惟高枕

垂年 肺を病んで 惟だ枕を高くし

絶塞愁時早閉門

絶塞 時を愁いて 早く門を閉ず

不可久留豺虎乱

久しく豺虎の乱に 留まるべからず

南方実未招魂

南方 実には 未だ招かざるの魂有り

【語釈】

返照：夕映え。楚王宮：夔州の東、巫山に有った楚王の離宮の跡。過雨：通り雨。歸雲：山に帰り行く雲。山邨：山里。垂年：年老いて死期の近いこと。絶塞：遠く離れた城塞。豺虎乱：山犬と虎の乱、安史の乱。

『楚辞、九章、抽思』 黄昏以爲期。

『楚辞、招隐士』 山中兮不可以久留。

『楚辞、宋玉、招魂』 魂兮归来、南方不可以止些。

(漢詩大系 9)

秋興

秋興

唐

杜

甫

玉露凋傷楓樹林

玉露ぎょくろ凋傷ちようしやうす楓樹ふうじゆの林

巫山巫峽氣蕭森

巫山ふざん巫峽ふきやう氣き蕭森しやうしん

江間波浪兼天沸

江間かうかんの波浪なみ天あまを兼ねて沸わき

塞上風雲接地陰

塞上さいじやうの風雲ふううん地ちに接して陰くもる

叢菊兩開他日淚

叢菊そうきく兩ふたび開ひらく他日たふの淚

孤舟一繫故園心

孤舟こしゆう一ひとえに繫つなぐ故園こゑんの心

寒衣處處催刀尺

寒衣かんい處々ところどころ刀尺とうせきを催もよほし

白帝城高急暮砧

白帝城はくちてい高たかくして暮砧ぼちん急いそなり

【語釈】

玉露：玉のような露。凋傷：しぼませ傷ませること。楓樹：楓。巫山：夔州（四川省奉節県）の東にある山。巫峽：三溪の一つで、巫山のそばの溪谷。蕭森：静かで物寂しいこと。江間：長江の流れ。兼天：天に届くばかりに。塞上：砦の付近。陰：暗くする。叢菊：野菊。他日：過去の日。孤舟：一艘の舟。一繫：つないだままである。故園：ふるさと。寒衣：冬服。刀尺：裁縫のこと。白帝城 夔州の白帝城の上にある城。蜀の劉備玄徳が亡くなった場所。暮砧：夕暮れに打つ砧。

（唐詩選）

感懷

感懷

唐

劉長卿
りゅうちやうけい

秋風落葉正堪悲

秋風落葉 正に悲しむに堪えたり、

黃菊殘花欲待誰

黃菊 殘花 誰をか待たんと欲する。

水近偏逢寒氣早

水近くして 偏えに寒氣に逢うこと早く

山深長見日光遲

山深くして 長く日光を見ること遅し

愁中卜命看周易

愁中 命を卜するに 周易を看

夢裏招魂讀楚詞

夢裏 魂を招くに 楚詞を読む

自笑不如湘浦雁

自ら笑う 湘浦の雁に如かざるを

飛來即是北歸時

飛來するは 即ち是れ 北歸の時

【語釈】

感懷：心を感じた思い。水：川や湖。偏：ひとえに、すこぶる。愁中：愁いの中で、愁いを抱いて。卜命：運命をうらなう。周易：周代の占いを書いた書、『易経』。夢裏：夢のなか。招魂：死者のたましいを招いてなぐさめ、祭る。楚詞：『楚辞』。自笑：自嘲する。不如A：Aにおよばない。湘浦：湘水のほとり。湘水は：湖南省を流れて瀟水と合流して洞庭湖に注ぐ川。

(二体詩)

春晚詠懷贈皇甫朗之

唐

白居易

春晚懷を詠じて皇甫朗之に贈る

豔陽時節又蹉跎

豔陽の時節 又 蹉跎なり

遲暮光陰復若何

遲暮の光陰 復た若何

一歲平分春日少

一歲平分するに 春日少し

百年通計老時多

百年通計するに 老時多し

多中更被愁牽引

多中 更に 愁に牽引せられ

少處兼遭病折磨

少處 兼ねて病に遭いて折磨せらる

賴有銷憂治悶藥

賴に憂を銷し悶を治むる藥有り

君家濃酌我狂歌

君が家の濃酌 我が狂歌

【語釈】

皇甫朗之…皇甫曙。豔陽…春の終わりの美しい季節。蹉跎…衰退する。遲暮…老年。光陰…年月。復…いつたい、疑問の語気を強める副詞。若何…どうしたらよいか。平分…等しく分ける。兼…その上。折磨…肉体に苦痛を受ける。濃酌…濃い酒。

(新釈漢文大系 白氏文集 十二上)

放言

放言

北宋

王禹偁
おううしやう

誰信人間是與非

誰か信ぜん 人間の是と非と
にんげん

進須行道退忘機

進みて 須らく道を行うべく 退いては機を忘れん
すへか しんぞ

卦逢大壯羝羊困

卦は 大壯に逢いて 羝羊 困しみ
け だいそう ていよう

鄉入無何蚨蝶飛

郷は 無何に入つて 蚨蝶 飛ぶ
むか な きようちやう

澤畔衣裳蘭作佩

沢畔の衣裳 蘭を佩と作し
たくはん らん はい な

山中生計竹爲扉

山中の生計 竹を扉と爲す
やまのせいけい たけをひ

饑腸已共夷齊約

飢腸 已に夷齊と共に約す
きちやう いせい

一曲高歌去採薇

一曲高歌 去つて 薇を採る
ひ

【語釈】

大壯：易の六十四卦の一つで、雷が天上にあつて陽剛が盛んである事を示す。羝羊：雄羊。無何蚨蝶：荘子の故事。澤畔衣裳蘭作佩：くつ言の故事。饑腸已共夷齊約：伯夷叔斉の故事。

初到黃州

初めて黃州に到る

北宋

蘇軾

自笑平生為口忙

自みずから笑へいぜいう 平生 口の為に忙わしきを

老來事業轉荒唐

老來 事業 轉うたた荒唐

長江繞郭知魚美

長江 郭を繞うって 魚の美きを知り

好竹連山覺筍香

好竹 山に連ちって 筍の香しきを覺ゆ

逐客不妨員外置

逐客ちくかく 妨なげず 員外に置かるるを

詩人例作水曹郎

詩人 例として 水曹郎すいそうろうと作る

只慚無補絲毫事

只はだ慚しつ 糸毫しごうの事を補なうなきを

尚費官家壓酒囊

尚のうお 費ついやす 官家庄酒の囊

【語釈】

老來…老人になる。轉…有る状態が深まること。荒唐…とりとめも無いこと。郭…城郭。逐客…流人。員外…員外郎、定員外の官、名目だけの官。水曹郎…工部水部郎。絲毫事…ごく僅かなこと。壓酒囊…酒を絞る為に使った袋。

(漢詩大系17)

書憤

憤を書す

南宋

陸游

早歲那知世事艱

早歲そうさい那なぞ知らん世事かたの艱かたきを

中原北望氣如山

中原ちゆうげん北望ほくぼうして氣山きさんの如ごとし

樓船夜雪瓜洲渡

樓船ろうせん夜雪やせつ瓜洲かしゅうの渡と

鐵馬秋風大散關

鐵馬ていば秋風あきかぜ大散たいさんの關かん

塞上長城空自許

塞上さいじょうの長城ちやうせい空みずかしく自みずから許ゆるせしも

鏡中衰鬢已先斑

鏡中きやうちゆうの衰鬢すいびん已まに先まず斑まだらなり

出師一表真名世

出師すいしの一表いつひょう真まことに世よに名なあり

千載誰堪伯仲間

千載せんざい誰たれか堪たえん伯仲はくちゆうの間かん

【語釈】

早歲：若いころ。那：反語、どうして。世事：世の中の事々。艱：難しい。中原：黃河流域の平野、金の占領地。樓船：高い櫓を組んだ舟。瓜洲渡：長江の江蘇省鎮江と向かい合う渡し場。大散關：関中西部から秦に入る境界の要衝。出師一表：諸葛孔明の出師表。伯仲間：伯は兄、仲は弟、優劣の付けがたいこと。

(漢詩大系16)

次韻李刑曹病起書懷

南宋

王十朋

李刑曹の病起書懷に次韻す

文園病思亂如飛

文園の病思 乱れて飛ぶが如し

禪榻逍遙謾息機

禪榻に逍遙として 謾に機を息む

漸喜珠絲封藥裏

漸く喜ぶ 珠糸の薬裏を封ずるを

未容鶴髮上簪微

未だ容さず 鶴髮の簪微に上るを

酒能伐性聊須止

酒は能く性を伐る 聊か 須らく止むべし

碁恐勞神未敢圍

碁は 神を勞するを恐れて 未だ敢えて囲まず

惟有詩懷禁不得

惟だ 詩懷の 禁じ得ざる有り

任他憔悴不勝衣

任他 憔悴して衣に勝ざるを

【語釈】

病思：病気がりの心の思い。禪榻：座禅を組む腰掛け。簪微：簪の止めあるところ。勞
神：精神を疲れさせる。任他：…ままよ。

遣興

興を遣る

南宋 文天祥

東風吹草日高眠

東風草を吹いて日高くして眠る

試把平生細問天

試みに平生を把りて細かに天に問う

燕子愁迷江右月

燕子愁い迷う江右の月

杜鵑聲破洛陽烟

杜鵑声は破る洛陽の煙

何從林下尋元亮

何ぞ林下に從つて元亮を尋ねん

只向塵中作魯連

只だ塵中に向つて魯連と作らん

莫笑道人空打坐

笑う莫かれ道人空しく打坐するを

英雄收斂便神仙

英雄收斂すれば便ち神仙

【語釈】

平生：常日頃の行為。江右：長江の西方。元亮：陶淵明。魯連：魯仲連、戦国時代の遊説家、秦王が「帝」となることの不利益を説き、それを納得させた。道人：道を修めた人。打坐：すわる、打は助字。收斂：手を収める。

過零丁洋

零丁洋を過ぐ

南宋

文天祥 ぶんてんしやう

辛苦遭逢起一經

辛苦 遭逢 一經より起こる

干戈落落四周星

干戈 落落 々たり 四周星

山河破碎風拋絮

山河 破碎して 風絮を 拋わし

身世飄揺雨打萍

身世 飄揺して 雨 萍を 打つ

皇恐灘頭説皇恐

皇恐灘頭 皇恐を説き

零丁洋裏歎零丁

零丁洋裏 零丁を歎く

人生自古誰無死

人生 古 自り 誰か 死 無からん

留取丹心照汗青

丹心を留取して 汗青を照さん

【語釈】

零丁洋：広東省の珠江の河口付近の海の名、「零丁」は、落ちぶれて孤独であること。辛苦：辛いことに遭って苦しむこと。遭逢：遭遇する。出くわすこと。起一經：経書を修めて、二十歳で進士に及第し、仕官したこと。干戈：戦争。落落：思うようにならないさま。「寥落」に作るテキストもある。四周星：四年。破碎：破壊された。絮：柳絮。柳の白い綿毛のついた種子。抛：吹き散らす。身世：わが身一代。一生涯。飄揺：さすらう。漂い動く。萍：浮き草。雨打萍：浮き草を雨が打ち叩く、不安なこと。皇恐灘：江西省万安県にある難所。皇恐：恐れる。零丁：落ちぶれて孤独であること。歎：嘆く。自：は「より」と読み、「よりから」と訳す。丹心：忠誠の真心。留取：留めておく。「取」は助字。汗青：歴史書を指す。照：史上に名を輝かせたい。

(中国名詩選(下) 川合)

横波亭青為口帥賦

横波亭 青口帥の為に賦す

金

元好問

孤亭突兀插飛流

孤亭 突兀として 飛流を 挿む

氣壓元龍百尺樓

氣は 圧す 元龍 百尺の樓

萬里風濤接瀛海

万里の風濤 瀛海に接し

千年豪傑壯山丘

千年の豪傑 山丘を 壯んにす

疏星澹月魚龍夜

疎星 澹月 魚龍の夜

老木清霜鴻雁秋

老木 清霜 鴻雁の秋

倚劍長歌一杯酒

劍に 倚りて 長歌す 一杯の酒

浮雲西北是神州

浮雲 西北 是れ 神州

【語釈】

青口帥：青口の守師であつた粘合を言う。横波亭は青口にあり。
突兀：高く聳えるさま。飛流：瀑布。元龍：後漢の陳登、豪毅の士、故事有り。瀛海：崑崙の東南の地方五千里を指す。澹月：淡い月。魚龍：魚と龍。

述懐

中原還逐鹿

投筆事戎軒

縱横計不就

慷慨志猶存

仗策謁天子

驅馬出關門

請纓繫南粵

憑軾下東藩

鬱紆陟高岫

出沒望平原

古木鳴寒鳥

空山啼野猿

既傷千里目

還驚九逝魂

豈不憚艱險

深懷國士恩

季布無二諾

侯嬴重一言

人生感意氣

功名誰復論

述懐

中原還た鹿を逐い

筆を投じて 戎軒を事とす

縦横の計 就らざれども

慷慨の志 猶お存せり

策を仗いて 天子に謁し

馬を駆って 関門を出ず

纓を請いて 南越を繫ぎ

軾に憑りて 東藩を下す

鬱紆として 高岫に陟り

出沒して 平原を望む

古木 寒鳥鳴き

空山 野猿啼く

既に 千里の目を傷ましめ

還た 九逝の魂を驚かす

豈に 艱険を憚らざらんや

深く 国士の恩を懐う

季布に 二諾無く

侯嬴は 一言を重んず

人生 意気に感ず

功名 誰か復た論ぜん

唐

魏

徵

【語釈】

中原：漢民族の故地、黄河下流域の華北平原一帯。逐鹿：隋朝を倒して唐朝を開くという政權奪取に活躍したことをいう。投筆：行政事務を辞めて。戎軒：戦闘に使う車。縦横計：軍略。蘇秦、張儀の合従、連衡の策。慷慨：昂ぶる心意気。杖策：乗馬用のムチを杖ついで。驅馬：馬に乗って、軍隊を指揮して。出關門：関より外へ出て敵を攻伐すること。纓：冠のひも、ここでは、捕虜にした夷狄を縛る縄。憑：車に乗ること。軾：車のながえの横木、転じて車。東藩：東の方の属国。鬱紆：山坂などが曲がりくねって続いているさま。陟：のぼる。高岫：高い山の峰。出沒：山道が上下して、上り下りしているさまをいう。古木：冬枯れの木や林のようす。寒鳥：寒々として、寂しげな鳥。空山：秋が過ぎて落葉してしまった山のようす。夜猿：夜に啼く猿、もの寂しげなさまをいう。既：であるうえに。であるのに。すでに。千里目：はるかな眺望。還：なおも、また。九折：坂などの曲がりくねりの多いこと。つづら折り。九折魂：長い遙かな路を努力を重ねて、曲がりくねって歩んできたわたしの魂。艱險：けわしいものごと。季布：漢初の楚人、項羽の部将として活躍する。侯嬴：戦国時代の魏の隠士の名。功名：手柄と名誉。

(唐詩選)

感遇

感遇

唐

張九齡
ちようきゆうれい

孤鴻海上來

ここう 海上より來る
きた

池潢不敢顧

ちこう 敢て顧ず
かえりみ

側見双翠鳥

側に見る 双翠鳥
そうすいちよう

巢在三珠樹

巢いて 三珠樹に在り
さんしゆじゆ

矯矯珍木嶺

矯々たる 珍木の嶺
きようきよう

得無金丸懼

金丸の懼れ 無きを得んや
おそ

美服患人指

美服は 人の指さすことを患う

高明逼神惡

高明は 神の悪しみに逼る

今我游冥冥

今我 冥々に遊ぶ
めいめい

弋者何所慕

弋者 何の慕う所ぞ

【語釈】

孤鴻：群れを離れた一羽のおおとり、作者が自分をたとえたもの。池潢：池や水たまり。双翠鳥：二羽の緑の美しい羽をしたかわせみ。三珠樹：珍木の名。矯矯：鳥などが高く舞い上がるさま。金丸：黄金製の弾丸。美服：美しい身なり。高明：高く明るい邸宅、富貴の人の家。神：鬼神。冥冥：奥深く遠い、暗い、大空の形容。弋者：いぐるみで鳥を落とす獵師。

(唐詩選)

閑居感懐

閑居感懐

明

方孝孺
ほうこうじゆ

我非今世人

我は今世の人に非らず

空懐今世憂

空しく懐く今世の憂い

所憂諒無他

憂うる所は諒に他無し
まこと

慨想禹九州

慨想す禹の九州
がいそう

商君以爲秦

商君は以って秦の為にし

周公以爲周

周公は以って周の為にす

哀哉萬年後

哀しい哉 万年の後

誰爲斯民謀

誰か斯の民の為に謀かる
こ はか

【語釈】

禹九州：中国全土、禹が洪水を収めて中国を九州に分けた。商君：商鞅、法家思想で秦を強大にした。周公：武王の弟、武王を助けて殷（いん）を滅ぼし、周の支配を確立した。

貧交行

貧交行 ひんこうこう

唐 杜 甫 と ほ

翻手作雲覆手雨

手を翻せば雲と作り手を覆せば雨となる。

紛紛輕薄何須數

紛々たる輕薄 何ぞ數うるを須いん

君不見管鮑貧時交

君見ずや 管鮑 貧時の交を

此道今人棄如土

此の道 今人棄てて土の如し

【語釈】

貧交行…貧しい時代の交友の歌。翻手…てのひらを上に向ける。覆手…掌てのひらを下に向ける。紛々…混じり乱れるさま。管鮑…春秋時代の管仲と鮑叔牙。今人…現在の人。
(唐詩選)

哀江頭

江頭に哀しむ

唐

杜
甫

少陵野老吞聲哭

少陵の野老 声を吞んで哭し

春日潛行曲江曲

春日潛行す 曲江の曲

江頭宮殿鎖千門

江頭の宮殿 千門を鎖す

細柳新蒲為誰綠

細柳新蒲 誰が為にか綠なる

憶昔霓旌下南苑

憶う昔 霓旌 南苑に下り

苑中萬物生顏色

苑中 萬物 顏色を生せしを

昭陽殿裡第一人

昭陽殿裡 第一人

同輩隨君侍君側

輩を同じくし君に隨つて君側に侍す

輦前才人帶弓箭

輦前の才人 弓箭を帶び

白馬嚼齧黃金勒

白馬嚼齧す 黄金の勒

翻身向天仰射雲

身を翻し天に向つて 仰いで雲を射れば

一笑正墜雙飛翼

一笑 正に墜す 雙飛翼

明眸皓齒今何在

明眸皓齒 今何くにか在る

血汚遊魂歸不得

血汚れて遊魂 歸り得ず

清渭東流劍閣深

清渭 東流し 劍閣深し

去住彼此無消息

去住 彼此 消息無し

人生有情淚沾臆

人生有情 涙 臆を沾す

江水江花豈終極

江水江花 豈に終に極らんや

黄昏胡騎塵滿城

黄昏 胡騎 塵 城に滿つ

欲往城南望城北

城南に往かんと欲して 城北を望む

【語釈】

江頭：曲江の畔。少陵：杜甫の住んでいたところの名。野老：田舎の老人。少陵野老：杜甫の号。吞聲：悲しみのあまり、声が出ない。春日：現実のどかな春を。潛行：こっそりと行く。曲江：長安中心部より東南東数キロのところにある池の名。曲：くま。池の湾曲した部分をいう。江頭：曲江の畔。宮殿：紫雲楼を謂う。鎖：閉ざす。千門：全ての門。多くの門。細柳：若葉が出たばかりで、枝が細く見えるヤナギ。新蒲：初々しい緑色をしたガマ。憶昔：開元の治、天寶の平安な時代を思い起こす。霓旌：虹色の旗。鳥の羽を五色に染め、それを綴って虹を象(かたど)って作った五色旗。天子の儀式や行列に掲げる。下：行幸する。南苑：曲江の南にあった庭園。芙蓉苑のこと。苑中：御苑の。萬物：あらゆるもの。生顏色：生き生きとし出す。元氣を出す。昭陽殿：漢の成帝の建てた宮殿で、皇后の趙飛燕とその妹が住んでいた。ここでは、玄宗の宮殿で、楊貴妃が住んでいた宮殿を指す。第一人：ここでは、楊貴妃を指す。同輦：天子の輦に同乗する。非常な寵愛を賜っている女性をいう。輦：天子の乗り物で手で引く車。君側：君は楊貴妃で、楊貴妃のそば。輦前：天子の乗り物の前に(供奉している)。才人：女官の位。帶：携える。弓箭：弓と矢。弓矢。嚼齧：歯でかむ。勒：くつわ。翻身：身を翻(ひるがえ)す。正：ちようど。雙飛翼：つがいになって翼を並べて飛ぶ鳥。明眸：めいぼう、美しく澄んだ瞳。皓齒：白い歯。美人の表現。遊魂：さすらっている魂。清渭：清らかに澄んだ渭水。劍閣：玄宗と、馬嵬の楊貴妃の魂。消息：音信、たより。消長。消えることと生じること。ここでは心のやり取りという意味である。有情：感情の働きがある。霑：うるおす。臆：思い。考え。江草 川辺に生えている草。江花：川辺の花。豈：どうして：なのだろうか。終極：尽きはてる。最後に極まる。物事の最後になる。究極となる。黄昏：夕方の薄暗い時。夕闇の迫るさま。薄暮の薄暗さをいう。たそがれ時。夕暮れ。胡騎：安祿山の軍勢。安祿山は突厥、ソグドの混血児で、その軍勢も、ソグド、突厥、奚、契丹：と、多くの西北異民族が関わっている。塵：戦塵。城：長安の街。城南：長安城の南側、少陵の近くに。城北：肅宗がいた長安城の北方にある靈武。

(新釈漢文大系 詩人編 杜甫 (上))

代悲白頭翁

白頭を悲しむ翁に代る

唐

劉廷芝
りゅうていし

洛陽城東桃李花

洛陽城東 桃李の花

飛來飛去落誰家

飛び来り 飛び去りて 誰が家にか 落つる

洛陽女兒惜顔色

洛陽の女兒 顔色を 惜しみ

行逢落花長歎息

行く 落花に逢いて 長く歎息す

今年花落顔色改

今年 花落ちて 顔色改まり

明年花開復誰在

明年 花開きて 復た誰か 在る。

已見松柏摧爲薪

已に見る 松柏の 摧かれて 薪と爲るを

更聞桑田變成海

更に聞く 桑田の 変じて 海と 成るを

古人無復洛城東

古人 復た 洛城の東に 無く

今人還對落花風

今人 還お対す 落花の風

年年歲歲花相似

年年 歲々 花 相 似 たり

歲歲年年人不同

歲々 年々 人 同 じ け ら ず

寄言全盛紅顔子

言を 寄す 全盛の 紅顔子

應憐半死白頭翁。

應に 憐むべし 半死の 白頭翁

此翁白頭眞可憐

此の翁 白頭 眞に 憐むべし

伊昔紅顔美少年

伊れ昔 紅顔の 美少年

公子王孫芳樹下

公子王孫 芳樹の下

清歌妙舞落花前

清歌 妙舞す 落花の前

光祿池臺開錦繡

光祿の 池台 錦繡を開き

將軍樓閣畫神仙

將軍の 樓閣 神仙を 画く

一朝臥病無相識

一朝 病に 臥して 相識 無く

三春行樂在誰邊

三春さんしゅんの行樂こうらく誰たが辺へんにか在る

宛轉蛾眉能幾時

宛轉えんでんたる蛾眉がび能よく幾時いくときぞ

須臾鶴髮亂如絲

須臾しゆゆにして鶴髮かくはつ乱れて糸いとの如し

但看古來歌舞地

但ただ看みる古來こらい歌舞かぶの地

惟有黃昏鳥雀悲

惟ただ黃昏こうこんに鳥雀ちようせうの悲あはれしむ有るのみ

【語釈】

寄言：言葉を与えて人に悟らせる。紅顔子：少年。伊：下の言葉を強調する語、これぞ。公子王孫：貴公子たち。清歌：美しい歌。妙舞：麗しい舞。光祿：光祿勳（漢の官制で、九卿の一つ）。高官の意。錦繡：錦の縫い物。美しい物の例え。相識：友人。三春：春の三ヶ月。宛轉：眉の美しく曲がるさま。蛾眉：美女。蛾の触角のようになめらかな弧を描いた眉をしている女性で美女。須臾：忽ち。鶴髮：白髪。黃昏：たそがれ。鳥雀：小鳥

（唐詩選）

★長歌行

長歌行

南宋 陸游

人生不作安期生

人生安期生と作なつて

醉入東海騎長鯨

酔よいて東海に入りて 長鯨ちやうきやうに騎かせずんば

猶當出作李西平

猶なほお 応まに 出いいでて 李西平りせいへいと作なつて

手鼻逆賊清舊京

手てに 逆賊ぎやくさくを 鼻びして 旧京きゆうきやうを清ききよむべし

金印煌煌未入手

金印きんいん 煌くわう々 未なだ手てに入いらざるに

白髮種種來無情

白髮はくびん 種しゆ々 來きた 情じやう無し

成都古寺臥秋晚

成都せんとの古寺こに 秋晚しゆばんに臥ふせば

落日偏傍僧窗明

落日らくじつ 偏ひとへに傍そいて 僧窓そうそう 明あかなり

豈其馬上破賊手

豈あに其その馬ま上じやう 賊さくを破やぶるの手

哦詩長作寒蟄鳴

詩しを哦がして 長とこなえに 寒蟄かんしやうの鳴めいを作なさんや

興來買盡市橋酒

興しきやう來きたりて 買かい尽つくす 市橋しきやうの酒

大車磊落堆長餅

大車だいしや 磊落らいらく 長餅ちやうへいに 堆うすたか

哀絲豪竹助劇飲

哀あい糸し 豪竹ごうちく 劇飲げきいんを助すけけ

如鉅野受黃河傾

巨野きよの 黃河くわがの傾かたむくを受うくるが如ごとし

平時一滴不入口

平時へいじ 一滴ひとつも 口くちに入いらざるに

意氣頓使千人驚

意氣い 頓とんに 千せん人にんをして驚おどかしむ

國讎未報壯士老

國讎こくしゆう 未なだ報はげざるに 壯士しやうし 老らい

匣中寶劍夜有聲

匣こ中の寶劍ほうけん 夜よ 声こゑ 有あり

何當凱還宴將士

何いずれのときか 當まさに 凱還がいかんして 將士しやうしを宴ますべき

三更雪壓飛狐城

三更さんこう 雪ゆきは 壓おさす 飛狐ひこの城

【語釈】

長歌行：楽府題。安期生：秦の始皇帝の時代の仙人の名。李西平：李晟のこと、唐代中期の武將で、涇原地方の叛乱を平定した。逆賊：金のこと。梟：さらし首にする。舊京：長安。金印：金屬製の官印。煌煌：光り輝くさま。古寺：ここでは、成都にある多福院。偏傍：傾き寄り添う。豈其：それ：るか、其は語調を整える助辞で意味はない。哦詩：詩を吟じる。意。蠶：ツクツクボウシ。市橋：橋の名。成都の石牛門にある。磊落：数が多いさま。哀糸豪竹：悲壮な管弦楽。劇飲：痛飲。頓：突然。国讐：国のかたき。国のあだ。讐：あだ。壮士：気力盛んな男。匣：小箱。凱還：戦勝して勝鬨をあげて帰る。将士：將兵。三更：現在の午後十一時・午前零時から二時間を謂う。雪压！：雪が：に降り積もる意。飛狐城：古代の関所の名称。飛狐は、北京の西南西150キロメートルのところの現・河北省保定の涿源県の関所。

(漢詩大系16)

★大雪歌

大雪の歌

南宋

陸游

長安城中三日雪

長安城中三日の雪

潼關道上行人絶

潼關道上行人の絶

黄河鐵牛僵不動

黄河の鉄牛 僵れて動かず

承露金盤凍將折

承露の金盤 凍りて 將に折れんとす

虬鬚豪客狐白裘

虬鬚の豪客 狐白裘

夜來醉眠寶釵樓

夜來 醉眠す 宝釵樓

五更未醒已上馬

五更 未だ醒めずして 已に馬に上る

衝雪却作南山遊

雪を衝いて 却って作す 南山の遊

千年老虎獵不得

千年の老虎 獵し得ざらん

一箭横穿雪皆赤

一箭 横しまに穿ちて 雪皆 赤し

擎空爭死作雷吼

空を 擎み 争死して 雷吼を作す

震動山林裂崖石

山林を 震動し て崖石を裂く

曳歸擁路千人觀

曳き歸えれば 路を擁して 千人觀る

觸體作枕皮蒙鞍

觸體は枕と作し 皮は鞍を蒙う

人間壯士有如此

人間 壯士 此の如き有り

胡不來歸漢天子

胡ぞ 來たりて 漢の天子に歸せざる

【語釈】

潼關：長安の東方にある関所。鉄牛：黄河の洪水を防ぐ為につくられた鉄の牛。承露金盤：漢の武帝が天上の露を集めて不老長寿の薬するためにつくった銅製の盤。虬鬚豪客：龍の如く口ひげのある西北の胡人。狐白裘：狐の脇下にある白毛皮を集めて作った貴重な毛皮。寶釵樓：妓楼。五更：午前四時。南山：長安の南にある山、猛虎が多い。雷吼：雷のように吠える。

◆ 節序類

春早

春早

唐

韋莊

聞鶯纔覺曉

鶯を聞きて 纔に 曉を覚え

閉戸已知晴

戸を閉じて 已に 晴るるを知る

一帶窗間月

一帶 窓間の月

斜穿枕上生

斜に穿がちて 枕上に生ず

春曉

春曉

唐

孟浩然

春眠不覺曉

春眠 曉を覚えず

處處聞啼鳥

処々 啼鳥を聞く

夜來風雨聲

夜來 風雨の聲

花落知多少

花落つること 知んぬ多少ぞ

【語釈】

春眠：春の夜の心地よい眠り。曉：夜が明けたこと。不覺：気づかない。處處：あちこちで。あちらこちらから。聞：自然に聞こえてくる。啼鳥：鳥のさえずり。夜來：昨夜、「來」は語調をととのえる助字。多少：疑問詞、どれくらい。知多少：いつたいどれくらい散ったことだろうか。

(唐詩選)

問梅閣

問梅閣 もんばいかく

明

高啓 こうけい

問春何處來

春に問う 何れの処より來るか

春來在何許

春來たつて 何れの許かに在るかと

月墮花不言

月墮ちて 花言わず

幽禽自相語

幽禽 ゆうきん 自ら あいかた 相語る

【語釈】

問梅閣：南京の東北の庭園「師子林菴」の中にある閣。幽禽：人里はなれた静かな山奥に住む鳥。幽禽：奥深い所に住む鳥。

春雨

春雨

南宋

陸游 りくゆう

春陰易成雨

春陰 しゅんいん 雨を成し易く

客病不禁寒

客病 かくへい 寒に禁えず

又與梅花別

又 梅花と別る

無因一倚欄

一たび 欄に倚るに 因無し よしな

【語釈】

春陰：春の花曇り。客病：旅中での病氣。無因：理由のないさま。
(漢詩大系19)

題齊安壁

齊安の壁に題す

北宋

王安石

日淨山如染

日は淨く山は染まるが如く

風暄草欲薰

風は暄しく草は薰せんと欲す

梅殘數點雪

梅は残す数点の雪

麥漲一溪雲

麥は漲ぎる一溪の雲

【語釈】

薰：良い香りがするさま。漲：一杯に広がる。

柳巷

柳巷

唐

韓愈

柳巷還飛絮

柳巷還た絮飛び

春餘幾許時

春は幾の時を余すを許す

吏人休報事

吏人事を報ずるを休めよ

公作送春詩

公は春を送る詩を作るなり

【語釈】

虢州：河南省慮氏県。劉給事使君：韓愈の知人である劉伯蕢、病気の為、中央の激務である給事中を辞めて虢州刺史となった。柳巷：柳のある町。吏人：下級役人。報事：職務上の出来事を報告する。公：劉給事使君

(漢詩大系 11)

汾上驚秋

汾上 秋に驚く

唐 蘇頲

北風吹白雲

北風 白雲を吹き

萬里渡河汾

万里 河汾を渡りて

心緒逢搖落

心緒 搖落に逢い

秋聲不可聞

秋聲 聞く可からず

【語釈】

汾上：汾水のほとり。汾水は山西省寧武県の西南に源を發し黄河に注ぐ川。吹：吹きとばす。萬里：都から遠く離れた旅の途中にあること。河汾：汾水。心緒：心の動き。搖落：落葉が揺れながら落ちること。秋聲：秋の物音、風の音や、木の葉の落ちる音。不可聞：物寂しくて、聞くに堪えない。
(唐詩選)

秋日

秋日

唐 耿湣

反照入閭巷

反照 閭巷に入る

憂來誰供語

憂い來たりて 誰と供にか 語らん

古道少人行

古道 人行 少なり

秋風動禾黍

秋風 禾黍を動かす

【語釈】

反照：傾いた夕陽。閭巷：小さな村里。禾黍：稲や黍。
(唐詩選)

早秋獨夜

早秋独夜

唐

白居易

井梧涼葉動

井梧 涼葉動き

鄰杵秋聲發

鄰杵 秋声を発す

獨向檐下眠

独り 檐下に向いて眠る

覺來半牀月

覚め来たれば 半牀の月

【語釈】

井梧：井戸の端の青桐。鄰杵：近隣の家のきぬた。秋聲：秋の気配を感じさせる物音。

長安秋望

長安秋望

唐

杜牧

樓倚霜樹外

楼は倚る 霜樹の外

鏡天無一毫

鏡天 一毫無し

南山與秋色

南山と秋色と

氣勢兩相高

氣勢 両つながら相い高し

【語釈】

倚：よりかかる。霜樹：霜が降りて紅葉した木。鏡天：鏡のように明るく澄みわたった空。無一毫：ほんの少しもない。南山：終南山。秋色：秋の景色。氣勢：いきおい。相高：お互いに高め合っている。

(新釈漢文大系 詩人編9)

夜雨

夜雨

唐

白居易

早蛩啼複歇

早蛩そうきょう啼ないて復やた歇やむ

殘燈滅又明

殘燈滅又明

隔窗知夜雨

窓を隔かてて夜雨を知る

芭蕉先有聲

芭蕉先まず声こゑ有り

【語釈】

早蛩：初秋のコオロギ。

軒窗

軒窓けんそう

北宋

蘇軾そしやく

東鄰多白楊

東鄰とうりんに白楊はくよう多し

夜作雨聲急

夜雨声なの急いそなるなを作なし

窗下獨無眠

窓下そうか独ひとりり眠ねる無なし

秋蟲見燈入

秋虫 灯を見て入る

夜雪

夜雪

唐

白居易

已訝衾枕冷

已きんちんに衾枕きんちんの冷ひややかなるを訝じなり

復見窗戸明

復また窓戸そうこの明あらかなるを見る

夜深知雪重

夜深くして雪の重おもきを知る

時間折竹聲

時に折竹せつちくの声こゑの聞こゆれば

【語釈】

訝：いぶかる。衾枕：掛け布団とまくら。窗戸：窓。
(新釈漢文大系 二下)

江雪

江雪

唐

柳宗元

千山鳥飛絶

千山鳥飛ぶこと絶え

萬逕人蹤滅

万径人蹤じんざう滅す

孤舟蓑笠翁

孤舟蓑笠さいりゆうの翁

獨釣寒江雪

独り釣る寒江の雪に

【語釈】

千山：果てしなく連なる山々。萬逕：数多くの径。人蹤：人の通った足跡。孤舟：川に一つだけ見える舟。蓑笠：蓑笠を着ける。寒江：寒々とした川。
(柳宗元詩選) (唐詩三百首)

密雪望行人

密雪に行人を望む

清

謝芳連

人行犬寒吠

人行きて 犬寒く吠ゆ

密雪迷村影

密雪に 村影 迷う

欲扣酒家扉

酒家の扉を 扣かんと欲す

山橋一簑冷

山橋一簑 冷かなり

【語釈】

密雪：細かく降りしきる雨。寒吠：寒く吠える。一簑：簑を着た独りの人。

城東早春

城東早春

唐

楊巨源

詩家清景在新春

詩家の清景は 新春に在り

柳嫩驚黄色未勻

柳嫩にして 驚黄色 未だ勻わず

若待上林花似锦

若し 上林の花 錦に似るを待たば

出門皆是看花人

門を出ずるは 皆是れ 花を看るの人

【語釈】

嫩：若く柔らか。驚黄：驚鳥の黄色を以て、柳の新芽の色に比したるもの。色未勻：柳の緑色が浅く、十分色づいていない。上林：漢の武帝が開いた苑で、転じて天子の御苑。

春思

春思

唐

賈至

草色青青柳色黃

草色 青々として 柳色黄なり

桃花歷亂李花香

桃花 歴乱 李花香る

東風不爲吹愁去

東風 為に 愁いを吹き去らず

春日偏能惹恨長

春日偏えに 能く恨みを惹いて長し

【語釈】

柳色：柳の新芽の色。歴亂：歴乱：花がいつぱいに咲き乱れるさま。為：私のため。春日：うららかな春の日。偏：あいにくと、人の気も知らないで。惹恨：深い嘆きを引き起こす、惹は、引きつける、引き起こす。長：尽きることがない。
(唐詩選)

寒食汜上作

寒食汜上の作

唐

王維

廣武城邊逢暮春

廣武城辺 暮春に逢い

汶陽歸客淚沾巾

汶陽の帰客 涙巾を沾す

落花寂寂啼山鳥

落花 寂寂 山に啼く鳥

楊柳青青渡水人

楊柳 青青 水を渡る人

【語釈】

寒食：寒食節、冬至から百五日目にあたる日の前後三日間。汜上：汜水の（河南省にある川の名）ほとり。廣武城：古城名、河南省滎陽の東北の廣武山上に東西二箇所ある。暮春：春の終わり。汶陽：山東省寧陽県地方。帰客：帰ってきた旅人（作者）。沾：ぬれる。巾：ハンカチ状の布。寂寂：もの寂しいさま。ひっそりとしたさま。楊柳：ヤナギの総称。青青：青々とした。

(詩詞世界) (新釈漢文大系 3) (三体詩)

寒食

寒食

唐

韓翃

春城無處不飛花

春城 処として 花の飛ばざる無く

寒食東風御柳斜

寒食 東風 御柳斜めなり

日暮漢宮傳蠟燭

日暮 漢宮 蠟燭を伝え

輕煙散入五侯家

輕煙 散じて 五侯の家に入る

【語釈】

寒食：冬至から百五日目にあたる日の前後三日間は、火をたくことが禁じられ、冷たいものを食べる。春城：春の都市。東風：春風。御柳：宮中のヤナギ。漢宮：漢王朝の宮殿、漢代に借りて、同時代（…唐代）の宮中。輕煙：薄く立ち上る煙。五侯：時の権力者、諸侯を謂う、公・侯・伯・子・男の五等の臣を指す。（唐詩選）

寒食夜

寒食の夜

北宋

蘇軾

漏聲透入碧窗紗

漏声 透り入る 碧窓紗

人靜鞦韆影半斜

人は静かに 鞦韆 影半ば斜めなり

沈麝不燒金鴨冷

沈麝 焼かず 金鴨 冷ややかに

淡雲籠月照梨花

淡雲 月を籠めて 梨花を照らす

【語釈】

寒食：昔、中国で冬至後百五日目の日は風雨が激しいとして、この前後三日には火を断つて煮たきしない物を食べた風習、また、その日。漏声：水時計の音。碧窗紗：窓にかけた緑の紗のカーテン。沈麝：沈水（沈香）と麝香。いずれも香料。金鴨：鴨の形をした金物の香炉。

清明

清明

唐

杜
牧

清明時節雨紛紛

清明せいめいの時節じせつ
雨粉々あめふんぶん

路上行人欲斷魂

路上こうじやうの行人こうじん
魂を断たたんと欲す

借問酒家何處在

借問す 酒家は何れの処にか在る

牧童遙指杏花村

牧童遙かに 指さす杏花の村

【語釈】

清明：清明節。春分から数えて十五日目から三日間。紛紛：（花や雪などが）散り乱れるさま。行人：道を行く人、旅人。斷魂：心が滅入る。借問：ちよっとお尋ねするが。酒家：酒屋、飲み屋。杏花村：杏の花が咲いている村。
（新釈漢文大系 詩人編 9）集外詩

江南春

江南の春

唐

杜
牧

千里鶯啼綠映紅

千里鶯啼いて 緑
紅くわんじやうに映ず

水村山郭酒旗風

水村すいそん山郭さんかく
酒旗しゆきの風

南朝四百八十寺

南朝なんてう四百八十寺しひやくはっしんじ

多少樓臺煙雨中

多少の楼台 煙雨の中うら

【語釈】

江南：長江下流の南側の地方。水村：水辺の村、山郭：山沿いの聚落の外周の建物。酒旗：酒屋の看板になっている旗、青色。南朝：四二〇年～五八九年の間に、江南の地に興つた六朝（呉、東晉、宋、齊、梁、陳）の中の宋、齊、梁、陳の四王朝で、建康（南京）を首都とした。多少：多くの。煙雨：霧雨。
（新釈漢文大系 詩人編 9）

漫興

漫興まんきよう

唐

杜甫とほ

糝徑楊花鋪白氈

徑に糝さんずる楊花ようか 白氈はくせんを鋪しき

點溪荷葉疊青錢

溪に点ちずる荷葉かよう 青錢せいせんを疊たたむ

竹根稚子無人見

竹根ちくこんの稚子ちし 人の見みる無なく

沙上鳧雛傍母眠

沙上ふすうの鳧雛ふすう 母そに傍そばいで眠ねる

【語釈】

漫興：見るまま、思うままに詩を作ること。糝徑：糝は、こながき。ねこやなぎの花が道に落ちているさまをいう。楊花：ねこやなぎの花。鋪白氈：氈は、毛氈。敷物。白い敷物のようであることを形容した語。點溪：谷川に蓮の葉が浮いているさまをいう。荷葉：はすの葉。疊青錢：はすの葉が重なるように浮いているさま。青錢は、はすの葉の形容。竹根稚子：竹の根元からはえている筍。鳧雛：かもの雛。鳧は、かも。

絶句

絶句

唐

杜甫とほ

兩箇黃鸝鳴翠柳

兩箇りょうこの黃鸝こうり 翠柳すいりゅうに鳴なぎ

一行白鷺上青天

一行いっくわの白鷺はくろ 青天せいせんに上のぼる

窗含西嶺千秋雪

窓まどに含こむ西嶺せいりやう 千秋せんしゅうの雪ゆき

門泊東吳萬里船

門かどに泊とす東吳とうご 萬里ばんりの船ふね

【語釈】

兩箇黃鸝：二羽のうぐいす。黃鸝は、高麗うぐいす、日本のものより大きい。一行白鷺：一列になつて飛ぶ白いさぎ。青天：青空。西嶺：西の方の山々。千秋雪：万年雪のこと。東吳：東の吳地方。萬里船：遠い道程（吳地方）をやつて来た舟をいう。

滁州西澗

じょしゅう せいがん
滁州の西澗

唐

いおうぶつ
韋應物

獨憐幽草澗邊生

ひとりあわれむ 幽草の澗辺に生ずるを

上有黃鸝深樹鳴

上に黃鸝の深樹に鳴く有り

春潮帶雨晚來急

春潮 雨を帯びて 晚來急なり

野渡無人舟自橫

野渡 人無く舟 自ら横わる

【語釈】

滁州：安徽省の滁市。西澗：西側の谷川。憐：いつくしむ・めである。幽草：奥深い谷に生ずる草。澗邊：谷川の岸辺。黃鸝：朝鮮うぐいす。深樹：生い茂った木々、木々の繁み。春潮：春の日のうしお。晚來：夕暮れになつてはじまった。急：流れが急になる。野渡：田舎の舟渡し場。自：自然と。勝手に。横：横たわっている。
(唐詩三百首)

即事

即事

唐

杜と 牧ぼく

小院無人雨長苔

小院 人無く雨 苔を長じ

滿庭修竹間疎槐

万庭の修竹 疎槐に間る

春愁兀兀成幽夢

春愁 兀々として 幽夢を成なし

又被流鶯喚醒來

又た 流鶯に喚よび醒さましたる

【語釈】

即事：その場の事柄や様子、風景をよんだ詩歌。小院：小さな奥庭。修竹：長い竹。間：まじわる。疏：まばらな。槐：エンジュ。兀兀：動かないさま。幽夢：ぼんやりしたゆめ。被：（…のために）…れる。流鶯：木から木へと飛び移つて鳴くウグイス。

過南鄰花園

南鄰の花園に過ぎる

唐

雍陶

莫怪頻過有酒家

怪しむ莫かれ頻りに酒有る家に過ぎるを

多情長是惜年華

多情は長に是れ年華を惜しむ

春風堪賞還堪恨

春風は賞するに堪え還た恨むに堪えたり

纔見開花又落花

纔かに開花を見しに又落花

【語釈】
過…「を過ぎる」と読むときは「通過する」、「に過ぎる」と読むときは「訪れる」。是…助辞、動詞の前に置かれて強調する。年華…歲月。
(三体詩)

春夜

春夜

北宋

蘇軾

春宵一刻值千金

春宵一刻値千金

花有清香月有陰

花に清香有り月に陰有り

歌管樓臺聲細細

歌管樓台声細々

鞦韆院落夜沈沈

鞦韆院落夜沈々

【語釈】
春宵…春のよい。一刻…わずかな時間。値…ねうち。千金…膨大な金。清香…清らかな香。陰…かすんでいること。歌管…歌声や管楽器の音。声細細…かすかな声。鞦韆…女性に乗って遊ぶぶらんこ。院落…中庭。夜沈沈…夜がしんと更けていくさま。
(中国詩人選集二―6) 集外詩

春日

春日

宋

呂祖謙
ろそけん

短短菰蒲綠未齊

短々たる菰蒲こほう 綠 未だととのわ 齊あ わず

汀洲水暖雁行低

汀洲 水暖かにして 雁行がんこう 低し

柳陰小艇無人管

柳陰りゅういん の小艇 人の管かん するなく

自送流花下別溪

自ずから 流花を送り 別溪を下る

【語釈】

菰蒲：マコモとガマ。汀洲：渚と中州。管：管理、あやつる。

春居雜興

春居雜興

北宋

王禹偁
おううしやう

兩株桃杏映籬斜

兩株とうき の桃杏 籬かき に映じて 斜かた めなり

粧點商山副使家

粧点しょうてん す 商山 副使の家

何事春風容不得

何事ぞ 春風 容い れ得ず

和鶯吹折數枝花

鶯うし に和して 吹き折る 數枝すうし の花

【語釈】

粧點：装飾する。商山：陝西省商県の東南にある山。副使：團練使、節度使の部下（左遷された作者）。

（漢詩大系16）

春日雑詠

春日雑詠

清

高
珩

青山如黛遠村東

青山 黛まゆずみの如く遠村の東

嫩綠長溪柳絮風

嫩綠どんりよく 長溪 柳絮りゅうじよの風

鳥雀不知郊野好

鳥雀は知らず 郊野の好きを

穿花翻戀小庭中

花うがを穿ち 翻かえつて恋こう 小庭うちの中

【語釈】

嫩綠：新緑。郊野：郊外。

春寒

春寒

清

鷹れい
鵲がく

漫脫春衣浣酒紅

漫まわらに春衣しゅんいを脱ぬいで 酒紅しゅこうを浣せんう

江南三月最多風

江南 三月 最も多た風ふう

梨花雪後酴醾雪

梨花りか 雪後せつごに 酴醾とびの雪

人在重簾淺夢中

人は重簾ちゆうれん 淺夢せんむの中に在あり

【語釈】

漫：何となく。春衣：春着。酒紅：酒のシミで赤くなつた痕。浣：洗う。江南：長江中流・下流の南岸地域。最多風：最も風がよく吹く季節である。梨花：梨なしの花。雪後：雪のように咲いた梨なしの白い花が散つた後。酴醾：バラ科の落葉小低木、頭巾いばら。酴醾雪：頭巾いばらの花が雪のように咲く。人：作者を指す。重簾：二重のすだれ。淺夢：……とうとしながら見る夢。

(Web 漢文大系)

冶春絶句

やしゅんぜつく
冶春絶句

清

おうししん
王士禛

東風花事到江城

東風花事 江城に到る

早有人家喚賣錫

早に 人家の 売錫を喚ぶ有り

他日相思忘不得

他日 相い思いて 忘れ得ず

平山堂下五清明

平山堂下 五清明

【語釈】

冶春：百花の盛んに咲く春のさなか。花事：春の日に花を見歩くこと。江城：江水に臨んだ城邑。喚賣錫：雨を売る声。平山堂：揚州の名所。

春日雑詩

春日雑詩

清

えん
袁枚

千枝紅雨萬重烟

千枝の紅雨 万重の煙

畫出詩人得意天

画き出だす 詩人得意の天

山上春雲如我懶

山上の春雲 我が懶の如く

日高猶宿翠微巔

日高くして 猶お宿す 翠微の巔

【語釈】

春日：春ののどかな日。または、春の日差し。雑詩：感じたことを自由に詠んだ詩。千枝：多くの木の枝。紅雨：赤い花びらの散る形容。万重：幾重にも重なり、たなびいている。煙：春霞。得意天：（詩人の）心情にかなった好景。懶：ここでは惰眠を貪って物憂い気分。日高：日は高く昇っているのに。猶：相変わらず。それでもまだ。宿：宿って動かない。翠微：山の八合目あたり、薄緑色にかすんで見える。巔：山の頂上。

（漢詩大系22）

雨中送春

うちゅうそうしゅん

唐

袁枚

東風吹雨洒雕輪

東風 雨を吹きて 雕輪に洒ぐ

楊柳依依欲斷魂

楊柳 依々として魂を断たんと欲す

眞箇送春如送客

眞箇に春を送るは 客を送るが如し

滿山花草有啼痕

満山の花草 啼痕 有り

【語釈】

雕輪：彫刻を施した美しい車。依依：なよなよするさま。眞箇：まことに、箇は強めの助字。啼痕：涙の痕のことで、この場合、雨滴がそのように見えること。
(墨場必携清詩選)

送春

春を送る

清

吳錫麒

落花飛絮滿烟波

落花 飛絮 煙波 満つ

九十春光去似梭

九十の春光 去りて梭に似たり

蹤跡年年何處覓

蹤跡 年々 何れの処にか覓めん

一回白髮一回多

一回 白髮 一回多し

【語釈】

飛絮：飛ぶ柳絮。烟波：水面のもや。春光：春の景色。梭：機織りの道具、和名「ひ」。蹤跡：足跡、ゆくえ。

送春

春を送る

清

王文潞
おうぶんろ

花如残夢柳如烟

花は 残夢の如く 柳は 煙の如し

回首光陰一惘然

首を回せば 光陰 一に 惘然

擬向東風買春色

東風に向つて 春色を買わんと擬すれば

枝頭榆莢已無錢

枝頭の榆莢 已に 錢無し

【語釈】

烟…もや、かすみ。惘然…がっかりして、ぼんやりとしているさま。春色…春景色。榆莢…ニレの実、錢に形が似ている。

苦雨

苦雨

清

陳謨
ちんぼく

一臥經春百事休

一臥 春を経て 百事 休す

寄人廡下苦淹留

人の廡下に 寄り 苦だ 淹留す

妬花風雨無情極

花を妬む風雨は 無情を極め

只送春光不送愁

只だ 春光を送り 愁を送らず

【語釈】

廡下…ひさしの下。淹留…久しく留まる。春光…春景色。

晴景

晴景

唐

王 駕

100

雨前初見花間葉

雨前初めて見る 花間の葉

雨後兼無葉裏花

雨後兼ねて無し 葉裏の花

蛺蝶飛來過牆去

蛺蝶 飛び来たりて 牆を過ぎて去る

應疑春色在鄰家

應に疑うなるべし 春色の鄰家に在るか

【語釈】

蛺蝶：ちようちよう。春色：春景色。

(三体詩)

三月晦日題慈恩寺

三月晦日慈恩寺に題す

唐

白居易

慈恩春色今朝盡

慈恩の春色 今朝 尽く

盡日徘徊倚寺門

尽日 徘徊して 寺門に倚る

惆悵春歸留不得

惆悵す 春 歸りて 留め得ざるを

紫藤花下漸黃昏

紫藤花下 漸く黃昏

【語釈】

慈恩寺：陝西省長安の南東3キロメートル、曲江の北にある寺。春色：春景色、春の気配。盡日：一日中。徘徊：ぶらぶら歩き回る。倚：もたれる。惆悵：うれえ悲しむさま。春歸：春が過ぎ去って帰っていく。漸：ようやく。黃昏：たそがれ。

(新釈漢文大系 白氏文集 三)

三月晦日贈劉評事

三月晦日 劉評事に贈る

唐

賈島

三月正當三十日

三月正に当たる三十日

風光別我苦吟身

風光 我が苦吟の身に別る

共君今夜不須睡

君と共に今夜 睡るを須いず

未到曉鐘猶是春

未だ 曉鐘に到らざれば 猶お是れ 春

【語釈】

晦日：一ヶ月の月末の日、三月晦日は春の最後の日。評事：大理寺（最高裁判所）に属する下級の裁判官。正當：ちようどくになる。風光：美しい自然のながめ。苦吟：苦心して詩歌を作ること。不須：くになおまだ。睡：ねむる。曉鐘曉鐘：黎明を告げる鐘の音。猶是：なおまだ。 (三体詩)

偶成

偶成

元

倪瓚

坐看青苔欲上衣

坐して見る 青苔の衣に上らんと欲するを

一池春水靄餘暉

一池の春水 余暉 靄たり

荒村盡日無車馬

荒村 尽日 車馬無し

時有殘雲伴鶴歸

時に 残雲の 鶴を伴いて帰る 有り

【語釈】

靄：かすむ。盡日：一日中。

初夏

初夏

北宋

曾鞏

雨過横塘水滿堤

雨は横塘を過ぎて 水は堤に満つ

亂山高下路東西

乱山 高下 路の東西

一番桃李花開盡

一番の桃李 花開くの後

惟有青青草色齊

惟だ 青々 草色の 斉しき有り

【語釈】

横塘：堤の名。色齊：青い草が一樣に連なるさま。

初夏即事

初夏即事

北宋

王安石

石梁茅屋有彎碕

石梁 茅屋 灣碕有り

流水澌澌度兩陂

流水 澌々として 兩陂を渡る

晴日暖風生麥氣

晴日 暖風 麥氣を生じ

綠陰幽草勝花時

綠陰 幽草 花時に勝れり

【語釈】

初夏即事：初夏みるままに、「即事」は、その場の情景をそのまま詩にすること。石梁：石の橋。茅屋：茅葺きの家。彎碕：湾曲した岸の先端。澌澌：水がさらさらと流れるさま。兩陂：兩岸の堤。麥氣：麦の熟した香。綠陰：緑の木の木陰。幽草：深く生い茂ったさま。花時：花が咲いている（春の）景色。

（中国詩人選集二 4）

初夏

初夏

北宋

司馬光

四月清和雨乍晴

四月清和 雨乍ち晴れ

南山當戸轉分明

南山 戸に当たって 転た分明

更無柳絮因風起

更に 柳絮の 風に因って起こる無く

惟有葵花向日傾

惟だ 葵花の 日に向かつて傾く有り

【語釈】

客中…旅の途中。清和…清くなごやかなさま。分明…はつきりして明かなさま。葵花…向日葵。清和…爽やかで清々すがすがしい気候、また、陰暦の四月一日をもう。乍…急に、さつと。南山…南の方に見える山。当戸…戸口の真正面に、「当」は向かい合うこと。転…いよいよ。分明…はつきりと見えている。更無…少しもくはない、まったくなくない。柳絮…柳の白い綿毛のついた種子。因風起…風に吹かれて乱れ飛ぶ。葵花…ひまわりの花。
(漢詩大系 16)

夏日西齋書事

かじつせいさいそくじ

北宋

司馬光

榴花映葉未全開

榴花は 葉に映じて 未だ 全て開かず

槐影沈沈雨聲來

槐影は 沈々として 雨声 来る

小院地偏人不道

小院地は偏にして 人 到らず

滿庭鳥迹印蒼苔

滿庭の鳥迹 蒼苔に印す

【語釈】

榴花…石榴の花。槐影…エンジユの影。沈沈…茂って暗いさま。小院…小さな家。鳥迹…鳥の足跡。蒼苔…青色の苔。

田家

田家

南宋

范成大

書出耘田夜績麻

昼は出でて田を耘がやし 夜は麻を績ぐ

村莊兒女各當家

村莊の兒女 各家に当たる

童孫未解供耕織

童孫未だ解せず 耕織に供するを

也傍桑陰學種瓜

也 桑陰に傍いて 瓜を種うるを學ぶ

【語釈】

耕織：耕作と機織り。供：手伝う。

插秧

插秧

南宋

范成大

種密移疎綠毯平

種は密に移すこと疎に 綠毯 平かなり

行間清淺穀紋生

行間 清淺 穀紋生ず

誰知細細青青草

誰か知らん 細々青青々の草

中有豐年擊壤聲

中に 豐年 擊壤の聲 有るを

【語釈】

綠毯：緑のけむしろ。穀紋：穀物の模様。擊壤：遊びの一種、鼓腹擊壤で、平和な生活を送ること。

暮歸

暮に帰る

金

趙秉文
ちやうとぎん

貪看孤鳥入重雲

孤鳥の重雲に入るを 貪り見て

不覺青林雨氣昏

覺えず 青林 雨氣の昏きを

行過斷橋沙路黑

行きて 斷橋を過ぐれば 沙路黒し

忽從電影得前村

忽ち 電影に従り 前村を得たり

【語釈】

斷橋：壊れて渡れない橋。 電影：稲妻。

夏晝偶作

夏昼偶作

唐

柳宗元
りゆうそうげん

南州溽暑醉如酒

南洲の溽暑 酔いて酒の如し

隱几熟眠開北牖

几に隠って熟眠 北牖を開く

日午獨覺無餘聲

日午独り覺めて 余声無し

山童隔竹敲茶臼

山童 竹を隔てて 茶臼を敲く

【語釈】

夏晝偶作：夏の昼に、たまたま作った詩。南州：南国の永州、作者が左遷された先の地。溽暑：蒸し暑いこと。酔如酒：（暑熱による）酔いのさまは、酒に酔ったかの如くである。隱：よりかかる。几：机。熟眠：じ熟睡。北牖：北側の窓。牖：れんじ窓。日午：正午。独覺：ひとり目覚める。餘声：ほかの物音。山童：山に住む子供。茶臼：茶の葉をひいて抹茶にするのに用いるひき臼。

（三体詩）

山亭夏日

山亭の夏日

唐

高 駢

綠樹陰濃夏日長

綠樹陰濃にして夏日長し

樓臺倒影入池塘

樓台影を倒しにして池塘に入る

水精簾動微風起

水精の簾動いて微風起り

一架薔薇滿院香

一架の薔薇滿院香し

【語釈】

山亭：山の別荘。夏日：夏の一日。綠樹：緑なす木々。陰濃：地面に濃い影を落と
している。夏日長：夏の一日がなかなか暮れない。樓台：高殿たかどの。二階建て以
上の建物。倒影：その姿が水面にさかさまに映っていること。池塘：池。水精：水
晶のこと。簾：すだれ。微風：そよ風。一架：柵いっばいの。薔薇：バラ。滿院
：中庭いっばいに。
(唐詩選)

香山避暑

香山避暑

唐

白居易

六月灘聲如猛雨

六月灘声猛雨の如し

香山樓北暢師房

香山樓北暢師の房

夜深起倚闌干立

夜深くして起ちて闌干に倚りて立てば

滿耳潺湲滿面涼

耳に滿つる潺湲一面に滿つる涼

【語釈】

灘聲：岩にぶつかる早瀬の音。香山：香山寺。暢師：香山寺の高僧の一人、文暢禪師を
いう。潺湲：水の流れる音。
(漢詩大系12)

香山避暑

香山避暑

唐

白居易

紗巾草履竹疎衣

紗巾さきん草履ぞうり竹疎衣ちくそい

晚下香山蹋翠微

晚下香山すいび翠微ふを蹋む

一路涼風十八里

一路涼風十八里

臥乘籃輿睡中歸

臥がして籃輿らんよに乗り睡中に帰る

【語釈】

紗巾：薄絹の頭巾。竹疎衣：竹の繊維を織って作った衣。晚下：日暮れ。翠微：山の八合

目。籃輿：竹を編んで作った籠。

(漢詩大系12)

夏夜追涼

夏夜追涼

南宋

楊萬里

夜熱依然午熱同

夜熱依然として午熱に同じ

開門小立月明中

門を開いて小立しょうりつす月明げつめいの中

竹深樹密蟲鳴處

竹深く樹密にして虫鳴く処

時有微涼不是風

時に微涼びりよう有るも是れ風ならず

【語釈】夜熱：夜になってもまだ残っている暑さ。午熱：昼間の暑さ、真昼のうだるような暑さ。小立：しばらく立ったままでいる。月明：月あかり。竹深：竹林がこもりと深く生い茂っている様子。樹密：樹木が薄暗くなるほど鬱蒼と生い茂っている様子。時：ときどき。時おり。微涼：かすかな涼しさ。

(漢詩大系 16)

納涼

納涼

北宋

秦観しんかん

杖携來追柳外涼
 杖を携え来り追う 柳外の涼りゅうがいのりょう
 畫橋南畔倚胡床
 画橋 南畔 胡床に倚るなんはん こしょう よ
 月明船笛參差起
 月明 船笛 參差として起りしんし
 風定池蓮自在香
 風定りて 池蓮 自在に香ばしちれん かん

【語釈】

畫橋：美しい橋。胡床：背もたれのある腰掛け。參差：長短・高低、入り交じって不揃いな様。池蓮：池の蓮の花。

鄂渚南樓書事

鄂州南樓書事がくしゅうなんろうしよじ

北宋

黃庭堅こうていけん

四顧山光接水光
 四顧すれば 山光水光に接ししご さんこうすいこう
 凭闌十里芰荷香
 闌に凭れば十里 芰荷香るまきか
 清風明月無人管
 清風 明月 人の管する無くせいふう せつげつ
 并作南樓一夜涼
 并わせて作す 南樓 一夜の涼あわ な なんろう じやう

【語釈】

鄂州：湖北省武漢市の長江以南の地区。書事：事柄の感慨を書きしるす。山光：山の景色。水光：水面の輝き。闌：手すり。凭：もたれる。芰荷：菱と蓮。管：司る、支配する。

(漢詩大系18)

大暑

大暑

金

趙ちよう

元げん

早雲飛火燎長空

早雲かんうん 火を飛ばして 長空を燎くや

白日渾如墮甌中

白日すへ 渾て 甌そうちゆう 中に墮つるが如しお

不到廣寒冰雪窟

不到 廣寒こうかん 冰雪の窟に 到らずんば

扇頭能有幾多風

扇頭せんとう 能く 幾多の風 有らん

【語釈】

早雲：ひでりの雲。○甌中…こしきの中。○廣寒…月の中にあると言われる宮殿。広寒宮のこと。

暑夜

暑夜

明

釋宗泐しゃくそうらく

此夜炎蒸不可當

此の夜 炎蒸えんじゆう 当たるべからず

開門高樹月蒼蒼

門を開ければ 高樹月そうそう 蒼々

天河只在南樓上

天河は 只だ 南樓の上に在り

不借人間一滴涼

借さず 人間にんげん 一滴の涼

【語釈】

炎蒸：蒸し暑いこと。月蒼蒼：月の青白いさま。天河：天の川。

銷夏詩

銷夏詩

清

袁枚

不著衣冠不半年
水雲深處抱花眠
平生自想無官樂
第一驕人六月天

衣冠を著げざること半年に近く
水雲 深き処 花を抱だきて眠る
平生 自ら想う 無官の楽しみ
第一一人に驕るは六月の天

題介白亭

介白亭に題す

清

嚴遂成

遶亭三面水如煙
好是霏微釀雨天
滿袖蘋香將不去
夜涼輸與鷺鷥眠

亭を遶る三面 水煙の如し
好し是れ 霏微として 雨を醸すの天
滿袖の蘋香 將ち去らず
夜涼 輸與す 鷺鷥の眠

【語釈】

霏微：雪や雨の細かに降るさま。滿袖：袖一杯。蘋香：浮き草の香り。將不去：家に持つて帰る。輸與：致し与える。鷺鷥：しろさぎ。

涼思

涼思

唐

吳

融

松間小檻接波平

松間の小檻 波に接して平かなり

月澹煙沈暑氣清

月澹く煙沈み暑氣清し

半夜水禽棲不定

半夜水禽棲 定まらず

綠荷風動露珠傾

綠荷風動いて露珠傾く

【語釈】

小檻：小さな手すり。水禽：水鳥。綠荷：緑の蓮の葉。露珠：露の玉。

秋思

秋思

唐

劉禹錫

自古逢秋悲寂寥

古より秋に逢いて 寂寥を悲しむ

我言秋日勝春朝

我は言う 秋日は春朝に勝ると

晴空一鶴排雲上

晴空 一鶴雲を排して上り

便引詩情到碧霄

便ち 詩情を引いて 碧霄に到る

【語釈】

秋詞：秋のうた。寂寥：寂しく静かなさま。排：おしひらく。引：惹起する。碧霄：青空。

(漢詩鑑賞事典)

秋思

秋思

元

孫存吾

雁落西風字字沈

雁 西風に落ちて 字々沈む

嫩涼偷入藕花心

嫩涼 偷かに入る 藕花の心

眼前多少關心事

眼前 多少 關心の事

付與寒蟄徹夜吟

寒蟄に付與して 徹夜に吟ぜしむ

【語釈】

字字：雁の行列を字に喩えた物。嫩涼：柔らかな涼気、新涼に同じ。藕花：蓮の花。關心：心に関する事。寒蟄：ツクツクボーシ。

秋懷

秋懷

南宋

陸游

園丁傍架摘黃瓜

園丁 架に傍いて 黃瓜を摘み

村女沿籬采碧花

村女 籬に沿いて 碧花を采む

城市尚餘三伏熱

城市 尚お余す 三伏の熱

秋光先到野人家

秋光 先づ到る 野人の家

【語釈】

秋懷：秋の思い。園丁：畑をつくる人傍：…そう。架：…苗を支える柱。摘：…つむ。黃瓜：キユウリ。村女：村娘。籬：かきね。碧花：アサガオ。尚餘：なおも余している。三伏：猛暑の候。野人：庶民。
(詩詞世界)

初秋夜涼

しよしゆうやりよう
初秋夜涼

金

りゆうちゆうい
劉仲尹

小蟲機杼月西廂

小虫 機杼 月 西廂
きじよ きじよ せいしやう

風雨纒分半枕涼

風雨 纒に分かつ 半枕の涼
わすか わすか はんちん りよう

白髮自疎河漢夢

白髮 自ら疎なり 河漢の夢
おのすか おのすか かかん

一瓶秋水玉簪香

一瓶の秋水 玉簪 香し
いっぺい いっぺい きやくしん かんば

【語釈】

機杼：織機の「ひ」を送るとき声。西廂：西のひさし。半枕：単に枕をいう。河漢：天の川。玉簪：花の名、ギボウシユ。

雨後

雨後

金

ちやう ちよ
張 著

西風無意嫪織雲

西風 織雲を 嫪うに 意無し
せんうん せんうん した

埽盡千峰雨脚痕

埽い尽くす 千峰 雨脚の痕
はら はら うみやく

一片秋光清似水

一片の秋光 清きこと 水に似たり

家家空翠滿柴門

家々 空翠 柴門に満つ
くうすい くうすい

【語釈】

織雲：細かい雲。嫪：恋い慕う。空翠：したたるような緑色、山の美しい緑色。

野堂

野堂

金

王庭筠
おうていいん

緑李黄梅繞屋疏

緑李黄梅屋を繞りて疏なり

秋眠不著鳥相呼

秋眠著せず鳥相呼ぶ

雨聲偏向竹間好

雨声偏に竹間に向つて好く

山色漸從煙際無

山色漸く煙際従り無し

【語釈】

緑李：緑の李の葉。黄梅：黄色に実つた梅。不著：ここでは眠られないこと。向：於いて。煙際：霞の終端。

中秋望月

中秋月を望む

唐

王建
おうけん

中庭地白樹棲鴉

中庭地白くして樹に鴉棲み

冷露無聲濕桂花

冷露声無く桂花を湿らす

今夜月明人盡望

今夜月明人尽く望むも

不知秋思在誰家

知らず秋思の誰が家にか在る

【語釈】

望月：月を眺めて楽しむこと。中庭：母屋の正面にある庭。棲：ねぐらにつく。露：冷やかな露。桂花：木犀の花。秋思：秋の思いにふけている人。
(唐詩選)

中秋月

中秋の月

北宋

蘇軾

暮雲收盡溢清寒

暮雲 收まり尽きて 清寒溢る

銀漢無聲轉玉盤

銀漢 声なく 玉盤を転ず

此生此夜不長好

此の生 此の夜 長に好からず

明月明年何處看

明月 明年 何れの処にか看ん

【語釈】

暮雲：暮れの雲。收盡：すっかりなくなる。清寒：清らかな寒さ。銀漢：銀河。玉盤：月のこと。
(漢詩大系 17)

秋夕

秋夕

唐

杜牧

銀燭秋光冷畫屏

銀燭 秋光 画屏 冷え

輕羅小扇撲流螢

輕羅の小扇 流螢を撲つ

天階夜色涼如水

天階の夜色 涼水の如し

臥看牽牛織女星

臥して看る 牽牛 織女星

【語釈】

銀燭：白いロウソク。秋光：秋の景色。畫屏：絵が描かれている屏風。輕羅小扇：薄絹を張った軽やかなおうぎ。流螢：飛び交うホタル。天階：宮中のきざはし。夜色：夜の景色。

(唐詩三百首)

秋夕

秋夕

南宋

朱熹

一雨涼生杜若洲

一雨涼は生ず 杜若洲

月波微漾綠溪流

月波微に漾こく 緑溪の流

茅簷歸去無塵土

茅簷歸去 塵土無し

淡薄閑花遶舍秋

淡薄の閑花 舍を遶つて秋なり

【語釈】

杜若：カキツバタ。月波：月の光を浴びた波。茅簷：粗末な家。

山間秋夜

山間の秋夜

南宋

真山民

夜色秋光共一闌

夜色 秋光 共に一闌

飽收風露入脾肝

飽くまで 風露を収めて 脾肝に入る

虚簷立盡梧桐影

虚檐 立ち尽くす 梧桐の影

絡緯數聲山月寒

絡緯 数声 山月寒し

【語釈】

夜色：夜の景色。秋光：秋の趣。一闌：一つの欄干。虚檐：誰もいない縁側。梧桐：青桐。絡緯：こおろぎ。

江行

江行

清

傅昂霄
でんうせい

白雲明月漾微瀾

白雲 明月 微瀾に漾う
びらん ただよ

空外秋聲落遠灘

空外の秋声 遠灘に落つ
えんだん

燕子磯頭中夜起

燕子磯頭 中夜に起てば
えんしきとう

一天星斗大江寒

一天の星斗 大江寒し

【語釈】

微瀾：少しの波。秋聲：秋を感じさせる物音。燕子磯：南京近くの江辺にある磯。星斗：北斗星。

社日

社日

唐

王駕
おうが

鵝湖山下稻梁肥

鵝湖山下 稻梁肥え
がこさんか りやうとう

豚穿鷄埒半掩扉

豚穿 鷄埒半ば扉を掩す。
とんせい けいじ

桑柘影斜秋社散

桑柘 影斜めにして 秋社 散ず
そうしや

家家扶得醉人歸

家家 醉人を 扶け得て歸る
たす

【語釈】

社日：土地神を祀る日。立春後第五の戌の日を春社、立秋後第五の戌の日を秋社という。鵝湖山：荷湖山ともいう。信州鉛山県、現在の江西省鉛山県にある山。稻梁肥：晩秋の豊作をいう。梁は穀物。豚穿：豚を飼っているところ。穿は、穴。豚は坑で飼われていた。鷄埒：鶏を飼っているところ。埒は、鳥のねぐら。桑柘：桑の木。影斜：夕暮れ。
(三体詩)

九日

九日

南宋

戴復古

醉來風帽半欹斜

すいらい 風帽 半ば 欹斜す

幾度他鄉對菊花

いくたび 幾度か 他郷にて 菊花に 対す

最苦酒徒星散後

くも 最も 苦しむ 酒徒 星散の 後

見人兒女倍思家

人の 兒女を見て 倍 家を 思う

【語釈】

九日：九月九日、重陽の節句。欹斜：そばだち斜めになること。星散：星の如く四方に散らばる。

村夜

村夜

唐

白居易

霜草蒼蒼蟲切切

霜草は 蒼々として 虫 切々たり

村南村北行人絶

村南村北 行人絶ゆ

独出門前望野田

独り 門前に出でて 野田を 望めば

月明蕎麥花如雪

月明らかに して 蕎麥 花雪の 如し

【語釈】

霜草：霜にあつたために枯れた草。蒼蒼：しおれて青白い色。切切：虫がしきりに鳴く擬声語。村南村北：村の南も北も。行人：道を行く人。野田：野の中の田。蕎麥：そば、秋に白い花が咲く。
(新釈漢文大系 白氏文集 三)

初冬作贈劉景文

初冬の作 劉景文に贈る

宋

蘇軾

荷盡已無擎雨蓋

荷は尽きて 已に雨を擎ぐるの蓋無く

菊殘猶有傲霜枝

菊は残して 猶お霜に驕るの枝あり

一年好景君須記

一年の好景 君 須らく記すべし

正是橙黃橘綠時

正に是れ 黃橙橘綠の時

【語釈】

劉景文：劉季孫のこと、景文は字、父は北宋の將軍。荷：蓮。擎：持ち上げる。差し上げる。蓋：かさ。残：そこなわれる。すたれる。猶有：なお：がある。傲霜：霜にあっても枯れない。傲：ものともしない。須：すべきである。黃橙橘綠：橙が黄色くなり、橘が緑色になるころ、初冬の小春日和の時節、この詩を語源とする成語になっている。
(漢文大系 17)

對雪憶往歲錢塘西湖訪林逋

北宋 梅堯臣

雪に対して 往歲 錢塘の西湖に林逋を訪いしを憶う

昔乘野艇向湖上

昔 野艇に乗りて 湖上に向う

泊岸去尋高士初

岸に泊し 去りて 高士を尋ねし初

折竹壓籬曾礙過

折竹 籬を圧して 曾て 過ぐるを礙げ

却尋松下到茅廬

却って 松下を尋ね 茅廬に到りき

【語釈】

林逋：西湖の故山に隱棲した詩人。野艇：野川の小舟。茅廬：茅葺きの家。

寒夜

寒夜

南宋

杜
耒

寒夜客來茶當酒

寒夜客來りて茶酒に當つ

竹爐湯沸火初紅

竹炉湯沸きて火初めて紅なり

尋常一樣窗前月

尋常一樣窓前の月

纔有梅花便不同

纔に梅花有れば便ち同じからず

【語釈】

竹爐：小さ火鉢を竹で囲んだ暖房具。

除夜作

除夜の作

唐

高
適

旅館寒燈獨不眠

旅館の寒燈独り眠らず

客心何事轉淒然

客心何事ぞ転た淒然

故郷今夜思千里

故郷今夜千里を思ふ

霜鬢明朝又一年

霜鬢明朝又一年

【語釈】

寒灯：薄暗く、寒々とした灯。客心：旅人の心。何事：どうしたことか。転：ますます。淒然：ものさびしいさま。いたましいさま。霜鬢：霜のような白い鬢。
(唐詩選)

新年作

新年作

唐

宋之問

郷心新歲切

郷心^{きょうしん} 新歲^{しんさい} 切^{せつ}なり

天畔獨潛然

天畔^{てんぱん} 獨^{ひと} 潛然^{さんぜん}たり

老至居人下

老^{おい}至^しりて 人^{ひと}の下^{した}に居^いり

春歸在客先

春^{はる}歸^{かへ}りて 客^{きやく}の先^{さき}に在^あり

嶺猿同旦暮

嶺^{れい}猿^{えん} 同^{どう} 旦暮^{たんぼ}を 同^{どう}じゅうし

江柳共風煙

江^{かう}柳^{りゅう} 共^きに 風煙^{ふうえん}を 共^きにす

已似長沙傳

已^いに 長沙^{ちやうさ}の 伝^{でん}に 似^にたり

從今又幾年

今^{いま}從^より 又^{また} 幾^{いく}年^{ねん}

【語釈】

郷心：故郷を思う心。新歲：新しい年。天畔：天の端、天涯。潛然：涙を流す。嶺猿：山猿。旦暮：あけくれ。風煙：春霞。長沙傳：漢代の買誼のこと、長沙の傳に謫せられた。(唐詩三百首)

春夜喜雨

春夜雨を喜ぶ

唐

杜
甫

好雨知時節

好雨 時節を知り

當春乃發生

春に當つて 乃ち發生す

隨風潜入夜

風に從つて 潜かに夜に入り

潤物細無聲

物を潤して 細やかに声無し

野徑雲俱黑

野徑 雲と俱に黒く

江船火獨明

江船 火独り明かなり

曉看紅濕處

曉に 紅の湿う処を看れば

花重錦官城

花は 錦官城に重からん

【語釈】

當春：春になる。乃：そこで。發生：春に万物が生じること。入夜：夜になる、夜まで降り続く。野徑：野の小徑。江船：江上の船。

(漢詩大系 9)

新春

新春

南宋

真山民 しんざんみん

餘凍雪纒乾

余凍雪 わずか 纒に乾き

初晴日驟暄

初晴日 にわか 驟に暄なり けん

人心新歲月

人心新歲月

春意舊乾坤

春意旧乾坤 けんこん

煙碧柳回色

煙は碧にして柳色を回し かえ

燒青草返魂

焼は青くして草魂を返えず

東風無厚薄

東風厚薄無く

隨例到衡門

例に随つて衡門に到る

【語釈】

餘凍：余寒、立春後に残っている寒さ。燒青：野焼きの跡が蒼くなる。厚薄：不公平。衡門：木を横たえて門とした粗末な門、隠者の門。

曉起

曉起ぎょうき

南宋

文天祥ぶんてんしやう

夢破風煙迥

夢破れて風煙 迥はるかに

衾寒不自由

衾きん寒くして自由ならず

鍾聲到枕曙

鍾聲しやうせい 枕まくらに到いたつて曙あけ

月影入簾秋

月影げん 簾れんに入いつて秋なり

雁過江山老

雁かり 過すぎて江山 老おい

蛩吟草樹愁

蛩きやう 吟いずれば草樹愁う

整冠人共笑

冠かんを整ととうれば人共ひとどもに笑わらう

兩月不梳頭

兩月りやうげつ 頭あたまを梳くしけず

【語釈】

風煙：風にたなびく霞。江山老：江山共に歳が暮れようとしている。蛩：コオロギ。兩月：二ヶ月。

九日藍田崔氏莊

九日 藍田 崔氏の莊

唐 杜甫

老去悲秋強自寬

老い去りて 悲秋 強いて自ら寛うす

興來今日盡君歡

興來つて 今日 君が歡を尽くす

羞將短髮還吹帽

羞すらくは 短髮を將つて 還た帽を吹かるるを

笑倩旁人為正冠

笑うらくは 旁人に倩いて 為に冠を正すを

藍水遠從千澗落

藍水 遠く 千澗より落ち

玉山高並雨峰寒

玉山 高く並びて 雨峰寒し

明年此會知誰健

明年 此の会 知んぬ誰か健なる

醉把茱萸仔細看

酔いて茱萸を把つて 仔細に看る

【語釈】

九日：九月九日、重陽の節句。藍田：現在の陝西省藍田県。崔氏：不明。莊：別荘。老去：年老いること。悲秋：悲しみをそそられる秋。寬：心の悩みをやわらげる。吹帽 帽子が風で吹き飛ばされること。倩：頼む。旁人：傍らのひと。藍水：藍田の東から流れる川。千澗：多くの谷と川。玉山：藍田にある山。雨峰：雨の降っている峰。

(唐詩選) (新釈漢文大系 杜甫 (上))

和子由送春

子由の春を送るに和す

北宋

蘇軾

夢裏青春可得追

夢裏の青春 追うを得べけんや

欲將詩句絆餘暉

詩句を將つて 余暉を絆がんと欲すれども

酒闌病客性思睡

酒 闌 にして 病客 性だ 睡りを思い

蜜熟黃蜂亦懶飛

蜜熟して 黃蜂 亦た 飛ぶに 懶し

芍藥櫻桃俱掃地

芍藥 櫻桃 俱に 地を掃い

鬢絲禪榻兩忘機

鬢糸 禪榻 両つながら機を忘る

憑君借取法界觀

君に憑つて 法界觀を借取して

一洗人間萬事非

一洗せん 人間 万事の非を

【語釈】

夢裏：夢の中。餘暉：落日、又はその余光。鬢絲：老人の白髮。禪榻：座禪を組む腰掛。忘機：機巧の起こらないこと。法界觀：華嚴法界觀という仏教の名。

賦得四月清和雨乍晴

「四月清和雨乍晴」を賦し得たり

清

李文淵

小圃香銷雨乍停

小圃香銷して雨乍ち停み

陰陰新綠遍郊垌

陰々たる新緑 郊垌に遍し

波添曲沼當軒碧

波は添いて 曲沼 軒に当たつて碧に

雲斂遙峰入座青

雲は斂まりて 遙峰 座に入りて青し

掠水燕雛飛欲倦

水を掠むる燕雛は 飛んで倦まんと欲し

宿花蝶羽夢初醒

花に宿る蝶羽は 夢 初めて醒む

薰風到處田禾好

薰風 到る処 田禾 好し

爲愛農歌駐馬聽

農歌を愛するが爲に 馬を駐めて聴く

【語釈】

賦得：題を与えられて作った詩。四月清和雨乍晴：司馬光の「初夏」の起句、前出。小圃：小さな野菜畑。陰陰：暗く曇るさま。郊垌：郊外の野原。曲沼：曲がった沼。遙峰：遙かに見える峰。燕雛：燕の雛。薰風：初夏の風。田禾：五穀。

楚山秋晚

そざんばんしゆう
楚山秋晚

元

けいけいし
掲傒斯

山人何處抱琴歸
遙想樓臺隔翠微
老樹風生舟正泊
空江日落雁初飛
豈無賦客能招隱
亦有漁翁醉息機
一幅秋光舒復卷
誰教塵土澆人衣

山人何れの処にか琴を抱いて帰る
遙かに想う楼台の翠微を隔つるを
老樹風生じて舟正に泊し
空江日落ちて雁初めて飛ぶ
あふかく豈に賦客の能く隠を招く無からんや
また亦た漁翁の酔いて機を息する有り
ま一幅の秋光舒べて復た巻き
誰か塵土をして人衣を澆さしむる

【語釈】

翠微：山の八合目。賦客：賦を作る人、「文選」に招聘の詩あり。息機：名利の心を抛ち捨て去る。一幅秋光：一つの絵のような秋景色。舒：延べる。

雪後書北臺壁

雪後 北台の壁に書す

北宋

蘇軾

城頭初日始翻鴉

城頭の初日始めて鴉を翻えし

陌上晴泥已沒車

陌上の晴泥已に車を沒す

凍合玉樓寒起粟

凍玉樓に合して寒粟を起こし

光搖銀海眩生花

光銀海に搖れて眩して花を生ず

遺蝗入地應千尺

遺蝗地に入る応に千尺なるべし

宿麥連雲有幾家

宿麥雲に連つて幾家か有る

老病自嗟詩力退

老病自ら嗟す詩力の退くを

空吟冰柱憶劉叉

空しく氷柱を吟じ劉叉を憶つ

【語釈】

初日：朝日。陌上：道の上。晴泥：晴れた後の泥。凍：氷。粟：とりはだ。蝗：イナゴの子。宿麥：麦のこと。劉叉：韓愈の門人で、氷柱を詠じた詩がある。

(漢詩大系17)

足柳公權聯句

柳公權の連句を足す

北宋

蘇軾

人皆苦炎熱

人皆炎熱を苦しむ

我愛夏日長

我は愛す 夏日の長きを

薰風自南來

薰風 南 自り来たり

殿閣生微涼

殿閣 微涼を生ず

一為居所移

一たび 居の為に移されて

苦樂永相忘

苦樂 永く 相い忘る

願言均此施

願くは 言に 此の施を均しくして

清陰分四方

清陰 四方に分たんことを

【語釈】

柳公權：唐の人、詩賦に巧み。聯句：数人集まって一つの詩を作ること（日本の連歌のよ
うなもの）。最初の二句は玄宗皇帝、次の二句は柳公權の作、残りが蘇軾の作。薰風：穏や
かな初夏の風。言：助字、実質的な意味はない。清陰：涼しい木陰、清らかな恩沢。

苦熱行

苦熱行

唐

王 韞

祝融南來鞭火龍

祝融南來 火龍に鞭ち

火旗焰焰燒天紅

火旗 焰々 天を焼いて紅なり

日輪當午凝不去

日輪 午に当たりて凝りて去らず

萬國如在江爐中

万国 江炉の中に在る如く

五嶽翠乾雲彩滅

五岳 翠 乾きて 雲彩 滅ず

陽侯海底愁波竭

陽侯 海底に 波の 竭くるを愁う

何當一夕金風發

何ぞ 當に 一夕 金風 発し

爲我掃却天下熱

我が 爲に 天下の 熱を 掃却す べき

【語釈】

祝融：夏の神。焰焰：炎が盛んに燃えるさま。五嶽：泰山、衡山、崑山、恒山。翠：山の八合目。陽侯：晉の陽陵国公、水に溺れ大海の神となった。金風：秋の風。掃却：払い去る、却は完了を示す助字。

◆ 名勝類

鹿柴

鹿柴 ろくさい

唐

王維 おうい

空山不見人

空山 くうざん 人を見ず

但聞人語響

但 た 人語の響を聞く

返景入深林

返景 へんけい 深林に入りて

復照青苔上

復 ま 青苔 せいたい の上を照らす

【語釈】

鹿柴：鹿を放し飼いにするための囲いの柵。空山：人かげのない、静かで物寂しい山。返景：夕日の照りかえしの光。夕日の光。「景」は、光。日差し。深林：奥深い林の中。復：そして。青苔：濃い緑の苔。

(唐詩選)

木蘭柴

木蘭柴 もくらんさい

唐

唐王維 おう せい

秋山斂餘照

秋山 余照を斂め あきやま よしょう おさ

飛鳥逐前侶

飛鳥 前侶を逐う とせりよ ぜんりよ お

彩翠時分明

彩翠 時に分明 さいすい さいすい

夕嵐無處所

夕嵐 処所無し せきりん しょしょ

【語釈】

餘照：落日の残照。前侶：前の仲間。彩翠：（山の）美しい緑の色。夕嵐：夕方、山に懸かる靄。處所：落ち着く所。
（王維 100選）

白石灘

白石灘 はくせきたん

唐

唐王維 おう せい

清淺白沙灘

清淺なり 白沙灘 はくせきたん

綠蒲尚堪把

綠蒲 尚お 把るに堪えたり りよくほ と

家住水東西

家は住す 水の東西 じゅう

浣紗明月下

紗を浣う 明月の下 しゃ あら もと

【語釈】

白石灘：網川二十景の一つ。綠蒲：緑の蒲。
（王維 100選）

竹里館

ちくりかん
竹里館

唐

おう
王维

獨坐幽篁裏

独坐 幽篁の裏
ゆうしゆう うち

彈琴復長嘯

琴を弾じて 復た 長嘯す
きん まま ちようしやう

深林人不知

深林 人知らず

明月來相照

明月 来たりて 相照らず
あいて

【語釈】

幽篁：ひっそりした竹林。長嘯：声をのばして歌う。
(王维100選)

望天門山

てんもんざん
天門山を望む

唐

り
李白

天門中斷楚江開

天門 中斷して 楚江開く
てんもん ちゆうだん そくやうひら

碧水東流至北迴

碧水 東に流れて 北に至って廻る
へきすい とうにながれて きたに至ってめぐ

兩岸青山相對出

兩岸の青山 相對して出で
りょうがん せいざん たいたいしで

孤帆一片日邊來

孤帆 一片 日辺より来る
こはん いっぺん じっぺんより

【語釈】

天門山：長江兩岸を夾んで門のように聳える二つの山の総称。安徽省当塗県にある博望山（東梁山）と和县にある梁山のこと。中斷：中が断ち切られること。楚江：長江。碧水：青い色をした川の流れ。廻：まわる，向きを変える。青山：木が青々と茂っている山。相對：向かい合う。出：（大空に）突き出る。孤帆：ただ、一そのの帆掛け船。日邊：太陽のある所。
(唐詩選)

望廬山瀑布

廬山の瀑布を望む

唐 李白

日照香爐生紫煙

日は香炉を照らして紫煙を生ず

遙看瀑布挂長川

遙かに看る瀑布の長川を挂くるを

飛流直下三千尺

飛流直下 三千尺

疑是銀河落九天

疑うらくは是れ 銀河の九天より落つるか

【語釈】

廬山：江西省九江市南部の名勝。香炉峰：廬山の主峰の一つ。形が高香炉に似ているからこう呼ぶ。紫煙：紫のもや。前川：川の向こうに。疑是：と疑うほどだ。直下：まっすぐに落ちる。九天：空の非常に高いところ。
(漢詩鑑賞事典)

宿石邑山中

石邑山中に宿す

唐 韓翃

浮雲不共此山齊

浮雲も此の山と齊しからず

山靄蒼蒼望轉迷

山靄蒼々として望み 転た迷う

曉月暫飛千樹裏

曉月 暫く飛ぶ 千樹の裏

秋河隔在數峰西

秋河は 隔たりて 數峰の西に在り

【語釈】

不齊：等しくない、浮き雲が石邑山ほど高くないということ。暫飛：にわかに飛ぶように移ってゆく。

(唐詩選)

漢江

漢江 かんこう

唐

杜牧 とぼく

溶溶漾漾白鷗飛

溶溶漾漾 ようようようよう 白鷗飛 はくおう ぶ

綠淨春深好染衣

綠淨 きよ 春深 はるふか 好染 このぞむ 衣 ころも に好し

南去北來人自老

南去 なんきよ 北來 ほくらい 人 おのずか 自 おのずか から老ゆ

夕陽長送釣船歸

夕陽 せきよう 長 なが 送 おく 釣船 ちようせん の帰るを

【語釈】

漢江：陝西省西部に源を發し、東に流れ、武漢で長江に注ぐ。溶溶 水がこんこんとたたえているさま。漾漾：水面がゆらゆら揺れているさま。南去北來：南へ行ったり、北へ行ったりすること。

(新釈漢文大系 詩人編 9)

六月二十七日望湖樓醉書五絶

北宋

蘇軾 そしやく

六月二十七日望湖樓醉書 五絶 ぼうれうすいしよ

黑雲翻墨未遮山

黑雲 こくうん 墨 すみ を翻 ひるがえ して未 な だ 山 やま を遮 かざ らず

白雨跳珠亂入船

白雨 はくう 珠 たま を跳 おど らせて 乱 みだ れて船 ふね に入る

卷地風來忽吹散

地 ち を卷 ま き 風 かぜ 來 き たつて 忽 たちま ち吹 ふ き散 ち ず

望湖樓下水如天

望湖樓 ぼうれう 下 か 水 みづ 天 あま の如 ごと し

【語釈】

望湖樓：西湖畔の建物、看經楼とも、先徳楼ともいう。宝石峰にあったというのが現在はない。黑雲：黒い(雨)雲。翻：ひっくり返す。反対になる。ひるがえす。遮山：(雨雲が)山を遮(さえぎ)る。白雨：にわか雨、夕立。跳：はねる。珠：真珠。卷地：地面をまきあげる、風の勢いの強いさま。忽：たちまち。吹散：(雨粒を)吹き飛ばす。

(漢詩鑑賞事典)

飲湖上初晴後雨二首

北宋

蘇軾

湖上に飲む 初めは晴 後は雨ふる二首

水光激艶晴方好

水光 激艶として 晴れてまさに好く

山色空濛雨亦奇

山色 空濛として 雨もまた奇なり

欲把西湖比西子

西湖を把て 西子に比せんと欲すれば

淡粧濃抹總相宜

淡粧濃抹 総べて相宜ろし

【語釈】

水光：湖の水面が輝いているさま。激艶：さざ波が揺れているさま。山色：山の色。空濛：朦朧としたさま。奇：独特の趣がある。西施：春秋時代の美女。欲：くしようとする。淡粧：薄化粧。濃抹：厚化粧。相宜：ふさわしい。
(漢詩大系17)

横塘

横塘

南宋

范成大

南浦春来绿一川

南浦 春来 緑 一川

石橋朱塔兩依然

石橋 朱塔 両つながら 依然たり

年年送客横塘路

年年 客を送る 横塘の路

細雨垂楊繫畫船

細雨 垂楊 画船を繫く

【語釈】

横塘：蘇州市中央のやや南寄りにある古い堤の名。南浦：別れの港。(別れの港である) 南の方のなごさ。一川：一面の原野：満川。依然：もとのままである。

題西林壁

西林の壁に題す

北宋

蘇軾

横看成嶺側成峰

横より看れば嶺を成し 側よりすれば峰と成る

遠近高低總不同

遠近 高低 総て 同じからず

不識廬山真面目

廬山の真面目を 識らざるは

只緣身在此山中

只だ 身の 此の山中に在るに縁る

【語釈】

西林：西林寺、廬山（江西省九江市南部）のふもとに西林寺と東林寺があった。題壁：壁に詩を書きつけること。横看：横の方から眺めわたすと。成嶺：連なつた山になる。側：そば。成峰：鋭く聳える峰となる。廬山：山の名、江西省九江市の南方にある。真面目：本来の姿。
（漢詩大系 17）

鍾山

鍾山

北宋

王安石

澗水無聲繞竹流

澗水 声無く 竹を繞つて流る

竹西花草弄春柔

竹西の 花草 春柔を弄す

茅簷相對坐終日

茅簷 相對して 坐すること終日

一鳥不啼山更幽

一鳥啼かず 山更に幽なり

【語釈】

鍾山（鍾山）：南京の東側にある紫金山の旧名。即事：事に触れて、その場のことを題材として詩を作ること。澗水：谷川の水。竹西：竹林の西側あたり。花草：花の咲く草。春柔：春の柔らかな気配。弄：表す、めぐる。茅簷：かやぶきの軒端。幽：奥深く静かなさま
（漢詩大系 16）

臨平道中

臨平道中
りんへいどうちゆう

北宋

釋道潜
しゃくどうせん

風蒲獵獵弄輕柔

風蒲 獵々として 輕柔を弄す
ふうほ ろうろう けいじゆう ろう

欲立蜻蜓不自由

立たんと欲するも 蜻蜓 自由ならず
りんへいさんか せいてい

五月臨平山下路

五月 臨平山下の路
りんへいさんか

藕花無數滿汀洲

藕花 無數 汀洲に満つ
ぐうか ていしゆう

【語釈】

臨平：杭州の江西県にある山の名。風蒲：風に吹かれる蒲の葉。獵獵：風の吹く声。輕柔：軽く柔らかなさま。蜻蜓：とんぼ。藕花：蓮の花。汀洲：なぎさと中州。

過臨平蓮蕩

臨平の蓮蕩を過ぐ
りんへい れんどう

南宋

楊萬里
ようばんり

人家星散水中央

人家 星散す 水の中央
せいさん せいさん

十里芹羹菰飯香

十里の芹羹 菰飯 香し
きんこう こはん かんぱ

想得薰風端午後

想得たり 薰風 端午の後
くんふう

荷花世界柳絲鄉

荷花の世界 柳糸の郷
かか りゆうし きよう

【語釈】

臨平：前記、臨平山の側の湖の名。蓮蕩：蓮池の堤。星散：星のように散らばっていること。芹羹：芹のあつもの。菰飯：マコモの実が入った飯。薰風：初夏の心地よい風。
(漢詩大系16)

入瑞巖道間得四絶句呈彦集充父二兄

南宋 朱熹

瑞巖ずいがんに入る道間 四絶句を得たり 彦集充父二兄に呈す

清溪流過碧山頭 清溪 流れ過ぐ 碧山の頭

空水澄鮮一色秋 空水 澄鮮 一色 秋なり

隔斷紅塵三十里 紅塵を隔斷す 三十里

白雲黃葉共悠悠 白雲 黃葉 共に悠悠

【語釈】

空水…水と空。澄鮮…澄んで鮮やかなさま。紅塵…浮き世の汚れた塵。悠悠…ゆったり静かなさま。

醉下祝融峰

酔いて祝融峰を下る

南宋 朱熹

我來萬里駕長風

我 来って万里 長風に駕す

絶壑層雲許盪胸

絶壑の層雲 許胸を盪かす

濁酒三杯豪氣發

濁酒 三杯 豪氣発し

朗吟飛下祝融峰

朗吟 飛び下る 祝融峰

【語釈】

祝融峰…南岳衡山（湖南省衡陽市）にある峰の名。長風…遠方から吹いて来る風。駕…乗る。絶壑…深く切りたった谷。層雲…重なっている雲。許…こんなにも。豪氣…豪快な気分。

（漢詩鑑賞事典）

武夷山中

武夷山中 ぶいさんちゆう

南宋

謝枋得 しゃほうとく

十年無夢得還家

十年夢無く家に還るを得る無し かえ

獨立青峯野水涯

独立す青峯野水の涯

天地寂寥山雨歇

天地寂寥として山雨歇む せきりよう や

幾生修得到梅花

幾生か修し得て梅花に到らん いくせい

【語釈】

武夷山：福建省にある黄崗山を中心とする山系の総称。山水の名勝として有名で、黄山、桂林とぶ景勝の山。寂寥：寂しいさま。修得：道を修行する。

三峽歌九首

三峽の歌九首

南宋

陸游 りく ゆう

十二巫山見九峰

十二の巫山九峰を見る ふざん

船頭彩翠滿秋空

船頭の彩翠秋空に満つ せんとう さいすい

朝雲暮雨渾虛語

朝雲暮雨渾て虚語 すべ

一夜猿啼明月中

一夜猿は啼く明月の中 うち

【語釈】

三峽：長江上流、重慶市奉節県の白帝城から湖北省宜昌の南津関にかけてある峡谷。瞿塘峽・巫峽・西陵峽、古来、舟行の難所。十二巫山：巫山には十二の峰があると言われる。船頭：舟の舳先（「せんどう」は和語）。彩翠：彩られた山の緑。朝雲暮雨：巫山の巫女が楚の襄王に「朝に朝雲となり、暮れに暮雲となる」と言った故事、「高唐賦」による。（漢詩大系19）

由三分水至楠木園出巫峡

三分水さんぶんみずよ由より楠木園なまほくえんに至いたり巫峡ふきょうを出でず

清

張問陶ちやうもんとう

江聲蟠曲亂山開

江聲ばんきよく蟠曲ばんきよくして乱山ばんきよく開ひらく

天半濛濛萬古苔

天半もうもう濛濛もうもうたり万古もうもうの苔も

千丈奇峰立如壁

千丈せんじやうの奇峰きほう立たちて壁かべの如ごとく

蛟竜窟裏一帆來

蛟竜窟裏こうりゆうくくり一帆いつぱん來きる

【語釈】

巫峡：瞿唐峡、西陵峡と共に三峡の一つ。蟠曲：うづくまり曲がる。江聲蟠曲：江水が音を立てて曲がりくねるさま。濛濛：（雨や小雨で）煙るようにもやもやしているさま。蛟竜窟：巫峡の両岸が相迫って険しいさまを形容したもの。

吳山

吳山

金

完顔亮わんやんりやう

萬里車書合混同

万里まんり車書しやしょ合あひに混同まじすべし

江南豈有別堤封

江南かんなん豈いかでに別堤べつてい封ふう有あらんや

移兵百萬西湖上

兵へいを移うつす百万ひゃくまん西湖せいこの上のうへ

立馬吳山第一峯

馬うまを立たつ吳山ごさん第一だいいちの峯のね

【語釈】

吳山：西湖の近傍にある山。車書合混同：天下を統一する意味、「中庸」に記載あり。有別堤封：別の領土を他人が支配すること。

過梅嶺岡留題

梅嶺岡を過ぎて留題す

元伯顔

馬首經從庾嶺回

馬首 庾嶺を 經從して 回る

王師到處悉平夷

王師 到る處 悉く平夷す

擔頭不帶江南物

擔頭 帶びず 江南の物

只插梅花一兩枝

只だ 挿む 梅花 一兩枝

【語釈】

庾嶺：韶州にある梅の名所。經從：經過する。王師：皇帝の軍。平夷：平定する。擔頭：かづきもの、荷物。

出東林六七里望廬山

東林に出で六七里廬山を望む

清 錢載

連峰出雲雲半開

連峰 雲を出で 雲半ばは開く

奔渠捲雪響春雷

奔渠 雪を捲き 春雷 響く

雲中屈曲明如玉

雲中 屈曲 明玉の如し

都是天池傾瀉來

都是 是れ 天池より 傾瀉して來たる

【語釈】

廬山：江西省北端部の名山。東林：廬山の北西麓に位置する名刹、東林寺のある場所。奔渠：水のほとばしる溝。天池：海、ここでは天上の池。傾瀉：傾き瀉ぐ。

南屏雜詠

南屏雜詠 なんぺいざつえい

清

王又旦 おうゆうしや

西湖西去萬山閒

西湖西に去る 万山の間

桑柘離離茅屋閑

桑柘 離々として 茅屋 閑かなり

路到飛來峰一半

路は到る 飛來峰の一半

白雲先伴老僧還

白雲 先ず 老僧に伴ないて 還える

【語釈】

南屏：浙江省杭州市にある南屏山、臥竜山ともいう。桑柘：桑とヤマグルワ。離離：草樹が反映しているさま。飛來峰：西湖の西にある山で、山中に靈隠寺がある。

鶯湖竹枝詞

鶯湖竹枝詞 おうこちくしし

清

吳景果 ごけいか

沢國烟波似畫圖

沢國の煙波 画図に似たり

汀洲處處長菰蒲

汀洲 処々 菰蒲 長ず

就中最是難忘處

就中 最も是れ 忘れ難き処

細雨斜風鶯脰湖

細雨 斜風 鶯脰湖

【語釈】

鶯湖：江蘇省蘇州市にある湖。竹枝詞：劉禹錫が左遷地であった朗州（湖南省）での民謡に倣って作った物、土地の人情、風俗などを詠ったもの。沢國：池沼の多い地。烟波：水面の靄。汀洲：岸と中州。菰蒲：マコモとガマ。就中：とりわけ。鶯脰湖：鶯湖の別名。

真州雑詩

雑詩

清

王士禛
おうししん

江干多是釣人居

江干は多く是れ釣人の居

柳陌菱塘一帶疎

柳陌菱塘一帶疎なり

好是日斜風定後

好し是れ日斜めにして風定まるの後

半江紅樹賣鱸魚

半江の紅樹鱸魚を売る

【語釈】

真州：江蘇省儀征市。江干：江の岸。釣人：漁民。柳陌：柳を植えた道。菱塘：菱の生えた池塘。半江：江の岸辺。

泊秦淮

秦淮に泊す

唐 杜牧

煙籠寒水月籠沙

煙は寒水を籠め月は沙を籠む

夜泊秦淮近酒家

夜秦淮に泊して酒家に近し

商女不知亡國恨

商女は知らず亡国の恨みを

隔江猶唱後庭花

江を隔てて猶唱う「後庭花」

【語釈】

秦淮：建康（南京）を貫流して長江へ注ぐ古代の運河。煙：霞は靄。寒水：寒々とした冬の川。籠：月光が河の砂に射している。・籠：つつみこむ。沙：砂州。酒家：酒屋、飲み屋。商女：妓女。亡國恨嘗てここに都を構えていた南朝の陳の後主が酒色に耽り、国を亡ぼしたという。後庭花：後庭花：『玉樹後庭花』。南朝の陳の後主が作った詩。

（漢詩大系 9）

留題秦淮丁家水閣四首

秦淮の丁家の水閣に留題す四首

明

錢謙益

舞榭歌臺羅綺叢

舞榭 歌台 羅綺の叢

都無人跡有春風

都て 人跡無く 春風有り

踏青無限傷心事

踏青 限り無し 傷心の事

併入南朝落照中

併せて入る 南朝 落照の中

【語釈】

秦淮：建康（南京）を貫流して長江へ注ぐ古代の運河、周辺は歓楽街。榭：屋根のある台。舞榭歌臺：歌舞を催すうてな。羅綺：薄絹の美しい「アヤ」それで装った美人達。叢：群集する。踏青：春、青草の上で遊ぶこと。落照：夕日。
（漢詩大系22）

留題秦淮丁家水閣四首 其二

秦淮の丁家の水閣に留題す四首 其二

明

錢謙益

苑外楊花待暮潮

苑外の楊花 暮潮を待つ

隔溪桃葉限紅橋

隔溪の桃葉 紅橋を限る

夕陽凝望春如水

夕陽 凝望すれば 春水の如く

丁字簾前是六朝

丁字簾前 是れ 六朝

【語釈】

楊花：柳絮。桃葉：渡し場の名。紅橋：紅い欄干の橋。丁字簾：妓楼の簾
（漢詩大系22）

秦淮雜詩原十四首

秦淮雜詩原十四首

清

王士禛

年來腸斷秣陵舟

年來 腸斷す

秣陵の舟

夢繞秦淮水上樓

夢は遶る 秦淮

水上の樓

十日雨絲風片裏

十日の雨糸 風片の裏

濃春煙景似殘秋

濃春の煙景 殘秋に似たり

【語釈】

秦淮：建康（南京）を貫流して長江へ注ぐ古代の運河、周辺は歓楽街。雜詩：興の赴くままに作った詩。年來：数年この方。腸斷：はらわたが断ち切れるほどの悲しみ、愁い（ここでは、心の底から思い焦がれていたという意味）。秣陵：南京の近くにある地。雨絲：細かい雨。風片：軽い風。濃春：春のたけなわ。煙景：霧の中の景色。殘秋：秋の末。
(漢詩大系 23)

秦淮雜詩 其二

秦淮雜詩 其二

清

王士禛

潮落秦淮春復秋

潮は秦淮に落ちて 春復た秋

莫愁好作石城遊

莫愁 好し作す 石城の遊び

年來愁與春潮滿

年來 愁は 春潮と滿つ

不信湖名尚莫愁

信ぜず 湖名の 尚お 莫愁なるを

【語釈】

秦淮：金陵（南京）城内を流れる河。莫愁：金陵にある湖の名。石城：石頭城、金陵のこ

と。
(漢詩大系 23)

登岳陽樓

岳陽樓に登る

唐

杜甫

昔聞洞庭水

昔聞く 洞庭の水

今上岳陽樓

今登る 岳陽樓

吳楚東南坼

吳楚 東南に坼け

乾坤日夜浮

乾坤 日夜浮かぶ

親朋無一字

親朋 一字無く

老病有孤舟

老病 孤舟あり

戎馬關山北

戎馬 關山の北

憑軒涕泗流

軒に憑れば 涕泗流る

【語釈】

岳陽樓：湖南省岳陽市市街の北西、岳陽城の西城門上の樓閣。昔聞：以前に（言い伝えで）聞いていた。洞庭水：洞庭湖。吳楚：吳楚の地方。東南坼：吳楚の地方は、東南部分に裂けて洞庭湖となったと言う伝説がある。乾坤：天と地。日夜：昼も夜も。浮：水面に影を映して浮かび漂う。親朋：親戚と友人。無一字：一通の手紙も来ない。戎馬：軍馬。兵馬。ここでは戦いを指す。関山：関所のある山。軒：手すり。憑：よりかか。涕泗：涙、目から出るのが「涕」、鼻から出るのが「泗」。

（唐詩選）

臨洞庭上張丞相 洞庭に臨む張丞相に上る 唐 孟浩然

八月湖水平 八月湖水平らかに

涵虛混太清 虚を涵して太清に混ぜず

氣蒸雲夢澤 氣は蒸す 雲夢沢

波撼岳陽城 波は撼がす 岳陽城

欲濟無舟楫 濟らんと欲するも 舟楫なく

端居恥聖明 端居 聖明に恥がす

坐觀垂釣者 坐に釣を垂るる者を観て

徒有羨魚情 徒らに魚を羨むの情あり

【語釈】

洞庭：洞庭湖。臨：目の前にする。高い所から下を見る。虚：虚空。大空。涵：浸す。太清：天。道教用語。混：空と水とが一つに混ざり合う。氣蒸：水蒸氣が立ちのぼる。雲夢沢：今の湖北省南部から湖南省北部にかけてあったといわれる広大な湿地帯の名。氣蒸：水蒸氣が立ちのぼる。舟楫：舟と櫂。端居：なすこともなく、じっとしている。聖明：天子、天子の明德。

(唐詩選) (漢詩鑑賞事典)

黄鶴樓

黄鶴樓

唐

崔顥さいこう

昔人已乘白雲去

昔人せきじん 已に 黄鶴に乗じて去り

此地空餘黄鶴樓

此の地 空しく余す 黄鶴樓

黄鶴一去不復返

黄鶴 一たび去って 復また返らず

白雲千載空悠悠

白雲 千載 空しく悠悠ゆうゆう

晴川歴歴漢陽樹

晴川せいせん 歴々れきれぎ たり 漢陽の樹かんよう

芳草萋萋鸚鵡洲

芳草ほうそう 萋々せいせい 鸚鵡洲おうむしゅう

日暮鄉關何處是

日暮 鄉關きょうかん 何れの処これか是なる

煙波江上使人愁

煙波 江上 人をして 愁えしむ

【語釈】

黄鶴樓：湖北省武昌県の西端、長江に突き出した所にある楼台。昔人：伝説にある、昔この地に来たという仙人。悠悠：どこまでも遠い。晴川：晴れた長江の流れ。歴歴：はつきり見えるさま。芳草：かぐわしい春の草。萋萋：生い茂っているさま。鸚鵡洲：湖北省漢陽県の西南、揚子江の中洲。郷関：故郷。煙波：川面を覆う霧。

(唐詩選)

登金陵鳳凰臺

金陵の鳳凰臺に登る

唐 李白

鳳凰臺上鳳凰遊

鳳凰臺上鳳凰遊ほうおうだいじょう ほうおう

鳳去臺空江自流

鳳去り 台空しくして 江自から流るほう たいくしくして かうおのず

吳宮花草埋幽徑

吳宮の花草は幽徑に埋もれごきゆう かそう ゆうけい

晉代衣冠成古丘

晉代の衣冠は古丘と成るしんだい いこん

三山半落青天外

三山 半ば落つ 青天の外さんざん はんぱおち へんか

二水中分白鷺洲

二水 中分す 白鷺洲にすい ちゆうぶん ぱくろしゆう

總爲浮雲能蔽日

総て 浮雲の能く日を蔽うが爲にすべ ふうん のよく日をおほ

長安不見使人愁

長安見えず 人をして愁えしむ

【語釈】

金陵：南京市、六朝の古都、南朝の各朝の首都。鳳凰臺：〔南朝・宋の元嘉十四年（437年）に、孔雀のようで五色の模様鳳凰のある美しい鳴き声の鳥が集まったことに因つて、築いた台、南京市の鳳凰山上にある。鳳凰：想像上の鳥、聖主が世に出ると現れるという、鳳は雄、凰は雌。江：長江。自：自然に、変わることなく。吳宮：三國の呉の孫権が建業（金陵）においた宮殿。幽徑：奥深い小道、人気のない静かな小道。晉代：東晋。衣冠：権門富貴、貴族。三山：金陵の西南にある三つの山（山名不明）。二水：金陵を挟むように流れる二つの川（秦淮河と護城河）。白鷺洲：中州の名。浮雲：〔宦官の高力士を指していると思われる。日：（玄宗を指していると思われる）。（漢詩大系 8）

参考 『茗溪漁隱叢話・卷五』

昔人已乘白雲去，此地空餘黃鶴樓，黃鶴一去不復返，白雲千載空悠悠。晴川歷歷漢陽樹，芳草萋萋鸚鵡洲。日暮家山何處在？煙波江上使人愁。李太白負大名，尚曰『眼前有景道不得，崔顥題詩在上頭。』欲擬之較勝負，乃作《金陵登鳳凰台》詩。

松滋渡望峽中

松滋渡より峽中を望む

唐 劉禹錫

渡頭輕雨灑寒梅

渡頭の輕雨 寒梅を灑ぐ

雲際溶溶雪水來

雲際 溶々 雪水 来たる

夢渚草長迷楚望

夢渚草 長じて 楚望迷い

夷陵土黒有秦灰

夷陵 土黒くして 秦灰有り

巴人淚應猿聲落

巴人の涙は 猿声に应じて落ち

蜀客船從鳥道回

蜀客の船は 鳥道従り 回える

十二碧峰何處所

十二の碧峰 何れの処の所ぞ

永安宮外是荒臺

永安宮外 是れ 荒台

【語釈】

渡頭：渡し場のあたり。溶溶：水が盛んに流れるさま。夢渚：洞庭湖の周辺に広がる沼沢地。楚望：楚の国の遠望。夷陵：湖北省宜昌。秦灰：秦の將軍白起が焼き払ったあとと灰。

巴人：四川省東部。鳥道：鳥しか通わないような險阻な道（川）。十二碧峰：巫山にある十二の緑の峰。永安宮：夔州にあった行宮、劉備が死んだところ。

(三体詩)

登玲瓏山

玲瓏山に登る
れいろうざん

宋 蘇軾
そ しょく

何年僵立兩蒼龍

何年僵立す兩蒼龍
きやうりつ りやうせうりゆう

瘦脊盤盤尚倚空

瘦脊 盤々 尚お 空に倚る
そうせい ばんばん しょう くうよ

翠浪舞翻紅罷亞

翠浪 舞翻して 紅罷亞
すいろう ぶはん こういあ

白雲穿破碧玲瓏

白雲 穿破して 碧玲瓏
せんば へまれいろう

三休亭上工延月

三休亭上 工に月を延べ
さんきゆうていじよう たくみ

九折巖前巧貯風

九折巖前 巧みに風を貯う
くせつがんぜん たく

脚力盡時山更好

脚力 尽くる時 山更に好し
きゃくりきくるとき やま更にこうし

莫將有限趁無窮

有限を將つて 無窮を趁うこと 莫かれ
も お な

【語釈】

玲瓏山：杭州市臨安県にある山、2角山が屹立している。僵立：直立不動。兩蒼龍：二つの蒼い玲瓏山の峰。瘦脊：瘦せた骨（山の様子）。盤盤：曲がりくねっているさま、何処までも続いているさま。翠浪：緑の波（稲の穂が風で波立つさま）。舞翻：舞い翻る。紅罷亞：稲の熟したものの。穿破：穿ち破る。碧玲瓏：玲瓏山を形容したもの。三休亭：玲瓏山にある一つの亭。九折巖：玲瓏山の山頂にある巖。

登州海市

登州海市とうしゅうかいし

北宋

蘇軾そしやく

東方雲海空復空
羣仙出沒空明中
蕩搖浮世生萬象
豈有貝闕藏珠宮
心知所見皆幻影
敢以耳目煩神功
歲寒水冷天地閉
為我起蟄鞭魚龍
重樓翠阜出霜曉
異事驚倒百歲翁
人間所得容力取
世外無物誰為雄
率然有請不我拒
信我人厄非天窮
潮陽太守南遷歸
喜見石廩堆祝融
自言正直動山鬼
豈知造物哀龍鐘
伸眉一笑豈易得
神之報汝亦已豐
斜陽萬里孤鳥沒

東方の雲海 空復た空
群仙出沒す 空明の中
浮世を蕩搖して 万象を生ず
豈に 貝闕の 珠宮を蔵する 有らんや
心に知る 見る所 皆 幻影
敢て 耳目を以って 神功を 煩わさん
と 歳 寒く 水 冷やかにして 天地 閉ず
我が為に 蟄を起こして 魚龍を 鞭つ
重樓 翠阜 霜 曉に出で
異事 驚倒す 百歳の翁
人間 得る所は 力取す容し
世外 物無し 誰か雄と為す
率然として 請う有れば 我を拒まず
信に 我は 人厄 天窮に非らず
潮陽の太守 南遷して 歸り
喜び見る 石廩の祝融に 堆するを
自ら言う 正直 山鬼を動かすと
豈に知らんや 造物の 龍 鐘を 哀むを
眉を伸べて 一笑するも 豈に得易からんや
神の 汝に報ずるも 亦た 已に豊かなり
斜陽 万里 孤鳥 没す

但見碧海磨青銅

但だ見る碧海青銅を磨するを

新詩綺語亦安用

新詩綺語も亦た安ぞ用いん

相與變滅隨東風

相い與に變滅して東風に隨う

【語釈】

海市：蜃気楼。蕩搖：ゆるぎ動く。貝闕：紫色の貝殻で飾った宮殿、河伯（黄河の神）の居る所。珠宮：竜宮の類い。起蟄：地中に眠っている虫を起こす。翠阜：翠の山。力取：全力を尽くして得る。人厄：人によって被る災害。天窮：天によって被る災害。潮陽太守：韓愈のこと。石廩：南方の衛岳の高峰。祝融：衛岳の高峰。龍鐘：年老いてやつれた様。青銅：「カラカネ」の鏡。

蜀道難

蜀道難

唐 李白

噫吁戲危高哉

噫^あ吁^あ戲^あ 危^{かな}いう^{かな}乎^{かな} 高^{かな}き^{かな}哉^{かな}

蜀道之難難于上青天

蜀道の難きは 青天に上るよりも難し

蚕叢魚鳧

蚕叢^{さんそう} 及び^{ぎよふ} 魚鳧^{ぎよふ}

開國何茫然

開国^{かいこく} 何ぞ^{なげ} 茫然^{ぼうぜん}たる

爾來四萬八千歲

爾來^{じらい} 四万八千歳

不與秦塞通人煙

秦塞^{しんさい} 与人煙を通ぜず

西當太白有鳥道

西^あ 太白^{あた}に当^あつて 鳥道^{ちうだう}有り

可以橫絕峨眉巔

以^がつて 峨眉^{がび}の巔^{てん}を 横絶^がすべし

地崩山摧壯士死

地崩^{ちぼう}れ 山^{くた} 摧^{くた}けて 壯士^{さうし} 死^しす

然後天梯石棧相鈎連

然^{しか}る後^ご 天梯^{てんてい} 石棧^{せきせき} 相鈎連^{あいこうれん}す

上有六龍回日之高標

上^うには 六龍^{ろくりやう} 日^{かえ}を回^{かえ}すの 高標^{かうひょう} 有り

下有沖波逆折之回川

下^{した}には 衝波^{しょうは}逆折^{ぎやくせつ}の 回川^{かいせん} 有り

黃鶴之飛尚不得過

黃鶴^{わうかく}の 飛^とぶこと 尚^{なほ}お 過^あぐることを得^えず

猿猴欲度愁攀緣

猿猴^{えんじゆう} 度^{わた}らんと 欲^{ほつ}しするも 攀緣^{はんえん}を愁^{おも}う

青泥何盤盤

青泥^{せいじ} 何ぞ^{なに} 盤々^{ばんばん}たる

百步九折迴岩巒

百步^{ひやくふ} 九折^{くしやく} 岩巒^{がんらん}を廻^{めぐ}る

捫參歷井仰脅息

參^{さん}を捫^もし 井^いを歴^{れき}て 仰^あいで 脅息^{きゆうそく}す

以手撫膺坐長嘆

手^てを以^もつて 膺^{むね}を撫^ぶし 坐^まして 長嘆^{ちやうたん}す

問君西游何時還

問^とう 君^{きみ} 西游^{せいゆう} 何れの時^{とき}にか 還^{かえ}らん

畏途巖岩不可攀

畏途^{いと}の 巖岩^{ざんざん} 攀^よずべからず

但見悲鳥號古木

但^{ただ} 見^みる 悲鳥^{ひちゆう} 古木^{こぼく}に号^{なげ}び

雄飛雌呼繞林間

雄飛び雌を呼びて林間を繞るを

又聞子規啼夜月愁空山

又聞く子規夜月に啼いて空山に愁うることを

蜀道之難難于上青天

蜀道の難きは青天に上るよりも難し

使人聽此凋朱顏

人をして此を聽きて朱顔を凋ぼしむ

連峰去天不盈尺

連峰天を去ること尺に盈たず

枯松倒挂倚絕壁

枯松倒しまに挂かりて絶壁に倚る

飛湍瀑流爭喧怪

飛湍瀑流争いて喧怪たり

擊崖轉石萬壑雷

崖を撃ち石を転じて万壑雷く

其險若此

其の險や此の若し

嗟爾遠道之人

嗟す爾遠道の人

胡為乎來哉

胡為ぞ来る哉

劍閣崢嶸而崔嵬

劍閣は崢嶸として崔嵬たり

一夫當關萬夫莫開

一夫関に当たれば万夫も開く莫し

所守或匪親

守る所或は親に匪ざれば

化為狼與豺

化して狼と豺と為る

朝避猛虎

朝には猛虎を避け

夕避長蛇

夕には長蛇を避く

磨牙吮血

牙を磨し血を吮す

殺人如麻

人を殺すこと麻の如し

錦城雖云樂

錦城は云に樂しと雖も

不如早還家

早く家に還るに如かず

蜀道之難難于上青天

蜀道の難きは青天に上るよりも難し

側身西望長咨嗟

身を側てて西望長く咨嗟す

【語釈】

蜀道難：四川省の道路の極めて危険なこと、楽府題。蚕叢：古代蜀の国王で、養蚕を發明した人物。古代蜀の国王で、鵜飼を始めた人物。何：何と、感嘆を表す。茫然：ぼんやりしているさま。爾来：それ以来。秦塞：秦の地方、関中。通人煙：人々が往来する意。西当：西側に当たる。当：当たる。(…に) 向いて。太白：太白山のこと現・陝西省眉県の南、太白県にある。鳥道：鳥しか通わないような険しい山道。可以：…できる。横絶：よこぎる。山や川や海を横切り渡る。峨眉：四川省の四川盆地西南端にある名山の一の峨眉。巔：いただき。地崩山摧：大地の崩れるさま。壮士死：この句は『華陽國志』の『蜀志』に基づく。然後：その後。しかるのち。天梯石栈：「切り立った険しい崖沿いの山道に、石(や木材)で棚のように張り出して設けた道。鈎連：つづき連なる。六龍回日：六頭立ての龍車に乗って運行する太陽。回：遠回りする。迂回する。避ける。高標：蜀山の嶺の中の標識となるべき最高峰。衝波：激しい真つ直ぐな流れの波。逆折：逆方向に折れ曲がって(の流れ)。回川：渦巻く川。黄鶴：黄鶴のことで、大空を善く飛ぶ大鳥。猿猱：サルやテナガザル。(蜀の地にいる) サルの類を謂う。攀援：よじのぼる、物につかまわって登る。青泥：陝西省略陽県の西北にあった山の名・青泥嶺。盤盤：ぐるぐるの回りをする。百歩九折：百歩(歩(あゆ)むうちに九回折れ曲がる。磧：めぐる、めぐらす。巖巒：けわしい山、険しい岩山。・捫：取る、持つ。歴：経過する。參、井：ともに、星座の名。脅息：息をひそめる。膺：胸。坐：そぞろに。・西遊：西の方を旅する。畏途：険しくておそろしい道。巉巖：岩山が険しく高いさま。号：大声でさげびよばわる。凋：しぼませる。朱顔：少年の顔、(血色の良い) 赤い顔。去天：天から離れること。盈：満ちる。去天不盈尺：天から離れること一尺に満たない。倒挂：逆さまに掛かる。倚：よりかかる、寄る。飛湍：水の勢いよく流れる瀨。瀑流：たき。喧脛：やかましい。さわがしい。砢：水が岩を撃つ(音)。雷：どどろく、石を転がす。嗟：ああ。感嘆や歎きの声。遠道：遠路。はるか遠い道。はるばる。胡為：なぜ。劍閣：劍門関のことで、山の名。崢嶸：高く聳えるさま。高く険しいさま。所守：守るところの者。或：ひよつとしたら。…かもしれない。あるいは。匪親：腹心／肉親でない意。匪：「非」の意。化為：…に変わる。化して…となる。磨牙：牙を磨く。吮血：血をすする。如麻：多いことの形容。如麻：多いことの形容。雖云：…とはいっても。側身：身をそばめ縮める。咨嗟：ため息をついてなげく。

(漢詩大系8) (唐詩二百首)

<http://www5a.biglobe.ne.jp/~shici/p20.htm>

◆ 遊覧編

獨坐敬亭山

独り敬亭山に坐す

唐

李白

衆鳥高飛盡

衆鳥 高く飛んで尽き

孤雲獨去閒

孤雲 独り去って閑なり

相看兩不厭

相看 両つながら厭わざるは

只有敬亭山

只敬亭山 有るのみ

【語釈】

敬亭山：安徽省東南にある宜城市の北にある山。衆鳥：群れ飛ぶ鳥。孤雲：ぼつんと一つだけある雲。閒：ゆったりと落ちついて静かなさま。相看：お互いに見あつて。兩：双方、敬亭山と作者を指す。厭：あきる。
(漢詩大系 8)

登鶴雀樓

鶴雀樓に登る

唐

王之渙

白日依山盡

白日 山に依りて 尽き

黄河入海流

黄河 海に入つて 流る

欲窮千里目

千里の目を 窮めんと欲して

更上一层楼

更に上る 一層の楼

【語釈】

鶴雀樓：蒲州府永濟県の西南城上にある楼（三階建）。白日：くもりのない太陽。千里目：遙か彼方まで、見極めること。
(唐詩選)

登樂遊原

樂遊原に登る

唐

李商隱
りしやういん

向晚意不適

晚くれに向なんんとして意こ適じゆわず

驅車登古原

車かをか驅りて古こ原げんに登る

夕陽無限好

夕せき陽よう無げん限に好し

只是近黄昏

只ただ是こ是これこ黄こう昏こんに近し

【語釈】

樂遊原：長安の東南にある遊覽の地で、長安を眺め渡すことのできる名勝地。向晚：夕方、暮れ方。意：思い、気分不適：調子がわるい。只是：ただ：ではあるが（しかし）。黄昏：たそがれ。
(三体詩)

晚望

晩望ばんぼう

唐

白居易
はくきよい

江城寒角動

江かん城かく寒かん角かく動き

沙洲夕鳥還

沙さ洲しゅう夕せき鳥ちよう還る

獨在高亭上

独ひとり在高亭の上に在りて

西南望遠山

西西南南望遠山を望む

【語釈】

江城：江に臨んだ城。寒角：寂しい角笛の音。沙洲：中州

南浦

南浦 なんぼ

宋

王安石 おうあんせき

南浦隨花去
迴舟路已迷
暗香無覓處
日落畫橋西

南浦花に隨いて去り
舟を迴せば路已に迷う
暗香 覓むる処無し
日は落つ 画橋の西

【語釈】

南浦：中国江西省北部、南昌の西南の地名。もと南浦亭があつた。暗香：どこから来るとも定かでない香り。畫橋：美しく彩つた橋。

雨中過玉遮山

雨中 玉遮山を過ぐ ぎやくしやせん

明

高啓 こうけい

尋鐘入蒼茫
一澗復一崦
落葉去方深
山扉雨中掩

鐘を尋ねて蒼茫に入る
一澗 復た一崦
落葉 去ること方に深し
山扉 雨中に掩う さんび

【語釈】

蒼茫：水面などの青々として果てしないさま。澗：谷。崦：山。山扉：山の中の家の扉。

渡江

江を渡る

清

文
點

青山如故人

青山は 故人の如く

江水似美酒

江水は 美酒に似たり

今日重相逢

今日 重ねて相逢あひあう

把酒對良友

酒を把とつて 良友に對す

【語釈】

青山：青々とした山。故人：昔なじみ。把酒：酒杯を持つ。

渡江

渡江

清

繆りゅう

彤とう

涼月漾中流

涼月 中流に漾りょうげつ ただよい

金山隱隱浮

金山 隱々として浮いんいんかぶ

尚餘殘醉在

尚お 殘醉ざんすい あまを余して 在り

和夢到揚州

夢に和して 揚州に到る

【語釈】

金山：建康（南京）の東北40 kmにある地名？。隱隱：かすかに見える。

江畔獨步尋花

こうはんどくほ
江畔獨歩花を尋ぬ

唐

杜
甫

163

黄四娘家花滿蹊

黄四娘の家 花蹊に満ち

千朵萬朵壓枝低

千だ ばんだ
枝を圧して低る

留連戲蝶時時舞

りゅうれん
戯蝶 時々舞い

自在嬌鶯恰恰啼

自在の嬌鶯 恰々として啼く

【語釈】

黄四娘：黄家の四番目のおばさん、四は排行、一説に妓女の名。朵：花の付いた枝。留連：そこに つづけて居る。自在 歌喉の自由なこと。嬌鶯：可愛い鶯。恰恰：鳥の鳴き声のさま。

(杜甫全詩訳注)

自朗州召至京戲贈看花諸君

唐

劉禹錫

こうしゅうよ
朗州自り召され京に至る 戲に花を看る諸君に贈る

紫陌紅塵拂面來

しはく
紫陌の紅塵 面を払いて来り

無人不道看花回

人の 花を見て回ると道わざるは無し

玄都觀裏桃千樹

げんとかんり
玄都觀裏 桃千樹

盡是劉郎去後栽

じんすい
尽く是れ 劉郎去りて後に栽えたり

【語釈】

戲贈：ふざけて詩を作って贈る。紫陌：都の市街。紅塵：賑やかな街の埃、俗塵。玄都觀：道教寺院の名、長安の朱雀街にあった。劉郎：仙桃を味わった伝説上の人物劉晨と自分のことを掛けたもの。
(唐詩選) 曰く付きの詩。劉禹錫、再び左遷。

再遊玄都觀

再び玄都觀に遊ぶ

唐 劉禹錫

百畝庭中半是苔

百畝の庭中 半ば是れ苔

桃花淨盡菜花開

桃花 淨尽し 菜花 開く

種桃道士歸何處

桃を種えし道士 何れの処か帰る

前度劉郎今又來

前度の劉郎 今 又た 來る

【語釈】

再遊：二度目の訪問。玄都觀：長安の朱雀街にあつた道教寺院。淨盡：すっかり無くす。菜花：野菜の花。劉郎：劉禹錫自身。

念昔遊

昔遊を念う

唐 杜牧

李白題詩水西寺

李白 詩を題す 水西寺

古木迴巖樓閣風

古木 迴巖 樓閣の風

半醒半醉遊三日

半醒 半醉 遊ぶこと三日

紅白花開山雨中

紅白花は開く 山雨の中

【語釈】

昔遊：昔遊んだこと。水西寺：安徽省宣城の水西山の上にあつた三つの寺の総称。廻巖：巖を取り巻いている。半醒半醉：ほろ酔い。三日：三日間。

(漢詩大系 14)

吉祥寺賞牡丹

吉祥寺にて牡丹を賞す

北宋

蘇軾

人老簪花不自羞

人は老いて花を簪し 自らは羞じず

花應羞上老人頭

花は応に羞ずべし 老人の頭に上るを

醉歸扶路人應笑

醉歸路に扶けらるるを 人 応に笑うべし

十里珠簾半上鉤

十里の珠簾半は 鉤に上せらる

【語釈】

吉祥寺：杭州にあった寺院名、ボタンの名所。賞：見て楽しむ。簪：かんざしをさす。不自：別にくとは思わない。醉歸：酔って帰ること。扶：支える。応：応にくすべし、当然：である。珠簾：玉スダレ。鉤：簾をとめるかぎ。
(中国詩人選集二―5)

花時遍遊諸家園

花時 遍く 諸家の園に遊ぶ

宋

陸游

爲愛名花抵死狂

名花を愛するが為に 死に抵るまで 狂す

只愁風日損紅芳

只だ愁う 風日の 紅芳を損するを

綠章夜奏通明殿

綠章 夜 奏す 通明殿

乞借春陰護海棠

春陰を乞借して 海棠を護せん

【語釈】

名花：海棠をさす。綠章：緑色の奏書、道士が天神に奏するのに用いる。通明殿：天上の玉帝の殿名、常に雲を擁している。乞借：乞いて借りる。春陰：春の花曇り。

(漢詩大系 16)

豊樂亭遊春

豊樂亭に春を遊ぶ

北宋

歐陽修

緑樹交加山鳥啼

緑樹交加して山鳥啼き

晴風蕩漾落花飛

晴風蕩漾として落花飛ぶ

鳥歌花舞太守醉

鳥歌い花舞いて太守酔う

明日酒醒春已歸

明日酒醒むれば春已に帰らん

【語釈】

豊樂亭…安徽省の滁州に歐陽脩が作ったあずまや。交加…枝と枝が交わる。蕩漾…のどかにゆるぎ動く。太守…歐陽脩自ら。春歸…春が去る。

東城

東城

元

趙孟頫

野店桃花紅粉姿

野店の桃花 紅粉の姿

陌頭楊柳綠烟絲

陌頭の楊柳 綠煙の糸

不因送客東城去

客を送り東城に去るに 因らずんば

過却春光總不知

春光を過却して 総て知らざらん

【通釈】

野店…田舎の店、野原の茶屋。紅粉…紅おしろい。陌頭…道ばた。綠烟絲…柳の細い枝に芽が萌え出て煙の如きさま。過却…見ないで空しく過ぐす。春光…春景色。

夜宿天池月下聞雷

夜 天池に宿し月下に雷を聞く 明

王守仁 おうしゅじん

昨夜月明峰頂宿

昨夜 月明 峰頂に宿す しんぐく

隱隱雷聲在山麓

隱々たる 雷声 山麓に在り いんいん

曉來卻問山下人

曉來 卻つて問う 山下の人 ぎょうらい かえ

風雨三更卷茆屋

風雨 三更 茆屋を卷く ほううく

【語釈】

隱隱：雷が大きく鳴るさま。曉來：明け方になって。却……にもかかわらず。風雨：あらし。三更：午前零時ごろ。茆屋：茅葺きの家。

山行

山行

唐 杜 牧 と ぼく

遠上寒山石徑斜

遠く寒山に上れば石徑斜めなり

白雲生處有人家

白雲生ずる處 人家有り

停車坐愛楓林晚

車を停めて 坐に愛す 楓林の晩 そざろ

霜葉紅於二月花

霜葉は 二月花よりも 紅なり

【語釈】

寒山：秋から冬にかけての、さむざむとした山。石徑：石の多い小道。白雲：俗世間を離れた境地を表現している。生處：湧き上がるところ。坐：「そざろに」と読み、「何とはなしに」「何となく」と訳す。愛：鑑賞する。楓林：カエデの林。紅葉林。霜葉：霜にうたれて紅葉した葉。於：「A於B」の形で「AはBより（も）（なり）」と読み、「AはBよりもくだ」と訳す。比較の対象を示す。ちなみにこの句から「紅於」が楓かえでの別称となった。二月花：陰曆二月。桃の花を指す。

望江州

江州を望む

唐

白居易

江迴望見雙華表

江迴りて望み見る 双華表

知是潯陽西郭門

知る是れ 潯陽の西郭の門

猶去孤舟三四里

猶お 孤舟を去ること 三四里

水煙沙雨欲黃昏

水煙 沙雨 黃昏ならんと欲す

【語釈】

華表：城郭の門にたてる鳥居のようなもの。潯陽：江州の城の名。沙雨：砂州に降る雨。

秋下荊門

秋 荊門を下る

唐

李白

霜落荊門江樹空

霜は荊門に落ちて 江樹空し

布帆無恙挂秋風

布帆 恙無く 秋風に掛く

此行不為鱸魚鱠

此行 鱸魚の鱠の為ならず

自愛名山入剡中

自ら名山を愛して 剡中に入る

【語釈】

荊門：長江の南岸、湖北省枝城市の西北にある山で、蜀と湖北・湖南地方との境目。江樹：秋の紅葉した木。布帆：帆掛け船。挂：ひっかかる、かかる。鱸魚：すずき。鱠：なます。剡身。剡中：浙江省嵊州市。

(唐詩選)

初至巴陵與李十二白裴九同泛洞庭湖

唐 賈至

初めて巴陵に至り李十二白と同じく洞庭湖に泛ぶ

楓岸紛紛落葉多

楓岸 紛紛ふうぶんとして落葉多し

洞庭秋水晚來波

洞庭の秋水 晚來 波立つ

乘興輕舟無近遠

興に乗じ 輕舟 近遠 無し

白雲明月弔湘娥

白雲 明月 湘娥しょうがを弔う

【語釈】

族叔曄…刑部侍郎（法務次官）の李曄（李白の叔父）。中書舍人（皇帝の秘書官）の賈至。
巴陵…湖南省岳陽市。李十二白…李白、十二は排行。湘娥…洞庭湖の女神である湘君。

陪族叔刑部侍郎曄及中書賈舍人至遊洞庭

唐

李 白

族叔刑部侍郎曄 及び中書賈舍人至に陪して洞庭に遊ぶ

洞庭西望楚江分

洞庭 西に望めば 楚江分かる

水盡南天不見雲

水尽きて 南天に雲を見ず

日落長沙秋色遠

日落ちて 長沙 秋色遠し

不知何處弔湘君

知らず 何れの処にか 湘君を弔わん

【語釈】

族叔曄：刑部侍郎（法務次官）の李曄（李白の叔父）。中書舍人（皇帝の秘書官）の賈至。
洞庭：洞庭湖。楚江：長江。長沙：中国、湖南省の省都。洞庭湖南、湘江下流の東岸に位置する。湘君：湘水の女神。舜の二妃、江湘の間に死し、俗に湘君という。
〔唐詩選〕

陪族叔刑部侍郎曄及中書賈舍人至遊洞庭

唐

李 白

族叔刑部侍郎曄 及び中書賈舍人至に陪して洞庭に遊ぶ

洞庭湖西秋月輝

洞庭湖西 秋月輝く

瀟湘江北早鴻飛

瀟湘江北 早鴻飛ぶ

醉客滿船歌白苧

醉客 満船 白苧を歌う

不知霜露入秋衣

知らず 霜露の 秋衣に入る

【語釈】

瀟湘：中国、湖南省を北流する湘江とその支流である瀟水、また二河の合流する洞庭湖南部。鴻：おおかも、おおかり。白苧：白紵の詞または曲とも。長江の南（江南） 吳地方の民歌。

（漢詩大系8）

雨中登岳陽樓望君山 雨中岳陽樓に登り君山を望む 宋

こうていけん
黃庭堅

投荒萬死鬢毛斑

こう
荒に投げられて万死鬢毛斑なり

生出瞿塘灘瀨關

くとうえんよ
生きて出る瞿塘灘瀨の関

未到江南先一笑

まだ江南に到らざるに先ず一笑し

岳陽樓上對君山

かくようろう
岳陽樓上君山に對す

【語釈】

岳陽樓：湖南省岳陽市の西門の樓。洞庭湖に面し、楼上からの眺めが美しいことで有名。
山：洞庭湖中にある山。荒：辺境の地。投：流される。万死：何度も死ぬ思いをすること。死を覚悟すること。鬢毛：鬢びんの毛。左右側面の耳ぎわの毛。斑：白髪まじりになること。生出：生きて通り抜けることができた。瞿塘：瞿塘峡。四川省奉節県の東にある。長江の三峡の一つ、船の難所。灘瀨關：灘瀨堆の難関、瞿塘峡の入り口にある大暗礁。長江最大の難所、「関」は難関の意であるが、ここでは関所の意も懸けている。江南：ここでは作者の故郷、分寧（江西省修水県）を指す。一笑：ちよつと笑うこと。
(漢詩大系18)

雨中登岳陽樓望君山 其二

北宋

こうていけん
黃庭堅

雨中岳陽樓に登り君山を望む

滿川風雨獨憑欄

満川の風雨 ひとり欄に憑る

縮結湘娥十二鬟

かんけつ
縮結す 湘娥の十二鬟

可惜不當湖水面

惜むべし湖水の面に当たつて

銀山堆裏看青山

ぎんざんたいり
銀山堆裏に青山を看ざるを

【語釈】

縮結：「ワゲ」を束ねる、山を美人のワゲに喩えた。湘娥：洞庭湖の女神である湘君。
(漢詩大系18)

水口行舟

水口行舟

南宋

朱熹

昨夜扁舟雨一簑

昨夜扁舟雨 一簑

滿江風浪夜如何

滿江の風浪 夜如何

曉來試揭孤篷看

曉來 試みに 孤篷を 掲て 看れば

依舊青山綠樹多

旧に依つて 青山 綠樹多し

【語釈】

水口…入り江の水口。扁舟…小さな舟。雨一簑…簑を潤すばかりの雨。曉來…明け方。孤篷…一つの舟の苫。

雙井院前小立

雙井院前小立

元 倪瓚

山色微茫好放船

山色 微茫 好し 船を放つに

秋渠野水夕陽邊

秋渠 野水 夕陽の 辺

西風更灑菰蒲雨

西風 更に 灑ぐ 菰蒲の 雨

羨爾沙鷗自在眠

羨む 爾 沙鷗の自在に眠るを

【語釈】

微茫…かすかに遙かなるさま。菰蒲…マコモとガマ。沙鷗…砂浜にいる鷗。

江行

澄江如練客船輕

楚水吳山新雨晴

一片渚花浮動處

白鷗斜帶夕陽明

江行

澄江は練の如く客船輕し

楚水吳山新雨晴る

一片の渚花浮動の処

白鷗斜に夕陽を帯びて明かなり

清

顧宗泰

【語釈】

澄江：清く澄んだ川。練：練り絹。楚水吳山：江南地方一帯の山水。渚花：渚に咲いた水草の花。

湖天雜興

斷渚平沙淨渺然

酒旗寒映晚炊煙

分明滿幅榮邱畫

畫出江南欲雪天

湖天雜興

斷渚平沙淨くして渺然

酒旗寒に映ず晚炊の煙

分明に滿幅榮邱の画

画き出す江南雪ふらんと欲する天

清

李重華

【語釈】

斷渚：きれぎれの渚。平沙：平かな沙。渺然：遙かに広いさま。榮邱：宋の画家、李成のこと、水墨画の名手。滿幅：一幅の絵。

過閩關

びんかん
閩関を過ぐ

明

りゆう
劉

き
基

峻嶺如弓驛路餘

しゅんれい
峻嶺 弓の如く 驛路 餘かに

清溪一帶抱山斜

せいせき 一帶 山を抱いて 斜なり

高秋八月崇安道

こうしゅう 八月 崇安の道

時見棠梨三兩花

ときに見る 棠梨の 三兩花

【語釈】

閩関：中国南方の関中への入り口。高秋：天高い秋。崇安：江蘇省無錫市。棠梨：カラナシ、白い花を付ける。

泛海

うか
海に泛ぶ

明

おうしゅじん
王守仁

險夷原不滞胸中

けんい もと
險夷 原 胸中に 滞らず

何異浮雲過太空

なにぞ 異らん 浮雲の 太空を過ぐるに

夜靜海濤三萬里

よは 靜かなり 海濤 三万里

月明飛錫下天風

つき 明かに 飛錫 天風を下る

【語釈】

險夷：難険と平夷。順境と逆境。錫：道人、僧侶の携える杖。

小舟遊西涇經度西岡而歸

南宋

陸游

小舟にて西涇に遊び 西岡に度りて帰る

小雨重三後

小雨 重三の後

餘寒百五前

余寒 百五の前

聊乘瓜蔓水

聊か瓜蔓の水に乗じて

閑泛木蘭船

閑に泛ぶ 木蘭の船

雪暗梨千樹

雪は暗し 梨千樹

烟迷柳一川

煙は迷う 柳一川

西岡夕陽路

西岡 夕陽の路

不到又經年

到らざる 又年を経たり

【語釈】

重三…三月三日の節句。餘寒…春に残っている寒さ。百五…寒食、冬至から数えて百五日。瓜蔓水…晩春初夏の出水をいう。

(漢詩大系19)

城西陂泛舟

城西陂に舟を泛ぶ

唐 杜甫

青蛾皓齒在樓船

青蛾 皓齒 樓船に在り

橫笛短簫悲遠天

橫笛 短簫 遠天に悲しむ

春風自信牙檣動

春風 自信から信す 牙檣の動くに

遲日徐看錦纜牽

遲日 徐に看る 錦纜牽くを

魚吹細浪搖歌扇

魚は 細浪を吹きて 歌扇を搖かし

燕蹴飛花落舞筵

燕は 飛花を蹴りて 舞筵に落とす

不有小舟能盪槳

小舟の 能く 槳を盪かすに有らずんば

百壺那送酒如泉

百壺 那ぞ送らん 酒泉の如きを

【語釈】

青蛾：美しい眉。皓齒：白い歯。樓船：屋形船。信：任す。牙檣：象牙で作った帆柱。遲日：春のうららかな日。錦纜：錦で作った帆柱。歌扇：歌妓の持つ扇。舞筵：舞姫の舞う席。

山西の村に遊ぶ

南宋

陸游

莫笑農家臘酒渾

笑う莫かれ農家の臘酒渾れるを

豊年留客足雞豚

豊年客を留むるに雞豚足れり

山重水複疑無路

山重水複路無かきと疑がうに

柳暗花明又一村

柳暗花明又一村

簫鼓追隨春社近

簫鼓追隨して春社近く

衣冠簡朴古風存

衣冠簡朴にして古風存す

從今若許閑乘月

今より若し閑に月に乘ずるを許さば

拄杖無時夜叩門

杖を拄き時無く夜門を叩かん

【語釈】

臘酒：十二月に仕込んだ酒。春社：春の祭り。柳暗花明：田舎の美しい景色の有様。衣冠：正装、祭りの時に着る衣服。簡朴：簡単に飾り気がないこと。乗月：月の光に誘われて散歩する。無時：好きなときに。

(漢詩鑑賞事典)

病中遊祖塔院

病中祖塔院に蘇軾と遊ぶ

北宋

蘇軾

紫李黃瓜村路香

紫李 黃瓜 村路香ばし

烏紗白葛道衣涼

烏紗 白葛 道衣涼し

閉門野寺松陰轉

門を閉す野寺は 松陰に轉じ

欹枕風軒客夢長

枕を風軒に 欹てて 客夢 長し

因病得閑殊不惡

病に因つて閑を得たるは 殊に悪しからず

安心是藥更無方

安心 是れ藥なり 更に 方 無なし

道人不惜階前水

道人は 階前 水を惜まずして

借與匏樽自在嘗

匏樽を借与して 自在に嘗めしむ

【語釈】

紫李：紫色の李。黃瓜：きゅうり。烏紗：烏紗帽（黒色の帽子）。白葛：白色の葛布。道衣：官僚などの平服。風軒：風通しの良い家。客夢：うたた寝。安心：心を安んずること。方：薬の処方の方。道人：法師。匏樽：茶碗。

（蘇東坡詩集 第三冊）

六月二十日夜渡海

六月二十日夜海を渡る

北宋

蘇軾

參横斗轉欲三更

參横たわりて斗転じ三更ならんと欲す

苦雨終風也解晴

苦雨終風也た解く晴る

雲散月明誰點綴

雲散じ月明かに誰か点綴す

天容海色本澄清

天容海色本澄清

空餘魯叟乘桴意

空しく余す魯叟桴に乗ずるの意

粗識軒轅奏樂聲

粗ぼ識る軒轅樂を奏するの聲

九死南荒吾不恨

南荒に九死すとも吾は恨みず

茲游奇絶冠平生

茲の游奇絶平生に冠たり

【語釈】

參：二十八宿の一つ、「カラスキ」。斗：北斗星。參横斗轉：時間が経過すること。三更：真夜中。苦雨：長雨。終風：一日中吹きすさぶ風。誰點綴：この晴れ渡った空に、微雲を點綴することなど誰がしようか、『世説新語』による。魯叟：孔子、「道行われずんば桴に乗りて海に浮かばん」。軒轅：黄帝、『莊子』に黄帝が洞庭湖で樂を奏したとあり。南荒：南（海南島）の荒れ果てた地。平生：常（じょう）ろ。

（漢詩大系17）

江上吟

江上吟

唐

李白

木蘭之榭沙棠舟

木蘭の榭 沙棠の舟

玉簫金管坐兩頭

玉簫 金管 兩頭に坐す

美酒尊中置千斛

美酒 尊中 千斛を置き

載妓隨波任去留

妓を載せ波に隨つて 去留に任す

仙人有待乘黃鶴

仙人待つ有つて 黃鶴に乘じ

海客無心隨白鷗

海客 無心にして 白鷗に隨う

屈平詞賦懸日月

屈平の詞賦 日月を懸け

楚王臺榭空山丘

楚王の台榭 空しく山丘

興酣落筆搖五嶽

興 酣にして 筆を落とせば 五嶽を搖がし

詩成笑傲凌滄洲

詩成つて 笑傲すれば 滄洲を凌ぐ

功名富貴若長在

功名 富貴 若し 長えに在らば

漢水亦應西北流

漢水も亦た応に西北に流るべし

【語釈】

江上吟：長江での歌。木蘭：香木。榭：かい。かじ。沙棠：棠（やまなし）に似た木。玉簫：立派なしょうのふえ。金管：立派な管楽器。兩頭：前後の（へさき）。尊：たる。千斛：極めて多量。妓：妓女。去留：去ると留まると。自然のなりゆき。黃鶴：仙人の乗る黄色い仙鶴、なお、これより、この詩が黃鶴樓のあたりで作られたと推定される。海客：海辺の人。『列子・黃帝篇』に出てくる海上之人。白鷗：白いカモメ。前出『列子・黃帝篇』に出てくる人の心を読むカモメ。屈平：屈原のこと。懸：つりさげる。かかげる。かける。臺榭：高台の上の御殿、樓閣。落筆：筆をおろす、書き始める。五嶽：五つの靈山。泰山、華山、衡山、嵩山の五山。笑傲：あざわらつていばる。滄洲：仙人の住むところ。滄浪洲。漢水：陝西省の方から東南方向に向かって流れ、襄陽を経て、漢陽で長江に注ぎ込む大河。

（新釈漢文大系 詩人編 李白 上）

春江花月夜

春江花月の夜

唐

張若虛
ちやうじやくきよ

春江潮水連海平

春江の潮水 海に連なりて 平かなり

海上明月共潮生

海上の明月 潮と共に生ず

滟滟隨波千萬里

滟々 波に隨う 千万里

何處春江無月明

何れの処にか 春江 月明 無からん

江流宛轉遶芳甸

江流 宛転として 芳甸を遶り

月照花林皆似霰

月は 花林を照らして 皆 霰に似たり

空裏流霜不覺飛

空裏の流霜 飛ぶを覺えず

汀上白沙看不見

汀上の 白沙 看みれども見えず

江天一色無纖塵

江天 一色 纖塵 無く

皎皎空中孤月輪

皎々 たり 空中の孤月輪

江畔何人初見月

江畔 何人か 初めて月を見る

江月何年初照人

江月 何れの年か 初めて人を照らしし

人生代代無窮已

人生 代々 窮已 無し

江月年年望相似

江月 年々 望み 望み 相似たり

不知江月照何人

知らず 江月 何人かを照らす

但見長江送流水

但だ 見る 長江の 流水を送るを

白雲一片去悠悠

白雲 一片 去りて 悠悠

青楓浦上不勝愁

青楓浦上 愁いに勝えず

誰家今夜扁舟子

誰が家ぞ 今夜 扁舟の子

何處相思明月樓

何れの処にか 相思う 明月の樓

可憐樓上月裴回

憐むべし 樓上月 裴回し

應照離人妝鏡臺

應まさに照らすべし離人の妝鏡しょうきやうだい台

玉戸簾中卷不去

玉戸簾中卷けども去らず

擣衣砧上拂還來

擣衣砧上払えども還また來たる

此時相望不相聞

此の時相あい望めども相あい聞こえず、

願逐月華流照君

願わくは月華を逐おいて流れて君を照らさん

鴻雁長飛光不度

鴻雁こうがん長く飛んで光度らず

魚龍潛躍水成文

魚龍ぎょりゅう潛躍せんやく水文を成す

昨夜閑潭夢落花

昨夜かんとん閑潭落花を夢む

可憐春半不還家

憐むべし春半しゅんぱん家に還らざるを

江水流春去欲盡

江水春を流して去り尽きと欲し

江潭落月復西斜

江潭かうたんの落月復た西に斜かたむく

斜月沈沈藏海霧

斜月沈々として海霧かくに蔵れ

碣石瀟湘無限路

碣石かつせき瀟湘せうしやう無限の路

不知乘月幾人歸

知らず月に乗じて幾人か歸る

落月搖情滿江樹

落月情を搖うごかして江樹に満つ

【語釈】

春江：春の長江。潮水：満ちあふれる潮うしお。連海平：はるか大海原へと平らに
続いている。瀟瀟：月の光が水に映ってきらめくさま。随波：波のまにまに広がって
ゆく。月明：明るい月の光。宛転：ゆるやかに曲がりくねっているさま。芳甸：芳
しい花の咲いている春の野原。花林：花咲く林。似霰：木々に咲く花が月光に照らさ
れて白く光る様子を、霰に似ていると表現したもの。空裏：空中。流霜：空中を流れ
飛ぶ霜の気。汀上：渚。江天：川と空。一色：白一色に澄みわたる。緋塵：こま
かい塵。皎皎：白く輝くさま、「こうこう」。孤月輪：たった一つの丸い月。江畔：
この川のほとり。江月：川辺の月。悠悠：遙かに遠いさま。青楓：青々とした楓。
浦上：入り江のほとり。不勝愁：愁いに堪えきれない。不勝：堪えきれない。扁舟
：舟底の平らな小舟。子：旅の若者。応照：きつと照らしているに違いない。離人
：遠く離れている人。粧鏡台：化粧をする鏡台。玉戸：玉で飾った扉。簾中：扉に

垂らした簾すだれの中。卷不去：簾を巻き上げて月の光もいっしょに巻き込めようとす
るが、月の光は去らない。擣衣砧上：織った布を柔らかくして光沢を出すため、砧きぬ
たの上に置いて棒で打つこと。払還来：払っても払っても、月影はまた差し込んで来
る。相望：お互いに月を眺めて相手のことを思い慕っても。不相聞：お互いに便りを
交わすすべもない。月華：月、または月の光。鴻雁：雁のこと。長飛：列をなして
遠くへ飛んでいく。光不度：月の光は雁と違って、あなたの所までは届かない。魚竜：
魚と竜、広く水中に棲息する動物をいう。潜躍：潜ったり跳ねたりすること。水成文：
水面に波紋が広がるばかり（手紙を届けてくれない）。閒潭：静かな淵ふちのほとり。江
潭：川の深い淵。沈沈：静かで奥深いさま。蔵：隠れていく。礪石：山の名。瀟
湘：瀟水と湘江（湘水）、洞庭湖に南から流れこむ二つの川の名、洞庭湖の南の流域一帯
を指す、ここでは広く南の果てを指す。乗月：月明かりに照らされて。揺情：私の感
情を揺り動かしながら。江樹：川辺の木々の辺り。

（唐詩選）

http://www5a.biglobe.ne.jp/~shici/shi4_08/rs271.htm

◆ 懷古類

三閭廟

三閭の廟

唐

戴叔倫

沅湘流不盡

沅湘 流れて尽きず

屈子怨何深

屈子 怨み何ぞ深き

日暮秋煙起

日暮 秋煙起り

蕭蕭楓樹林

蕭々たり 楓樹の林

【語釈】

三閭廟：屈原を祀った廟。沅湘：沅江と湘江、どちらも洞庭湖に注ぐ。屈子：屈原。
蕭蕭：風が物寂しく鳴る音の形容、または風に吹かれて木々の葉が鳴る音の形容。楓樹
…カエデの一種。
(唐詩選)

題慈恩寺塔

慈恩寺の塔に題す

唐

荊叔

漢國山河在

漢国 山河在り

秦陵草樹深

秦陵 草樹深し

暮雲千里色

暮雲 千里の色

無處不傷心

処として心を傷まじめざるは無し

【語釈】

慈恩塔：陝西省西安市東南郊外、大慈恩寺の境内にある仏塔。漢国：前漢の都長安を指す。山河在：山も河も昔のままだ。秦陵：秦の始皇帝の陵墓。
(唐詩選)

歌風臺

かふうだい
歌風台

清

しんとくせん
沈徳潜

登臺歌大風

台に登りて 大風を歌う
たいふう

亭長作天子

亭長 天子と作る

韓彭安在哉

かんほう いず
韓彭 安くにか在る哉

徒勞思猛士

いたずら
徒に勞して 猛士を思う

【語釈】

歌風臺：漢の高祖が天下平定後に故郷に錦を飾り、「台風歌」を歌った台。亭長：宿場の長、高祖は沛の亭長であった。韓彭：韓信と彭越、高祖に協力したが、天下平定後に殺された。

古行宮

こあんぐう
古行宮

唐

げん じん
元 稹

寥落古行宮

りょうらく
寥落たり 古えの行宮
あんぐう

宮花寂寞紅

きゅうか せきぼく
宮花 寂寞の紅
くれなゐ

白頭宮女在

はくとう
白頭の宮女在り
きゅうじよ

閑坐説玄宗

かんざ
閑坐して 玄宗を説く
げんそう

【語釈】

行宮：天子が行幸した際に、仮に設けられる皇宮。寥落：荒れはてて寂しいさま。・宮花：宮中に咲く花。寂寞：ひっそりとしたものさびしいさま。白頭：白髪頭。宮女：宮中に仕えている女官。閑坐：ひまにまかせて座談する。
(唐詩三百首)

蘇臺覽古

そだいらんこ
蘇台覽古

唐

李 白
り ぱく

舊苑荒臺楊柳新

きゆうえん こうたい
旧苑 荒台 楊柳新たなり

菱歌清唱不勝春

りょうか せいしやう
菱歌 清唱 春に勝えず

只今惟有西江月

ただいま た
只今 惟だ 西江の月のみありて

曾照吳王宮裏人

かつ
曾て照らす 吳王宮裏の人

【語釈】

蘇台：姑蘇台、吳王夫差の宮殿があつた、江蘇省蘇州市の西・姑蘇山山頂にある。覽古：昔を懐かしむこと。旧苑：古い園。荒台：荒れた高台。菱歌：菱を取りながら歌う女性の歌。清唱：清らかに歌う。勝春：春の感傷に耐えられない。西江：姑蘇台の西を流れている川。吳王宮裏人：吳王夫差の宮殿にいた美女、西施のこと。
(漢詩大系 8)

越中覽古

越中覽古

唐

李 白
り ぱく

越王勾踐破吳歸

えつおうこうせん
越王勾踐 吳を破つて帰る

義士還家盡錦衣

ぎし かに
義士 家に還つて 尽く錦衣す

宮女如花滿春殿

きゆうじよ
宮女 花の如く 春殿に満つ

只今惟有鷓鴣飛

ただいま た
只今 惟だ 鷓鴣の飛ぶ有るのみ

【語釈】

越中：春秋時代の越の国。覽古：懐古する。越王勾踐：春秋時代の越の王の勾踐。破：撃破する。吳：ここでは吳王・夫差の軍。義士：忠義の兵士。錦衣：にしきをきる。春殿：春の宮殿。只今：現在。鷓鴣：シヤコ。鳥の名。キジ科の鳥。悲しげな鳴き声でなく。
(唐詩選)

南游感興

なんゆうかんきよう
南游感興

唐

とう
竇鞏

傷心欲問前朝事

傷心問わんと欲す前朝の事

惟見江流去不回

惟だ見る江流の去つて回らざるを

日暮東風春草綠

日暮東風春草緑に

鷓鴣飛上越王臺

鷓鴣しゃこ飛び上る越王台

【語釈】

南游：南方（ここでは呉楚の地方）を旅すること。前朝：春秋戦国時代の越。江流：長江の流れ。越王臺：越王勾践が築いた台。

馬陵道

ばりやうどう
馬陵の道

清

ぎらいとう
魏荔彤

戰壘千秋沙草平

戦壘るい千秋沙草平かなり

更無殘戟礙春耕

更に残戟ざんげきの春耕を礙さまたぐる無し

荒城夜半喧雷雨

荒城夜半雷雨喧かまひすし

還似當年萬弩聲

還また似たり当年万弩ばんどの聲

【語釈】

馬陵：山東省臨沂市郯城县、魏（將軍龐涓）と齊（將軍孫臏）が激突した所。戰壘：戦いの寨。沙草：砂原の雑草。殘戟：残つているほこ。春耕：春の耕作。当年：当時、馬陵の戦いのあつたとき。萬弩聲：多くの石弩が一斉に発せられる音。

長城

長城

唐

汪遵

秦築長城比鐵牢

秦長城を築きて 鉄牢に比す

蕃戎不敢逼臨洮

蕃戎 敢えて 臨洮に 逼らず

焉知萬里連雲色

焉んぞ 知らんや 万里 連雲の勢い

不及堯階三尺高

及ばず 堯階 三尺の高きに

【語釈】

蕃戎：野蛮な異民族。臨洮：甘肅省定西市あたり。堯階：堯帝の宮殿。

經秦始皇墓

秦の始皇の墓を經

唐

許渾

龍盤虎踞樹層層

龍盤虎踞 樹層々

勢入浮雲亦是崩

勢い浮雲に入るも 亦た是れ 崩る

一種青山秋草裏

一種の青山 秋草の裏

路人惟拜漢文陵

路人 惟だ 拜す 漢文の陵

【語釈】

龍盤虎踞：龍がとぐるを巻き、虎がうづくまるように、ある場所を根拠地として威勢を振るうこと。層層：幾重にも重なっていること。漢路人：道行く人。漢文陵：仁君であった漢の文帝の陵。

焚書坑

焚書坑

唐 章 碣

竹帛煙消帝業虛

竹帛煙消えて帝業虚し

關河空鎖祖龍居

關河空しく鎖す祖龍の居

坑灰未冷山東亂

坑灰未だ冷やかならざるに山東乱る

劉項元來不讀書

劉項元來書を読まず

【語釈】

焚書坑：秦の始皇帝が儒教の書物を焼き捨てた穴。竹帛：竹や帛の書籍。銷：「消」に同じ。帝業：秦の始皇帝による天下統一の事業。関河：函谷関と黄河。祖竜：秦の始皇帝。居：始皇帝のいた咸陽の宮殿を指す。坑灰：坑の中で焼いた書物の灰。山東：函谷関の東方。劉項：劉邦と項羽。
(三体詩)

登樂遊原

樂遊原に登る

唐 杜 牧

長空澹澹孤鳥沒

長空澹々として孤鳥没す

萬古銷沈向此中

万古銷沈此の中に向う

看取漢家何事業

看取す漢家何の事業ぞ

五陵無樹起秋風

五陵樹の秋風を起こす無し

【語釈】

樂遊原：長安の東南にある遊覽の地で、高くなっており、長安を眺め渡すことのできる名勝地。長空：大空。澹澹：あっさりしたさま。孤鳥：群を離れて一羽だけになった鳥。没：かくれて見えなくなる。看取：みる。みてとる。漢家：漢の王室。何：なに、どれほど、疑問の助字。事業：営む事からその成果。五陵：長安にあった前漢の五帝陵。高祖長陵、惠帝安陵、武帝茂陵、昭帝平陵の五帝陵。
(漢詩大系14)

山房春事

さんぼうしゆんじ

唐

岑 参
しん じん

梁園日暮乱飞鴉

りやうえん にちぼ 乱れ飛ぶ鴉

極目蕭条三両家

きくもく しょうじょう さんりょうか

庭樹不知人去尽

ていじゆ 庭樹は知らず 人の去り尽すを

春来還発旧時花

しゆんさい ま 旧時花

【通釈】

山房春事…山房での春のものの思い。梁園…漢代に、文帝の子、梁の孝王が築いた園の名、河南省東部、商丘の東にある。極目…目の届く限り。蕭条…もの寂しいさま。舊時…昔と変わらない。
〔唐詩選〕

烏衣巷

ういこう

唐

劉禹錫
りゆううしやく

朱雀橋邊野草花

すざくせうべん やせうか

烏衣巷口夕陽斜

ういこうこう せきやう 斜めなり

舊時王謝堂前燕

きゆうじ おうしゃ どうぜん じよぼめ

飛入尋常百姓家

飛びて 尋常 百姓の家に 入る

【語釈】

烏衣巷…金陵城（南京）の南側、秦淮区の白鷺洲公園のすぐ西側にある町内の名。朱雀橋…南京城の南にある秦淮河の上の浮橋の名。巷口…路地の入り口。舊時…過ぎ去った昔。王謝…王導や謝安を出した南朝の名族。堂前…大きい建物の前。尋常…普通の。百姓…庶民。
（唐詩三百首）

石頭城

石頭城

唐

劉禹錫
りゆううしやく

山圍故國周遭在

山は故國を圍んで周遭として在り

潮打空城寂寞回

潮は空城を打って寂寞として回る

淮水東邊舊時月

淮水東邊 旧時の月

夜深還過女牆來

夜深くして還た女牆を過ぎて來たる

【語釈】

石頭城…金陵（南京）市街の西にある六朝の古都の城郭。故國…古都、六朝の古都・南京を指す。週遭…めぐる。空城…嘗ての首都、実態が無くなった寂しい首都。寂寞…回…めぐる、かえる。淮水…秦淮河のこと、金陵（南京）市街の南部、西部を回る川。女牆…ひめがき、城壁の上にある高い部分と低い部分のうち、低い部分をいう。
（中国名詩選）

楊柳枝詞

楊柳枝詞

唐

劉禹錫
りゆううしやく

煬帝行宮汴水濱

煬帝の行宮 汴水の浜

數枝楊柳不勝春

數枝の楊柳 春に勝えず

晚來風起花如雪

晚來 風起こつて花雪の如し

飛入宮牆不見人

飛んで 宮牆に入つて人を見ず

【語釈】

行宮…天子が行幸の際に泊まる仮宮。汴水…汴河、黄河と淮水とをつなぐ運河。浜…水ぎわ、ほとり。不勝春…春の風情に堪えられない。晚來…夕方、來は、時をあらわす語につく助辞。花…柳絮を指す。宮牆…屋敷の周りの垣根。
（唐詩選）

金陵圖

江雨霏霏江草齊

江雨霏々として江草齊し

六朝如夢鳥空啼

六朝夢の如く鳥空しく啼く

無情最是臺城柳

無情なるは最も是れ台城の柳

依舊烟籠十里隄

旧に依りて煙は籠む十里の隄

金陵の図

唐

韋莊

【語釈】

金陵圖：金陵（南京）の風景画を見て、その印象を詠んだ詩、江雨：長江に降る雨。霏霏：雨や雪などが絶え間なく降りしきる様子。江草：川辺の草。齊：一面に生はえ揃って茂っている様子。六朝：建康を都とした六つの王朝。如夢：夢のように消え去ってしまったこと。台城：玄武湖のほとりにあった宮城、建康宮。依旧：昔のままに。昔ながらに。煙籠：緑のしだれ柳が芽吹いて、春雨にけぶって見える様子。十里堤：玄武湖の十里あまりの長い堤。（唐詩三百首）

赤壁

折戟沈沙鐵半銷

折戟沙に沈んで鉄半ばは銷す

自將磨洗認前朝

自ら磨洗を將つて前朝を認む

東風不與周郎便

東風周郎の与に便ならずんば

銅雀春深鎖二喬

銅雀春深くして二喬を鎖さん

赤壁

唐

杜牧

【語釈】

赤壁：今の湖北省咸寧市赤壁市にある古戦場、呉の孫権と蜀の劉備の連合軍が、魏の曹操の軍を打ち破った所。折戟：折れたほこ。銷：錆びて朽ち果てる。磨洗：洗い磨くこと。前朝：前の時代。赤壁の戦いのあった三国時代。周郎：呉の名将、周瑜のこと。便：都合良くする。銅雀：曹操が鄴（今の河北省臨漳県）に築いた台の名、銅雀台。二喬：呉の喬氏の美人姉妹。姉の大喬は孫策が、妹の小喬は周瑜が側室とした。（三体詩）

經汾陽舊宅

汾陽の旧宅を經

唐

趙嘏

門前不改舊山河

門前改まらず 旧山河

破虜曾經馬伏波

虜を破り 曾て 輕んず 馬伏波

今日獨經歌舞地

今日 独り經 歌舞の地

古槐疎冷夕陽多

古槐 疎冷にして 夕陽 多し

【語釈】

汾陽：山西省汾陽市。汾陽舊宅：郭子儀の旧宅、郭子儀は、唐朝に仕えた軍人・政治家。安史の乱で大功を立て、以後よく異民族の侵入を防いだ。虜：蛮族。曾經：馬伏波以上の功績があることをいう、馬伏波は馬援、後漢の武將。歌舞地：汾陽の舊宅のこと。古槐：古い槐の樹。疎冷：疎らでさびしいさま。

釣臺

釣台

南宋

戴復古

萬事無心一釣竿

萬事無心 一釣竿

三公不換此江山

三公にも換えず此の江山

平生誤識劉文叔

平生 誤りて 劉文叔を識り

惹起虛名滿世間

虛名を惹起して世間に滿たしむ

【語釈】

釣臺：敵子陵が宮廷生活を辞し、富春山に住み、その中腹の岩場で釣りをしていたところ、敵陵釣台ともいう。無心：何も考えないこと。三公：最高位の三つの官職。後漢では大尉、司徒、司空。平生：その昔。劉文叔：後漢の光武帝劉秀が皇帝になる前の名前、敵子陵は劉文叔の親友であり、光武帝が即位したとき招かれたが出士しなかった。虚名：実力の伴わない名声。

(漢詩大系 16)

華清宮

かせいぎゆう
華清宮

唐

さいろ
崔櫓

草遮回磴絶鳴鑾

草は回磴を遮って鳴鑾を絶ち

雲樹深深碧殿寒

雲樹深々として碧殿寒し

明月自來還自去

明月自ら来り還た自ら去る

更無人倚玉欄干

更に人の玉欄干に倚る無し

【語釈】

雲樹：雲のかかる樹木。深深：奥深くまで生い茂っている形容。碧殿：青緑色に塗った宮殿、または碧玉で飾られた美しい宮殿。寒：ひっそりとして肌寒く感じる。自來：ひとりでにやつて来て。自去：ひとりでに去っていく。玉欄干：玉で飾った欄干。
(唐詩選)

華清宮

華清宮

唐

とぼく
杜牧

長安回望繡成堆

長安回望すれば繡堆を成す

山頂千門次第開

山頂の千門次第に開く

一騎紅塵妃子笑

一騎紅塵妃子笑う

無人知道荔枝來

人の荔枝来るを知る無し

【語釈】

華清宮：華清宮は、長安東方の驪山の近くに在った宮殿。回望：（華清宮から見れば西の方を）ふり返って眺める。繡成堆：美しい山並みの起伏がうずたかくつもり重なる。千門：多くの門。次第：つぎつぎと。紅塵：浮き世の塵。妃子笑：きさき（楊貴妃）が笑む。荔枝：れいし。
(漢詩大系14)

再過露筋祠

再び露筋祠に過ぎる

清

王士禛

翠羽明璫尚儼然

翠羽 明璫 尚お 儼然たり

湖雲祠樹碧于烟

湖雲 祠樹 煙よりも碧なり

行人繫纜月初墮

行人 纜 を繫げば 月初めて 墮つ

門外野風開白蓮

門外の野風 白蓮 開く

【語釈】

露筋祠：江蘇省揚州市高郵市にある祠廟、邵伯湖の東北岸にある。唐の頃、ある娘が嫂と旅をしてこの地まで来たとき、蚊が群れ飛んでいた。そこに農夫の小屋があり、嫂はそこに寄宿した。娘は貞操を守って野宿し、蚊に食われて死に、その皮が裂けて筋まで露出したという。祠ほこらはその娘を祀ったもの。翠羽：翡翠（かわせみ）の羽で作った髪飾り。明璫：明珠で作った耳飾り。儼然：厳おごそかな様子、気高い様子。行人：旅人、作者自身を指す。繫纜：ともづなをつないで舟をとめる。月初墮：たった今、月が沈んで夜が明けた。初：「はじめて」と読み、「やっとうしたばかり」。門外：祠門の外。野風：野を吹く風。開白蓮：辺り一面の白蓮の花が次々とぱつと開いていく。（漢詩大系23）

登兗州城樓

兗州の城樓に登る

唐

杜
甫

東郡趨庭日

東郡 趨庭の日

南樓縱目初

南樓 縦目の初め

浮雲連海岱

浮雲 海岱に連なり

平野入青徐

平野 青徐に入る

孤嶂秦碑在

孤嶂 秦碑在り

荒城魯殿餘

荒城 魯殿余る

從來多古意

從來 古意多し

臨眺獨躊躇

臨眺 独り躊躇す

【語釈】

兗州…今の山東省滋陽県。東郡…秦代の古名。河北省南部と山東省西北部を指す。趨庭…子が父の教えを受けること。縦目…目を欲しいままにすること。海岱…舜のとき
の十二州の一つ、東海から泰山までの間の地、岱は泰山。青徐…青州と徐州。孤嶂…
平野の中に孤立する峰。秦碑…秦代（始皇帝）の碑。魯殿…宮殿の名、魯の恭王が建
てた靈光殿のこと。古意…昔をしのぶ心。臨眺…高い所から遠くを眺めわたすこと。
躊躇…ここでは立ち去りかねること。

（漢詩大系9）

咸陽城東樓

咸陽城の東樓

唐

許 暉

一上高城萬里愁

一たび高城に上れば 万里愁れう

蒹葭楊柳似汀洲

蒹葭 楊柳 汀洲に似たり

溪雲初起日沈閣

溪雲 初めて起りて 日閣に沈み

山雨欲來風滿樓

山雨 来らんと欲して 風樓に滿つ

鳥下綠蕪秦苑夕

鳥は 綠蕪に下る 秦苑の夕べ

蟬鳴黃葉漢宮秋

蟬は 黃葉に鳴く 漢宮の秋

行人莫問當年事

行人 問う莫かれ 當年の事

故國東來渭水流

故國 東來 渭水流る

【語釈】

咸陽城：秦の始皇帝が都を置いた都市。一上：ひとたび上る。高城：高樓、城樓。萬里：遙か彼方まで。愁：もの悲しい、愁いに滿ちた。蒹葭：葦、荻（おぎ）水辺に生えるイネ科の多年生草本の総称。楊柳：カワヤナギ、ネコヤナギ、ヤナギの総称。汀洲：中州。溪雲：溪間に生じる雲。初：たった今。閣：大きな建物。山雨：山に降る雨。綠蕪：（綠色の雑草の茂った草叢。秦苑：秦の始皇帝が咸陽に建設した宮殿の御苑。漢宮：漢の宮殿。行人：旅人。・當年：その当時。故國：故都、ここでは咸陽。東來：東に向かってくる（流れる）。渭水：渭咸陽と長安の間を劃するように東に向かって流れて黄河に注ぐ大河。（三体詩）

金陵懷古

きんりょうかいこ
金陵懷古

唐

きよこん
許渾

玉樹歌殘王氣終

玉樹の歌 残りて 王氣終わり

景陽兵合戍樓空

景陽兵 合して 戍樓空し

楸梧遠近千官塚

楸梧 遠近 千官の塚

禾黍高低六代宮

禾黍 高低 六代の宮

石燕拂雲晴亦雨

石燕 雲を払いて 晴亦た雨

江豚吹浪夜還風

江豚 浪を吹いて 夜還た風

英雄一去豪華盡

英雄 一たび去りて 豪華尽き

唯有青山似洛中

唯 青山の 洛中に似たる有り

【語釈】

金陵：南京、六朝の首都。玉樹歌：玉樹後庭歌、陳の後主が作り、宮女に詠わせた物。景陽：南京の北、玄武湖畔にあった陳の宮殿の名。戍樓：守りのための櫓。楸梧：ひさぎと桐。禾黍：きびとあわ。石燕：零陵というところに石の燕があつて、雨が降ると飛び、やむと又石になったと言われる。江豚：猪に似た魚で、波間に姿を見せると、長江に風が起ると言われる。

(三体詩)

登餘干古城

余干の古城に登る

唐 劉長卿

孤城上與白雲齊

孤城 上は白雲と齊し

萬古蕭條楚水西

萬古 蕭條たり 楚水の西

官舍已空秋草沒

官舍 已に空しく 秋草 沒し

女牆猶在夜烏啼

女牆は猶お在りて 夜烏 啼く

平沙渺渺迷人遠

平沙 渺々として人を迷わして 遠く

落日亭亭向客低

落日 亭々として客に向いて 低し

沙鳥不知陵谷變

沙鳥は知らず 陵谷の變

朝來暮去弋陽谿

朝に來たり 暮に去る 弋陽谿

【語釈】

餘干：江西省上饒市に位置する県。蕭條：…もの寂しいさま。楚水：楚の地の川。女牆：城の上の低い垣。渺渺：遠く果てしないさま。亭亭：遠く隔たっているさま。陵谷變：高岡が變じて谷となり、深溪が變じて陵となる、世事の變遷の甚だしいこと。弋陽谿：餘干城の近くにある溪。

題宣州開元寺水閣

宣州開元寺の水閣に題す

唐

杜牧

六朝文物草連空

六朝の文物草空に連なり

天澹雲閑今古同

天澹く雲閑にして今古同じ

鳥去鳥來山色裏

鳥去り鳥來る山色の裏

人歌人哭水聲中

人歌い人哭す水聲の中

深秋簾幕千家雨

深秋簾幕千家の雨

落日樓臺一笛風

落日樓臺一笛の風

惆悵無因見范蠡

惆悵す范蠡を見るに因無きを

參差煙樹五湖東

參差たる煙樹五湖の東

【語釈】

宣州：安徽省東南の宣州市。開元寺：現安徽省宣州宣城にある寺院で、正式の名称は永樂寺。水閣：水辺に建てたたかどの。六朝：六つの王朝のことで、後漢の滅亡後、建業（南京）に都した六つの王朝：文物：文化の産物。礼法音楽学問芸術など、文化的な制度。澹：やすらか、穏やか。閑：しずか。今古：今と昔。山色：山の景色。水声：川の水音。深秋：晩秋。簾幕：スタレと幕。千家：多くの家々。一笛風：風に乗って、一人で吹く笛の音が聞こえて来ること。惆悵：うらみなげくさま。無因：わけが無い。見：会う、見る。范蠡：越王勾践に仕え、隠棲をするとして湖に舟を浮かべて過ごした。范蠡：越王勾践に仕え、吳王夫差を討って会稽の恥を雪がせ、自分の果たすべき事をした後、隠棲をするとして湖に舟を浮かべて過ごした。五湖：太湖のこと。參差：長短不揃いのさま。煙樹：靄の中に霞んで見える木。五湖：太湖を及びその周辺の湖。

（新釈漢文大系 詩人編 9）

薊丘覽古

そきゆうらんこ

唐

陳子昂
ちんすごう

南登碣石館

南のかた 碣石館に登り

遙望黃金臺

遙かに 黄金台を望む

丘陵盡喬木

丘陵は 尽く喬木

昭王安在哉

昭王は安くに在りや

霸圖悵已矣

霸図 悵として 已んなるかな

驅馬復歸來

馬を駆つて 復た 歸來す

【語釈】

碣石館：幽州の薊県の西三十里、燕の昭王が築いた碣石宮の跡。黄金台：燕の昭王が築いた台。台上に千金を置いて天下の賢者を招いた。喬木：高い木。昭王：？前279。燕の王（在位前311～前279）。霸図：覇者となろうとする策略。悵：うらむ。いたむ。已んぬるかな：今となつては、どうにも仕方がない。復：そして
(唐詩選)

經下邳圯橋懷張子房

唐

李白

下邳の圯橋を経て 張子房を懷う

子房未虎嘯

子房未だ 虎嘯せず

破産不爲家

産を破つて 家を為さず

滄海得壯士

滄海に 壯士を得て

椎秦博浪沙

秦を椎す 博浪沙

報韓雖不成

韓に報じて 成らずと 雖も

天地皆振動

天地皆 振動す

潜匿遊下邳

潜匿して 下邳に遊ぶ

豈曰非智勇

豈に 智勇に非ずと 曰わんや

我來圯橋上

我 圯橋（いきょう）の上に来たり

懷古欽英風

古を懷いて、 英風を欽う

惟見碧水流

唯だ 碧水の流るるを見る

曾無黃石公

曾て 黃石公 無し

歎息此人去

嘆息す 此の人去つて

蕭條徐泗空

蕭條として 徐泗の空しきを

【語釈】

下邳：現在の江蘇省徐州市邳州市。圯橋：この地方の方言で土橋のことだともいい、下邳にある橋の名だともいわれるが、正確なところはよく分からない。張子房：漢の高祖の功臣、張良。子房：張良の字。虎嘯：虎が吠えるように、英雄が志を得て活躍すること。破産：財産を使い果たす、ここでは秦の始皇帝を殺すため、家財を使い尽くして刺客を求めたことを指す。不為家：家計のことを顧みない。滄海：滄海君の所で、滄海君は東夷（東方の異民族）の豪族の君長。椎秦：秦の始皇帝に鉄椎を投げつけた。博浪沙：現在の河南省新郷市原陽県。報韓：韓の恩に報いようとした企て。雖不成：

成功はしなかつたけれども。潜匿：…ひそみ隠れる。身をひそめる。遊：…決まった所に留まらず、ぶらぶらすること。智勇：智恵と勇氣。懷古：…昔を懐かしんで。英風：…すぐれた風姿。欽：…尊敬して慕う。碧流水：…青緑色の川の流れ、ここでは小沂水を指す。曾無：…「かつてくなし」と読み、「決してくでない」と訳す。黄石公：…秦末の隠士、張良に兵法書を授けたといわれている。蕭条：…ひっそりとして物淋しい様子、うらさびしいさま。徐泗：…徐は徐州（江蘇省徐州市一帯）、泗は泗州（江蘇省徐州市邳州市一帯）、下邳一帯の地を指す。

（唐詩選）

滕王閣

とうおうかく
滕王閣

唐

おう
王勃

滕王高閣臨江渚

滕王の高閣 江渚に臨み

珮玉鳴鸞罷歌舞

珮玉 鳴鸞 歌舞 罷む

畫棟朝飛南浦雲

畫棟 朝に飛ぶ 南浦の雲

珠簾暮捲西山雨

珠簾 暮に捲く 西山の雨

閒雲潭影日悠悠

閒雲 潭に影りて 日に悠々

物換星移幾度秋

物換り 星移りて 幾度の秋ぞ

閣中帝子今何在

閣中の帝子 今 何くにか在る

檻外長江空自流

檻外の 長江 空しく自ら流る

【語釈】

滕王：唐・太宗の弟で、滕王に封ぜられた李元嬰。江渚：河畔（贛江の渚）。珮玉：おびだ
ま。鳴鸞：（天子の）車に付ける鈴。畫棟：美しく彩色した建物の棟。南浦：江西省南
昌の西南の所、滕王閣の近くを指す。珠簾：たますだれ。西山：西の山。ここでは南昌
山。閒雲：静かに流れる雲。潭影：深い淵の色。悠悠：のどかな様、限りないさま、長く
久しいさま、ゆったりと落ち着いたさま。檻外：手すりの外。

（唐詩選）

◆ 詠史類

虞姫

虞姫 ぐき

清

吳永和 ごえいわ

大王真英雄

大王は真の英雄

姫亦奇女子

姫も亦た奇女子 ま

惜哉太史公

惜しい哉太史公 かな

不記美人死

美人の死を紀せず き

【語釈】

虞姫：虞美人のこと、西楚霸王・項羽の愛姫。大王：西楚霸王・項羽。姫：虞美人のこと。奇：ぬきでる、めずらしい。太史公：司馬遷の自称、『史記』の著者。

八陣圖

八陣の図

唐

杜甫 とほ

功蓋三分國

功は蓋う三分の國 おお

名成八陣圖

名は成す八陣の図

江流石不轉

江流れて石転ぜず

遺恨失吞吳

遺恨 吳を吞むを失す みく

【語釈】

八陣図：諸葛孔明が石を積みかさねて作った陣形をいう、八陣とは天、地、風、雲、竜、虎、鳥、蛇の八種の陣形をいう、これが魚復浦の平沙の上に在り、大水のときには破壊されるが水が減ずるときはまた旧態に復し、ふしぎなものとされている。蓋：ふたをする、圧倒する。三分国：三国時代。吞吳：吳の国を併呑する。

(唐詩三百首)

題楚昭王廟

楚の昭王廟にす題す

唐

韓愈

邱墳滿目衣冠盡

丘墳 滿目衣冠 尽く

城闕連雲草樹荒

城闕 雲に連なりて 草樹 荒る

猶有國人懷舊德

猶お 国人の 旧徳を懐う有り

一間茅屋祭昭王

一間の茅屋 昭王を祭る

【語釈】

楚：春秋戦国時代に長江中流域を領有していた国。昭王：春秋時代の楚の王、聖賢の大道に通じた有徳の王。丘墳：墳墓。滿目：見渡す限り。衣冠：衣冠を附ける身分のもの、官吏。城闕：城の門、宮殿。連雲：空に高く聳える様。荒：雑草が地を覆う、あははてる。国人：ある地域の人民。旧徳：昔の徳行。ここでは楚の昭王の徳治を指す。一間：一間（けん）の幅。茅屋：かや・わらなどでふいた粗末な家。（中国詩人選集11）

博浪沙

博浪沙

元 陳孚

一擊車中膽氣豪

一擊 車中 胆氣 豪なり

祖龍社稷已驚搖

祖龍の社稷 已に驚揺す

如何十二金人外

如何 十二金人の外

猶有人間鐵未銷

猶お 人間 鉄 未だ銷せざる 有り

【語釈】

博浪沙：張良が力士に鉄椎を投げさせて始皇帝の車を狙撃した地。膽氣：大胆な気力、きもったま。祖龍：秦の始皇帝。驚揺：驚き動揺する。十二金人：始皇帝が天下統一の後、天下の兵器を溶かして作った十二の金属で出来た人像。人間：一般社会。銷：溶ける。

讀秦紀

秦紀を読む

明

陳恭尹
ちんきやうい

謗聲易弭怨難除

謗聲 弭め易しく 怨みは除き難し

秦法雖嚴亦甚疎

秦法 嚴なりと 雖も 亦た 甚だ疎なり

夜半橋邊呼孺子

夜半 橋邊 孺子を呼ぶ

人間猶有未燒書

人間 猶お 未だ燒かざるの書 有り

【語釈】

秦紀：史記の秦始皇本紀。謗聲：誹しる声。弭：止める。秦法：挾書律、始皇帝の時、民が密かに書を蔵するのを禁止した。孺子：張良のこと、老翁から兵書を与えられた。

過鴻溝

鴻溝を過ぐ

唐

韓愈
かん ゆ

龍疲虎困割川原

龍疲虎困して川原を割く

億萬蒼生性命存

億万の蒼生 性命 存す

誰勸君王回馬首

誰か 君王に勧めて 馬首を回えさしめ

真成一擲賭乾坤

真成 一擲 乾坤を賭す

【語釈】

鴻溝：河南省開封市にあたり、項羽と劉邦が、ここを境にして、こ孤から西を劉邦、東を項羽の領土とする事で講和した。張良が勧めて、劉邦を裏切らせて項羽を追撃し、これが垓下の戦いにおける勝利に繋がった。龍疲虎困：項羽と劉邦が戦いに疲れ果て苦しんだこと。一擲賭乾坤：ひとたび采を擲ち博して天下を懸け物にする、「乾坤一擲」の語源。

烏江廟

烏江廟 うかうびやう

唐

杜牧 とほく

208

勝敗兵家不可期

勝敗は 兵家も 期すべからず

包羞忍恥是男兒

羞を包み 恥を忍ぶ 是れ男兒

江東子弟多才俊

江東の子弟 豪俊多し、

捲土重來未可知

捲土重來 未だ知るべからず

【語釈】

烏江亭：安徽省の長江北岸にある亭。項羽と劉邦の天下争覇で、敗れた項羽が舟での戦場離脱を拒んだところ。烏江：安徽省東部を流れる川であり地名。・兵家：兵法家。不可期：予期することができない。男兒：立派な男である。是：強意の助辞、…である。江東：烏江の東側にある項羽の根拠地。豪俊：優れた豪傑。捲土重來：砂塵を巻き起こす勢いで、再びやってくる。未可知：その結果はどうなるかは、まだ、知ることができない。

(漢詩大系 9)

虞兮

虞兮ぐや

清

吳偉業ごいぎやう

千夫辟易楚重瞳

千夫も辟易す 楚の重瞳へきえき ちゆうじゆう

仁謹居然百戰中

仁謹 居然たり 百戦の中じんきん きよぜん うち

博得美人心肯死

博し得たり 美人 心に死を肯ずるをはく がいん

項王此處是英雄

項王 此の処 是れ英雄

【語釈】

虞兮：項羽の寵妾の虞美人。辟易：恐れてたじろぐ。楚重瞳：項羽のこと、項羽は瞳が2つあったという。仁謹：いつくしみ慎む。居然：物に動じないさま。博：得る。美人：虞美人。此處：この点、虞美人の殉死を得られたという点。是：くはくである、言動詞の働きをする。

王昭君

王昭君

唐

白居易はくきやい

漢使却回憑寄語

漢使 却回 憑りて語を寄すきやくかい よ

黄金何日贖蛾眉

黄金 何れの日にか 蛾眉を贖わんがひ あがな

君王若問妾顏色

君王 若し 妾が 顔色を問わばも しやう

莫道不如宮裏時

道う 莫れ 宮裏の時に如かずとい なか きやうり

【語釈】

王昭君：匈奴の呼韓邪单于、復株累若鞮单于の時代の閼氏（单于の妻）、漢の後宮から選ばれて匈奴に嫁いだので悲劇の美女と呼ばれる。却迴：ひき返す。憑：頼んで。寄語：伝言する。蛾眉：美人のこと。王昭君を指す。贖：買い戻す。君王：天子さま。前漢の元帝を指す。顔色：かおいろ、容姿。宮裏：宮殿の中。不如：及ばない。

題李陵泣別圖

李陵 泣別の図に題す

明

袁凱

上林木落鴈南飛

上林木落ちて雁南飛し

萬里蕭條使節歸

万里蕭條として使節帰る

猶有交情兩行淚

猶有交情 兩行の涙有り

西風吹上漢臣衣

西風吹き上ぐ漢臣の衣

【語釈】

李陵：前漢の名将単于軍とよく奮戦したが孤軍の歩兵のため、匈奴に降った。泣別：涙を流して泣いて別れる。上林：上林苑のこと、秦、前漢の皇帝のための大庭園、長安の西南すぐ（現・陝西省西安市長安区）にあった。蕭条：もの寂しいさま。猶：まだ、やはり、それでも。蘇武と李陵の交誼。兩行涙：二筋の涙。漢臣：漢王朝の臣下。蘇武を謂う。

題河梁泣別圖

かりよう
河梁泣別の図に題す

明

たんでいりよう
譚貞良

都尉臺前起朔風

とくだいぜん さくふう
都尉台前朔風起こり

節旄空盡路西東

せつもう
節旄空しく尽き路西東

不知別淚誰先落

べつなみ たれ
知らず別淚誰か先ず落つ

同在河梁夕照中

かりよう せきしょう
同じく河梁夕照の中に在り

【語釈】

河梁：河梁之吟（李陵が蘇武との別れに對して作つた詩）。都尉臺：台の名、詳細不明。朔風：北風。節旄：皇帝の盟を受けた印として持つ物、牛毛で作る。河梁：河に懸かる橋。

釣臺

ちやうたい

清

こう
洪升

逃卻高名遠俗塵

とうきゃく
高名を逃却して俗塵より遠ざかり

披裘澤畔獨垂綸

きゆう
裘を披て沢畔独り綸を垂る

千秋一箇劉文叔

せんしゅう
千秋一箇の劉文叔

記得微時有故人

びじ
記し得たり微時故人有るを

【語釈】

釣臺：嚴子陵が宮廷生活を辭し、富春山に住み、その中腹の岩場で釣りをしていたところ。嚴陵釣台ともいう。逃卻：完全に逃れる。俗塵：俗世間の塵。垂綸：釣り糸を垂れる。千秋一箇：千年に一人あるような。劉文叔：後漢の光武帝劉秀が皇帝になる前の名前。嚴子陵は劉文叔の親友であり、光武帝が即位したとき招かれたが出土しなかった。記得：記憶していた。微時：嚴子陵が貧乏であるとき。故人：親友である嚴子陵。

螭磯靈澤夫人祠

螭磯靈沢夫人の祠

清

王士禛

霸氣江東久寂寥

霸氣江東久しく寂寥

永安宮殿草蕭蕭

永安の宮殿草蕭々

都將家國無窮恨

都て家國無窮の恨みを將つて

分付潯陽上下潮

分付す潯陽上下の潮

【語釈】

螭磯：地名、安徽蕪湖西江中にある。靈澤夫人：蜀の劉備の婦人、夫の崩ずるを聞き、慟哭して自ら水死した。霸氣：覇者たる気性。寂寥：ひっそりして物寂しいさま。永安宮殿：成都にある劉備の宮殿。蕭蕭：もの寂しい様子や音の形容。潯陽：江西省潯陽江。

禹廟

禹廟 うびょう

唐

杜甫 とほ

禹廟空山裏

禹廟 うびょう 空山の裏 うち

秋風落日斜

秋風 落日斜めなり

荒庭垂橘柚

荒庭 橘柚 垂れ きつゆう

古屋畫龍蛇

古屋 龍蛇を画く えが

雲氣生虚壁

雲氣 虚壁に生じ きよへき

江聲走白沙

江聲 白沙に走る はくさ

早知乘四載

早く知る 四載に乗りて はや しさい

疏鑿控三巴

疏鑿して 三巴を控くことを そさく は

【語釈】

禹廟：夏の禹王の廟、重慶市忠県にある。空山：寂しい山。雲氣：雲のように空中に現れる気。虚壁：人のいない壁。江聲：長江の長れる音。四載：禹が治水に用いた四つの乗り物、車、舟、そり、かんじき。疏鑿：土地を穿って水を流通する。三巴：長江が重慶市巴県の東北で別れて三流となり、巴の形をなすところ。

(唐詩選)

和劉道原詠史

劉道原の史を詠ずるに和す

北宋

蘇軾

仲尼憂世接輿狂

仲尼世を憂い 接輿は狂す

臧穀雖殊竟兩亡

臧穀殊なりと雖も 竟に兩つながら亡ぶ

吳客漫陳豪士賦

吳客漫に陳す 豪士の賦

桓侯初笑越人方

桓侯初めて笑う 越人の方

名高不朽終安用

名高くして 朽ちざるも 終に 安んぞ用いん

日飲無何計亦良

日に飲み 何んとも無からしむ 計も亦た良し

獨掩陳編弔興廢

独り 陳編を掩いて 興廢を弔すれば

窗前山雨夜浪浪

窓前の山雨 夜浪々

【語釈】

劉道原：劉恕、歴史学者。仲尼：孔子。接輿：孔子を誹った楚の狂者。臧穀：臧と穀の二人『莊子』に記載あり。臧は書を読み、穀は遊んでいたが、二人とも羊を亡うことは同じであった。吳客：晉の陸機。桓侯：戦国時代の齊王。越人：名医扁鵲。陳編：古い書籍。

蜀相

蜀相

唐

杜甫

丞相祠堂何處尋

丞相の祠堂 何れの処にか尋ねん

錦官城外柏森森

錦官城外 柏森々

映階碧草自春色

階に映ずる碧草 自から春色

隔葉黃鸝空好音

葉を隔つる黃鸝 空しく好音

三顧頻煩天下計

三顧頻煩なり 天下の計

兩朝開濟老臣心

兩朝開濟す 老臣の心

出師未捷身先死

師を出して未だ捷たざるに 身先ず死し

長使英雄淚滿襟

長えに英雄をして 涙襟に満たしむ

【語釈】

蜀相：三国時代の蜀の丞相の諸葛亮をいう。丞相：天子を輔けて政治を行う最高位の官。祠堂：靈を祀ったところ。錦官城：成都のこと。柏：コノテガシワ。森森：樹木が盛んに繁っているさま。碧草：春の青い草。自：自然と。・春色：春の気配。隔葉：葉の繁みの向こう側で。黃鸝：チヨウセンウグイス。三顧：蜀の劉備が軍師を求めて諸葛孔明に三顧の礼をとった故事をいう。天下計：天下を手中に収める計略。兩朝：先主・劉備と後主・劉禪の二朝。開濟：基礎を始め、立派に成功する。出師：出兵。捷：勝つ。英雄：国事に奔走する人物。襟：衣服のえり。

(漢詩大系 9)

赤壁

赤壁

清

趙

翼

依然形勝扼荆襄

依然いぜんたる形勝けいのう 荆襄やくを扼す

赤壁山前故壘長

赤壁山前こゝろ 故壘こゝろ 長し

烏鵲南飛無魏地

烏鵲うじゃく 南に飛んで 魏地ぎち 無く

大江東去有周郎

大江東しゅうろうに去りて 周郎 有り

千秋人物三分國

千秋の人物 三分の國

一邊山河百戰場

一辺の山河 百戦の場

今日經過已陳迹

今日 經過すれば 已ちんせきに陳迹

月明漁父唱滄浪

月明らかにして 漁父ぎよほ 滄浪そつろうを唱う

【語釈】

依然：もとのまま。荆襄：荊州と襄州。扼：制圧する。故壘：昔の寨。烏鵲南飛：曹操の「短歌行」の一句。周郎：曹操軍を破った周瑜。經過：通り過ぎる。陳迹：古い跡。漁父唱滄浪：「漁父の辭」

赤壁

赤壁

清

袁枚

一面東風百萬軍

一面東風 百万の軍

當年此處定三分

当年 此の処 三分を定む

漢家火德終燒賊

漢家の火德 終に賊を燒き

池上蛟龍竟得雲

池上の蛟龍 竟に雲を得たり

江水自流秋渺渺

江水 自ら流れて 秋 渺々

漁燈猶照荻紛紛

漁灯 猶お照らして 荻 紛紛

我來不共吹簫客

我 來りて 簫を吹くの 客と共にせず

烏鵲寒聲聞靜夜

烏鵲の寒声 静夜に聞く

【語釈】

赤壁：湖北省の名勝地、中国の三国時、呉の孫権と蜀の劉備の連合軍が、魏の曹操破った古戰場。一面東風：周瑜が東南の風の便を得て、曹操百万の軍を火攻めにより破った。定三分天下を魏、呉、蜀で三分して治める諸葛亮の計が定まった。漢家火德：蜀漢は五行説の火をう（木…もく・火…か・土…ど・金…こん・水…すい）からいつて火の徳を以て王となることになっていた蜀が魏を破るに火攻めの計を用いたことに引用した表現である。池上蛟龍：まだ龍にならない龍のこと、劉備をさす、周瑜が劉備をこう呼んだ。渺渺：広く果てしないさま、遠くかすかなさま。荻：葦の類。紛紛：乱れ飛ぶさま。吹簫客蘇東坡はここで簫を吹く客と共に遊んだことをさす。烏鵲：かささぎ。寒聲：寒々とした声。

（漢詩大系22）

岳鄂王墓

がくがくおう
岳鄂王の墓

元

ちようもうか
趙孟頫

鄂王墳上草離離

がくおうほじょう
鄂王墓上草離々たり

秋日荒涼石獸危

秋日荒涼石獸危うし

南渡君臣輕社稷

南渡の君臣社稷を輕んじ

中原父老望旌旗

中原の父老旌旗を望む

英雄已死嗟何及

英雄已すでに死す嗟何ぞ及ばん

天下中分遂不支

天下中分遂に支えず

莫向西湖歌此曲

西湖に向つて此の曲を歌うこと莫なれ

水光山色不勝悲

水光山色悲しみに勝えず

【語釈】

鄂王：岳飛が死後鄂王に封ぜられたことによる。離離：稲や麦の穂が伸びて垂れるさま。
荒涼：荒れはててさびしい。南渡：北方の異民族に圧迫されて長江を渡って江南半壁の地に漢民族の国家をうち立てたこと、北宋滅亡後の南宋をいう。社稷：国家をいう。中原父老：華中、華北に取り残された漢民族の老人。旌旗：旗。天下中分：北宋が亡んで、南宋の地に追いやられたこと。向：おいて。

(中国名詩選)

蘇武

蘇武 そぶ

唐

李 り
白 はく

219

蘇武在匈奴	蘇武 匈奴に在り
十年持漢節	十年 漢節を持す
白雁上林飛	白雁 上林に飛び
空傳一書札	空しく一書札云う
牧羊邊地苦	牧羊 辺地に苦しみ
落日歸心絶	落日 歸心絶ゆ
渴飲月窟冰	渴しては 月窟の水を飲み
飢餐天上雪	飢えては 天上の雪を餐す
東還沙塞遠	東に還らんとして 沙塞遠く
北愴河梁別	北に愴む 河梁の別れ
泣把李陵衣	泣いて 李陵の衣を把り
相看淚成血	相見て 涙血を成す

【語釈】

蘇武：漢の忠臣。中郎将として節を授かり匈奴（きょうど）に使いたが、捕らえられて降伏をせまられた。しかし彼は節義をまげず拒否したために北海（バイカル湖）のほとりの荒野に送られて羊を飼われ、苦難の抑留生活をつづけた。匈奴にとどまること二年、昭帝が即位して匈奴との講和が成立するに至ってようやく帰国がかない、典属国に拝せられた。持漢節：漢の符節を恒に持つ。上林：上林苑のこと、秦、前漢の皇帝のための大庭園、長安の西南すぐ（現・陝西省西安市長安区）にあった。月窟：月が出る穴（『文選』）。沙塞：砂漠の辺塞。河梁別：蘇武と李陵とが別れた地。

虞美人草

虞美人草

宋

曾鞏

鴻門玉斗紛如雪

鴻門の玉斗紛として雪の如し

十萬降兵夜流血

十万の降兵夜血を流す

咸陽宮殿三月紅

咸陽の宮殿三月紅なり

霸業已隋煙燼滅

霸業已に煙燼に随いて滅す

剛強必死仁義王

剛強なるは必ず死し仁義なるは王たり

陰陵失道非天亡

陰陵に道を失いしは天の亡すに非ず

英雄本學萬人敵

英雄本學万人の敵

何用屑屑悲紅粧

何ぞ用いん屑々として紅粧を悲しむを

三軍散盡旌旗倒

三軍散じ尽きて旌旗倒れ

玉帳佳人座中老

玉帳の佳人座中に老ゆ

香魂夜遂劔光飛

香魂夜劔光を遂いて飛び

青血化為原上草

青血化して原上の草と為る

芳心寂莫寄寒枝

芳心寂莫寒枝に寄せ

舊曲聞來似斂眉

旧曲聞き来たりて眉を斂むるに似たり

哀怨徘徊愁不語

哀怨徘徊して愁いて語らず

拾如初聽楚歌時

恰も初めて楚歌を聴きし時の如し

滔滔逝水流今古

滔滔たる逝水今古に流る

漢楚興亡兩丘土

漢楚の興亡兩ながら丘土

當年遺事久成空

当年の遺事久しく空と成る

慷慨樽前為誰舞

慷慨樽前誰が為にか舞わん

【語釈】

鴻門玉斗：鴻門の会で劉邦に逃げられて、激怒した項羽の参謀范増贈は、劉邦から贈られた玉斗を粉々に叩き割った。紛如雪：粉々に砕け、雪のように舞い散る様子。十万降兵夜流血：楚に降参した秦の十万もの投降兵は項羽に虐殺され、一夜にして夥しい血が流された。咸陽宮殿：秦の始皇帝が渭水のほとりに建てた宮殿・阿房宮のこと。三月紅：項羽が宮殿に火を放ち、その火は三ヶ月間燃え続けた。霸業：武力で天下を統一する事業。剛強：強くて勇ましい者・項羽を指す。仁義：情け深く、正直な者・劉邦を指す。陰陵失道：項羽が陰陵で道に迷い、農夫に騙されて窮地に陥った。英雄：項羽を指す。万人敵：一人で万人を敵にまわして戦う兵法。何用：どうしてくする必要があるのか、反語。屑屑：くよくよと。悲紅粧：化粧した美人のこと・虞美人を指す。三軍：諸侯の率いる大軍のこと。散尽：ちりぢりになる。四方に散らばる。旌旗：旗さしもの。玉帳：玉をちりばめた美しいとばり。香魂：香り高い魂。青血：鮮やかな血。芳心：虞美人の香り高い魂。寂寞：もの寂しく。旧曲：垓下で劉邦の軍に包囲されたとき、項羽と虞美人とが唱和した歌。聞来：聞こえてくると。似斂眉：虞美人草はこの曲が聞こえると葉を揺らすといわれており、その様子が眉をひそめて悲しんでいるように見える。哀怨：哀しみ恨む。徘徊：ここでは虞美人草が風に揺れ動くこと。滔滔：水がよどみなく、さかんに流れる様子。逝水：流れ去っていく水。流今古：今も昔も変わることもなく、流れ行く。当年：当時の。遺事：伝えられて残っている昔の事蹟。慷慨：いきどおり、なげくこと。

過平原作

平原を過ぐるの作

宋

文天祥

平原太守顔真卿

平原の太守 顔真卿

長安天子不知名

長安の天子 名を知らず

一朝漁陽動鼙鼓

一朝 漁陽 鼙鼓を動かし

大河以北無堅城

大河以北 堅城 無し

公家兄弟奮戈起

公の家の兄弟 戈を奮いて起ち

一十七郡連夏盟

一十七郡 夏盟を連ぬ

賊聞失色分兵還

賊聞きて 色を失い 兵を分ちて還る

不敢長驅入咸京

敢えて 長驅して 咸京に入らず

明皇父子將西狩

明皇 父子 將に西狩せんとす

由是靈武起義兵

是に由りて 靈武 義兵を起こす

唐家再造李郭力

唐家の再造は 李郭の力

若論牽制公威靈

もし 牽制を論ずれば 公の威靈

哀哉常山慘鉤舌

哀しい哉 常山 慘として舌を鉤せられ

心歸朝廷氣不懼

心 朝廷に歸して 氣 懼れず

崎嶇坎坷不得志

崎嶇 坎坷 志を得ず

出入四朝老忠節

四朝に出入して 忠節に老ゆ

當年幸脱安祿山

當年 幸に脱す 安祿山

白首竟陷李希烈

白首 竟に陥る 李希烈

希烈安能遽殺公

希烈 安んぞ 能く 遽かに 公を殺さん

宰相盧杞欺日月

宰相 盧杞 日月を欺く

亂臣賊子歸何處

亂臣 賊子 何れの処にか歸す

茫茫煙草中原土

ぼうぼう 煙草 中原の土

公死於今六百年

公死して今に於て六百年

忠精赫赫雷當天

忠精 赫赫として雷 天に当たる

【語釈】

平原：山東省北西境の徳州市を中心とする地方。顔真卿：ウイキペディア参照。以下、歴史の記述に寄るので、ウイキペディア参照。

◆ 禁省類

玉階怨

玉階怨 ぎよくかいえん

唐

李 り
白 はく

玉階生白露

玉階に 白露生じ

夜久侵羅襪

夜久しくして 羅襪を侵す らへつ

却下水精簾

水精の簾を 却下して れん

玲瓏望秋月

玲瓏として 秋月を望む れいろう

【語釈】

玉階怨：楽府題の一つ、宮女の物思いを詠んだもので、いわゆる閨怨詩の一つ。玉階：大理石や玉で作られた階段。夜久：夜が更けて。羅襪：薄絹の靴下。水晶簾：水晶の玉を連ねて作ったすだれ。却下：下ろす。玲瓏：冷たく冴さえて輝くさま。
(中国詩人選集8)

班婕妤

はんせんよ
班婕妤

唐

おう
王维

225

怪來妝閣閉

怪しみ来たる 妝閣の閉ずるを
しょうかく

朝下不相迎

朝より下りて 相迎えず
あいまか

總向春園裏

総て 春園の裏に 向かいて
すべむ

花間笑語聲

花間 笑語の聲

【語釈】

班婕妤：班は姓、婕妤は女官名、漢の成帝の寵愛を得たが、後に寵を失って西宮（長信宮）に移された。來：助辞、意味はない。粧閣：化粧部屋。朝：朝廷。向：於いて。春園：春の園。花間：花の間。笑語：笑いさざめく。
(唐詩選)

春宮曲

しゅんきゆうきょく
春宮曲

唐

おうしやうれい
王昌齡

昨夜風開露井桃

昨夜 風に 開く 露井の桃
ろせい

未央前殿月輪高

未央の前殿 月輪 高し
びおう

平陽歌舞新承寵

平陽の歌舞 新たに寵を承け
う

簾外春寒賜錦袍

簾外 春寒くして 錦袍を賜う
れんがい きんぽう

【語釈】

春宮曲：樂府題、宮女の怨みを詠う。露井：屋根のない井戸。未央：未央宮、漢の宮殿で長安にあった。平陽：平陽公主、武帝の姉。錦袍：錦の上着、陣羽織の類。
(唐詩選)

西宮春怨

西宮春怨
せいぎゅうしゅんえん

唐

王昌齡
おうしょうれい

西宮夜靜百花香

西宮夜靜かにして 百花香ばし

欲捲珠簾春恨長

珠簾を捲かんと欲して 春恨長し

斜抱雲和深見月

斜めに 雲和を抱いて 深く 月を見れば

朦朧樹色隱昭陽

朦朧たる樹色 昭陽を隠す

【語釈】

西宮春怨…樂府題、寵を失った宮女の怨みを詠う。西宮…長信宮、寵を失った班婕妤が移された宮殿。雲和…瑟の名。朦朧…おぼろげなるさま。昭陽…趙飛燕がいた宮殿。
(漢詩大系7)

清平調詞三首其一

清平調詞三首其一
せいへいちょうし

唐

李白
りはく

雲想衣裳花想容

雲には 衣裳を想い 花には 容を想う

春風拂檻露華濃

春風 檻を払って 露華 濃やかなり

若非羣玉山頭見

若非 群玉山頭に見る非ずんば

會向瑤臺月下逢

會ず 瑤台 月下に向かつて逢わん

【語釈】

容…容貌。檻…宮中の手すり。露華…美しい露。郡玉山…西王母のすむ山、西王母のまわりにはたくさんの仙女がつかえている。瑤台…仙女のすみか。向…於いて。
(唐詩選)

清平調詞三首其二

清平調詞三首其二

唐 李白

一枝濃艷露凝香

一枝の濃艷露香を凝らす

雲雨巫山枉斷腸

雲雨巫山枉げて断腸

借問漢宮誰得似

借問す漢宮誰か似たるを得ん

可憐飛燕倚新妝

可憐の飛燕新妝に倚る

【語釈】

濃艷：牡丹の花のあでやかで美しい様子、貴妃の美しさに喩えたもの。露凝香：花に降りた露が花の香りを凝縮させている。雲雨巫山：宋玉の「高唐の賦」〔文選〕卷十九に見える故事を踏まえる。枉：いたずらに。無駄なことをする。断腸：非常に悲しい様子。借問：ちよつとお尋ねしますが。漢宮：漢の後宮の美女の中で。誰得似：いったい誰が貴妃に似ていたであろうか。飛燕：漢の趙飛燕のこと、卑賤の出だった。が、妹とともに絶世の美女だった。新粧：化粧したての姿。倚：たのみとする、自負する。

(唐詩選)

清平調詞三首其三

清平調詞三首其三

唐 李白

名花傾國兩相歡

名花傾国両つながら相歓ぶ

長得君王帶笑看

長に得たり君王の笑いを帯びて看るを

解釋春風無限恨

春風限り無き恨みを解釈して

沈香亭北倚闌干

沈香亭北欄干に倚る

【語釈】

名花：美しくて立派な花、眼前の牡丹の花を指す。傾国：君主が色香に迷い、自分の国を危うくするほどの絶世の美女のこと、ここでは貴妃を指す。春風無限恨：春風がもたらす限らない憂愁。解釈：解きほぐす。沈香亭：長安の興慶宮の中央、竜池の東にあった沈香の香木で作られたあずまや。倚：（貴妃が）寄りかかる。

(唐詩選)

夜直

夜直 やちよく

宋

王安石 おうあんせき

金爐香盡漏聲殘

金爐香盡きて漏声残す きんろ ぼうせいざん

翦翦輕風陣陣寒

翦々たる輕風 陣々として寒し せんせん けいふう じんじん

春色惱人眠不得

春色人を悩まして眠り得ず しゅんしよく

月移花影上欄干

月は花影を移して 欄干に上らしむ つきは かげい うつ らんかん

【語釈】

金爐：宮中にある美しい金属製の香炉。香盡：香が燃え尽きる。漏声：水時計の水のしたたる音。「漏」は漏刻。残：音がかすかになる。翦翦：肌寒い風が吹く形容。輕風：そよ風。陣陣：一陣の風ごとく。春色：春の景色。惱人：人を物思いにふけさせる。眠不得：眠ろうとしても眠れない。移：位置を移す。花影：花の影。

(宋詩選注 1) (中国詩人選集 1—4)

西宮秋怨

西宮秋怨 せいきゆうしゅうえん

唐

王昌齡 おうしょうれい

芙蓉不及美人粧

芙蓉も及ばず美人の粧い

水殿風來珠翠香

水殿 風来たつて 珠翠香し しみずい

卻恨含情掩秋扇

却って恨む情を含んで秋扇を掩い

空懸明月待君王

空しく明月を懸けて君王を待たんとは

【語釈】

西宮：滕妾（そばめ）のいる室。秋怨：若い女性が秋の気配に感じてもの思いにふけること。芙蓉：はすの花。美人：前漢の成帝の妃であった班婕妤。水殿：池のほとりに建てた宮殿。珠翠：真珠や翡翠の髪飾り。秋扇：秋の扇。扇は秋になれば用がなくなり棄てられるところから、寵を失った女性（班婕妤）に喩える。懸：月が中天に懸かっているさま。空懸明月：班婕妤の長門賦の「懸明月以自照」に基づく。
(唐詩選)

長信秋詞

ちようしんしゆうし
長信秋詞

唐

おうしやうれい
王昌齡

真成薄命久尋思 真成に薄命 久しく尋思す

夢見君王覺後疑 夢に君王に見て 覚めて後疑う

火照西宮知夜飲 火は西宮を照らして 夜飲を知る

分明複道奉恩時 分明なり 複道 恩を奉ずる時

【語釈】

長信秋詞：楽府題。長信宮の秋の歌、長信宮に孤独な秋の夜を過ぐす班婕妤の嘆きを歌ったもの。真成：ほんとうに。薄命：不幸せなこと。尋思：いろいろ考えること。西宮：長信宮。夜飲：夜の酒宴。分明：ありありと、はっきりとしていること。複道：上下二層の渡り廊下。宮殿と宮殿とをつなぎ、上層は天子、下層は臣下が通った。奉恩時：天子の寵愛を受けるとき。
(唐詩選)

早入皇城贈王留守僕射

唐

白居易

早に皇城に入りて王留守僕射に贈る

津頭残月曉沈沈

津頭の残月 曉 沈々

風露凄清禁署深

風露 凄清として 禁署 深し

城柳宮槐謾搖落

城柳 宮槐 謾に搖落するも

悲愁不到貴人心

悲愁は到らず 貴人の心

【語釈】

王留守僕射：王起、当時、僕射で東都留守であった。津頭：渡し場、洛陽の洛水にかかる天津橋ともいう。沈沈：静まりひっそりとしたさま。凄清：ひっそりと静まりかえつているさま。禁署：宮中の官庁。城柳：城内の柳。宮槐：宮廷のエンジュ。謾：むやみやたらに。搖落：秋になり葉が落ちる。

宮詞

宮詞

宋

劉克莊

先帝宮人總道粧

先帝の宮人 総て道粧

遥瞻陵柏淚成行

遥かに 陵 柏を瞻て 涙行を成す

舊恩恰似薔薇水

旧恩 恰も似たり 薔薇水に

滴在羅衣到死香

滴つて 羅衣に在ありて 死に到るまで 香し

【語釈】

宮人：後宮の人。道粧：道教の服を着る、尼となること。瞻：遠くを見る。陵柏：陵に植えられた柏木。薔薇水：薔薇の香水。羅衣：薄物の衣。

秋詞

秋詞

元

薩都刺

清夜宮車出建章

清夜 宮車 建章を出ず

紫衣小隊兩三行

紫衣の小隊 兩三行

石闌干畔銀燈過

石闌干畔 銀燈過ぐ

照見芙蓉葉上霜

照らし見る 芙蓉 葉上の霜

【語釈】

建章：漢の建章宮、ここでは元の宮殿。紫衣小隊：天子の左右に侍する者。

宮詞

宮詞

明

王蒙

南風吹断采蓮歌

南風吹断す 采蓮の歌

夜雨新添太液波

夜雨新たに添う 太液の波

水殿雲廊三十六

水殿雲廊 三十六

不知何處月明多

知らず 何れの処か 月明多き

【語釈】

采蓮歌：歌の名、蓮を取る時に歌った物。太液：太液池、宮殿中の池の名。三十六：数の多いこと。

西宮怨

西宮怨

明

王世貞

點點蓮花漏未央

点々たる蓮花漏 未だ央ばならず

乍寒如水透羅裳

乍寒 水の如く羅裳を透す

誰憐金井梧桐露

誰か 憐む 金井 梧桐の露

一夜鴛鴦瓦上霜

一夜 鴛鴦 瓦上の霜

【語釈】

西宮：そばめのいる室。點點：一点一点。蓮花：蓮花の形をした水時計。漏未央：水時計が夜半でないことを言う。乍寒：急な寒さ。羅裳：薄絹の衣。金井：秋の井戸。梧桐：あおぎり。

春宿左省

春左省に宿す

唐

杜甫

花隱掖垣暮

花は隠る 掖垣の暮

啾啾棲鳥過

啾々として 棲鳥 過ぐ

星臨萬戶動

星は万戸に臨みて動き

月傍九霄多

月は九霄に傍いて多し

不寢聽金鑰

寝ねずして 金鑰を聴き

因風想玉珂

風に因りて玉珂を想う

明朝有封事

明朝 封事 有り

數問夜如何

数々問う 夜 如何と

【語釈】

花隱：隠はその形のみえなくなる。掖垣：宮側のかき。啾啾：鳥のなくさま。棲鳥：ねぐらにとまらんとする鳥。星：星のきらめき光をいう。万戸：宮殿の多くの戸。月：月光をいう。傍：近づく意。九霄：九重のそら、宮中の天をいう。金鑰：闔殿の門を開ける錠前のきしこみの鍵でこれを差し入れて開ける。因風：風が珂声をつたえて来ることを想う。玉珂：珂は貝の類をもつてつくった馬の飾り、その数は官位によつて等級がある、これは玉珂とあるので玉でつくったものである。他の臣僚についていう。封事：袋に収めた密封の上書である。夜如何：夜の時刻いかに、天の明けてくることをきづかう気持ちがある。

(漢詩大系9)

奉和聖製從蓬萊向興慶閣道中留春雨中春望之作應制 唐

王維

「聖製 蓬萊ほうらいよ従り興慶こうけいに向う閣道かくどうちゆう中の留春りゆうしゅんちゆう雨中春望りゆうちゆうしゆうの作」に奉和ほうわす 應制おうせい

渭水自縈秦塞曲

渭水おのは 自みづから 秦塞しんさいを 縈めぐつて 曲まがり

黄山舊繞漢宮斜

黄山らんよは 旧もとと 漢宮かんきゆうを 繞めぐつて 斜しやめなり

鸞輿迴出千門柳

鸞輿らんよ 迴はるか に出でず 千門せんもんの 柳りゅう

閣道迴看上苑花

閣道かくどう 迴めぐり 看みる 上苑じやうえんの 花はな

雲裏帝城雙鳳闕

雲裏うんりの 帝城ていじやう 雙鳳そうほうの 闕けつ

雨中春樹萬人家

雨あめ中の 春樹しゅんじゆ 萬ばん人の 家か

爲乘陽氣行時令

陽氣じやうきに 乘のりじて 時令じれいを 行いわんが 為ためにして

不是宸遊翫物華

是これ 宸遊しんゆうの 物華ぶつかを 翫もてあそぶには 不あらず

【語釈】

聖製：天子の作られた詩歌。蓬萊：宮殿の名、大明宮の別名。興慶：宮殿の名、興慶宮。閣道：高架の廊下、二階造りの渡り廊下、上を皇帝が通り、下を臣下が通る。留春：小宮殿の名、留春閣。「去りゆく春を惜しむ」とする解釈もある。雨中春望：春雨にけぐる屋外の風景を望む。応制：天子の命令によって作った詩文。渭水：黄河最大の支流、咸陽、長安の前を流れる。禁：めぐる。秦塞：昔の秦の国、とくにその都だった咸陽を指す。黄山：長安の西北、今の興平の近くにある山。漢の恵帝がここに黄山宮を建てた。旧：昔のまま。繞：とりまく。漢宮：黄山宮のこと。斜：斜面を見させている。鸞輿：天子の乗る車。千門：建章宮の門。迴：遙かに。上苑：上林苑、ここでは唐の御苑を指す。双鳳闕：一對の鳳凰を飾りつけた宮城の門、建章宮の東にあった。陽氣：春の気。行時令：時節に応じた良い政を行う。宸遊：行幸。物華：時節のすぐれた景色。

(唐詩選)

早朝大明宮呈兩省僚友

つと だいまいきゆう ちょう
早に大明宮に朝し兩省の僚友に呈す

唐 賈至

銀燭朝天紫陌長

銀燭 天に朝して 紫陌長し

禁城春色暎蒼蒼

禁城の春色 暎に蒼々たり

千條弱柳垂青瑣

千条の弱柳は 青瑣に垂れ

百轉流鶯繞建章

百轉の流鶯は 建章を繞る

劍佩聲隨玉墀步

劍佩の聲は 玉墀の歩に随い

衣冠身惹御爐香

衣冠の身は 御爐の香を惹けり

共沐恩波鳳池上

共に恩波に沐す 鳳池の上

朝朝染翰侍君王

朝々 翰を染めて君王に侍す

【語釈】

銀燭：銀製の燭台。熏朝 夜明けまで燃え続けるさま。紫陌：都大路。禁城：宮城。春色：春景色。蒼蒼：明けがたのまだ薄暗いさま。千条 何千という筋。弱柳：細い柳の枝。青瑣：青く塗った門の窓、春明門。百轉：鳥などがさまざまにさえずること。流鶯：鶯が枝々を飛びわたること。建章：建章宮。劍佩：腰にさげた剣や佩玉。玉墀：玉をしきつめた床。衣冠：天子から賜った制服と冠。惹御爐香：みかどの香炉にくゆらす香りがこもる。沐：恵みを受ける。恩波：天子の恵みの波。鳳池：鳳凰池、大明宮の大掖池のこと。鳳池上は中書省をいう。朝朝：朝毎のこと。染翰：翰は筆を執ること。
(唐詩選)

長恨歌

ちようこんか
長恨歌

唐

はくきよい
白居易

(第一段)

漢皇重色思傾國
御宇多年求不得
楊家有女初長成
養在深閨人未識
天生麗質難自棄
一朝選在君王側
回眸一笑百媚生
六宮粉黛無顏色
春寒賜浴華清池
溫泉水滑洗凝脂
侍兒扶起嬌無力
始是新承恩澤時
雲鬢花顏金步搖
芙蓉帳暖度春宵
春宵苦短日高起
從此君王不早朝
承歡侍宴無閑暇
春從春遊夜專夜
後宮佳麗三千人

かんこう 漢皇 色を重んじて 傾國を思う
ぎよう 御宇 多年 求むれども得ず
ようか 楊家に女有り 初めて長成す
しんけい 養われて 深閨に在り 人未だ識らず
れいしつ 天生の麗質 自ら棄て難く
かたわら 一朝選ばれて 君王の側 に在り
めくろ 眸を迴らして 一笑すれば 百媚生ず
ふんたい 六宮の粉黛は 顔色無し
よく 春寒くして 浴を賜う 華清の池
なめ 溫泉水 滑らかにして 凝脂を洗う
きよう 侍兒 扶け起こせば 嬌として 力無し
おんたく 始めて 是れ 新たに 恩沢を承けし時
うんびん 雲鬢 花顔 金步搖
ふよう 芙蓉の帳 暖かにして 春宵を度る
しゆんしやう 春宵 短きに苦しみ 日高くして 起き
そくちやう 此れより 君王 早朝せず
かんか 歡を承け 宴に侍し 閑暇 無く
しゆんゆう 春は 春遊び 従い 夜は 夜を専らにす
かれい 後宮の佳麗 三千人

三千寵愛在一身

三千の寵愛 一身に在り

金屋妝成嬌侍夜

金屋 粧よそおい い成なつて 嬌まよわとして 夜に侍し

玉樓宴罷醉和春

玉樓 宴えん 罷やんで 酔ようて 春に和す

姊妹弟兄皆列土

姊妹弟兄 皆しまいでいけい 土どを列れつし

可憐光彩生門戸

憐あわれむ可べし 光彩の門戸に生ずるを

遂令天下父母心

遂に 天下の父母の心をして

不重生男重生女

男を生むを重んぜず 女を生むを重んぜしむ

驪宮高處入青雲

驪宮りきゆう 高き処 青雲に入り

仙樂風飄處處聞

仙樂 風ひろがえに 飄ひらつて 処々に聞こゆ

緩歌慢舞凝絲竹

緩歌 慢舞 糸竹を凝らし

盡日君王看不足

盡日じんじつ 君王 看れども 足らず

【語釈】

漢皇：漢の武帝が李夫人を寵愛した故事をふまえるが、暗に唐の玄宗のことを指す。傾国：絶世の美人。御宇：治世。楊家有女：蜀州の官吏・楊玄琰の娘・楊玉環、後の楊貴妃。長成：大人になる。深閨：深い部屋。天生麗質：生まれついで的美貌。自：もともと。一朝：ある日突然に。百媚生：なまめかしさがあふれること。六宮：後宮、六つの宮殿があった。粉黛：化粧をこらした美女。無顏色：楊貴妃と比べて他の女たちは形無しとなったの意。賜浴：皇帝が楊貴妃に、温泉に入ることをお許しになった。華清池：長安の東驪山（りざん）にあった離宮の名、「池」は温泉。凝脂：白く凝り固まった脂肪、美人の肌のたとえ。侍兒：侍女。嬌：あでやか・なまめかしいこと。恩沢 天子の寵愛。雲鬢：雲のように豊かな髪の毛。花顔：花のように美しい顔。金步搖：金の髪飾り。歩くたびに揺れたのでこう言う。芙蓉帳：蓮の花を刺繍した寢室のカーテン。春宵：春の夜。春宵苦短：春の夜が短いのであつという間に朝が来て、寝過ごしてしまうこと。早朝：朝の政。承歡：皇帝の楽しみに自分の気持ちをあわせ、ご機嫌を取ること。侍宴：宴や遊びの席にお供する。無閑暇：片時の暇もなく天子のお側に侍っている。夜專夜：夜は夜毎一晩中、天子のお相手をする。佳麗：美女。金屋：黄金の御殿。漢の武帝の故事による。玉樓：玉の楼台。和春：酔い心地が春の空気に溶け込んでいく。姊妹弟兄：楊貴妃の姉妹兄弟たち。列土：諸侯となり土地を領有する。はこの楊国忠は宰相にまでなった。可憐：深い感動をあらわす言葉、「ああ」。門戸：一族。驪宮：長安の東驪山の離宮、華清宮。仙樂：仙人の世界の音楽。緩歌：ゆるやかな歌。慢舞：静かな舞。凝糸竹：弦楽器と管楽器の音色が

溶け合う。尽日…一日中。

(第二段)

漁陽鞞鼓動地來
驚破霓裳羽衣曲
九重城闕煙塵生
千乘萬騎西南行
翠華搖搖行復止
西出都門百餘里
六軍不發無奈何
宛轉蛾眉馬前死
花鈿委地無人收
翠翹金雀玉搔頭
君王掩面救不得
回看血淚相和流
黃埃散漫風蕭索
雲棧縈紆登劔閣
峨嵋山下少人行
旌旗無光日色薄
蜀江水碧蜀山青
聖主朝朝暮暮情
行宮見月傷心色
夜雨聞鈴腸斷聲

漁陽の鞞鼓地を動かして来たり
けいは げいしよううい きやく
驚破す 霓裳羽衣の曲
きゆうちよう じようけつ
九重の城闕 煙塵生し
せんじようばんき
千乗万騎 西南に行く
すいか しようよう
翠華 揺々として 行き復た止まる
西のかた 都門を出づること 百余里
りくくん
六軍 発せず 奈何するともする無し
えんてん
宛転たる蛾眉 馬前に死す
かてん
花鈿地に委てられて 人の収むる 無し
すいきよう きんじやく ぎよくそうとう
翠翹 金雀 玉搔頭
君王 面を掩いて 救い得ず
かえ
廻り看れば 血涙相和して流る
こうしん さんまん
黄埃 散漫として 風 蕭索
うんさん えいう けんかく
雲棧 縈紆 劔閣に登る
がひさんか
峨嵋山下 人行 少なり
せいき
旌旗 光無く 日色 薄し
みどり
蜀江は水 碧にして 蜀山は青し
ちようちようぼほ
聖主 朝々暮々の情
あんぐう
行宮に月を見れば 傷心の色
やう
夜雨に鈴を聞けば 腸断の声

【語釈】

漁陽鼙鼓動地来：節度使安祿山が任地漁陽（北京の東）で謀反を起こし、南下したこと、「鼙鼓」は馬上で打ち鳴らす太鼓、「動地来」は大地をゆさぶって襲い来ること。驚破 驚かし、打ち砕く。霓裳羽衣曲 唐代の楽曲の名。九重城闕：天子の居城、九つの門を置いたことから。千乘万騎：天子の隊列。西南行：玄宗一行が長安を脱出し、成都に難を逃れたことを指す。翠華：カワセミの羽飾りをつけた旗で、天子のしるし。揺揺 ゆらゆらするさま。西出都門百余里：長安の西百余里のところに馬嵬の駅があった。六軍 天子の軍隊。不発：出發しない、陳玄礼の率いる軍隊は、楊国忠と一族を殺害し、楊貴妃の死刑を要求した。玄宗は仕方なく楊貴妃に死を賜い、宦官高力士が仏堂の前の梨の木の下で絞殺した。宛転：すんなりと美しい形をしている。蛾眉 蛾の細い触覚のような眉をした美人。馬前死：玄宗皇帝が兵士たちの要求を容れて楊貴妃に死を賜ったことをいう。花鈿：螺鈿づくりの花のかんざし。翠翹：かわせみの羽をかたどった髪飾り。金雀：孔雀の形をかたどった金の髪飾り。玉搔頭：玉のかんざし。

第三段

天旋日轉回龍馭

天旋り日転じて竜馭を回し

到此躊躇不能去

此に到りて躊躇して去る能わず

馬嵬坡下泥土中

馬嵬坡下 泥土の中

不見玉顏空死處

玉顔を見ず 空しく死せし処

君臣相顧盡露衣

君臣 相顧みて 尽く衣を露し

東望都門信馬歸

東のかた 都門を望み 馬に信せて歸る

歸來池苑皆依舊

歸り来たれば 池苑 皆 旧に依る

太液芙蓉未央柳

太液の芙蓉 未央の柳

芙蓉如面柳如眉

芙蓉は面の如く 柳は眉の如し

對此如何不淚垂

此に對して 如何ぞ 涙の垂れざらん

春風桃李花開夜

春風 桃李 花 開く日

秋雨梧桐葉落時

秋雨 梧桐 葉 落つる時

西宮南苑多秋草

西宮南苑 秋草多し

宮葉滿階紅不埒

落葉 階に満ちて 紅 掃わず

梨園弟子白髮新

梨園の弟子 白髮 新たに

椒房阿監青娥老

椒房の阿監 青娥 老ゆ

夕殿螢飛思悄然

夕殿 螢 飛んで 思い 悄然

孤燈挑盡未成眠

孤燈 挑げ尽して 未だ眠りを成さず

遲遲鐘鼓初長夜

遅々たる鐘鼓 初めて長き夜

耿耿星河欲曙天

耿耿たる星河 曙けんと欲する天

鴛鴦瓦冷霜華重

鴛鴦瓦 冷やかに 霜華 重く

翡翠衾寒誰與共

翡翠衾 寒くして 誰と与に 共にせん

悠悠生死別經年

悠悠たる生死 別れて 年を経たり

魂魄不曾來入夢

魂魄 曾て来りて 夢に入らず

【語釈】

天旋日転：天下の情勢が大きく変わったことを指す。757年肅宗は長安を奪還した。迴竜馭：玄宗皇帝が長安に戻ることを指す。「竜馭」は天子の乗り物。此：楊貴妃が殺された馬嵬駅。馬嵬坡下：馬嵬の坂道の下。玉顔：楊貴妃の美しい顔。池苑：宮中の池と苑。依旧：昔のまま。太液：宮中の池の名。太液池。未央：宮殿の名。梧桐：アオギリ。西宮南内：西宮は長安の宮城、南内は興慶宮。玄宗は蜀がもどつてしばらくは興慶宮にいたが上元元(760年)、西宮に移された。階：宮殿のきざし。梨園弟子：「梨園」は玄宗が皇帝であつたときに組織した楽団。弟子はその構成員。白髮新：白髮が急に目立つようになった。椒房：皇后の居室。阿監：取り締まり役の女官。青娥：若々しい眉。夕殿：夜の宮殿。悄然：哀しみに暮れるさま。孤灯：たった一つのともし火。挑尽：ともし火を何度もかきため、かきためて尽くすこと。遅遅鐘鼓：時間が進むのが遅く感じられるさま。「鐘鼓」は時刻を告げる鐘や太鼓。耿耿：光り輝くさま。星河：天の川。鴛鴦瓦：オシドリをかたどつた瓦。霜花：霜を花にたとえる。翡翠衾：カワセミの羽を刺繍したかけ布団。鴛鴦も翡翠も夫婦の暗示。悠悠：遠く離れているさま。魂魄 楊貴妃の魂。

(第四段)

臨邛道士鴻都客

能以精誠致魂魄

爲感君王展轉思

遂教方士殷勤覓

排空馭氣奔如電

升天入地求之徧

上窮碧落下黃泉

兩處茫茫皆不見

忽聞海上有仙山

山在虛無縹緲間

樓閣玲瓏五雲起

其中綽約多仙子

中有一人字太真

雪膚花貌參差是

金闕西廂叩玉扃

轉教小玉報雙成

聞道漢家天子使

九華帳裏夢魂驚

攬衣推枕起裴回

珠箔銀屏遞迤開

雲鬢半偏新睡覺

臨邛の道士 鴻都の客

能く精誠を以て 魂魄を致す

君王の展轉の思いを感ずるが爲に

遂に方士をして 殷勤に覓めしむ

空を排し 氣を馭して 奔ること 電の如く

天に昇り 地に入つて 之を求むること 徧し

上は 碧落を窮め 下は 黄泉

兩処 茫茫として 皆 見えぬ

忽ち 聞かば 海上有る 仙山 有り

山は 虚無縹緲の間に 在りと

樓閣は 玲瓏として 五雲起こり

其中 綽約として 仙子 多し

中に 一人有り 字は 太真

雪膚 花貌 参差として 是ならん

金闕の 西廂に 玉扃を 叩き

轉じて 小玉をして 双成に 報ぜしむ

聞道く 漢家 天子の 使いなりと

九華帳裏 夢魂 驚く

衣を 攬り 枕を 推して 起ちて 徘徊す

珠箔 銀屏 遞迤として 開く

雲鬢 半ば 偏りて 新たに 睡り 覚め

花冠不整下堂來
風吹仙袂飄飄舉
猶似霓裳羽衣舞
玉容寂莫淚闌干
梨花一枝春帶雨
含情凝睇謝君王
一別音容兩渺茫
昭陽殿裏恩愛絕
蓬萊宮中日月長
回頭下望人寰處
不見長安見塵霧
唯將舊物表深情
鈿合金釵寄將去
釵留一股合一扇
釵擘黃金合分鈿
但教心似金鈿堅
天上人間會相見
臨別殷勤重寄詞
詞中有誓兩心知
七月七日長生殿
夜半無人私語時
在天願作比翼鳥
在地願爲連理枝

花冠 整えず 堂を下りて来る
風は 仙袂を吹いて 飄飄として 挙り
猶お 霓裳羽衣の舞に 似たり
玉容 寂寞として 涙 闌干たり
梨花 一枝 春雨を 帯ぶ
情を含み 睇を凝らして 君王に謝す
一別 音容 両つながら 渺茫
昭陽殿裏 恩愛 絶え
蓬萊宮 中 日月 長し
頭を 廻らして 下人 寰を 望む 処
長安を見ずして 塵霧を見る
唯だ 旧物を 將つて 深情を表わし
鈿合 金釵 寄せ 將ち 去らしむ
釵は 一股を 留め 合は 一扇
釵は 黄金を 擘き 合は 鈿を 分つ
但だ 心をして 金鈿の 堅きに 似しめば
天上人間 会ず 相見えん
別れに 臨んで 殷勤に 重ねて 詞を 寄す
詞中に 誓い有り 両心のみ 知る
七月七日 長生殿
夜半 人無く 私語の時
天に在りては 願はくは 比翼の鳥となり
地に在りては 願はくは 連理の枝と 為らんと

天長地久有時盡

天長く地久しきも時有って尽く

此恨綿綿無絕期

此の恨みは綿々として絶ゆる期無し

【語釈】

臨邛：四川省の地名。道士：神仙の術を会得した修験者。鴻都：長安。精誠：精神の集中。致魂魄：死者の魂を招く。展転思：楊貴妃を想って鬱々とし、夜も眠れないほどの思い。方士：方術をよくする者。殷勤：丁寧。排空：空をかきわけて。馭氣：大気に乗つて。碧落：大空。黄泉：死者の国。茫茫：限りなく広がっているさま。忽聞：ふと聞きつける。虚無縹緲間：何も無い、遠くぼんやりしたあたり。玲瓏：明るく光り輝くさま。五雲：五色の雲。綽約：しなやか。たおやか。仙子：仙女。太真：玄宗皇帝は楊貴妃がすでに息子のもとに嫁いでいたのを強引に奪って後宮に入れた。しかし人目をはばかるため、楊貴妃を道士として太真と名乗らせた。それをふまえ、太真という名によって楊貴妃の霊であることを示す。雪膚：雪のような肌。花貌：花のように美しい顔。参差是：どうやらそれらしい。金闕：黄金の宮殿。西廂：西側の棟。玉扇：玉の門。転：伝えて取次をする。小玉・双成 太真の侍女の名、「小玉」は呉王夫差の娘、「双成」は伝説上の仙女。聞道：聞けばよくということだ。九華帳裏：さまざまな花模様を刺繍したカーテンで閉ざされた部屋の内。夢魂驚：夢から覚める。徘徊：行きつ戻りつすること。珠箔：真珠のすだれ。銀屏：銀の屏風。邏迤：いくつも続くさま。雲鬢：雲のように見事な髪。半偏：髪の毛が半ば崩れているさま。花冠：花の冠。仙袂：仙女の衣のたもと。飄飄：ひるがえる様。霓裳羽衣：唐代の楽曲の名。玉容：美しい顔。寂寞：寂しげであること。闌干：涙がとめどなく流れるさま。含情：思いをこめ。一別：お別れして以来。音容：声と姿。渺茫：はるかにかすかなさま。昭陽殿：漢の成帝が趙飛燕姉妹を住ませた御殿、ここでは楊貴妃が住んだ御殿。蓬萊宮：海上の仙山にある宮殿。人寰：人間世界。旧物：思い出の品。鈿合：螺鈿細工の小箱。金釵：金のかんざし。釵留一股合一扇：かんざしは二つに折ってその一方を、箱は蓋と身の一方を手元に留める。金鈿堅 金や螺鈿のような堅さ。兩心知：玄宗と楊貴妃の二人の心だけ。長生殿：華清宮にあった宮殿の名。私語：ひそかに言った。比翼鳥：雌雄ひとつがいで、いつも仲良く飛ぶ鳥。連理枝：幹が二本で枝が一本につながった木。愛し合う男女のたとえ。恨：悲しみ。綿綿：長く続いて絶えないさま。

◆ 閨閣類

子夜春歌

子夜しやの春歌しゅんか

唐

郭かく
震しん

陌頭楊柳枝

陌頭はくとう楊柳の枝

已被春風吹

已しに春風に吹かる

妾心正斷絶

妾しやうが心正しやうに断絶

君懷那得知

君おもいが懷な那なんぞ 知しることを得ん

【語釈】

子夜：子夜は元女性の名、子夜のうたった歌の曲に合わせて、後世の詩人が作ったかえ歌。陌頭：道ばた。楊柳：やなぎ。被：受け身を示す助字。妾：女性の一人称代名詞、わらわ。懐い：胸のうち。
(唐詩選)

閨怨詞

けいえん
閨怨の詞

唐

白居易

珠箔籠寒月

しゅはく
珠箔 寒月を籠め

紗窗背曉燈

しやそう ぎやうとう そむ
紗窓 曉灯に背く

夜來巾上淚

やらい きんじょう
夜來 巾上の涙

一半是春冰

しゅんぴよう
一半 是れ 春 氷

【語釈】

珠箔：珠のすだれ。籠：覆い被さる。紗窗：薄絹のカーテンをした窓。曉燈：曉の灯火。
背：背を向ける。夜來…：夜通し。巾…：ハンカチ。一半…：半分

同洛陽李少府觀永樂公主入蕃

唐 孫逖

洛陽の李少府と同じく永樂公主の蕃に入るを觀る

邊地鶯花少

へんち おうか まれ
辺地 鶯花 少なり

年來未覺新

年來たれども 未だ 新たなるを 覚えず

美人天上落

美人 天上より落つ

龍塞始應春

りゅうさい
龍塞 始めて 応に 春なるべし

【語釈】

少府…：県尉の雅称、県の警察事務を司る職。永樂公主…：公主は天子の娘。唐の宗室の外甥にあたる楊元嗣の娘を天子の養女として契丹に降嫁させたので、これに与えた称号。蕃…：契丹という意味と、野蛮人の部落という意味がある。鶯花…：うぐいすと花、春らしい景色のこと。年…：新しい年。美人…：永樂公主を指す。天上…：ここでは唐の帝室を天上にたとえている。龍塞…：辺地のとりで。竜城のこと。
(唐詩選)

怨情

怨情 えんじょう

唐

李白 りはく

美人捲珠簾

美人 珠簾を捲き しゅれん ま

深坐顰蛾眉

深く坐して 蛾眉を顰む がび ひそ

但見淚痕濕

但だ 見る 淚痕の湿うを らいいん うみおも

不知心恨誰

知らず 心 誰をか恨む

【語釈】
怨情：樂府題、天子の寵愛を失った宮女を詠う。珠簾：真珠で飾ったすだれ。簾：捲き上げる。深坐：すだれの奥深くひっそりと坐っている。蛾眉：蛾の触角のような、三日月形の美しい女性の眉。顰：眉間にしわをよせて愁いの表情をする。不知心恨誰：いったい心のなかで誰を恨んでいるのか。
(唐詩選)

春怨

春怨 しゅんえん

唐

金昌緒 きんしょうちよ

打起黃鸝兒

黄鸝兒を打起して こうおうじ だき

莫教枝上啼

枝上に 啼かしむ莫かれ しじょう な

啼時驚妾夢

啼く時 妾の夢を驚かして しじょう しょう

不得到遼西

遼西に到ることを得ざらしむ りょうせい

【語釈】
春怨：若い女性が春の気配に感じてもの思いにふけること。妾：女性の自称、わらわ。遼西：遼河の西方、遼寧省の錦州市、朝陽市等から河北省東北部から北京市へ至る地域、作者の夫は、ここに出征している。
(唐詩三百首)

無題

無題

清

朱彝尊

織女牽牛匹

織女は牽牛の匹ひつ

姮娥后羿妻

姮娥は后羿の妻こうが こうげい

神人猶薄命

神人すら猶お薄命な

嫁娶不須啼

嫁娶 啼くを 須いずかしゆ な もち

【語釈】

匹：配偶者。姮娥：常娥。『淮南子』に見える伝説上の女性、弓の名人であった夫の羿が西王母からもらった不死の薬を盗んで飲み、月に逃げて月の精せいになったという、嫦娥ともいう。后羿：妻に乱暴であったという。神人：神と称せられる人。嫁娶：嫁となり、娶る側となる。

閨怨

閨怨けいえん

唐

王昌齡おうしょうれい

閨中少婦不知愁

閨中の少婦 愁を知らずけいちゆう

春日凝妝上翠樓

春日 妝いを凝らして 翠樓に上るはるかぜ

忽見陌頭楊柳色

忽ち見る 陌頭 楊柳の色たちまち

悔教夫婿覓封侯

悔ゆらくは 夫婿をして 封侯を覓めしをもと

【語釈】

閨中：妻の寢室。少婦：若妻。翠樓：青く塗った高殿、青楼に同じ。陌頭：道ばた。楊柳：やなぎ。夫婿：夫。封侯：諸侯として封ずる。「唐詩三百首」（唐詩選）

常娥

常娥 じょうが

唐

李商隱 りしょういん

雲母屏風燭影深

雲母の屏風 燭影 深く へいふう しよくえい

長河漸落曉星沈

長河 漸く落ちて 曉星 沈む ちやうが ぜんや ぎやうせい

嫦娥應悔偷靈藥

嫦娥 応に悔ゆべし 靈藥を偷むを じょうが れいやく ぬす

碧海青天夜夜心

碧海 青天 夜々の心 へきかい

【語釈】

常娥：『淮南子』に見える伝説上の女性、弓の名人であった夫の羿が西王母からもらった不死の薬を盗んで飲み、月に逃げて月の精せいになったという、嫦娥、姮娥ともいう。雲母屏風：雲母を張った美しい屏風。燭影：ともしびの光。長河：天の川。漸落：しだいに傾いて。しだいに薄れて。曉星：夜明けの空に消え残り、まばらに見える星。明け方の星。沈：消える。靈藥：不思議な効き目のある薬。碧海：青海原。夜夜：夜ごと。

(唐詩三百首)

燕子楼

えんしろう
燕子楼

唐

はくきよい
白居易

満窓明月満簾霜

まんそう
満窓の明月 満簾の霜

被冷燈殘臥臥床

ひ
被冷やかに燈は残して 臥床を払う

燕子楼中霜月夜

えんしろう
燕子楼中 霜月の夜

秋來只爲一人長

しゅうらい
秋來 只だ一人の為に長し

【語釈】

燕子楼：徐州の長官、張氏の邸内の小楼。張氏の愛妓眇眇が、張氏の死後十余年ここに住んで独身を守った。楼の名は二夫を持たないという燕に因む。被冷：ふとんの冷ややかなこと。臥床：臥床に就く。殘：燃え尽きる。秋來：秋になって。只爲一人長：自分にとつてだけ長いのかと嘆く心、夫を失った独り身ゆえに、夜が一層長く感じられる。
(漢詩大系12)

瑤瑟怨

ようしつえん
瑤瑟怨

唐

おんてい
温庭筠

冰簟銀牀夢不成

ひょうたん
冰簟 銀床 なれども 夢 成ならず

碧天如水夜雲輕

ひてん
碧天 水の如く 夜雲 輕し

雁聲還向瀟湘去

えんせい
雁聲 還た 瀟湘 に向つて 去り

十二樓中月自明

じふにろう
十二樓中 月 自ら 明るし

【語釈】

瑤瑟怨：立派な瑟を奏でて（離れた地にいる男性を）うらめしく思う詩、閨怨詩。冰簟：涼しげな竹で編んだ莫座（ござ）。銀床：立派で美しい寢床（ねどこ）。簟床：竹のすのこ。夢不成：夢が成立しない、夢の中で愛しい男性と会いたいものと思つていたが、独り寝の侘びしさの為、寝付けずにいる、そのため、夢を見ることもできない、と謂うこと。碧天：大空。如水：夜空が川面のように澄みわたっているさま。瀟湘：瀟水と湘水、湖南省を流れ、洞庭湖に注ぐ大河。十二樓：ここでは若い女性の美しい部屋を謂う、本来の義は、神話伝説中の仙人の居住場所。崑崙の仙宮・天墉城にある十二の楼台。

子夜呉歌

子夜呉歌

唐

李白

長安一片月

長安 一片の月

萬戸擣衣聲

萬戸 衣を擣つての聲

秋風吹不盡

秋風 吹いて尽きず

總是玉關情

總是 是れ 玉關の情

何日平胡虜

何れの日か 胡虜を平らげて

良人罷遠征

良人 遠征を罷めん

【語釈】

子夜呉歌…歌曲の題名。一片月…一個の月。萬戸…多くの家。擣衣…砧で衣を叩いて柔らかくしつやを出す。玉關…玉門関。情…(玉門関の辺りに遠征している) 夫を思う妻の心。胡虜…匈奴の蔑称。良人…妻の夫への呼称。

(唐詩選)

妾薄命

妾薄命

唐

李白

漢帝重阿嬌	漢帝阿嬌を寵し
貯之黃金屋	之を黄金の屋に貯む
咳唾落九天	咳唾 九天より落ち
隨風生珠玉	風に随つて 珠玉を生ず
寵極愛還歇	寵 極つて 愛 還た歇み
妒深情却疎	ねた 深くして 情 却つて 疎なり
長門一步地	長門 一步の地
不肯暫回車	肯て 暫く 車を回らさず
雨落不上天	雨落ちて 天に上らず
水覆難再收	水 覆つて 再び 收り難し
君情與妾意	君が情と妾の意と
各自東西流	各自 東西に流る
昔日芙蓉花	昔日 芙蓉の花
今成斷腸草	今 断腸の草と成る
以色事他人	色を以て 他人に事う
能得幾時好	能く幾時 好きを得ん

【語釈】

阿嬌：漢の武帝の後の幼名。貯之黄金屋：劉徹（後の武帝）は「もし阿嬌を得る事ができたら、金の建物に住ませよう」と言った。咳唾：せきとつばき。九天：宮廷のこと。風随：かぜのふくままに。珠玉生：一言一句が珠玉の言葉になること、権力・勢力の強いさま。寵：天子の寵愛。愛還歇：別の后妃に移った。妒深：嫉妬心が深く。長門：長門宮、漢の武帝の陳皇后のために作られたものである。陳皇后は、幼帝の寵愛が衛子夫に移

ると、ひどいやきモチをやいたので、ついに長門宮に幽閉された。回車…お立ちよりの車馬、輦車。水覆難再收…覆水盆に返らず、太公望の故事。君情…天子の愛情。妾意…后妃の思い。昔日…むかし。斷腸草…散って見る影もない草。

烏夜啼

うやてい
烏夜啼

唐
李白

253

黄雲城邊烏欲棲 黄雲 城辺 烏棲まんと欲す

歸飛啞啞枝上啼 歸り飛んで 啞々として 枝上に啼く

機中織錦秦川女 機中 錦を織る 秦川の女

碧紗如煙隔窗語 碧紗 煙の如く 窓を隔てて語る

停梭悵然憶遠人 梭を停めて 悵然として 遠人を憶う

獨宿空房淚如雨 獨り 空房に宿して 涙雨の如し

【語釈】

烏夜啼：樂府題、遠くにいる夫や恋人を思う女性の嘆きを題材としたものが多い。黄雲：黄色がかった夕暮れの雲。城辺：町の周囲にある城壁のほと。欲棲：ねぐらにつこうとする。啞啞：カラスの鳴き声。機中：機を前にして。秦川女：長安一帯の平野の女、前秦の苻堅のとき、秦州刺史竇滔は西域の流砂の地に流された、彼の妻蘇蕙は、はた織り機で錦を織り、八百四十字から成る「迴文旋図の詩」（上から読んでも下から読んでも意味が通じる詩）をその中に織りこんで贈ったという故事を踏まえる。碧紗：青緑色の紗うすぎぬのカーテン。如煙：もやのように薄く透けているさま。隔窓語：窓、こしに何か独り言を言っている。悵然：悲しみ嘆くさま。遠人：遠く離れた、いとしい人。獨宿：独り寝をすること。空房：人ひと気けない寂しい部屋、夫のいない寂しい寝室。

（唐詩選）

井底引銀餅

井底に銀餅を引く

唐

白居易

井底引銀餅

せいでい ぎんぺい
井底に銀餅を引く

銀餅欲上絲繩絶

ぎんぺいのほ
銀餅 上らんと欲して 糸繩 絶ゆ

石上磨玉簪

ぎよくしん
石上に玉簪を磨く

玉簪欲成中央折

ぎよくしん
玉簪 成らんと欲して 中央より 折る

餅沈簪折知奈何

へい しん
餅 沈み 簪 折れて 知んぬ 奈何ぞ

似妾今朝與君別

しやう こんちやう
妾が 今朝 君と別るるに 似たり

憶昔在家爲女時

じよた
憶う 昔家に在りて 女 爲りし時

人言舉動有殊姿

しゆし
人は言う 挙動 殊姿 有りと

嬋娟兩鬢秋蟬翼

せんけん つばさ
嬋娟たる両鬢は 秋蟬の翼

宛轉雙蛾遠山色

えんてん そうが
宛転たる双蛾は 遠山の色

笑隨戲伴後園中

うち
笑つて 戲伴に従う 後園の中

此時與君未相識

あいし
此の時 君と 未だ 相識らず

妾弄青梅憑短牆

しやう たんしやう
妾は 青梅を弄して 短牆に憑り

君騎白馬傍垂楊

の
君は 白馬に騎りて 垂楊に傍う

牆頭馬上遙相顧

しょうとう あいかえり
牆頭 馬上遙かに 相顧み

一見知君即斷腸

はらわた
一見して知る 君が 即ち 腸を断つを

知君斷腸共君語

はらわた
君が 腸を断つを知りて 君と共に語る

君指南山松柏樹

しょうはくじゆ
君は 指す 南山の松柏樹

感君松柏化爲心

な
君が 松柏を化して 心と爲すに 感じ

間合雙鬢逐君去

あん そうかん がつ お
間に 双鬢を合して 君を逐いて 去る

到君家舍五六年

君が 家舍に到る 五六年

君家大人頻有言

君が家の大人頻りに言有り

聘則爲妻奔是妾

聘すれば則ち妻と爲り奔すれば是れ妾

不堪主祀奉蘋蘩

祀を主どりて蘋蘩を奉ずるに堪えずと

終知君家不可住

終に知る君が家住まるべからざるを

其奈出門無去處

其れ門を出でて去る処無きを奈んせん

豈無父母在高堂

豈に父母の高堂に在る無からんや

亦有親情滿故郷

亦た親情の故郷に満つる有り

潛來更不通消息

潜かに來りて更に消息を通ぜず

今日悲羞歸不得

今日悲羞歸り得ず

爲君一日恩

君が一日の恩の爲に

誤妾百年身

妾が百年の身を誤る

寄言癡小人家女

言を寄す痴小人家の女

慎勿將身輕許人

慎んで身を將つて輕しく人に許すこと勿かれ

【語釈】

井底：井戸の底。銀餅：銀のつるべ。絲繩：つるべ綱。玉簪：玉の簪。殊姿：優れた容姿。嬋娟：艶やかなさま。秋蟬翼：髪の毛を梳きて透すを蟬の羽の薄く美しいことに喩えた物。宛轉：美しく曲がれるさま。雙蛾：両まゆ。戲伴：遊び友達。牆頭：低い垣根の上。松柏：松と柏、貞節の堅い事の喩え。雙鬢：二つのワゲ。大人：良人の父をいう。聘：結納を贈り、正式の婚札をなす。奔：出奔する。主祀：祖先の祭祀の札をとる。蘋蘩：白花を開く水草とシロヨモギ、神に供える物。親情：親しき縁者。潛來更不通消息：密かに出奔したので、それ以来音信不通となっている。悲羞：悲しく恥ずかしい。癡小：愚かな少女。許人：貞節を人に任す。

太行路

太行の路

唐

白居易

太行之路能摧車

太行たいこうの路よ能よく車くるまを摧くだく

若比人心是坦途

若もし人ひとの心こころを比ひすれば是これ坦途たんとう

巫峽之水能覆舟

巫峽ふきようの水みづ能よく舟ふねを覆くつがえす

若比君心是安流

若もし君きみが心こころに比ひすれば是これ安流あんりゆう

人心好惡苦不常

人ひと心こころの好このお悪はなは苦くるだ常とこならず

好生毛羽惡生瘡

好このおめば毛羽けうよくを生なじ惡にくめば瘡きずを生なず

與君結髮未五載

君きみと結髮むす未なほだ五載ごさいならず

豈期牛女爲參商

豈あに期まをせんや牛女ぎゆうじよの參商さんしようと為ならんとは

古稱色衰相棄背

古いにしえより稱なす色いろ衰おとろうれば相棄背あいきはいすと

當時美人猶怨悔

当時たうじの美人めいじん猶なお怨悔えんかいす

何況如今鸞鏡中

何いかに況いわんや如じよこん今らんきよう鸞鏡うらひの中

妾顔未改君心改

妾しやうが顔かんばんの未なほだ改あらまざるに君きみが心こころ改あらまる

爲君熏衣裳

君きみが為ために衣裳いさうを熏くずれば、

君聞蘭麝不馨香

君きみは蘭麝らんじやを聞きいて馨香けいかうとせず

爲君盛容飾

君きみが為ために容飾ようしやくを盛もんにすれば

君看金翠無顔色

君きみは金翠きんすいを看みて顔色がんしよく無なしとす

行路難

行路難こうろなん

難重陳

かさのがた
重ねて陳べ難し

人生莫作婦人身

ななか
人生まれて婦人の身と作る莫れ

百年苦樂由他人

よ
百年の苦樂他人に由る

行路難

こうろなん
行路難

難於山

かた
山よりも難く

險於水

け
水よりも険わし、

不獨人間夫與妻

じんかん ふ さい
独り人間の夫と妻とのみならず、

近代君臣亦如此

ま かく
近代の君臣も亦た此の如し

君不見左納言右納史

み づや 左は納言 右は納史
ふげん ないし

朝承恩

あした
朝に恩を承けて

暮賜死

くれ たま
暮に死を賜う

行路難

こうろなん
行路難

不在水

水に在らず

不在山

山に在らず

只在人情反覆間

ただ 人情 反覆の間に在り

【語釈】
太行…太行山、山西省・河北省・河南省の境界をなす大山脈。摧…打ち砕く。坦途…平らな道。巫峽…長江三峡の二番目(真ん中)の峽谷。覆…くつがえす。結髪…髪を結う。成人の風、転じて成人として結婚する。牛女…牽牛星と織女星。参商…参星(オリオン)と商星(サソリ)、いっしょに現れることがないことから、人が顔を合わせることに無い喩え。棄背…そむかれてすてられる。当時…そのころ。怨悔…うらみくやむ。何況…どうしてましてや…。如今…いま。鸞鏡…鸞鳥を背にきざんだ鏡。熏…香を焚きこむ。聞…においをかぐ。蘭麝…蘭(香草)と麝香(香料)。馨香…芳香。容飾…すがたを整える飾り。金翠…金と翡翠とでできた飾り。無顔色…顔色が無い。行路難…世渡りの困難なこと。納言…中書省の長官の官名。納史…中書省の長官の官名。承恩…天子の恩愛をこうむる。

琵琶行

びわこう
琵琶行

唐

はくきよい
白居易

潯陽江頭夜送客

しんようこうとう
潯陽江頭 夜 客を送る

楓葉荻花秋瑟瑟

ふうよう てきか
楓葉 荻花 秋 瑟瑟

主人下馬客在船

主人は 馬を下り 客は 船に在り

舉酒欲飲無管絃

酒を挙げて 飲まんと欲するに 管絃無し

醉不成歡慘將別

酔いて 飲を成さず 慘として 將に別れんとす

別時茫茫江浸月

別る時 茫々として 江は月を浸す

忽聞水上琵琶聲

たちま
忽ち聞く 水上 琵琶の聲

主人忘歸客不發

主人は 歸るを忘れ 客は 発せず

尋聲暗問彈者誰

聲を尋ねて 暗に問う 弾く者は誰ぞと

琵琶聲停欲語遲

琵琶の聲は停んで 語らんと欲する遅し

移船相近邀相見

船を移して 相近づき 邀えて相見る

添酒迴燈重開宴

酒を添え 燈を廻らし 重ねて宴を開く

千呼萬喚始出來

せんこばんかん
千呼万喚 始めて 出で来たるも

猶抱琵琶半遮面

な
猶お 琵琶を抱きて 半ば面を遮る

【語釈】

潯陽江：江西省九江の北を流れる長江のこのあたりでの別名。夜送客：夜に送別の宴を張った。楓葉荻花：カエデの色づいた葉とオギの花。瑟瑟：寂しく吹く風の形容。舉酒欲飲：杯を上げて飲もうとするが。無管絃：音楽がない。茫茫：果てしなく広がるさま。江浸月：月が江の水面にかかっていた。忽：突然。暗問：ひそやかに問いかける。添酒：酒を追加する。迴燈：灯火を、もう一度明るくする。千呼萬喚：何度も呼びかけるさま。

轉軸撥絃三兩聲
未成曲調先有情
絃絃掩抑聲聲思
似訴平生不得志
低眉信手續續彈
說盡心中無限事
輕攏慢撚抹復挑
初爲霓裳後六玄
大絃嘈嘈如急雨
小絃切切如私語
嘈嘈切切錯雜彈
大珠小珠落玉盤
間關鶯語花底滑
幽咽泉流水下灘
水泉冷澀絃凝絕
凝絕不通聲暫歇
別有幽愁暗恨生
此時無聲勝有聲
銀瓶乍破水漿迸
鐵騎突出刀槍鳴
曲終收撥當心畫
四絃一聲如裂帛
東船西舫悄無言

軸を転じ 絃を撥す 三兩声
未だ 曲調を成さざるに 先ず 情有り
絃々 掩抑して 声々 思いあり
訴うるに似たり 平生 志を得ざるを
眉を低れ手に 信せて 続々と 弾き
説き尽くす 心中 限り無き事
軽く攏え 慢く撚り 抹でて 復た 挑ぐ
初めは 霓裳を為し 後には 六玄
大絃は 嘈々として 急雨の如く
小絃は 切々として 私語の如し
嘈々 切々 錯雑として 弾じ
大珠 小珠 玉盤に落つ
間関たる鶯語 花底に滑らかに
幽咽せる泉流 水灘に下る
水泉は 冷澀して 絃は 凝絶
凝絶して 通ぜず 声 暫らく歇む
別に 幽愁と 暗恨の生ずる有り
此の時 声 無きは 声 有るに 勝れり
銀瓶 乍ち破れて 水漿 迸り
鉄騎 突出して 刀槍 鳴る
曲終り 撥を收めて 心に 当てて 画す
四絃の 一声 裂帛の如し
東船 西舫 悄として 言無く

唯見江心秋月白

唯だ見る江心に秋月の白きを

【語釈】

轉軸：絃の軸をしめて、音の高さの調整をする。撥絃：絃をはらう。三兩聲：二、三回少
しだけ音を出す。絃絃：どの糸（の音）も。掩抑：おさえとどめる。聲聲思：どの（糸
の）音にも思いがこもっている。低眉：眉を低くたれて、努めて従順、柔らかな表情をする
こと。信手：おもいのままに。續續：次から次へと。説盡：言い尽くす。擻：引き締め
る。燃：指で挟む。抹：通常の演奏法で、右下にはらうようにする。なでつける。右手の
絃の操作法の一。挑：掌を返して、はねる。霓裳：霓裳羽衣の曲。線腰：琵琶の曲名、六
么の曲。大絃：琵琶の五（四）絃の中で、一番太い絃。嘈嘈：声や音のけたたましいさ
ま。小絃：琵琶の五（四）絃の中で、一番細い絃。切切：ひそひそと語るさま。珠：真
珠。玉盤：大皿。間關：鳥の和やかにさえる声。幽咽：むせび泣く、ここでは、水の流
れるかすかな音の喩え。冷澀：冷えて滞る。凝絶：とどこおり絶える。幽愁：深い思いに
沈むこと。暗恨：人知れぬ恨み。銀瓶：銀のような白い色をしたビン、白い色をした小型
のカメ。乍：突然に。水漿：みず。飲み物。迸：ほとばしる。鐵騎：ヨロイで武装した人
馬。當心畫：（琵琶の弦の）真ん中をかき鳴らす。裂帛：キヌを裂く（ような激しい音を
出す）。悄：ひっそりと。東船西舫：東の船や西の船などあちこちらにある船。悄：ひっ
そりと。

沈吟放撥插絃中

沈吟して撥を放ち絃中に挿み

整頓衣裳起斂容

衣裳を整頓して起ちて容を斂む

自言本是京城女

自ら言う本是れ京城の女

家在蝦蟆陵下住

家は蝦蟆陵下に在りて住す

十三學得琵琶成

十三 琵琶を学び得て成り

名屬教坊第一部

名は属す教坊の第一部

曲罷曾教善才伏

曲罷んで曾て善才をして伏せしめ

粧成每被秋娘妬

粧い成つては毎に秋娘に妬まる

五陵年少爭纏頭

五陵の年少争って纏頭し

一曲紅綃不知數

一曲の紅綃 数を知らず

鈿頭銀篋擊節碎

鈿頭の銀篋 節を撃ちて碎く

血色羅裙翻酒汚

血色の羅裙 酒を翻して汚る

今年歡笑復明年

今年こんねんの歡笑こんねん 復また 明年

秋月春風等閑度

秋月とうかん 春風わたく 等閑に度る

弟走從軍阿姨死

弟は走あしたつて 軍に從あい 阿姨は死す

暮去朝來顏色故

暮くれ去り 朝あした來たつて 顔かほ色 故ふるびぬ

門前冷落鞍馬稀

門前れいらく 冷落して 鞍馬あんば 稀まれなり

老大嫁作商人婦

老大ろうだい 嫁かして 商人つまの婦となる

商人重利輕別離

商人は 利を重おもんじて 別離を輕かろんず

前月浮梁買茶去

前月ふりやう 浮梁に 茶をかいりに去る

去來江口守空船

江口かうこうに 去來きやうらいして 空船くうせんを守る

邊船明月江水寒

船を邊めぐる 明月 江水寒し

夜深忽夢少年事

夜深ふかけて 忽たちまち 夢ゆめむ 少年の事

夢啼粧淚紅闌干

夢に啼なげば 粧淚しやうなみは 紅くくして 闌干たり

【語釈】

沈吟：微かに口ずさむ、思いに沈む。起：たつ。斂容：衣裳を整える。自言：自分から言
い出す。本是：もともと。京城：帝都。蝦蟆陵：長安中心地の東南数キロの地点、曲江に
ある。學得：モノにする。成就する。身につける。成：成就する。名屬：名は：に属して
いる。教坊：歌舞を教えるところ。第一部：トップグループ。罷：終わる。曾：いままで
に：したことがある。善才：唐代の琵琶の名手、転じて琵琶の名人。伏：感服する。妝成
：美しく装いしあげる。每被：（…する）たびごとに。秋娘：杜秋娘のこと、名妓の名。
妬：ねたむ。五陵少年：長安郊外豊かな地域に住む貴公子。纏頭：心付け。綰：きぎぬ。
ここでは心付けのこと。不知數：多くて数が分からない。鈿頭雲篋：螺鈿の飾りのあるコ
ウガイ。擊節：拍子を打つ。リズムをとる。碎：くだける。血色：殷色。羅裙：うすぎぬ
のスカート。翻酒：酒をこぼす。秋月春風：秋の月に春の風といった、各季節の風物を眺
めている内に年月は過ぎ去ったことをいう。等閑：物事をいいかげんにすること。度：す
ごす、すぎる。阿姨：おば、ここでは、肉親の叔母ではなくて、琵琶を弾く妓女たちのや
りて。暮去朝來：日々が過ぎてゆく。顔色：容色。故：ふるびてしまう。冷落：おちぶれ
る。鞍馬：馬に乗った来客、相應の身分や財産のある男性の客になる。稀：まれになっ
た。老大：としが長ける。浮梁：江西省景德鎮の東北部、茶の名産地。去來：行つてよ
り。行つた後。「來」は、添えている辞。江口：溢江のほとり、水が長江に注ぎ込む河口
部分。守空船：独り寝を維持している。邊船：女性の住んでいる船をめぐって。江水寒：
川の水は寒々としている。夜深：夜がふける。忽夢：たちまち夢をみる。少年事
：若い時の事がら。夢啼：夢の中で声に出して涙を流して啼けば。妝淚：化粧した顔を流

れる涙。紅闌干…紅く（頬紅の色に染まった）涙が次々に出てくる。闌干…涙が多く出るさま。

我聞琵琶已歎息

我は 琵琶を聞きて 已に歎息し

又聞此語重唧唧

又 此語を聞きて 重ねて唧々たり

同是天涯淪落人

同じく 是れ 天涯 淪落の人

相逢何必曾相識

相逢う 何ぞ必ずしも曾ての相識なるべき

我從去年辭帝京

我 去年 帝京を辞してより

謫居臥病潯陽城

謫居して 病に臥す 潯陽城

潯陽地僻無音樂

潯陽は 地 僻にして 音樂 無く

終歲不聞絲竹聲

終歲 聞かず 糸竹の聲

住近湓江地低濕

住して 湓江に近くして 地は低濕

黃蘆苦竹繞宅生

黃蘆 苦竹 宅を繞りて生ず

其間旦暮聞何物

其の間 旦暮に 何物をか聞く

杜鵑啼血猿哀鳴

杜鵑は 血に啼き 猿は哀しく鳴く

春江花朝秋月夜

春江の花朝 秋月の夜

往往取酒還獨傾

往々 酒を取って 還た独り傾く

豈無山歌與村笛

豈に 山歌と村笛と 無からんや

嘔啞嘲哢難爲聽

嘔啞 嘲哢 聴くを為し難し

今夜聞君琵琶語

今夜 君が琵琶の語を聞きて

如聽仙樂耳暫明

仙樂を聴くが如く 耳暫らく明らかなり

莫辭更坐彈一曲

辞する莫かれ 更に坐して一曲を弾ずるを

爲君翻作琵琶行

君が為に 翻して 琵琶行を作らん

感我此言良久立

我が此の言に感じて 良や久しく立ち

却坐促絃絃轉急

坐かえに却り絃うながを促して絃うた轉た急なり

淒淒不似向前聲

淒せいせい々として似せず向前きょうぜんの聲

滿座重聞皆掩泣

滿座重なみだねて聞おほきて皆泣を掩う

座中泣下誰最多

座中泣下たれること誰か最も多き

江州司馬青衫濕

江州こうしゅうの司馬せいさん青衫うめお濕う

【語釈】

唧唧：嘆息の聲。天涯淪落：落ちぶれ果てて地の果てを流浪すること。相逢：偶然に行きあうこと。何必：必ずしも…するに及ばぬ。曾：以前の。相識：知り合い。帝京：みやこ。江：江西省を流れる川の名。黃蘆：黄色く枯れたアシ。地僻：辺鄙なところ。終歲：一年中。旦暮：朝、明けてから、暮れるまで。杜鵑：ホトトギス。啼血：血を吐いて鳴く。春江花朝秋月夜：春の川の流れに、花咲く朝、そして秋月の夜と、一年中いつも。往往：しばしば。山歌：山の歌。村笛：鄙びた笛等の音楽。嘔啞：擬声語、ギャーギャー、キーキー。暫明：耳がしばらくすっきりとする。辭：辞去する。

翻作：音楽を詩に翻案すること。良：久しくして。卻坐：後に戻って座る。促絃：弦をしめる。轉：たちまち。淒淒：すさまじい。向前：以前と。泣：声を出さないでなくこと。泣下：落涙する。江州司馬：白居易自身。青衫：一重の青い着物、身分の低い人が着る。

<http://www5a.biglobe.ne.jp/~shnici/r30.htm>

古別離

古別離 こべつり

南宋

陸游 りくゆう

孤城窮巷秋寂寂

孤城の窮巷秋寂々 きゆうけいしゆう せきせきせき

美人停梭夜嘆息

美人梭を停めて夜嘆息す び へいめて やたんそくす

空園露濕荊棘枝

空園露は湿う荊棘の枝 くうえん れうあつめく けいげきのみぎ

荒蹊月照狐狸迹

荒蹊月は照らす狐狸の迹 かうけい げつあつめく こりあと

憶君去時兒在腹

憶う君が去りし時兒腹に在り おぼ くんがさりしとき じぶくにあり

走如黃犢翁未識

走ること黃犢の如きも翁は未だ識らず しゆく ぎゆうの ごとくも おんは まだしからず

紫姑吉語元無據

紫姑の吉語元拠る無し しこ きちご 元よ 拠る無し

况憑瓦兆占歸日

况や瓦兆に憑つて歸日を占うをや いわん がちよう よ よつて けふを 占うをや

嫁来不省出門前

嫁し来つてより省て門前に出ず よめ 来てより かつて もんぜんに出ず

魂夢何因識酒泉

魂夢何に因つてか酒泉を識らん こんむ なによつてか けうせんを しらん

粉綿磨鏡不忍照

粉綿鏡を磨けども照らすに忍びず ふめん かがみを みがけども てるすに しのびず

女子盛時無十年

女子の盛時は十年も無し むすめ の せいじは じゅうねんも 無し

【語釈】

古別離：樂府題、夫と離ればなれになった女性の嘆きを詠う。寂寂：もの寂しいさま。梭：機織りの具、ひ。荊棘：棘などの灌木。荒蹊：荒れた小路。狐狸迹：家が荒れて、狐や狸のすみかとなったもの。黃犢：子牛。翁：夫のこと、子の立場からこう呼んだ。紫姑：農村で信仰されている神、農作物の吉凶を占う。瓦兆：瓦を投げて吉凶を占うもの。省：曾と同じ。魂夢：夢は魂が抜け出て歩くものと信じられた。酒泉：甘肅省の地名。粉綿：磨き粉を綿に付けたもの。

(漢詩大系19)

張節婦

張節婦 ちようせつふ

明

高啓 こうけい

誰言妾有夫

誰か言う 妾に夫有りたれ しよつ ふうと

中路棄妾身先殂

中路 妾を棄てて身先ず殂ちゆうろ しよつ す そ

誰言妾無子

誰か言う 妾に子無したれ しよつ じと

側室生兒與伏似

側室 兒を生みて夫と似たり

兒讀書

兒は書を読み

妾辟纊

妾は辟纊へきろす

空房夜夜聞啼鳥

空房 夜々啼鳥を聞きていしやう

兒能成名妾不嫁

兒は能く名を成し妾は嫁せず

良人瞑目黃泉下

良人 瞑目せよ黃泉めいもく こうせん しよの下

【語釈】

殂…死ぬ。辟纊…麻を練る。空房…夫のいない部屋。良人…夫。瞑目…安らかに死ぬ。黄泉…あの世、墓地の下。

(漢詩大系19)

題美人對鏡圖

美人鏡に對す図に題す

明

高啓

曉院鹿盧鳴露井

曉院ぎょういんの鹿盧ろくろ露井ろせいに鳴る

玉人夢斷梨雲冷

玉人ぎよくしん夢斷えて梨雲りうん冷ややかなり

起開妝閤笑窺奩

起つてた妝閤しょうかくを開きて笑つてれん奩うかがを窺う

月裏分明見娥影

月裏げつり分明がえいに娥影がえいを見る

自對猶憐況主傢

自みずから對するも猶なお憐むいわん況んや主家をや

春風一面斷腸花

春風一面斷腸の花

何由鑄入青銅內

何よに由りてか鑄いて青銅の内に入れ

不遣鞦韆換娥翠

秋霜がすいをして娥翠がすいに換えしめざらん

【語釈】

鹿盧：井戸の車。露井：屋根のない井戸。妝閤：化粧部屋の戸。奩：鏡箱。月裏：円形の月を鏡に喻えて言う。分明：はっきりと。娥影：鏡に映る美人を月中の嫦娥に比して言う。主家：宮人が天子を称し、妻妾が夫を称する語。青銅内：鏡の中。秋霜：白髪のこと。

妬花歌

花を妬む歌

明

唐寅

昨夜海棠初帶雨

昨夜海棠初めて雨を帯ぶ

数朶輕影媚欲語

数朶の輕影媚びて語らんと欲す

佳人曉起出蘭房

佳人曉に起きて蘭房を出で

折來對鏡比紅妝

折り来りて鏡に對し紅妝を比ぶ

問郎花好妾顏好

郎に問う花好きか妾が顏好きか

郎道不如花窈窕

郎道う花の窈窕なるに如かずと

佳人聞語發嬌嗔

佳人語を聴きて嬌嗔を發す

不信死花勝活人

信ぜず死花の活人に勝るを

把花揉碎擲郎前

花を把りて揉碎して郎の前に擲つ

請郎今夜抱花眠

請う郎今夜花を抱きて眠れ

【語釈】

數朶…数枝。蘭房…蘭の香りのする婦人の部屋。紅妝…美人の美しさ。窈窕…奥ゆかしく美しいさま。嬌嗔…なまめかしい美人の怒り。揉碎…もみくだく。

◆ 宴会類

勸酒

酒を勧む

唐

于武陵

勸君金屈卮

君に勧む 金屈卮

滿酌不須辭

滿酌 辞するを須いず

花發多風雨

花発けば 風雨多し

人生足別離

人生 別離足る

【語釈】

金屈卮：黄金色をした取っ手が折れ曲がった大杯。滿酌：なみなみとつがれた酒。發：花が開く。

(唐詩選)

書堂飲既夜復邀李尚書下馬月下賦絕句

唐 杜甫

書堂の飲いん 既に夜にして 復また 李尚書を邀えて 馬より下りて 月下に絶句
を賦す

269

湖水林風相與清

湖水 林風 相与あいともに清し

殘尊下馬復同傾

殘尊ざんそん 馬より下りて 復また 同まじく傾く

久拌野鶴如雙鬢

久さしく 野鶴りんけいの如さくなる 双鬢そうびんを拌はんす

遮莫鄰雞下五更

遮莫さもあらばあれ 鄰雞りんけいの五更くだを下るを

【語釈】

書堂…書齋。李尚書…李之芳、尚書は尚書省の六部の長官。殘尊…残つた酒。拌…放つておく。野鶴如…如野鶴の倒置法。双鬢…左右の鬢の毛。遮莫…どうでもよい、ままよ。隣雞…隣りの鶏。五更…今の午前四時。夜明けのとき。鄰雞…隣の鶏（が知らせる）。下…過ぎ去る。

（唐詩選）

酒泉太守席上醉後作

酒泉の太守 席上 醉後の作

唐

岑參

酒泉太守能劒舞

酒泉の太守能く劒舞す

高堂置酒夜擊鼓

高堂に置酒して夜鼓を撃つ

胡笳一曲斷人腸

胡笳一曲 人の腸を断つ

座上相看淚如雨

座上 相い見て 涙雨の如し

【語釈】

酒泉：郡名、今の甘肅省酒泉市。太守：郡の長官。席上：酒宴の席で。醉後：酒に酔ったあと。能：上手に。高堂：大広間。置酒：酒宴を開くこと。胡笳：北方民族の胡人が吹く葦あしの葉の笛。坐客：一座の客人たち。相看：互いの顔を見合わせ

て。
(唐詩選)

宴城東莊

城東の莊に宴す

唐

崔敏童

一年始有 一年春

一年始めて 一年の春有り

百歲曾無 百歲人

百歲会て 百歲の人無し

能向花前幾回醉

能く花前に向いて 幾回か酔わん

十千沽酒莫辭貧

十千酒を沽って 貧を辞する莫れ

【語釈】

一年：一年経つ。始：やっと。百歲：前のは百年、後のは百歲。曾無：今までに無い。十千：一万錢、大金を言う。沽：買う。辞：避ける。
(唐詩選)

宴城東莊

城東の莊に宴す

唐

崔惠童 さいけいどう

一月人生笑幾回

一月 いちげつ 人生 笑うこと 幾回ぞ

相逢相值且銜杯

相 あい逢 あい 相 あい 値 あわば 且 しかく 杯 はくを 銜 くまん

眼看春色如流水

眼 めに 看 みる 春 しゆ色 しき 流 り水 すいの 如 ごときを

今日殘花昨日開

今 こん日 にちの 殘 ざん花 か 昨 さく日 じつ開 けり

【語釈】

城東莊：長安の東郊にある庵の玉山草堂。一月：一ヶ月で。人生：人が生きていて。相逢：であう。逢：であう。値：ぴったりであう。且：しばしの間。銜杯：酒を飲む意。春色：春景色。眼看：みるみるうちに。
(唐詩選)

與鄭時敏登樓把酒書一絶

南宋

王十朋 おうじゆうほう

鄭時敏と樓に登り 酒を把つて一絶を書す

登樓能賦非王粲

樓に登って 能く賦す 王粲に非ず

沽酒忘形有鄭虔

酒を沽つて 形を忘るる 鄭虔有り

千里相從文字飲

千里 相從う 文字の飲

不辭費盡杖頭錢

辞せず 杖頭の錢を 費やし 尽くすを

【語釈】

王粲：後漢の文人「登樓の賦」は文選にある。沽酒：酒を買う、買った酒。忘形：己の形を忘れる、物我の隔たりのないこと。鄭虔：唐の人、画書三絶と言われた。文字飲：詩文などを作り、又、評しながら酒を飲む。杖頭錢：晋の阮修が常に錢百文を杖の先にかけて、酒店に行つて飲んだという故事。

醉後口占

すいごこうせん
醉後口占

清

ちやうもんとう
張問陶

錦衣玉帶雪中眠

錦衣玉帶 雪中に眠る

醉後詩魂欲上天

醉後 詩魂 天に上らんと欲す

十二萬年無此樂

十二萬年 此の樂しみ無し

大呼前輩李青蓮

大呼す 前輩 李青蓮

【語釈】

口占…文字に書かず即興で口ずさんだ詩。錦衣玉帶…礼服。十二萬年…極めて長い間。李青蓮…青蓮居士、即ち李白。

江孟卿招飲淨香園

かうもつけい
江孟卿 浄香園に招飲す

清

ごしやくき
吳錫麒

樹自清蒼水自流

樹は 自ずから 清蒼 水は 自ずから 流る

湘簾無復上銀鈎

湘簾 復た 銀鈎に上す 無し

風標公子來何意

風標 公子は 来る 何の意ぞ

添寫白荷花畔秋

添え写す 白荷 花畔の秋

【語釈】

湘簾…竹（湘竹）の簾。風標公子…白鷺の異名。鈎…先の曲がった物を引っかける器具。白荷…白い蓮の花。花畔…花の咲く池畔。

夜宴左氏莊

夜左氏の莊に宴す

唐

杜
甫

273

風林織月落

風林に織月落ち

衣露靜琴張

いろ 静琴張る

暗水流花徑

暗水 花徑に流れ

春星帶草堂

春星 草堂を帯ぶ

檢書燒燭短

書を檢ずれば燭を焼きて短く

看劔引杯長

劔を看れば杯を引いて長し

詩罷聞吳詠

詩罷んで 吳詠を聞き

扁舟意不忘

扁舟意 忘れず

【語釈】

風林：風のわたる林。織月：細くなった月。衣露：衣上におりた露。淨琴：穢れのない綺麗な琴の調。張：琴の弦をはる。暗水：くらがりの水。花徑：花のさいている小徑。帶：とりかこむこと。檢書：書物を調べる。引：口もとへひきよせること。長：時間が長いこと。詩罷：席上で詩をつくりおわること。吳詠：江南の音調で詩をうたうこと。扁舟：小さくひらべたい舟。

(杜甫全詩訳注)

客至

客至る

唐

杜甫

舍南舍北皆春水

舍南^{しやなん}舍北^{しやほく}皆^し春水^{ゆんすい}

但見群鷗日日來

但^ただ見^みる群鷗^{ぐんおう}の日々に來^{きた}るを

花徑不曾緣客掃

花徑^{かけい}曾^{かつ}て客^{かく}に緣^よつて掃^{はら}わす

蓬門今始為君開

蓬門^{ほうもん}始^{はじ}めて君^{きみ}が為^{ため}に開^{ひら}く

盤飧市遠無兼味

盤飧^{ばんそん}市遠^{いちゑん}くして兼味^{けんみ}無^なく

樽酒家貧只舊醅

樽酒^{そんしゅ}家貧^{いえまず}しくして只^{ただ}旧醅^{きゅうはい}あるのみ

肯與鄰翁相對飲

肯^あえて鄰翁^{りんおう}と相對^{あいたい}して飲^のまん

隔籬呼取盡餘杯

籬^{まがき}を隔^{へた}てて呼^よび取^とりて余杯^{よはい}を尽^{つく}くさしめん

【語釈】

客至：客が来る。但見：ただ：だけが見える。群鷗：群をすかもめ。花徑：花の散つてい
る小道。掃：はく。客：俗世間の人物。蓬門：貧し家の蓬で屋根を葺いた門。君：作者の
母方の親戚である崔明府（白水県尉・崔のこと、「明府」：県令の尊称。）

（漢詩大系 9）

友人會宿

友人會宿す

唐

李白^{りはく}

滌蕩千古愁

滌蕩^{ていとう}す 千古の愁

留連百壺飲

留連^{りゅうれん}す 百壺の飲^{いん}

良宵宜清談

良宵^{りょうせう} 宜^{よろ}しく 清談^{せいだん}す べし

皓月未能寢

皓月^{こうげつ} 未だ 寢^ねる 能^{あた}わず

醉來臥空山

酔^よい 來^{きた}れば 空山^{くうざん}に 臥^がす

天地即衾枕

天地^{てんち} 即^{すなは}ち 衾枕^{きんちん}

【語釈】

滌蕩：洗い除く。留連：さまよって去るに忍びない様子。宜：「宜しくしべし」と読み、「くする方が妥当である」「くするのが良い」と訳す。衾枕：寝具。

(漢詩大系8)

把酒問月

酒を把りて月に問う

唐

李白

青天有月來幾時

青天 月有りて 来るは幾時ぞ

我今停杯一問之

我今 杯を停めて 一たび之に問わん

人攀明月不可得

人 明月を攀しんとするも 得べからず

月行却與人相隨

月は行きて却つて人と相い隨う

皎如飛鏡臨丹闕

皎として 飛鏡の丹闕に臨むが如し

綠烟滅盡清輝發

綠煙 滅し尽きて 清輝発し

但見宵從海上來

但だ見る 宵に海上從り來たるを

寧知曉向雲間沒

寧ぞ知らん 曉に雲間に向いて没するを

白兔擣藥秋復春

白兔は藥を搗く 秋復た春

嫦娥孤棲與誰鄰

嫦娥は 孤り棲みて 誰と隣せん

今人不見古時月

今人は見ず 古時の月

今月曾經照古人

今月は曾經 古人を照らせり

古人今人若流水

古人 今人 流水の若く

共看明月皆如此

共に明月を看ること 皆此の如し

唯願當歌對酒時

唯だ願がう 歌に當りて酒に對する時

月光長照金樽裏月

月光 長えに 金樽の裏を照さんことを

【語釈】

有月：月が現れて。來……から。攀……よじのぼる。卻……反対に。隨……ついていく。くつついていく。皎：月ら明るい様。飛鏡：大空を飛ぶ鏡で、月の形容として使われている。丹闕：赤く色を塗った仙人の住む宮殿の門。綠煙：緑色の靄。清輝：清らかな光。白兔：白ウサギ、月に住むという。・搗藥：不老不死の薬をつく。秋復春：ずうつと。嫦娥……

「嫦娥」ともいう、西王母から与えた不死の仙薬を盗んで飲み、月に逃げた。曾經…か
つて。長…とこしえに。金樽…黄金の酒器。

(漢詩大系 8)

湖上對酒作

湖上酒に對して作る

唐

張謂

夜坐不厭湖上月

夜坐厭わず湖上の月

晝行不厭湖上山

昼行厭わず湖上の山

眼前一樽又長滿

眼前の一樽又長えに滿つ

心中萬事如等閑

心中万事等閑の如し

主人有黍萬餘石

主人黍有り万余石

濁醪數斗應不惜

濁醪數斗應に惜しまざるべし

即今相對不盡歡

即今相對して歡を尽くさずんば

別後相思復何益

別後相思も復た何の益あらん

茱萸灣頭歸路賒

茱萸灣頭歸路賒かなり

願君且宿黃公家

願わくば君且らく宿せよ黃公が家

風光若此人不醉

風光此の若くして人酔わずんば

參差辜負東園花

參差として東園の花に辜負せん

【語釈】

湖中：湖に舟を浮かべて。夜坐：夜は坐つたままで。不厭：飽きない。湖上月：湖の水面にかかる月。昼行：昼は歩き回つて。眼前一樽：目の前の酒樽。又長滿：いつも酒がいっぱいに入っている。等閑：気に留めないこと、意に介しないこと。黍：きび、酒を作る原料。万余石：一万石余り。濁醪：濁り酒、どぶろく。応不惜：何の惜しまれるはずがある。応：「まさにすべし」と読み、「きつとである」と訳す、強い推量の意を示す。即今：ただいま、現在。相對：向かい合つて。不盡歡：思う存分喜びを尽くさなかつた。別後：別れた後。相思：互いに懐かしがる。復何益：何の役に立つものか。茱萸灣：江蘇省揚州市の東北にあった灣という説、あるいは長沙府益陽県にあった洞庭湖の一つの灣という説とがある。灣頭：灣の出入り口。賒：はる

かに遠い。黄公家：竹林の七賢の一人、晋の王戎等が黄公の酒場で痛飲したことを懐かしんだという『世説新語』に見える故事に基づく、ここでは主人の家を指す。風光：よい景色。参差：食い違って、ここでは咲きほこっている東園の花の心意気と食い違ふこと。東園花：東の庭に咲いている桃や李の花。辜負：相手の気持ちにそむく。
(唐詩選)

飲中八仙歌

いんちゅうはっせんか
飲中八仙歌

唐

杜
甫

280

知章騎馬似乘船
眼花落井水底眠
汝陽三斗始朝天
道逢麴車口流涎
恨不移封向酒泉
左相日興費萬錢
飲如長鯨吸百川
銜杯樂聖稱避賢
宗之瀟洒美少年
舉觴白眼望青天
皎如玉樹臨風前
蘇晉長齋繡佛前
醉中往往愛逃禪
李白一斗詩百篇
長安市上酒家眠
天子呼來不上船
自稱臣是酒中仙
張旭三杯草聖傳
脫帽露頂王公前
揮毫落紙如雲煙
焦遂五斗方卓然

ちしやう
知章が馬に騎るは船に乗るに似たり
がなか
眼花 井に落ちて 水底に眠る
じよやう
汝陽は三斗にして始めて天に朝し
きくしゃ あ
道に 麴車に逢いて 口に 涎を流す
うら
恨むらくは 封を移して酒泉に向わざるを
さしやう ごとくまう ばんせん
左相の日興 万錢を費す
ちやうけい ひやくせん
飲むことは 長鯨の百川を吸うが如し
ひやく
杯を銜んで 聖を樂しみ 賢を避くと称す
そつし しやうしや
宗之は 瀟洒たる 美少年
さかすき あ
觴を挙げて 白眼 青天を望む
きやう
皎として 玉樹の 風前に臨むが如し
そしん ちやうせい しゅうがう
蘇晉は 長齋す 繡仏の前
すいちゆう おつおつ とうぜん
醉中 往々 逃禪を愛す
ちやうきやく
李白 一斗詩 百篇
長安市上 酒家に眠る
天子 呼び来きたれども 船に上らず
のほ
自ら称す 臣は 是れ 酒中の仙と
ちやうきやく
張旭 三杯 草聖傳う
ぼう あいわ
帽を脱し 頂を露す 王公の前
こうみ ぶん
毫を揮い 紙に落とせば 雲煙の如し
しやうすい まさ たくぜん
焦遂は五斗 方に卓然

高談雄辨驚四筵

高談こうたん 雄弁しえん 四筵を驚かす

【語釈】

飲中八仙歌：八人の酒豪の歌、賀知章・汝陽王李璿・李適之・崔宗之・蘇晋・李白・張旭・焦遂それぞれの酔態を詠じている。知章：賀知章、盛唐の詩人。眼花：目がちらついてよく見えない。汝陽：汝陽郡王に封ぜられた李璿のこと。三斗：三斗の酒のこと。唐代の一斗は約のリットル。麴車：酒の原料である麴を積んだ車。移封：領土を移しかえること。酒泉：郡名。今の甘肅省酒泉県、酒の味のする泉が湧いたという。左相：左丞相李適。日興：日々の楽しみ。または、日々の遊興。万錢：大金。長鯨：大きな鯨。百川：多くの川。銜杯：酒を飲むこと。樂聖・避賢：聖は清酒、賢は濁り酒。

(唐詩選)

月夜與客飲杏花下

月夜客と杏花の下に飲す

宋

蘇軾

杏花飛簾散餘春

杏花簾に飛んで 余春を散す

明月入戸尋幽人

明月戸に入つて 幽人を尋ぬ

褰衣歩月踏花影

衣を褰げ 月に歩して 花影を踏めば

炯如流水涵青蘋

炯として流水の青蘋を涵すが如し

花間置酒清香發

花間に置酒すれば 清香発す

爭挽長條落香雪

争でか長條を挽きて 香雪を落さん

山城薄酒不堪飲

山城の薄酒 飲むに堪へず

勸君且吸盃中月

君に勸む 且く吸え 盃中の月

洞簫聲斷月明中

洞簫 声は断ゆ 月明の中

惟憂月落酒盃空

惟だ憂う 月落ちて 酒盃の空しからんことを

明朝卷地春風惡

明朝 地を巻いて 春風悪しくば

但見綠葉棲殘紅

但だ見ん 緑葉の殘紅を棲ましむるを

【語釈】

余春：晩春。幽人：世を避けて静かに暮らしている人。褰：裾を持ち上げる。炯：明らか。青蘋：青々とした水草。置酒：酒宴を開く。争：どうしてしようか。長條：長い枝。

香雪：白い花の形容。ここでは杏の花をさす。山城：山にある町、いなかの町。洞簫：尺八に似た竹製の吹奏楽器。捲地：大地の砂塵をまきあげる強い風の吹くさま。殘紅：散り残っている赤い花

(漢詩大系 17)

◆ 豪侠類

283

長安道

長安道

唐

儲光羲
ちよこうぎ

鳴鞭過酒肆

鞭を鳴らして酒肆に過ぎり
しゆしよ

袷服遊倡門

袷服して倡門に遊ぶ
げんみくしやうもん

百萬一時盡

百萬一時に尽く
ひやくまんいつじゆん

含情無片言

情を含みて片言無し
へんげん

【語釈】

長安道…樂府題、横吹曲辭、「長安の繁華街の道辺」の意。酒肆…酒場。袷服…晴れ着を著る。倡門…妓楼。百萬…龐大な金額。含情…感情を胸におさめて表さない。片言…一言。
(唐詩選)

洛陽道

洛陽道

唐

儲光羲 ちよこうぎ

大道直如髮

大道 なほ 直くして 髮の如く

春日佳氣多

春日 かき 佳氣 多し

五陵貴公子

五陵 ごりょう の貴公子

雙雙鳴玉珂

雙々 そうそう 玉珂 ぎよくか を鳴らす

【語釈】

洛陽道：樂府題、横吹曲辭、「洛陽の繁華街の道辺」の意。大道：洛陽の都大路。直如髮：髪のようにまっすぐだ。春日：のどかな春の日。佳氣：うっすらかな気。五陵：長安北郊の地名、この付近には富豪や貴族の別荘があり、遊樂の地でもあったので遊俠の徒が多く集まっていた。雙雙：二人ずつ馬を並べて。玉珂：馬の轡くつわにつける玉の飾り。

(唐詩選)

逢俠者

俠者に逢う

唐

錢起 せんき

燕趙悲歌士

燕趙 えんちよう 悲歌 ひか の士

相逢劇孟家

相逢 げんごう 劇孟 げきまつ が家

寸心言不盡

寸心 すんしん 言 い 尽 つく さず

前路日將斜

前路 ぜんろ 日 ひ 將 まさ に斜 な らんとす

【語釈】

俠者：… 俠客。燕趙：… 燕は今の河北省、趙は今の山西省の地、感慨悲歌の士が多いとされる。悲歌：… 悲歌慷慨。劇孟：… 漢の洛陽の俠者（史記の「遊俠伝」に記載される）、ここでは劇孟の「とき大親分。寸心：… 心。前路：… 行く手。

(唐詩選)

少年行

少年行 しょうねんこう

唐 李白 たうりはく

五陵年少金市東

五陵の年少金市の東 ごりやうねんしょうきんし

銀鞍白馬度春風

銀鞍白馬春風を度る ぎんあんはくばしゅんふう

落花踏盡遊何處

落花を踏み尽くして何れの処にか遊ぶ らつか

笑入胡姬酒肆中

笑って入る胡姫の酒肆の中 こきしゅし

【語釈】

少年行：楽府題、いなせな若者や壮士を詠う。五陵：長安の北にある地名、富裕階層の住宅地。年少：わかもの。金市：長安の西の市場。銀鞍：銀色に耀くくら。度：わたる。胡姬：西域出身の美人女性。酒肆：酒場。
(唐詩選)

少年行

少年行 しょうねんこう

唐 王维 たうい

出身仕漢羽林郎

出身して漢に仕う羽林郎 うちんろう

初随驃騎戰漁陽

初めて驃騎に随って漁陽に戦う び

孰知不向邊庭苦

孰か知らん辺庭に向かわざるの苦しみを たれ

縦死猶聞俠骨香

縦い死すとも猶お聞かん俠骨の香 たと

【語釈】

出身：仕官する。羽林郎：皇帝を守護する近衛兵、両家の子を当てた。驃騎：驃騎將軍。漁陽：現在の北京近郊、漢代には匈奴など異民族との戦いの最前線であった。俠骨香：遊侠の気高い気骨。
(新釈漢文大系 詩人編)

少年行

しょうねんこう
少年行

唐
王維

新豊美酒斗十千

しんほう
新豊の美酒 斗十千

咸陽遊俠多少年

かんよう
咸陽の遊俠 少年多し

相逢意氣爲君飲

あい逢いて意氣 君が為に飲む

繫馬高樓垂柳邊

馬を繫ぐ高樓 垂柳の辺

【語釈】

少年行：樂府題。いなせな若者や壯士を詠う。新豊：長安の東、華清宮のあるところ。斗十千：一斗（今の一升）が一万錢もする高級酒。咸陽：渭城。遊俠：勇気があり男気にとむ人。垂柳：しだれ柳。
（新釈漢文大系 詩人編 3）

絶句

絶句

宋

きてんこく
黄天谷（黄春谷）

半篙春水一蓑烟

はんこう
半竿の春水 一蓑の煙

抱月懷中枕斗眠

月を懷中に抱きて 斗に枕して眠る

説與時人休問我

時人に説与す 我に問うを休よ

英雄回首即神仙

英雄 首を回せば 即ち神仙

【語釈】

半篙：棹半分ほどのふかさ。説與：説き明かす。烟：もや、霞。

公子行

公子行
こうしこう

唐

劉廷之
りゅうていし

天津橋下陽春水

天津橋下 陽春の水

天津橋上繁華子

天津橋上 華繁の子

馬聲迴合青雲外

馬聲迴合す 青雲の外

人影動搖綠波裏

人影動搖す 緑波の裏

綠波蕩漾玉爲砂

緑波 蕩漾して 玉を砂と爲し

青雲離披錦作霞

青雲 離披して 霞を錦と作す

可憐楊柳傷心樹

憐む可し 楊柳 傷心の樹

可憐桃李斷腸花

憐む可し 桃李 断腸の花

此日遨遊邀美女

此の日 遨遊 美女を邀え

此時歌舞入娼家

此の時 歌舞 娼家に入る

娼家美女鬱金香

娼家の美女 鬱金香

飛來飛去公子傍

飛び来たり 飛び去る 公子の傍

的的珠簾白日映

的々たる 珠簾 白日に映じ

娥娥玉顏紅粉妝

娥娥たる 玉顏 紅粉の妝

花際裴回雙蛺蝶

花際に 裴回す 双蛺蝶

池邊顧歩兩鴛鴦

池邊を 顧歩す 兩鴛鴦

傾國傾城漢武帝

傾國傾城 漢武帝

爲雲爲雨楚襄王

爲雲爲雨 楚襄王

古來容光人所羨

古來 容光は 人の羨む所

況復今日遙相見

況んや復た 今日遙かに 相見るをや。

願作輕羅著細腰

願わくは 輕羅と作なりて 細腰に著き

願爲明鏡分嬌面

願わくは明鏡と爲りて嬌面を分かつたん

與君相向轉相親

君と相向いて転た相親しみ

與君雙棲共一身

君と双棲して共に一身

願作貞松千歲古

願わくは貞松の千歳に古きと作らん

誰論芳槿一朝新

誰か論ぜん芳槿の一朝に新たなるを。

百年同謝西山日

百年同じく謝す西山の日

千秋萬古北邙塵

千秋万古北邙の塵

【語釈】

公子行：貴公子の歌。樂府題。天津橋：洛陽城の西南にあつて、洛水に架けられた橋。陽春：うららかな春の日。繁華子：華やかな生活をしている貴公子。廻合：ぐるぐるめぐりながら一つになる。青雲外：青空の彼方。綠波裏：緑の波間にうつつて。蕩漾：水が揺れ動くさま。玉爲砂：川底の砂は玉を敷いたようである。青雲：青空。離披：四方に散り広がる。錦作霞：霞が錦のように照り映えている。可憐：深い感動を表す言葉。ああ。楊柳：柳の総称。傷心：心を傷ましめる。桃李：桃とスモモ。斷腸：非常に悲しいさま、非常に悩ましいさま。遨遊：気ままに遊ぶこと。美女：娼妓を指す。邀：呼び迎える。招く。歌舞：歌舞に興じるために。入娼家：遊女の家へくり込む。鬱金香：西域産の鬱金香から採った香料。的的：明るくきらきら輝いている様子。珠簾：真珠を飾ったすだれ。白日映：日光に照り映えている。娥娥：女性の姿の美しいさま。玉顔：女性の美しい顔。紅粉：紅べにと白粉おしろい。妝：化粧をして粧よさうこと。花際：庭に咲く花の辺り。裴回：ここでは飛び回る。雙蛺蝶：二匹の蝶。池邊：池のほとり。顧歩：あちこちを振り返りながら歩く。兩鴛鴦：つがいのおしどり。傾國傾城：自分の城を危うくし、国を危うくするほどの絶世の美女の形容。漢武帝：その美女を愛した漢の武帝。爲雲爲雨：楚の襄王が巫山の巫女と契った故事による。容光：美しい顔かたち。羨：慕うの意。況復：そのうえに。まして、さらに加えて。相見：美しい女性に巡りあえようとは。願：ねがわくは「せん」と読み、「願うところは」「どうかうしたい」と訳す。自らの願望の意を示す。輕羅：軽いうすぎぬ。著細腰：細い腰にまといつきたい。明鏡：曇りのない鏡。嬌面：美しく、かわいらしい顔。分：分けてもらいたい。相向：さし向かいしていると。轉：だんだんと、ますます。相親：親しい仲となる。親しみが募ってくる。雙棲：夫婦となつて一緒に住む。共一身：一心同体となる。貞松：みさおの正しい松。誰論：誰が問題にしましょう、問題じゃない。芳槿：むくげの花。花は朝開いて夕方にはしぼむので、移ろいやすいことや、はかないことに喩える。一朝新：一朝ひとあさで新しく生えてくるような、浮いた話。百年：百年の寿命が尽きたら。同謝：一緒に死ぬこと。西山日：西山に沈む太陽。千秋萬古：千年も万年も。北邙塵：北邙山の塵となつて、添い遂げましょう。北邙：洛陽の北にある北邙山、古くから墓地として有名。

(唐詩選)

浩浩歌

浩浩歌

北宋

馬存

浩浩歌

浩浩として歌う

天地萬物如吾何

天地万物 吾を如何

用之解帶食太倉

之を用うるときは 帯を解きて 太倉に 食み

不用拂枕歸山阿

用いざれば 枕を払いて 山阿に帰る

君不見渭川漁父一竿竹

君見ずや 渭川の漁父 一竿の竹

莘野耕叟數畝禾

莘野の耕叟 數畝の禾

喜來起作商家霖

喜こび来たって 起って 商家の霖と作り

怒後便把周王戈

怒りて後 便ち 周王の戈を把る

又不見子陵橫足加帝腹

又た見ずや 子陵 足を横たえて 帝腹に加う

帝不敢動豈敢訶

帝 敢えて動かず 豈に 敢えて訶せんや

皇天爲忙逼

皇天 為に忙逼し

星辰相繫摩

星辰 相繫き 摩す

可憐相府癡

可憐 相府の痴

邀請先經過

邀え 請いて 先ず經過せしむ

浩浩歌

浩浩として歌う

天地萬物如吾何

天地 万物 吾を如何

屈原枉死汨羅水

屈原 枉げて死す 汨羅の水

夷齊空餓西山坡

夷齊 空しく餓す 西山の坡

丈夫犖犖不可羈

丈夫 犖犖 羈すべからず

有身何用自滅磨

身有り 何ぞ用いん 自ずから滅磨するを

吾觀聖賢心

吾 聖賢の心を 觀るに

自樂豈有他

自ずから楽しむのみ 豈に他有らんや

蒼生如命窮

蒼生如し命窮し

吾道成蹉跎

吾が道 蹉跎を成さば

直須爲用天下人

直ちに 須らく爲に 天下の人を弔すべし

何必嫌恨傷邱阿

何ぞ必ずしも 嫌恨して 邱阿を傷まん

浩浩歌

浩浩として歌う

天地萬物如吾何

天地 万物 吾を如何

玉堂金馬在何處

玉堂 金馬 何れの処にか在る

雲山石室高嵯峨

雲山 石室 高くして 嵯峨たり

低頭欲耕地雖少

頭を低れて 耕さんと欲すれば 地 少しと 雖も

仰面長笑天何多

面を仰ぎて 長笑すれば 天 何ぞ多き

請君醉我一斗酒

請う君 我に酔わしめよ 一斗の酒

紅光入面春風和

紅光 面に入つて 春風に和せん

【語釈】

浩浩：元気が宇宙の間に充滿するように広大なさま。解帶：布衣韋帯を解いて衣冠を着ける。食太倉：俸禄を受ける、太倉は官倉。山阿：山の隅。渭川漁父：太公望呂尚。一竿竹：一本の釣り竿。莘野耕叟：伊伊、有莘の野を耕していた。禾：穀物の総称。商家霖：殷の朝廷を助ける者の意、「書経」。周王戈：呂尚が周王の戈を持って戦に出た。子陵：光の字、の光武帝となる劉秀と同門に学ぶ。劉秀が皇帝となると、蔽光は姓名を変えて身を隠した。光武帝はその才能を惜しみ行方を捜させたところ、後斉国で羊毛の皮衣を着て沢の中で釣りをしているところを見いだされて、長安に召し出された。ある夜、光武帝と蔽光がともに就寝し、蔽光が光武帝の腹の上に足を乗せて熟睡し、翌日太史がその不敬を奏上して罰しようとしたが、光武帝は「故旧とともに臥したのみ」とこの件を取りあげなかった。訶：叱る。皇天：大いなる天。忙逼：忙しく迫る。皇天爲忙逼：天象が変じた。星辰相繫摩：宿星が帝座を侵した。相府癡：侯霸が使いを使わして蔽光を向かえたが、蔽光は答えもしなかった。榮榮：超絶のさま。羈：束縛。蹉跎：その意を遂げないこと。邱阿：孔子。玉堂：翰林院。金馬：宮廷の門の名。石室：洞窟。嵯峨：山の高いさま。

◆ 贈答類

秋夜寄丘二十二員外

秋夜丘二十二員外に寄す

唐

韋應物

懷君屬秋夜

君を懷いて 秋夜に属す

散步詠涼天

散步 涼天に詠ず

山空松子落

山空くして 松子落つ

幽人應未眠

幽人 応に未だ 眠ざるべし

【語釈】

丘二十二…丘は姓、丘丹、二十二は排行。員外…員外郎、長官の補佐役。懷…懐かしく思う。属…ちようどくにあたる。今ちようどそのときである。涼天…秋の涼しい夜空。詠…詩を口ずさむ。空…人気がなくて、ひっそりしている様子。松子…松かさ。幽人…俗世間を離れてひっそり暮らしている人、隠者、丘丹を指す。応…「まさにくすべし」と読み、「きつとくである」と訳す、強い推量の意を示す。

(唐詩三百首)

簡舒古廉

舒古廉に簡す

清

吳錫麒

292

君居我巷東

君は我が巷の東に居り

望見我家樹

我が家の樹を望見す

三日春雨深

三日春雨深し

相思落花暮

相思う落花の暮れ

【語釈】

簡…手紙を送る。巷…街。相思…互いに相手进行を思ふ。

聞王昌齡左遷龍標遙有此寄

唐李白

王昌齡の龍標の尉に左遷せらるるを聞き遙かに此の寄有り

楊花落盡子規啼

楊花落ち尽くして子規啼く

聞道龍標過五溪

聞道く龍標五溪を過ぐと

我寄愁心與明月

我愁心を寄せて明月に与う

隨風直到夜郎西

風に隨いて直ちに到れ夜郎の西

【語釈】

竜標… 県名、湖南省洪江市西南の黔城鎮。寄… 詩を人に託して送り届けること。楊花… 柳絮。子規… ホトトギス。聞道… 聞くとくところによれば。五溪… 地名、洞庭湖の西南端、湖南省常德市の西方にあった五つの川。寄愁心与明月… 君を思ふ愁いの心を明月に託そう。隨風… どうか風に乗って。夜郎… 竜標の西北にある夜郎県のあたりを指す。
(唐詩選)

贈花卿

花卿に贈る

唐 杜甫

錦城絲管日紛紛

錦城の糸管 日に紛々

半入江風半入雲

半ばは江風に入り半ばは雲に入る

此曲祇應天上有

此の曲只だ 応に 天上に有るべし

人間能得幾回聞

人間 能く 幾回か 聞くを得ん

【語釈】

花卿：唐の猛将、花敬定のこと。錦城：錦官城。四川省の成都の別称。糸管：琴などの弦楽器と笛などの管楽器。紛紛：入りみだれて賑やかなさま。江風：川風。入雲：高く鳴り響く。天上：天界。人間：人間世界。
(唐詩選)

江南逢李龜年

江南にて李龜年に逢う

唐 杜甫

岐王宅裏尋常見

岐王の宅裏 尋常に見

崔九堂前幾度聞

崔九の堂前 幾度か聞く

正是江南好風景

正に是れ 江南の好風景

落花時節又逢君

落花の時節 又君に逢う

【語釈】

李龜年：玄宗に寵愛された当時有名な男性歌手。岐王：玄宗の弟、李範。宅裏：屋敷内。尋常：たびたび。崔九：崔滌いう貴族、玄宗に寵愛された。堂前：屋敷の前。幾度：何度も。風景：風と日の光。落花時節：晩春を示す。
(唐詩三百首)

玉關寄長安李主簿

玉関にて長安の李主簿に寄す

唐

岑 參

東去長安萬里餘

東のかた長安を去ること 万里余

故人那惜一行書

故人 那ぞ惜む 一行の書

玉關西望堪腸斷

玉関を西望すれば 腸 断つに堪えんや

況復明朝是歲除

況んや 復た 明朝は是れ 歲除なるをや

【語釈】

玉関：玉門関。寄：手紙を出す。主簿：役所で、記録や文書帳簿を管理し、庶務を司る官。萬里餘：万里以上、はるばると。故人：友人何惜：どうして（手間を）惜しむのか一行書：簡単な手紙。西望：西の方を望む。堪：我慢する。腸斷：腸（はらわた）が断たれるほどの辛さ。歲除：大晦日。
(唐詩選)

過燕支寄杜位

燕支を過ぎ杜位に寄す

唐 岑 參

燕支山西酒泉道

燕支山西 酒泉の道

北風吹沙卷白草

北風 沙を吹いて 白草を巻く

長安遙在日光邊

長安は 遙かに日光の辺に在り

憶君不見令人老

君を憶えども 見ず 人をして老いしむ

【語釈】

燕支山：中国甘肅省蘭州の北、張掖の東南にある山。酒泉：甘肅省酒泉市。白草：北地に生える白い草。
(岑嘉州集)

寄孫山人

孫山人に寄す

唐

儲光羲

新林二月孤舟還

新林二月 孤舟還る

水滿清江花滿山

水は清江に満ち 花は山に満つ

借問故園隱君子

借問す 故園の 隱君子

時時來往住人間

時々來往して 人間に住まるかと

【語釈】

山人：世を捨てて山中に隠れ住む人。寄：詩を人に託して送り届けること、「贈」は、詩を直接手渡すこと。新林：春になって新しく芽吹いた林。孤舟還：一艘の小舟で帰る。水滿清江：春の水が清らかな川に満ちあふれている。借問：ちよつとお尋ねしませんが。故園：古くから住み慣れた庭園、孫山人の住居を指す。隱君子：世を避けて山中に隠れ棲む徳の高い人、孫山人を指す。（唐詩選）

贈崔九

崔九に贈る

唐

劉長卿

憐君一見一悲歌

憐れむ 君の一たび見て 一たび悲歌するを

歲歲無如老去何

歳々老い去くを如何せん

白屋漸看秋草沒

白屋 漸く看る 秋草に没するを

青雲莫道故人多

青雲 道うこと莫かれ 故人多しと

【語釈】

崔九：崔載華のこと、「九」は排行、作者と親交があったと思われる。一見：一回会う。悲歌：悲しげな詩歌。歳歳：毎年。如：何……をどんなにしたものであるう。白屋：貧しい者の家。漸：次第に。没：かくれる。青雲：高い位、高官。莫道……（……と）言いなさるな。故人：古くからの友人。

酬李穆見寄

李穆の寄せらるるに酬ゆ

唐

劉長卿

孤舟相訪至天涯

孤舟 相訪あいつといて 天涯てんがいに至る

萬轉雲山路更賒

万転ばんてんの雲山路 更にまじ賒にほろなり

欲掃柴門迎遠客

柴門を払ひいて 遠客を迎えんと欲すれば

青苔黃葉滿貧家

青苔 黄葉 貧家に満つ

【語釈】

李穆：劉長卿の娘婿。酬：詩を送られたことの返礼。相訪：尋ねてくる。天涯：地の涯。ここでは、作者（：劉長卿）の許のこと。万転：何度も向きを変え意。雲山：雲のかかった高い山。賒：遠い。柴門：柴（しば）を編んでつくった粗末な門。遠客：遠くから来た客、ここでは李穆を指す。黄葉：もみじ葉、秋になって葉が黄色く変わる葉。貧家：貧しい家、寒家。
(三体詩)

寒食寄京師諸弟

寒食 京師の諸弟に寄す

唐

韋應物

雨中禁火空齋冷

雨中 火を禁じて 空齋くうさい 冷やかに

江上流鶯獨坐聽

江上の流鶯りゅうおう 独坐どくざして聴く

把酒看花想諸弟

酒を把とり 花を見て 諸弟を想う

杜陵寒食草青青

杜陵とりょうの寒食 草 青青せいせい

【語釈】

寒食：当時から百五日目、この前後火を使わない。空齋：人氣の無い部屋。流鶯：乱れ鳴く鶯。杜陵：西安市雁塔区三兆邑西北にあたる、漢の宣帝の陵があったので名付けられた。

寄李渤

李渤に寄す

唐

張籍

五度溪頭躑躅紅

五度溪頭躑躅紅なり

嵩陽寺裏講時鐘

嵩陽寺裏講時の鐘

春山處處行應好

春山處々行きて応に好かるべし

一月看花到幾峰

一月花を看て幾峰にか到る

【語釈】

李渤：中唐の詩人。（？～881年）。字は澹之。若くして嵩山の少室山に隱棲し、少室山人と号す。五渡溪：嵩山にある溪の名称。躑躅：つつじ。嵩陽寺：嵩陽書院。
（三体詩）

與歌者何哉

歌者何哉に与う

唐

劉禹錫

二十餘年別帝京

二十余年帝京に別れ

重聞天樂不勝情

重ねて天樂を聞いて情に勝えず

舊人唯有何哉在

旧人唯だ何哉の在る有り

更與殷勤唱渭城

更に与に殷勤に渭城を唱たう

【語釈】

歌者：歌手。何哉：人物については不明。帝京：天子の住んでいる都。重：再び。天樂：鈞天広楽。天上の音楽。転じて宮中の音楽を指す。旧人：昔の知り合い。有何哉在：何哉が一人いるだけ。更：さらに。そのうえに。与：自分のために。殷勤：懇懇に同じ。ねんごろで丁寧なこと。真心を込めること。渭城：王維の「元二の安西に使いを送る」(唐詩三百首では「渭城曲」)を指す。
(唐詩選)

寄韓鵬

韓鵬に寄す

唐

李頎

爲政心閑物自閑

まつりごと 政を為して心閑なれば物自ずから閑なり

朝看飛鳥暮飛還

あした 朝に看る飛鳥 暮れに飛び還る

寄書河上神明宰

書を寄す 河上神明の宰

羨爾城頭姑射山

うらや 羨む 城頭 姑射の山

【語釈】

韓鵬：山西省臨汾市辺りの県令であったようであるが、不詳。為政：政治を行うのに。閑：心静かに、のんびりしているならば。物自閑：物事すべてが自然に静かに治まってゆくものである。寄書：手紙を書き送る。河上：汾河のほとり、臨汾市辺り。神明宰：神のように賢明な県令。羨爾：羨ましく思う、「爾」は助字。城頭：町の辺り。町の付近。城は、城壁で囲まれた町全体。城市。姑射山：今の山西省臨汾市の西北にある山、仙人が住んでいるという。（唐詩選）

贈江客

江客を贈る

唐

白居易

江柳影寒新雨地

こうりゅう 江柳 影は寒し新雨の地

塞鴻聲急欲霜天

かんこう 塞鴻 声急にして霜ならんと欲するの天

愁君獨向沙頭宿

うれ 愁う 君が 独り 沙頭の宿に向うを

水遶蘆花月滿船

ろか 水は 蘆花を遶ぐり 月は 船に満つ

【語釈】

江柳：川辺の柳。塞鴻：北の辺地から来る雁。沙頭：沙洲のほとり。

夜發袁江寄李穎川劉侍御

唐

戴叔倫
たいしゆくりん

夜 袁江を發し 李穎川・劉侍郎に寄す

半夜回舟入楚鄉

半夜舟を回ぐらして楚郷に入る

月明山水共蒼蒼

月明山水共に蒼々たり

孤猿更叫秋風裏

孤猿更に叫ぶ秋風の裏

不是愁人亦斷腸

是れ愁人ならずとも亦た腸を断たん

【語釈】

袁江：江西省漂萍郷県を流れ、贛江に注ぐ川の名。李穎川：人名、不明。侍郎：中書省、門下省、尚書省各部署の副長官。半夜：夜中、夜半。楚郷：楚の地方。蒼蒼：青白い色。愁人：愁いを抱いている人。

(唐詩選)

贈殷亮

殷亮に贈る

唐

戴叔倫
たいしゆくりん

日日河邊見水流

日々河辺に水の流るるを見る

傷春未已復悲秋

春を傷み未まだ已まざるに復た秋を悲しむ

山中舊宅無人住

山中の旧宅人の住む無く

來往風塵共白頭

風塵に來往して共に白頭

【語釈】

殷亮：人名、不詳。河邊：川のほとり。舊宅：かつての住まい。來往：行ったり来たたり、うろろろすること。風塵：けがれた俗世間。白頭：白髪頭、年をとったことを示す常用語。

(三体詩)

酬曹侍御過象縣見寄

唐

柳宗元
りゆうそうげん

曹侍御の象縣を過つて寄せられしに酬ゆ

破額山前碧玉流

破額山前 碧玉の流れ

騷人遥駐木蘭舟

騷人遥かに駐む 木蘭の舟

春風無限瀟湘意

春風限り無し 瀟湘の意

欲採蘋花不自由

蘋花を采らんと欲するも 自由ならず

【語釈】

侍禦：侍御史、皇帝の側に使える役人。象縣：嶺南道柳州の県（広西壮族自治区象州県）。破額山：象県の中の柳江のほとりにある山。碧玉：清く青く澄んでいる喻え。騷人：屈原をはじめとする『楚辞』の世界の人、曹侍御をいう。遥駐：象縣と柳州は、50百ほど離れている。木蘭舟：木欄で作った船、船の美称。瀟湘：湘水と瀟水の合流しているところ、洞庭湖の南。瀟湘意：曹侍御に逢いたいのだが果たせないこと。蘋花：浮き草の一種の花。

（柳宗元詩集）

寄令狐郎中

令狐郎中に寄す

唐

李商隱

嵩雲秦樹久離居

嵩雲秦樹久しく離居す

雙鯉迢迢一紙書

雙鯉迢々たり一紙の書

休問梁園舊賓客

問うを休めよ 梁園旧賓の客に

茂陵秋雨病相如

茂陵の秋雨 病相如

【語釈】

令狐郎中：右司郎中（尚書省の役人を右司の長官）である令狐綯（令狐楚の子）。嵩雲：五岳の一つ崇山（河南省登封県の南）にかかる雲。秦樹：陝西省の樹木。雙鯉：二匹の鯉、雁と共に手紙をもたらす物とされている（『文選』卷二十七）。迢迢：遙かに遠いさま。一紙書：令狐郎中からの手紙。休問梁園舊賓客：梁園は、前漢の景帝の弟の凌の孝王の庭園で司馬相如を始めとする文人たちを賓客として招いた、自分を司馬相如をたとえ、令狐楚を孝王にたとえた物。茂陵：漢の武帝の陵墓、司馬相如が晩年病臥してすごした所。病相如：病気の司馬相如にも似た自分。（唐詩三百首）

寄揚州韓綽判官

揚州の韓綽判官に寄す

唐

杜牧

青山隱隱水迢迢

青山隱々水迢々

秋盡江南草木凋

秋尽きて 江南 草木凋る

二十四橋明月夜

二十四橋 名月の夜

玉人何處教吹簫

玉人 何れの処にか 吹簫を教う

【語釈】

青山：青く見える山。隱隱：かすんではつきりしないさま。迢迢：はるかに遠くまで続いている様子。草木凋：草木が枯れる。二十四橋：揚州城の内外の水路にかかった虹橋。玉人：貴公子、韓綽を指す。吹簫：簫の笛を吹く。（新釈漢文大系 詩人編 9）

懷吳中馮秀才

吳中の馮秀才を懷つ

唐

杜牧

長洲苑外草蕭蕭

長洲苑外草蕭々

却算遊程歲月遥

却つて遊程を算つれば 歲月遥かなり

唯有別時今不忘

唯だ別時の今に忘れざる有り

暮煙秋雨過楓橋

暮煙 秋雨 楓橋を過ぐ

【語釈】

吳中：江蘇省吳県（蘇州市）。馮秀才：馮という姓の科挙試験合格者。長洲苑：古の苑の名、春秋時代の吳王・闔閭が遊獵した処。蕭蕭：ものさびしいさま。卻：かえつて。遊程：旅路の行程。唯有：ただ。だけがある。別時：別れたとき。暮煙：夕暮れに立つもや。楓橋：江蘇省蘇州市の郊外にある橋の名。（杜樊川絶句詳解）

神水館寄子瞻兄

神水館子瞻兄に寄す

北宋

蘇轍

誰將家集過幽都

誰か家集を將つて 幽都を過ぐ

逢見胡人問大蘇

胡人に逢見すれば 大蘇を問わる

莫把文章動蠻貊

文章を把つて 蛮貊を動かすこと莫かれ

恐妨談笑卧江湖

恐らくは 談笑して 江湖に卧することを妨げん

【語釈】

家集：蘇軾一家の詩文集。幽都：契丹の都。大蘇：蘇軾。蠻貊：野蛮な異民族。

春日偶題呈錢尚書

春日偶題 錢尚書に呈す

宋

秦觀

三年京國鬢如絲

三年京國鬢 糸の如し

又見新花發故枝

又見る 新花の 故枝に 発くを

日典春衣非爲酒

日に 春衣を 典するも 酒の 爲に 非ず

家貧食粥已多時

家貧しくして 粥を 食するに 已に 多時

【語釈】

京國…帝都周辺の国。典…質に入れる。故枝…古い枝。多時…長い時間。

贈羅友卿

羅友卿に贈る

金 元好問

閑中日月病中身

閑中の日月 病中の身

寂寞相求有幾人

寂寞 相求むるは 幾人が 有る

莫怪門前可羅雀

怪しむ 莫かれ 門前 雀を 羅すべきを

詩家所得是清貧

詩家の 所得は 是れ 清貧

【語釈】

寂寞…ひっそりしても寂しいさま。可羅雀…門前に網を張り雀を捕る、訪れる人の無いことを言う、『史記』の故事。

灞橋寄内

灞橋内に寄す

清

王士禛

太華終南萬里遥

太華終南万里遥かなり

西來無處不魂銷

西來処として魂銷せざるは無し

閨中若問金錢卜

閨中若し金錢の卜を問わば

秋雨秋風過灞橋

秋雨秋風灞橋を過ぐ

【語釈】灞橋：長安の西にあり、ここで見送りに来た人が柳の枝を折り、旅立つ人の首に輪としてかけて送った。太華：華山、五岳の一つ、中国陝西省華陰市にある山。終南：終南山、長安の南にある山。西來：西にやってくる。魂銷：魂が消えるほどの寂しさ。閨中：女性の部屋。問金錢卜：錢を投げて、裏表で吉凶を占う。(漢詩大系23)

贈柳敬亭

柳敬亭に贈る

清

毛奇齡

流落相憐柳敬亭

流落相憐れむ柳敬亭

消除豪氣鬢星星

豪氣を消除して鬢星星々たり

江南多少前朝事

江南多少前朝の事

說與人間不忍聽

人間に說与するも聽くに忍びず

【語釈】流落：落ちぶれて四方に流浪する。豪氣：人に負けない豪壯の意気。消除：消え失せること。星星：白髪のちらちらするさま。前朝：明のこと。說與：説き聞かせる。

示友

友に示す

清

周亮工
しゅうりやうこう

海水群飛百丈高

海水群れ飛んで 百丈高し

同君城上擁弓刀

君と同じく 城上に弓刀を擁す

戰瘢莫向燈前看

戦瘢 灯前に向つて 看ること莫かれ

恐惹霜華上鬢毛

恐らくは 霜華を惹いて 鬢毛に上らさん

【語釈】

戰瘢：戦場にて受けた刀傷。向：於いて。霜華：白髪の意。

秋日寄懷高梓巖

秋日懷 高梓巖に寄す

清

張增慶
はりぞうけい

琴樽幾載憶南皮

琴樽 幾載か 南皮を憶つ

明月清風阻舊歡

明月 清風 旧歡を阻む

欲問離愁何處切

問んと欲す 離愁 何れの処にか切なる

滿庭黃葉雨來時

滿庭の黃葉 雨の來たる時

【語釈】

琴樽：文士が宴会して詩を作ること。南皮：河北省滄州市に位置する県。幾載：幾年。舊歡：昔の楽しみ。離愁：離れている愁。

口號贈盧徵君鴻

口号して盧徵君鴻に贈る

唐

李白

306

陶令辭彭澤

陶令 彭沢を辞し

梁鴻入會稽

梁鴻 会稽に入る

我尋高士傳

我 高士の伝を尋ぬるに

君與古人齊

君 古人と齊し

雲臥留丹壑

雲に臥して丹壑を留め

天書降紫泥

天書 紫泥を降す

不知楊伯起

知らず 楊伯起

早晚向關西

早晚か 関西に向う

【語釈】

口號：紙に書かないで詩を作る。盧鴻：博学で書に巧み、崇山に隠棲して再三応じなかつたが最期に仕官した。陶令：陶淵明。彭澤：彭澤：江西省九江市彭沢県、陶淵明が県令であつた。梁鴻：後漢の人、富貴功名を恥じて会稽にて隠棲した。丹壑：赤色の丘嶽。天書：天子の書。紫泥：紫色の泥で封じた書、即ち勅令。楊伯起：後漢の人、関西の孔子と称せられた。

寄邢逸人

邢逸人けいいつじんに寄す

唐

鄭

常じょう

羨君無外事

羨がやむ君が外事無く

日與世情遠

日に世情たがと遠をうを

地僻人難到

地僻へきにして人に到り難く

溪深鳥自飛

溪深くして鳥おの自づから飛ぶ

儒衣荷葉老

儒衣じゆい 荷葉かよう 老い

野飯藥苗肥

野飯やはん 藥苗やくびよう 肥ゆ

若問潮邊意

若もし潮邊の意を問わはば

而今憶共歸

而今じこん 共に歸らんことを憶う

【語釈】

儒衣：儒者の着物。潮邊意：潮が引き又満ちる意。而今…これから。

闕下贈裴舍人

闕下にて裴舍人に贈る

唐

錢起

二月黃鸝飛上林

二月 黃鸝 上林に飛ぶ

春城紫禁曉陰陰

春城 紫禁 曉に陰々

長樂鐘聲花外盡

長樂の鐘聲 花外に尽き

龍池柳色雨中深

龍池の柳色 雨中に深し

陽和不散窮途恨

陽和 窮途の恨みを散せず

霄漢常懸捧日心

霄漢 常に捧日の心を懸く

獻賦十年猶未遇

賦を獻じて十年 猶未だ遇わず

羞將白髮對華簪

羞ずらくは 白髮を將つて 華簪に對するを

【語釈】

闕下…：宮殿の門の下。裴…：裴某。人物については不明。舍人…：中書舍人、中書省に所属し、詔勅の作成などを司った。黃鸝…：高麗うぐいす。上林…：漢代の御苑、上林苑のこと。春城…：春の宮城。紫禁…：天子の宮殿。陰陰…：うす暗く、ひっそりしている様子。長樂…：漢代の宮殿の名、長樂宮。花外…：花の彼方。龍池…：興慶宮内にあつた池の名。柳色…：青々とした柳の色。陽和…：のどかな春の気。窮途…：仕官をするところがなく、行き詰まった境遇。霄漢…：大空。朝廷に喩える。捧日心…：天子への忠誠心。獻賦…：天子に賦を作つて獻ずること。十年…：長い間。未遇…：不遇なこと。華簪…：華やかなかんざし、地位の高い人、ここでは裴舍人を指す。

(唐詩三百首)

寄黎眉州

黎眉州に寄す

北宋

蘇軾

膠西高處望西川

膠西 高き処 西川を望む

應在孤雲落照邊

応に 孤雲の 落照の 辺に 在るべし

瓦屋寒堆春後雪

瓦屋 寒は 堆し 春後の 雪

峨眉翠掃雨餘天

峨眉 翠は 掃う 雨余の 天

治經方笑春秋學

経を 治して 方に 笑う 春秋の 学

好士今無六一賢

士を 好む 今 無し 六一の 賢

且待淵明賦歸去

且だ 淵明の 歸去を 賦するを 待ちて

共將詩酒趁流年

共に 詩酒を 將ちて 流年を 趁わん

【語釈】

黎眉州：黎希声、「春秋」を修めて歐陽脩に知られた人、時に蘇軾の故郷である眉州の刺史であった。膠西：河南省鄭州市新密市。西川：蜀の地。瓦屋：瓦屋山、四川省榮經県の近くにある山。峨眉：峨眉山。雨餘天：雨上がりの空。治經方笑春秋學：経書を収めて、王安石などの「春秋」を喜ばない人間を笑う。六一：歐陽脩。且待淵明賦歸去：陶淵明が「歸去来の辞」を作って故郷に帰ったように、自分が、眉州に帰ったならば。流年：余生。

贈鮮于伯機

鮮于伯機に贈る

元 劉 祁

憶昔逢君北渚秋

憶う昔 君に逢う北渚の秋

藕花香裏醉輕舟

藕花香裏に 輕舟に酔う

三年一別空回首

三年 一別 空しく首を回らし

千里相思更倚樓

千里 相思 更に樓に倚る

明月不隨春物老

明月 春物に随って老いず

碧山長帶暮雲愁

碧山 長えに暮雲を帯びて愁う

天平松竹黃華水

天平の松竹 黃華の水

早晚柴車得共遊

早晚 柴車に 共に遊ぶを得ん

【語釈】

伯機：鮮機枢（元の文人。官は太常寺典簿にいたった。西湖畔の虎林に住み、琴、書、古玩の鑑賞を好んだ。）の字。北渚：北のみぎわ。藕花：蓮の花。春物：春の景色。天平・黃華：共に地名。柴車：飾りのない車。

人日寄杜二拾遺

人日寄杜二拾遺

唐

高適

人日題詩寄草堂

人日 詩を題して 草堂に寄す

遙憐故人思故鄉

遙かに憐れむ 故人の故郷を思うを

柳條弄色不忍見

柳條は色を弄して 見るに忍びず

梅花滿枝空斷腸

梅花は枝に満ちて 空しく腸を断つ

身在南蕃無所預

身は南蕃に在りて 預る所無く

心懷百憂復千慮

心に懷く百憂 復た千慮なり

今年人日空相憶

今年の人日 空しく相い憶い

明年人日知何處

明年の人日 何れの処なるかを知らん

一臥東山三十春

一臥東山 三十の春

豈知書劍老風塵

豈に知らんや 書劍 風塵に老いんとは

龍鐘還忝二千石

龍鐘還た忝のうす 二千石

愧爾東西南北人

愧づ 爾 東西南北の人に

【語釈】

人日：陰曆正月七日。杜二拾遺：杜甫、杜二は排行、左拾遺であったことから拾遺と言っている。草堂：杜甫の浣花草堂。遙：遙か遠くから。故人：親しい友人。柳條：ヤナギの枝。弄色：色をきざす意。断腸：非常な悲しみ。南蕃：南方の野蠻地。預：かわる。あずかる。百憂：あれこれと考えをめぐらすこと。千慮：いろいろと考えをめぐらすこと。相憶：思い起こす。臥：仕官しないで、隠者生活をする意。東山：政治・軍事の世界に出る前、郷里で過ごしていた時期。龍鐘：年老いてつかれ病むさま。二千石：漢代の郡守の俸禄高。転じて、地方長官の意で使う。東西南北人：住所が定まらず、諸方をさまよい歩く人。

(唐詩選)

短歌行贈王郎司直

短歌行 王郎司直に贈る

唐 杜甫

王郎酒酣拔劔斫地歌莫哀
王郎酒 酣たけなわにして劔を抜き 地を斫り莫哀を歌う

我能拔爾抑塞磊落之奇才
我 能よく 爾なんじが 抑塞よくそくせる 磊落らいらくの 奇才を 抜かん

豫章翻風白日動
豫章 風に 翻りて 白日 動き

鯨魚跋浪滄溟開
鯨魚 浪を 跋みて 滄溟も 開く

且脫劔佩休裴回
且 脱 劔を 脱ぎて 裴回 すること を 休めよ

西得諸侯權錦水
西のかた 諸侯を得て 錦水に 棹ささば

欲向何門跋珠履
いず の 門に 向いて 珠履を 跋まんと 欲する

仲宣樓頭春色深
仲宣樓頭 春色 深し

青眼高歌望吾子
青眼 高歌して 吾子を 望まん

眼中之人吾老矣
眼中の人 吾れ 老いたり

【語釈】

短歌行：樂府題の一つ。王郎：姓は王、郎は親しみをこめた呼び方人物については不明。司直：官名、東宮御所の役人や護衛兵の目付役。斫地：地面を切りつける。莫哀：これ以上の哀しみはないという悲壮な曲。拔：本来は拔擢するの意だが、ここでは相手の才能を高く評価する程度の意。抑塞：おさえつけられていること。磊落：志が大きくて小さな事にこだわらないさま。予章：巨大な楠の木、王郎の奇才にたとえる。白日動：太陽までが揺れ動く。鯨魚：くじら、予章とともに王郎の奇才にたとえる。跋：踏む。滄溟：大海。劔佩：劔と腰に下げる玉。得諸侯：自分の才能を認めてくれる諸侯を見つけて、その人に仕えること。錦水：節度使のこと。錦水：四川省成都の近くを流れる川、錦江。跋珠履：珠履は宝玉で飾った靴、跋はつかけてはくこと、諸侯に仕え、上客として待遇されること。仲宣樓：湖北省荊州（今の江陵）にあった楼、魏の詩人、王粲がこの楼に登って「登樓の賦」を作ったため仲宣樓と呼ばれた。青眼：親しい人に対するうれしい目つき。晋の阮籍げんせきが気に入らない客に対しては白眼で、親友に対しては青眼で応対したという故事に基づく。高歌：声高らかに歌うこと。吾子：相手を親しんでいう言葉、あなた。眼中之人：目の中に浮かぶ人、ここでは王郎を指す。吾老矣：私はもう老いてしまった。

（唐詩選）

走筆贈燕孟

筆を走らせて燕孟に贈る

元

薩都刺

別君金陵城

君に別る金陵城

遇君錢塘驛

君に遇う錢塘驛

落魄江湖癩折腰

江湖に落魄して腰を折るに癩し

笑傲公侯但長揖

公侯に笑傲して但だ長揖す

柳花吹香撲酒缸

柳花 香を吹いて 酒缸を撲ち

酒波灑灑如春江

酒波 灑々として春江の如し

西湖天鏡碧墮地

西湖の天鏡 碧地に墮ち

吳山蛾眉春入窗

吳山の蛾眉 春窓に入る

平生豪氣如虹吐

平生 豪氣 虹の吐くが如し

餘子紛紛何足數

余子 紛紛 何ぞ 数うるに足らん

驛亭把酒歌別離

驛亭 酒を把りて別離を歌い

醉聽江湖鳴萬鼓

酔いて聽く江湖の 万鼓を鳴らすを

【語釈】

金陵城…六朝時代の旧都、今の南京。錢塘驛…浙江省杭州市の宿場。落魄…落ちぶれる。江湖…世の中。折腰…人にへつらって仕官をもとめること、陶淵明の故事。笑傲…人を侮り笑う。長揖…礼法の一つで、胸に手を当てて下に下ろすやり方。酒缸…酒がめ。灑灑…ナミナミとすること。天鏡…天の鏡、湖水の光。蛾眉…美しい眉。餘子…俗人。紛紛…入り交じり乱れるさま。

◆ 別離類

江亭夜月送別

江亭の夜月に別れを送る

唐

王勃おう ぼつ

江送巴南水

江は送る 巴南はなんの水

山横塞北雲

山は横たわる 塞北さいほくの雲

津亭秋月夜

津亭しんてい 秋月の夜

誰見泣離羣

誰か見ん 離郡りぐんに泣くを

【語釈】

巴南：蜀の地。塞北：匈奴を防ぐ為に設けられた秦の北。津亭：渡し場のあたりの亭。離羣：多くの友と別れる。

易水送別

易水の送別

唐

駱賓王
らくひんのう

此地別燕丹

此の地 燕えんの丹に別かる

壯士髮衝冠

壯士 髮はつ冠を衝く

昔時人已沒

昔時せき人 已に沒し

今日水猶寒

今日 水 猶なお寒し

【語釈】

易水送人：荆軻と燕の昭王の太子丹、高漸離たちと易水の畔での別れのことを指す。此地：燕（河北省北京附近の南方になる）。丹：燕の国の太子である丹。壯士：勇壮な男子、荆軻。今日：燕の時代と作者の詩を作った当時の政治情況を比較しての言葉。水：易水（河北省易県（易州）の附近から発し、東流して大清河に合流して、現・天津市を通過して渤海に注ぎ込む川）の流れ。猶：やはり。（唐詩選）

送司馬道士遊天台 司馬道士の天台に遊ぶを送る 唐 宋之問

羽客笙歌此地違 羽客の笙歌 此の地に違う

離筵數處白雲飛 離筵 數処 白雲飛ぶ

蓬萊闕下長相憶 蓬萊闕下 長く相憶うも

桐柏山頭去不歸 桐柏山頭 去つて帰らず

【語釈】

司馬道士：唐代の有名な道士、司馬承禎。天台：天台山、浙江省天台県の北にある。羽客：道士のこと、仙人は羽がはえて空中を飛ぶといわれるので、道士の衣を羽衣に喩える。笙歌：笙の音に合わせて歌うこと、司馬道士は音律に明るかったという。違：離れ去ること。離筵：送別の宴席。數処：あちらこちらに。白雲飛：後漢の道士薊子訓は、神異の術を使う人であったが去っていくとき、白雲があちこちに沸き起こったという故事を踏まえる。蓬萊闕下：蓬萊宮の宮門のあたり。長相憶：いつまでもあなたのことを思われることでありましょうが。

(唐詩選)

送梁六

梁六を送る

唐

張説

巴陵一望洞庭秋

巴陵 一望、洞庭の秋

日見孤峰水上浮

日に見る 孤峰の水上に浮かぶを

聞道神仙不可接

聞道 神仙は接すべからずと

心随湖水共悠悠

心は湖水に随いて 共に悠悠

【語釈】

梁六：梁知微のこと。洞庭山：君山のこと。巴陵：湖南省岳陽市。洞庭：洞庭湖のこと。孤峰：一つだけ離れてある峰、ここでは君山。聞道：聞くところによれば。悠悠：うれえるさま。ゆったりとしたさま。
(唐詩選)

贈汪倫

汪倫に贈る

唐

李白

李白乘舟將欲行

李白 舟に乗って 将に行かんと欲す

忽聞岸上踏歌聲

忽ち聞く 岸上 踏歌の聲

桃花潭水深千尺

桃花潭水 深さ千尺

不及汪倫送我情

及ばず汪倫が我を送るの情に

【語釈】

汪倫：人名。涇県にある桃花潭の村人の名、常に美酒を醸造していて、李白を接待したという。忽：急に。踏歌：手を繋ぎ、両足で足踏みをしてリズムを取りながら歌う民間歌謡の一形式。踏歌：大勢足を踏み鳴らして拍子をつけて歌う歌。桃花潭：安徽省東南の涇県西南にある桃花潭。情：思い
(唐詩選)

黄鶴樓送孟浩然之廣陵

唐 李白

黄鶴樓にて孟浩然の廣陵に之くを送る

故人西辭黃鶴樓

故人西のかた 黃鶴樓を辞し

煙花三月下揚州

煙花 三月 揚州に下る

孤帆遠影碧空盡

孤帆の遠影 碧空に尽き

唯見長江天際流

唯だ見る 長江の 天際に流るるを

【語釈】

黄鶴樓：湖北省武漢市武昌区の樓閣。呉の黄武二年（223）の建立と伝えられ、何度も破壊と改修を繰り返してきた、「黄鶴の伝説」で名高い。之：目的地に向かって行くこと。広陵：揚州（江蘇省揚州市）の古称。故人：古くからの友人。辞：辞去する。煙花：春がすみの中に咲く花。孤帆：ただ一艘いっそう浮かんで見える舟の帆。碧空：青空。尽：消える。唯：「ただ」と読み、「ただただだけである」「ただにすぎない」と訳す。天際：空のはて、水平線の彼方。（唐詩選）

芙蓉樓送辛漸

芙蓉樓にて辛漸を送る

唐 王昌齡

寒雨連江夜入吳

寒雨 江に連なって夜 吳に入る

平明送客楚山孤

平明 客を送れば 楚山 孤なり

洛陽親友如相問

洛陽の親友 如し 相問はば

一片冰心在玉壺

一片の氷心 玉壺に在り

【語釈】

芙蓉樓：長江南岸の江蘇省京口（鎮江）の西北にある樓。辛漸……不詳。寒雨……寂しい雨、寒々とした雨。吳：芙蓉樓のある江蘇省京口（鎮江）。平明：夜あけがた。楚山：楚の山、山名不詳。孤：ぼつんと立っていること。氷心：透き通って清い心。玉壺……玉で作った壺。（南朝宋の鮑照『代白頭吟』「直如朱絲繩，清如玉壺冰。」に基づく。）（唐詩選）

別李浦之京

李浦の京に之くに別る

唐

王昌齡
おうしょうれい

故園今在灞陵西

故園今灞陵の西に在り

江畔逢君醉不迷

江畔君に逢い酔いて迷わず

小弟鄰莊尚漁獵

小弟隣莊に尚お漁獵せん

一封書寄數行啼

一封の書は寄す數行の啼

【語釈】
李浦：人名。未詳。京：長安の都。故園：ふるさと。灞陵：漢の文帝の陵墓。長安の東南校外にある。江畔：川のほとり。江は長江を指す。醉不迷：酒を飲んでも酔えない意。小弟：おとうと。鄰莊：別荘の隣。漁獵：魚を捕って遊ぶ。
〔三体詩〕

送元二使安西

元二の安西に使いを送る

唐 王维
おう い

渭城朝雨浥輕塵

渭城の朝雨輕塵を浥す

客舍青青柳色新

客舍青々として柳色新たなり

勸君更盡一杯酒

君に勧む更に一杯の酒を尽くせよ

西出陽關無故人

西のかた陽關を出づれば故人無からん

【語釈】
元二：不詳。安西：唐の時代に置かれた都護府の名。現在の新疆ウイグル自治区庫車。渭城：秦の都であった咸陽、漢代になって渭城と改めた。浥：ぬらす。輕塵：軽く舞う土ぼこり。客舍：旅館。青青：青々としているさま。柳色：青々とした柳の色。人との別れの際、柳の枝を輪にして贈る習慣があった。新：みずみずしく、鮮やかである。更尽：もう一杯飲みほしたまえ。陽關：関所の名、今の甘肅省敦煌県の西南にあった。故人：古くからの友人。
(唐詩三百首)

送王道士還京

王道士の京に還るを送る

唐 賈至

一片仙雲入帝鄉

一片の仙雲 帝郷に入る

數聲秋鴈至衡陽

数声の秋鴈 衡陽に至る

借問清都舊花月

借問す 清都の旧花月

豈知遷客泣瀟湘

豈に知らや 遷客の瀟湘に泣くを

【語釈】

仙雲：仙人の入る雲、転じて仙人。帝郷：帝都、長安。衡陽：湖南省衡陽市。清都：長安のこと。遷客：左遷されて地方に移された火と、作者。瀟湘：瀟水と湘水の合流した下流、洞庭湖に近い地方。

送李侍郎赴常州

李侍郎の常州に赴くを送る 唐 賈至

雪晴雲散北風寒

雪晴れ 雲散じて 北風寒し

楚水吳山道路難

楚水 吳山 道路難し

今日送君須盡醉

今日君を送る 須らく酔いを尽くすべし

明朝相憶路漫漫

明朝 相憶わば 路 漫々

【語釈】

李：…李白の族叔（同族で父より年少の者）李暉のこと。郎：…刑部侍郎。雲散：…雲が散る、李侍郎が去っていくことと掛けている。楚水吳山：楚の川と吳の山。須：「すべからくべし」と読み、「せひする必要がある」「するべきだ」と訳す。相憶：…互いに思い偲んでみても。漫漫：…道路の長く遠いさま。

（唐詩選）

別董大

董大に別る

唐

高適

十里黄雲白日曛

千里の黄雲 白日曛し

北風吹雁雪紛紛

北風 雁を吹いて 雪紛紛

莫愁前路無知己

愁う莫かれ 前路に知己無きを

天下誰人不識君

天下 誰人が君を識らざらん

【語釈】

董大董が姓、大は排行第一（一族中の同世代の最年長者）、琴の名手、董庭蘭と思われる。千里：千里のかなたまで、空一面に。黄雲：黄色い雲、黄塵を巻き上げた雲。白日：輝く太陽。真昼の太陽。曛：暗くかすむこと。紛紛：盛んに入り乱れること。知己：知人（唐詩選）

送宇文六

宇文六を送る

唐 常建

花映垂楊漢水清

花は垂楊に映じて 漢水 清し

微風林裏一枝輕

微風 林裏 一枝 輕し

即今江北還如此

即今 江北 還って 此の如し

愁殺江南離別情

愁殺 江南 離別の情

【語釈】

宇文六：不詳。花：くれないの花。垂楊：しだれ柳。映：映はえる。漢水：陝西省西部に源を發し、東流して武漢で長江に注ぐ、漢江ともいう。林裏：林の中。即今：ただいま。江北：長江北部の地方。愁殺：深く悲しませる。江南：長江中流・下流の南岸地域。（唐詩選）

送杜十四之江南

杜十四の江南に之くを送る

唐

孟浩然

荆吳相接水爲鄉

荆吳 相接して 水を郷と爲す

君去春江正淼茫

君 去りて 春江 正に 淼茫

日暮孤舟何處泊

日暮 孤舟 何れの処にか泊する

天涯一望斷人腸

天涯 一望 人腸を断つ

【語釈】

杜十四：不詳。江南：長江下流以南の地。荆吳：荆は楚の国の別名、現在の湖北、湖南省あたり。淼茫：水の広々としたさま。天涯：空のはて。一望：広い眺めを一目で見渡すこと。斷人腸：断腸の思いをさせる。

(唐詩選)

送人使河源

人の河源に使用するを送る

唐

張謂

故人行役向邊州

故人行役して辺州に向う

匹馬今朝不少留

匹馬 今朝 少しも留らず

長路關山何日盡

長路 関山 何れの日にか尽きん

滿堂絲竹爲君愁

満堂の糸竹 君が為に愁う

【語釈】

河源：黄河の河源地方、寧夏省銀川のあたりから甘肅省蘭州あたりまでの地域。行役：官命によって旅に出ること。邊州：辺境。匹馬：一匹の馬。関山：国境の山。糸竹：管弦(唐詩選)

丹陽送韋參軍

丹陽にて韋參軍を送る

唐

嚴維

323

丹陽郭裏送行舟

丹陽郭裏行舟を送る

一別心知兩地秋

一別して心は知る 兩地の秋

日晚江南望江北

日晚れて 江南より江北を望めば

寒鴉飛盡水悠悠

寒鴉 飛尽きて 水悠悠

【語釈】

丹陽：現在の江蘇省鎮江市。韋參軍：伝未詳。參軍は、武官の官位名。郭裏：郭は、城郭。行舟：通り行く舟。一別：別れること。心知：心が自然と知ること。兩地秋：別れた互いの土地が秋の気配となる。江南望江北：江は、長江。長江の南より遙か北の方角を見る。寒鴉：冬のからす。水悠悠：水は、長江の流れのこと。悠悠は、遠くはるかなさま。

(三体詩)

七里灘嚴維送

しちりたん
七里灘にて重ねて送る

唐

りゆうちようけい
劉長卿

秋江渺渺水空波

秋江 渺々として水空しく波だつ

越客孤舟欲榜歌

越客の孤舟 榜歌せんと欲す

手折衰楊悲老大

手に衰楊を折りて老大を悲しむ

故人零落已無多

故人 零落して 已に多きこと無し

【語釈】

七里灘：浙江省桐廬県の西南20キロメートルほどの嚴陵山の西にあった長江の難所。渺渺：水のはてしなくけむるさま。越客：越の国（現・浙江省）の旅人、この詩で送別された人物。榜歌：舟歌。老大：年をとる。故人：古くからの友人。零落：落ちぶれてさびしい。無多：多くはない。

重送裴郎中貶吉州

唐

劉長卿

重ねて裴郎中の吉州に貶せらるるを送る

猿啼客散暮江頭

猿は啼き 客は散ず 暮江の頭

人自傷心水自流

人は自ら傷心 水は自ら流る

同作逐臣君更遠

同じく逐臣と作りて 君は更に遠く

青山萬里一孤舟

青山 萬里 一孤舟

【語釈】

重送：重ねて送別する。再び見送る。「重ねて」とあるのは、すでに「送裴郎中貶吉州」という五言律詩があるため。裴：作者の友人、人物については不明。郎中：官名、尚書省の六部の四司の各司の長。貶：罪によって官位をおとされ、地方に流されること。吉州：今の江西省吉安市。猿啼：猿が悲しげに鳴く。客散：見送りの人々がそれぞれ帰っていく。暮江頭：夕暮れの川のほとり。水自流：水は水として無心に流れていく、水は人間の嘆きをよそに流れていく。自：「おのずから」と読むが、ここでは「自然に」の意ではなく、「人は人、水は水、それ自体として」の意。逐臣：放逐された臣下。君更遠：君の左遷先は私よりずっと遠い。青山万里：遙か彼方まで続く青々として見える山。

(「唐詩選」)

曾山送別

曾山に別を送る

唐

皇甫冉

淒淒遊子苦飄蓬

淒々たる遊子 飄蓬に苦しむ

明月清罇祗暫同

明月 清罇 祗だ暫く同じうす

南望千山如黛色

南 千山を望めば 黛色の如し

愁君客路在其中

愁う 君が客路 其の中に在らんことを

【語釈】

曾山：場所不明。送別：別れていく人を送る。淒淒：元は冷たい風が吹いたり、雨が降りしきることの形容、ここでは落ちぶれて、寂しく辛つらいさま。遊子：旅人の君。飄蓬：風に吹かれてころがり飛ばされてゆく蓬草、落ちぶれた流浪の身に譬える。清罇：清らかな酒をたたえた樽。祗：ただ。只に同じ。暫同：しばらくはともに酒を傾けよう。黛色：まゆずみの色、かすんで見える遠山の青黒い色に喩える。客路：旅路。
(唐詩選)

送齊山人歸長白山

齊山人の長白山に帰るを送る

唐

韓翃

舊事仙人白兔公

旧と仙人の白兔公に事う

掉頭歸去又乘風

頭を掉り歸り去りて又風に乘ず

柴門流水依然在

柴門流水依然として在り

一路寒山萬木中

一路寒山万木の中

【語釈】
齊山人…人名 未詳 山人は世を捨てて山に隠れ住む人。白兔公…仙人の名。掉頭…頭をふる、事柄を否定するさま。歸去…ふるさとに帰る。柴門…しばで作った門。寒山…秋から冬にかけてのさびしい山、さむざむとした山。萬木…きわめて多くの木々。 (三体詩)

贈別

贈別

唐杜牧

多情却似総無情

多情は却つて似たり 総て無情なるに

惟覺罇前笑不成

惟覺ゆ 罇前 笑の成らざるを

蠟燭有心還惜別

蠟燭 心有りて 還た別れを惜しみ

替人垂淚到天明

人に替わりて涙を垂れ 天明に到る

【語釈】

多情…感情が豊かで、感じやすいこと。無情…感情が乏しいこと。覺…気づく、自覚する。罇…酒壺。笑不成…哀しみのために笑顔を作ることができない。心…ろうそくの芯(心と同音)にかけている。還…また。替人…私に代わって。天明…夜明け。(唐詩三百首)

淮上別故人

淮上故人に別る

唐

鄭谷

揚子江頭楊柳春

揚子江頭 楊柳の春

楊花愁殺渡江人

楊花 愁殺す 江を渡る人

数声風笛離亭晚

数声の風笛 離亭の晩

君向瀟湘我向秦

君は 瀟湘に向かい 我れは秦に向かう

【語釈】

淮上：淮水（現・淮河）華中を流れる河のほとり。楊柳：柳の総称。楊花：柳絮。柳の花が咲いた後、白い綿毛のある種子が散るさま。愁殺：ひどく愁えさせる。風笛：風に散る笛の声。離亭：送別の宴を張る亭。瀟湘：遙か南方の地湖南省。秦：長安などのある陝西省の別称。
（詩詞世界）

江上別李秀才

江上李秀才に別る

唐 韋莊

前年相送灞陵春

前年 相送る 灞陵の春

今日天涯各避秦

今日 天涯 各おの 秦を避く

莫向尊前惜沈醉

尊前 沈酔を惜しむ莫かれ

與君俱是異鄉人

君と俱に 是れ 異郷の人

【語釈】

江上：長江の畔。李秀才：李という姓の科挙の貢試に合格した人物。灞陵：長安の人士が旅立つ人を見送って灞陵橋畔まで足を運び、柳の枝を折って送別の意を表したという。天涯：空のはて、故郷を遠く離れた地。避秦：乱を避けて離れていること。向：於いて。沈酔：酔いつぶれる。

逢吳秀才復送歸江上

吳秀才と逢い復た江上に帰る

明

高啓

江上停舟問客蹤

江上舟を停どめ客縦を問う

亂前相別亂餘逢

亂前相別れ亂余に逢う

暫時握手還分手

暫時手を握り還た手を分つ

暮雨南陵水寺鐘

暮雨の南陵水寺の鐘

【語釈】
秀才：学者、知識人階級のこと。復：ふたたび。江上：河の畔、川の水面。客蹤：旅人としての行跡。亂：元末の張士誠の叛乱。餘……後。暫時：しばらくの間。還：また。南陵：地名。水寺：水辺にある寺。
(詩詞世界)

送呂卿

呂卿を送る

明 高啓

遠汀斜日思悠悠

遠汀斜日思い悠悠

花拂離觴柳拂舟

花は離觴を払い柳は舟を払う

江北江南芳草徧

江北江南芳草遍し

送君併得送春愁

君を送って併せて春愁を送るを得たり

【語釈】
呂卿：呂殿。遠汀：遠くまで引いたみぎわ。斜日：夕日。悠悠：うれえるさま。離觴：別れの杯。春愁：春の愁い。
(詩詞世界)

送明卿之江西

明卿の江西に之くを送る

明

李攀龍
りよりゆう

青楓颯颯雨凄凄

青楓せいふう颯々さつさつとして雨凄々せいせいたり

秋色遥看入楚迷

秋色はるか遙はるかに看る楚そに入りて迷うを

誰向孤舟憐逐客

誰か孤舟こくわうに向つて逐客ちくかくを憐む

白雲相送大江西

白雲相送る大江の西

【語釈】

郡城：郡役所のある町、ここでは、濟南府（山東省済南市）を指す。明卿：七子の中の一の呉国倫の字、作者の友人。江西：ここでは、江西省の南康（江西省康県）のことで、呉明卿が左遷されたところ。青楓：青いカエデ。凄凄：寒く冷ややかなさま。秋色：秋の景色。楚：長江中流地帯。逐客：追いやられて地方にある者。大江：長江のこと。

和晉陵陸丞早春遊望

唐

杜審言
としんげん

晉陵の陸丞の「早春遊望」に和す

獨有宦遊人

ひとり 宦遊の人のみ有りて

偏驚物候新

偏えに 物候の新たなるを驚く

雲霞出海曙

雲霞 海を出でて曙け

梅柳渡江春

梅柳 江を渡たって春なり

淑氣催黃鳥

淑氣 黃鳥を催し

晴光轉綠蘋

晴光 綠蘋を転ず

忽聞歌古調

忽ち 古調を歌うを聞き

歸思欲沾巾

歸思 巾を沾おさんと欲す

【語釈】

晉陵：江蘇省常州府武進県。陸丞：不明、「丞」は、県の次官。遊望：出遊して景色を眺望すること。宦遊：故郷を離れてほかの地方に行く役人のこと。物候：万物が気候に応じて移り変わる事。雲霞：雲と、かすみ。曙：夜が明ける。淑氣：春の和気。黃鳥：朝鮮うぐいす。晴光：明るい日の光。綠蘋：浮草。古調：古風な調子の詩。歸思：故郷に帰りたいと思う心。巾：ハンカチ。沾：涙でぬらすこと。

(唐詩三百首)

送友人入蜀

友人の蜀に入るを送る

唐

李_リ白_{はく}

332

見説蠶叢路

みるなら さんぎよう
見説く 蚕叢の路

崎嶇不易行

きく
崎嶇として 行き易からず

山従人面起

よ
山は 人面従り起り

雲傍馬頭生

ばとう そい
雲は 馬頭に傍いて生ず

芳樹籠秦棧

しんさん こ
芳樹 秦棧を籠め

春流遶蜀城

めぐ
春流 蜀城を遶る

升沉應已定

しょうちん まな
升沉 応に已に定まるべし

不必問君平

くんへい
必ずしも 君平に問わず

【語釈】

見説：聞説と同意、聞くところによれば。蠶叢：蜀の開祖の王、転じて蜀の地。崎嶇：山径の険しいこと。人面：人の顔、鼻先。秦棧：蜀の棧道（岩に穴を開けて横木をはめ込み、それに懸けた架け橋）、秦の時に作られた。升沉：人の運命の浮き沈み。君平：漢の時代の嚴君平、成都で占いを商売にしていた。
(唐詩選)

送友人

友人を送る

唐

李 白

333

青山横北郭

青山 北郭に横たわり

白水遶东城

白水 東城を遶る

此地一爲別

此地 一たび別れを為し

孤蓬萬里征

孤蓬 萬里に征く

浮雲遊子意

浮雲 遊子の意

落日故人情

落日 故人の情

揮手自茲去

手を揮つて 茲より去れば

蕭蕭班馬鳴

蕭々として 班馬鳴く

【語釈】

青山：草木が青々と茂っている山。北郭：都市の城郭の北側。白水：夕日で白く光る川。
東城：都市の東側の城郭。孤蓬：（風に飛ばされて）転がってゆく蓬。遊子：旅人。落日
：夕陽。故人：旧知の友人。情：感情。揮手：手を振る。茲：ここ。蕭蕭：馬の嘶く
声、また、もの寂しいさま。班馬：別れる馬。

（唐詩選）

送丘爲落第歸江東

唐 王維

丘爲きゅうゐの落第らくだいして江東きやうとうに帰るを送る

憐君不得意

憐あわれむ君が意を得ざることを

況復柳條春

況いわんや復またた柳條りゅうじょうの春なるをや

爲客黃金盡

客かくとなりて黃金かうごん尽つき

還家白髮新

家かに還かへりて白髮はくはつ新あらたなり

五湖三畝宅

五湖ごこ三畝さんふの宅たく

萬里一歸人

萬里ばんり一ひとたび帰かへる人ひと

知禰不能薦

禰でいを知りて薦すすむる能あたわず

羞為獻納臣

獻納けんのうの臣た爲るを羞はず

【語釈】

丘爲：盛唐の詩人。落第：科挙に不合格となること。江東：長江下流の南岸地方。五湖：太湖とその他の五つの湖、丘爲の故郷の地。三畝宅：狭い屋敷。禰：後漢の文学者の禰衡。孔融に愛されてその推薦で仕官した、丘爲をならぞえている。獻納臣：皇帝に忠言をする官、王維はこのとき左補闕。

(新釈漢文大系 詩人編 3)

送韓十四江東省親

唐 杜甫

韓十四の江東に親を省するを送る

兵戈不見老萊衣

へいがか 見ず 老萊の衣

歎息人間萬事非

たんそく 嘆息す 人間 万事の非なるを

我已無家尋弟妹

我已に家の弟妹を尋ぬる無く

君今何處訪庭闈

君今 何の処にか 庭闈を訪う

黃牛峽靜灘聲轉

こうぎゆう 峽 靜かにして 灘聲 轉じ

白馬江寒樹影稀

白馬江 寒くして 樹影 稀なり

此別應須各努力

此の別 應に 須らく各おの 努力すべし

故鄉猶恐未同歸

故郷 猶お恐る 未だ 同じく歸らざるを

【語釈】

韓十四：不詳。省：帰省する。老萊衣：兵戈 安史の乱を指す兵乱をいう。老萊衣：老萊子（ろうらいし）は、両親に仕えた人である。老萊子が「〇歳になっても、身体に派手な着物を着て、子供の格好になって遊び、子供のように愚かな振る舞いをし、また親のために食事を運ぶ時もわざと転んで子供が泣くように泣いた。これは、老萊子が「〇歳の年寄りになって若く美しくないところを見せると、息子もこんな歳になったのかと親が悲しむのを避け、また親自身が年寄りになったと悲しまないように、こんな振る舞いをしたのである。『二十四孝』の一人である、韓十四をたとえて言う。庭闈 闈は奥むきの小門、庭闈は親のいる奥の場所。杜甫は父を亡くして義母が山東にいる。洛陽の実家に母を迎えたい、そこに杜甫が帰ることをいう。黃牛峽：峽名、三峽の一角で西陵峽の末端の部分にある。長江にある三峽のことで、天險として有名、高崖の間に石があつて、人が刀を負って牛を牽くがごとくであり、人は黒く牛は黄いろ。白馬江：崇慶州東北十里にある、蜀州からの出発点と考えられる。努力 自愛すること、安史の乱が平定されていないのに却って大丈夫か、ということ。故郷：洛陽。同歸：韓とおなじく洛陽にかえること。

（杜甫詩全注）

送李少府貶峡中王少府貶長沙

唐 高適

李少府の峡中に貶せられ 王少府の長沙に貶せらるるを送る

嗟君此別意何如

嗟く君が此の別れ意や何如

駐馬銜栢問謫居

馬を駐め杯を銜みて謫居を問う

巫峡啼猿數行淚

巫峡の猿啼數行の淚

衡陽歸雁幾封書

衡陽の歸雁幾封の書

青楓江上秋天遠

青楓江上 秋天遠く

白帝城邊古木疎

白帝城邊 古木疎なり

聖代即今多雨露

聖代 即今 雨露多し

暫時分手莫躊躇

暫時 手を分かつも 躊躇すること莫かれ

【語釈】

少府：官名。県の尉（檢察・警察を指揮する職）の雅名。貶：官位をおとされて地方に流されること。峡中：今の三峡地方。長沙：今の湖南省長沙市。嗟：感嘆詞、あゝ。意何如：胸のうちの悲しみは、いかばかりであろうか。駐馬：両少府の馬を引きとめる。銜杯：別れの杯を口にあてる。謫居：配所。巫峡：四川省巫山県の東にある峡谷。三峡の險の一つ。啼猿：猿声。數行淚：幾すじもの涙。衡陽歸雁：衡陽は湖南省南部の町。長沙から約二百キロほど南にある。その北にある衡山には回雁峰という峰があり、北から渡ってきた雁はここから南へは飛ばずに引き返すといわれた。幾封書：何通の手紙。青楓江：長沙の近くを流れる川の名、位置は不明。聖代：りっぱな天子が治める御世。即今：ただいま、現在。雨露：天子の恵みをたとえる。暫時：しばらくの間。分手：別れること。躊躇：去りかねてためらうこと。

（唐詩選）

別舎弟宗一

舎弟宗一に別る

唐

柳宗元

零落殘魂倍黯然

れいらく さんこん ます

零落せる殘魂 倍ます黯然

雙垂別淚越江邊

そうすい べつるい えつこう へん

双垂の別淚 越江の辺

一身去國六千里

いしん くにを去る 六千里

萬死投荒十二年

まんじつ ぼうに投ず 十二年

桂嶺瘴來雲似墨

けいれい しょう 来たりて 雲 墨に似

洞庭春盡水如天

どうてい 春 尽きて 水 天の如し

欲知此後相思夢

この後 相思の夢を 知らんと欲すれば

長在荊門郢樹煙

長く 荊門 郢樹の煙に在り

【語釈】

零落：落ちぶれる。殘魂：ようやく生きながらえている命。黯然：気が晴れないさま。雙垂：両眼から垂れる。投荒：柳州のような辺鄙な地方に流される。瘴：湿気が蒸鬱している気、人に当たると病気になる。荊門：荊州。

送張生

張生を送る

北宋

歐陽修
おうえいしゅう

一別相逢十七春

一別相逢う 十七春

頽顔衰髮互相詢

頽顔 衰髮互いに相詢
たいがん すいびん あいどう

江湖我再爲遷客

江湖に 我れ再び 遷客と爲り
せんかく

道路君猶困旅人

道路 君は猶お旅に困む人
くるし

老驥骨奇心尚壯

老驥 骨奇にして心尚お壯なり
ろうき

青松歲久色逾新

青松 歲久しくして色 逾よ新なり
しよ

山城寂寞難爲禮

山城 寂寞 礼を爲し難し
せきばく

濁酒無辭舉爵頻

濁酒 辞す無かれ 爵を挙げること頻りなるを
しき

【語釈】

頽顔：しわが増え衰えた顔。相詢：互いに確かめ合う。遷客：官位を下げ地方に移される人、左遷される人。骨奇：骨相がすぐれている、ここでは風格がすぐれている。難為禮：十分なもてなしが出来ない。衰髮：髪が抜けた白髪。江湖：川や湖、ここでは地方のこと。老驥：老いた名馬、ここでは英雄が晩年不遇なこと。寂寞：さびしく不自由なさま。爵：酒杯。

代聖集贈別

聖集に代わりて贈別す

南宋

范成大

一曲悲歌水倒流

一曲の悲歌 水は倒流す

尊前何計緩千憂

尊前 何の計か 千憂を緩くせん

事如夢斷無尋處

事は夢の断ゆる如く 尋ぬる処無く

人似春歸挽不留

人は春の帰るに似て 挽けども留まらず

草色粘天鷓鴣恨

草色 天に粘して 鷓鴣 恨み

雨聲連曉鷓鴣愁

雨声 曉に連なりて 鷓鴣 愁う

迢迢綠浦帆飛遠

迢々たる 綠浦 帆 飛ぶこと遠く

今夜新晴獨倚樓

今夜 新晴 独り 樓に倚らん

【語釈】

尊前…酒樽の前。春歸…春が過ぎ去る。鷓鴣…ホトトギス。鷓鴣…中国南方に多い鳥、越雉。迢迢…遙かなさま。

送客遊洞庭湖

客の洞庭湖に遊ぶを送る

明

謝榛

相逢楚客問巴州

楚客そかくに相逢はしゆういて 巴州はしゆうを問とう

此去揚帆湖上遊

此こゝを去さり 帆ふを揚たげて 湖上こゝに遊あそぶ

天漢長連洞庭水

天漢てんかん 長ながく連つなる 洞庭てんかんの水

雲霞半入岳陽樓

雲霞うんげ 半はんば入いる 岳陽がくよう樓

低空白鴈投寒渚

空くうに低たるるの白鴈はくがん 寒渚かんちよに投なじ

隔浦丹楓照暮秋

浦うらを隔へつるの丹楓たんぷう 暮秋ぼしゆうを照てらす

莫向湘君聽鼓瑟

湘君しやうくんに向むかって 鼓瑟こしつを聽きくこと莫なかれ

黃陵月冷不勝愁

黃陵かうりやう 月つき 冷ひやややにして 愁ないに勝たえず

【語釈】

楚客：長江下流、湖南・湖北省地方から来た旅人。巴州：洞庭湖一帯の地。天漢：天の川。岳陽樓：洞庭湖に臨んで建てられた樓、洞庭湖を俯瞰し、君山に對している。丹楓：紅葉した楓。湘君：湘江の伝説上の女神、堯帝の二人の娘で、姉を娥皇・妹を女英といひ、共に舜の妃となったが、舜が没すると、悲しんで湘江に身を投げて水神となったといふ。鼓瑟：鼓と大琴。黃陵：湘君の廟。

離別

離別 りべつ

唐

陸龜蒙 りくきも

丈夫非無淚

丈夫淚無きに非らず あ

不灑離別間

灑そそがず 離別の間

仗劔對尊酒

劔よに仗りて 尊酒そんしゅに對し

耻爲游子顏

游子はの顏を為すを 耻はず

蝮蛇一螫手

蝮蛇ふくだ一たび 手さを螫ささば

壯士疾解腕

壯士と疾く 腕を解く

所思在功名

思しう所は 功名たんに在り

離別何足歎

離別りべつは 何ぞたん歎たんずるに足らん

【語釈】

丈夫：ますらお。灑：涙打ち払うの意。游子：故郷を離れた旅人。耻：恥じる。蝮蛇：毒蛇。螫：毒虫などが刺す。解腕：腕を切り放つ。

胡笳歌送顔真卿使赴河隴

唐 岑 參

胡笳の歌 顔真卿が使いして河隴に赴くを送る

君不聞胡笳聲最悲

君聞かずや 胡笳の聲 最も悲しきを

紫髯綠眼胡人吹

紫髯綠眼の 胡人 吹く

吹之一曲猶未了

之を吹いて 一曲 猶お 未だ了らざるに

愁殺樓蘭征戍兒

愁殺す 樓蘭 征戍の兒

涼秋八月蕭關道

涼秋 八月 蕭關の道

北風吹斷天山艸

北風 吹断す 天山の草

崑崙山南月欲斜

崑崙山南 月 斜めならんと欲す

胡人向月吹胡笳

胡人 月に向いて 胡笳を 吹く

胡笳怨兮將送君

胡笳の怨 將に 君を送らんとす

秦山遙望隴山雲

秦山 遙かに望む 隴山の雲

邊城夜夜多愁夢

邊城 夜々 愁夢 多し

向月胡笳誰喜聞

月に向かいて 胡笳 誰か聞くを喜ばん

【語釈】

胡笳：西方の異民族の箏笛。顔真卿：字は清臣、諡は文忠、玄宗以降四代に仕えて、安祿山の乱で大功を挙げた、書家として名高い。河隴：甘肅省東南部。紫髯：赤いほおひげ、緑眼：青い目。胡人：西域の人種。愁殺：ひどく愁えさせる。樓蘭：新疆ウイグル自治区東南部にあった幻の都市。征戍兒：国境守備の兵士。涼秋：涼しい秋。蕭關：甘肅省東南部に接する寧夏回族自治区の固原の東南にある関。吹斷：吹きちぎる。天山：天山山脈。崑崙山：崑崙山脈。怨：うらみがましい感情。秦山：陝西省の山。隴山：甘肅省東南部にあ

る山。邊城：辺疆の町。愁夢：心配のあまりにみる夢、愁いをふくんだ夢。

〔唐詩選〕

◆ 客旅編

南樓望

南樓の望

唐

盧僎

去國三巴遠

国を去りて 三巴遠し

登樓萬里春

樓に登る 万里の春

傷心江上客

心を傷ましむ 江上の客

不是故郷人

是れ 故郷の人にあらず

【語釈】

南樓望：南樓からの眺め。国：国都長安を指す。三巴：今の四川省東部一帯の地を指す。万里春：万里のかなたまで春景色である。江上客：南樓の下を流れる川のほとりを往来する旅人。
(唐詩選)

見渭水思秦川

渭水を見て秦川を思う

唐

岑参

344

渭水東流去

渭水東に流れ去る

何時到雍州

何れの時か 雍州に到る

憑添兩行淚

憑りて 兩行の涙を添えて

寄向故園流

寄せて 故園に向って流さん

【語釈】

渭水：黄河最大の支流、甘肅省隴西県の鳥鼠山に源を発し、長安を過ぎ、最後に黄河に合流する。秦川：長安の地方。雍州：陝西省・甘肅省および青海省の一部にあたる。憑：頼りとする、頼む。兩行淚：兩眼からあふれる涙。添：川の流れに加えること。寄：言付ける。故園：ふるさと。長安の自宅を指す。

(唐詩選)

靜夜思

静夜思

唐

李白

牀前看月光

牀前 月光を見る

疑是地上霜

疑うらくは是れ 地上の霜かと

舉頭望山月

頭を挙げて 山月を望み

低頭思故郷

頭を低れて 故郷を思う

(唐詩選)

憶東山

東山を憶う

唐 李白

不向東山久

東山に向わざること久し

薔薇幾度花

薔薇幾度か花さく

白雲還自散

白雲還た自ずから散ず

明月落誰家

明月誰が家にか落つ

【語釈】

東山：紹興市の西南にある山。薔薇：東山に薔薇洞がある、その薔薇。落：照らす。

絶句

絶句

唐 杜甫

江碧鳥逾白

江碧にして鳥逾白く

山青花欲然

山青くして花然えんと欲す

今春看又過

今春看又過ぐ

何日是歸年

何れの日か是れ歸年ならん

【語釈】

碧：みどりいろ、エメラルドグリーン。逾：いよいよ。然：もえる。：燃。紅い花が恰も焔をあげて燃え出すかのように、強烈に咲いているさま。看：みるみるうちに。歸年：郷里に帰る年。

(唐詩選)

聞鴈

鴈を聞く

唐

韋應物

故園眇何處

故園眇として何れの処ぞ

歸思方悠哉

歸思方に悠なる哉

淮南秋雨夜

淮南秋雨の夜

高齋聞鴈來

高齋に雁の來たるを聞く

【語釈】
聞雁：雁の鳴く音を聞きながら、故郷を思う。故園：ふるさと。眇：はるかかなた。歸思：故郷に帰りたいと思う心。方：まさしく。悠：思う心の果てしないさま。淮南：淮水の南、滁州を指す。高齋高樓にある郡齋。郡齋は郡の太守がいる役所。
(唐詩選)

雜詩三首其一

雜詩三首 其の一

唐

王維

君自故鄉來

君故郷自り來る

應知故鄉事

応に故郷の事を知るべし

來日綺窗前

來たりし日綺窓の前

寒梅着花未

寒梅花を着けしや未だしや

【語釈】

故郷：作者の故郷。綺窓：美しい模様で飾った窓。未：「いまだしや」と読み、「まだであるか」「まだでしようか」と訳す、疑問の意を示す。
(唐詩三百首)

雑詩三首其二

雑詩三首 其の二

唐

王維

已見寒梅發

已に見る 寒梅の発ひらくを

復聞啼鳥聲

復またた聞く 啼鳥ていちょうの聲

愁心視春草

愁心しゅうしん 春草を視て

畏向玉階生

玉階ぎょかいに向つて 生おそずるを畏る

【語釈】

寒梅：寒中に咲く梅。啼鳥：鳥のさえずり。愁心：愁いに沈んだ心。玉階：玉をちりばめた階段、宮殿のりっぱな階段のこと。
(唐詩選)

宿樟亭驛

樟亭しょうてい驛えきに宿す

唐

白居易

夜半樟亭驛

夜半しやうはん 樟亭しょうてい驛えき

愁人起望郷

愁人しゅうじん 起たちて郷を望む

月明何所見

月明げつめい 何の見る所ぞ

潮水白茫茫

潮水ぼうぼう 白茫茫

【語釈】

樟亭驛：浙江省杭州市にあった宿場。愁人：愁いのある人、作者自身。月明：月明かりの下。何所見：何も見えない。茫茫：遠く果てしないさま。

歸家

家に帰る

唐

杜牧

稚子牽衣問

稚子衣を牽きて問う

歸來何太遲

返り来たること何ぞ太だ遅き

共誰爭歲月

誰と共に歲月を争う

贏得鬢邊絲

贏ち得たり鬢辺の糸

【語釈】

稚子：家に残した幼児。贏得：利得したこと、多くは無駄に得た場合に使う。鬢邊絲：鬢に生じた白毛。

京師得家書

京師にて家書を得たり

明

袁凱

江水三千里

江水三千里

家書十五行

家書十五行

行行無別語

行々別語無し

只道早還鄉

只道う早く郷に還れと

【語釈】

江水：長江の流れ。三千里：都の南京から作者の故郷、松江県華亭までの距離。家書：家からの手紙。行行：どの行にも。毎行。別語：ほかの言葉。

(元明詩概説)

蜀中九日

蜀中九日

唐

王勃

九月九日望郷臺

九月九日望郷臺

他席他郷送客杯

他席他郷客を送る杯

人情已厭南中苦

人情已に厭う南中の苦

鴻雁那從北地來

鴻雁那ぞ北地より來る

【語釈】

蜀：四川省。 九月九日：重陽の節句、高いところに登って酒を飲むならわしがあった。望郷台：玄武山（蜀の東にある）にある高台の名。他席他郷：他郷での宴会。人情：作者自身の感情、望郷の念。已厭：もうあきあきした。南中：ここでは蜀のこと。鴻雁：が。北地：都の長安、又は作者の故郷山西省。（唐詩選）

渡湘江

湘江を渡る

唐

杜審言

遲日園林悲昔遊

遲日園林昔遊を悲しむ

今春花鳥作邊愁

今春花鳥辺愁を作す

獨憐京國人南竄

獨り憐む京国の南竄せられ

不似湘江水北流

似ず湘江の水北流するに

【語釈】 湘江：湘水ともいう。広西チワン族自治区に発して湖南省を北上し、瀟水と合流して洞庭湖に注ぐ。遅日：うららかな春の日のこと。園林：庭園の中の林。昔遊：かつて遊んだ。洞庭湖のこと。邊愁：辺地にある身の憂愁。獨憐：ひとりわが身を憐れん。京時：都の人。南竄：罪によつて南方の土地に流されること。京時：唐詩選

西亭春望

にししていしゆんぼう

唐

賈至

日長風煖柳青青

日長く風暖かにして柳青々たり

北鴈歸飛入窅冥

北鴈帰り飛んで窅冥に入る

岳陽城上聞吹笛

岳陽城上吹笛を聞く

能使春心滿洞庭

能く春心をして洞庭に満たしむ

【語釈】

西亭：湖南省岳陽市の町の西にあった亭。日長：春の日が長い。青青：青々と芽を吹いた。北雁：春になって北へ帰っていく雁。窅冥：奥深くて暗く、見えにくいさま、ここでは大空の遙か彼方をいう。岳陽楼：岳陽城の城郭の西門の高楼、洞庭湖に面している。春心：わが春の愁いを含む思い。(唐詩選)

客中作

客中作

唐

李白

蘭陵美酒鬱金香

蘭陵の美酒鬱金香

玉腕盛來琥珀光

玉腕盛り来たる琥珀の光

但使主人能醉客

但だ主人をして能く客をして酔わしめば

不知何處是他鄉

知らず何れの処か是れ他郷

【語釈】

客中作：旅先での歌。蘭陵：地名、山東省最南端の蒼山（の西南30キロメートル）、棗莊市（の東南東40キロメートル）の中間にある。鬱金香：ミョウガ科の多年草でキノメグサ（鬱金）の香。玉腕：玉杯。他郷：異郷。(唐詩選)

春夜洛城聞笛

春夜洛城に笛を聞く

唐

李白

誰家玉笛暗飛聲

誰が家の玉笛か 暗に声を飛ばす

散入春風滿洛城

散じて春風に入りて 洛城に満つ

此夜曲中聞折柳

此の夜 曲中 折柳を聞く

何人不起故園情

何人か 故園の情を起さざらん

【語釈】

洛城：洛陽の街。玉笛：宝玉でできた笛、笛の美称。暗：暗闇に、密やかに。折柳：折楊柳、横吹曲で別れの情をうたった曲名。故園：故郷。故園情：故郷を思う気持ち、郷愁。(漢詩大系 8)

與史郎中欽聽黃鶴樓上吹笛

唐 李白

史郎中欽と黃鶴樓上にて吹笛を聴く

一爲遷客去長沙

一たび 遷客と爲りて 長沙に去り

西望長安不見家

西のかた 長安を 望めども 家を見ず

黃鶴樓中吹玉笛

黃鶴樓中 玉笛を吹く

江城五月落梅花

江城 五月 「落梅花」

【語釈】

史郎中欽：郎中の官位にある史欽。黃鶴樓：武漢の西南の蛇山北黃鶴（長江右岸）にある樓。一爲：ひとたび…となつてすぐに。遷客：流罪に処せられた者。長沙：湖南省省都。玉笛：玉で作った笛、笛の美称。江城：川沿いの町。落梅花：笛の演奏用の「梅花落」という曲名のこと、悲しみを誘う。(唐詩選)

早發白帝城

早に白帝城を發す

唐 李白

朝辭白帝彩雲間

朝に辭す 白帝 彩雲の間

千里江陵一日還

千里の江陵 一日にして還る

兩岸猿聲啼不盡

兩岸の猿声 啼いて住まざるに

輕舟已過萬重山

輕舟 已に過ぐ万重の山

【語釈】
早：時間帶上、はやいこと。白帝：白帝城のこと、昔の城市（都市）の名。朝：あさ。辭：辭去する。彩雲：朝焼けや夕焼けの雲。江陵：湖北省江陵県。猿聲：四川省東部の巫峽は、（もの悲しげに啼く）猿の声で有名。輕舟：軽やかな小舟。萬重山：幾重にも重なった多くの山々。
（漢詩大系 8）

峨眉山月歌

峨眉山月の歌

唐 李白

峨眉山月半輪秋

峨眉山月 半輪の秋

影入平羌江水流

影は 平羌江水に入つて 流る

夜發清溪向三峽

夜 清溪を發して 三峽に向う

思君不見下渝州

思を君えども 見えず 渝州に下る

【語釈】
峨眉山：四川省西部の名山、月の名所。平羌江：青衣江、峨眉山の東北の麓を流れ、岷江（長江の支流）に合流する。清溪：峨眉山の東南、岷江の畔にある宿場町。渝州：重慶
（漢詩大系 8）

解悶

悶を解く

唐

杜甫

一辭故國十經秋

一たび故国を辞して 十たび秋を経たり

每見秋瓜憶故丘

秋瓜を見る毎に 故丘を憶う

今日南湖采薇蕨

今日 南湖 薇蕨を采る

何人爲覓鄭瓜州

何人が為に 覓む鄭瓜州

【語釈】

解悶…憂さ晴らし。故国…ふるさと、ここでは長安を指す。秋瓜…秋の瓜。故丘…故郷の丘。南湖…湖の名(所在不明)。薇蕨…ぜんまいとわらび。覓…求める。鄭瓜州…杜甫の旧友、鄭審のこと。
(唐詩選)

逢入京使

京に入る使に逢う

唐 岑参

故園東望路漫漫

故園 東に望めば 路漫漫

雙袖龍鐘淚不乾

双袖 龍鐘として 涙乾かず

馬上相逢無紙筆

馬上に相逢うて 紙筆無し

憑君傳語報平安

君に憑って 伝語して 平安を報ぜん

【語釈】

故園…ふるさと、住むべき地。漫漫…路が長々と続いているさま。雙袖…両袖龍鐘…失意のさま。涙を流すさま。相逢…に出逢う、…に(偶然に)出くわす。憑…たのむ。傳語…言伝(ことづて)する。報…知らせる。平安…無事。
(唐詩選)

磧中作

磧中の作

唐

岑 參
しん じん

走馬西來欲到天

馬を走らせて西來 天に到らんと欲す

辭家見月兩回圓

家を辞してより 月の兩回 円なるを見る

今夜不知何處宿

今夜 知らず 何れの処にか宿せん

平沙萬里絶人烟

平沙 万里 人煙 絶ゆ

【語釈】

磧中作：砂漠の中で作った詩。西來：西に向かつてやってきたこと。欲到天：今にも天まで届きそうだ。辞家：家を出てから。月兩回圓：月が二度満月になった、一か月経過したこと回：二廻りすること。平沙：砂漠。人煙：人家から立ち上る炊事の煙。
(唐詩選)

楓橋夜泊

楓橋夜泊

唐

張 繼
ちやう けい

月落烏啼霜滿天

月落ち烏啼いて 霜天に満つ

江楓漁火對愁眠

江楓漁火 愁眠に對す

姑蘇城外寒山寺

姑蘇城外の 寒山寺

夜半鐘聲到客船

夜半の鐘聲 客船に到る

【語釈】

楓橋：中国蘇州にある運河にかかった太鼓橋。霜滿天：霜の下りる気配が天に満ちること。霜は地面から上がってくるものだが、中国では天から降りてくるものと考えられていた。江楓 川沿いの楓の木々。漁火 漁船のいさり火。愁眠 旅愁を抱いてウトウトしながらたまに目が覚める浅い眠り。姑蘇：蘇州の旧名。春秋時代の呉の都。寒山寺：蘇州郊外西5キロの楓橋鎮にある、臨濟宗の寺。
(唐詩選)

聽角思歸

角を聴いて帰るを思う

唐 顧況

故園黃葉滿青苔

故園の黃葉 青苔に滿つ

夢後城頭曉角哀

夢後 城頭 曉角哀しむ

此夜斷腸人不見

此の夜 斷腸 人見えず

起行殘月影徘徊

起ちて行けば 殘月影徘徊

【語釈】

角：軍中で吹く角笛の音。思歸：望郷の念。故園：故郷の庭園。黃葉：黄色い落ち葉。青苔：青い苔。夢後：夢が覚めたあと。城頭：町の城壁の上から。曉角：曉の時を告げる角笛。哀：悲しげに鳴り響く。斷腸：非常に悲しい様子。起行：起床から起き上がったって（庭に）行けば。殘月：明け方の空に消えずに残っている月。影：わが影、または、月影。徘徊：行ったり来たりする。（唐詩選）

山店

山店

唐 盧綸

登登山路何時盡

登々として 山路 何れの時にか尽きん

決決溪泉到處聞

決々として 溪泉 到處に聞く

風動葉聲山犬吠

風は葉聲を動かして 山犬吠え

一家松火隔秋雲

一家の松火 秋雲を隔つ

【語釈】

山店：山の中の旅館。登登：どんどん登って行くこと。決決：谿のせせらぎを表す擬声語。松火：松の木を燃やした灯火。（三体詩）

與從弟瑾同下第後出關

唐 盧綸

從弟瑾（同）下第（出）出關

出關愁暮一沾裳 関を出でて愁暮一に裳を沾（お）おす

滿野蓬生古戰場 野に滿ち蓬（ほ）は生ず古戰場

孤村樹色昏殘雨 孤村の樹色 殘雨に昏（く）く

遠寺鐘聲帶夕陽 遠寺の鐘聲 夕陽を帶（づ）づ

【語釈】

從弟：（自分より年下の男の）いとこ。瑾：いとこの名。同：（…と）いつしよに。下第：科挙の郷試落第する出關：関中（…現・陝西省中部で、四つの関の中の地。中心は都の長安）の地より出る。言別：別れの言葉を告げる。愁暮：日が暮れたことを愁える。一：もつばら。沾：ぬらす。しめらす。うるおす。裳：衣服。滿野：野原いっぱい。蓬：ヨモギ。孤村：ぼつんと離れたところにある村。昏：（日が暮れて）くらい。殘雨：残り雨。（三体詩）

湘南即事

湘南即事

唐 戴叔倫

盧橘花開楓葉衰 盧橘 花開きて 楓葉衰（う）う

出門何處望京師 門を出でて 何れの処にか 京師を望（ま）まん

沅湘日夜東流去 沅湘 日夜 東に流（れ）れ去る

不為愁人住少時 不為愁人の為に 住（ま）まること 少時（も）もせず

【語釈】

湘南：湖南省湘潭県の西。即事：その場の事を詠じた詩。盧橘：金柑。楓葉：楓の葉。出門：城門を出ること。郊外へ行く意。京師：帝都。沅湘：沅江と湘江、共に湖南省を流れて洞庭湖に注ぐ川の名。愁人：愁いを抱く人。（三体詩）

秋思

しゅうし

唐

張籍

洛陽城裏見秋風

らくようじょうり 秋風を見る

欲作家書意万重

家書を作らんと欲すれば 意万重

復恐忽忽說不尽

復た恐る 忽々 説いて尽さざるを

行人臨発又開封

行人 発するに臨みて 又た封を開く

【語釈】

城裏：城壁に囲まれた市街の中。家書：家族へあてた手紙。意万重：「あれも書きたい、これも書きたい」と、思いが幾重にも重なること。忽忽：慌ただしいさま。行人：飛脚。

(唐詩選)

柳州二月榕葉落盡偶題

唐

柳宗元

柳州二月榕葉落ち尽くして偶々題す

宦情羈思共悽悽

かんてい 羈し 共に悽々

春半如秋意轉迷

春半ばなるに秋の如く 意 転た迷う

山城過雨百花尽

山城の過雨 百花 尽き

榕葉滿庭鶯乱啼

榕葉 庭に満ちて 鶯は乱れ啼く

【語釈】

柳州（広西壮族自治区の柳州市）。榕葉：榕樹（あこう）の葉。偶題：たまたま詩をつくる。宦情：役人としての思い。羈思：旅愁、ここでは地方勤めの愁。淒淒：わびしく悲しいさま。意：思い。転：まします。迷：悲しみ悼む。山城：山あいの町、柳州を指す。過雨：通り雨。

(柳宗元詩選)

尤溪道中

尤溪道中
ゆうけいどうちゆう

唐

韓偓
かんあく

水自潺湲日自斜

水は自ら潺湲 日は自ら斜めなり

盡無雞犬有鳴鴉

尽く雞犬無くして 鳴鴉有り

千村萬落如寒食

千村萬落 寒食の如く

不見人煙空見花

人煙を見ず 空しく花を見る

【語釈】

尤溪：中国福建省三明市の県。道中：旅の途中（で作った詩）。潺湲：水がさらさらと流れるようす。盡無雞犬：にわとりや犬がまったくない、軍隊が通過したあとの惨状を表している。有鳴鴉：カラスが鳴いているだけ、死肉を食っている情景を描写している。千村萬落：多くの村落。寒食：冬至の日から数えて百五日目の日のこと、陽暦では四月の初めに当たる、この日を挟んで三日間は火を断ち、煮たきしないで冷たい物を食べる風習があった。人煙：人家から立ちのぼる炊事の煙。

（三体詩）

渡桑乾

桑乾を渡る

唐 賈島

客舍并州已十霜

客舍并州已に十霜

歸心日夜憶咸陽

歸心日夜咸陽を憶つ

無端更渡桑乾水

端無くも更に渡る桑乾の水

却望并州是故郷

却つて并州を望めば是れ故郷

【語釈】
桑乾：桑乾河、北京の西南を流れ、永定河となる。并州：山西省太原市。客舍：旅ぐらしをする。十霜：十年、「霜」は星霜。歸心：故郷に帰りたいと思ふ心。咸陽：長安の西北にあり、秦の都があつた所、ここでは長安を指す。憶：思い出す。無端：思いがけず。更渡：更に（桑乾河を）渡つて遠方へ行く。却：ふり返つて。望：眺める。故郷：住むべき所。
(唐詩選)

宿武關

武関に宿す

唐 李涉

遠別秦城萬里遊

遠く秦城に別かれ万里に遊ぶ

亂山高下出商州

乱山高下商州を出ず

關門不鎖寒溪水

関門鎖さず寒溪の水

一夜潺湲送客愁

一夜潺湲として客愁を送る

【語釈】

武關・商州：共に秦の地名。潺湲：水の流れるさま。客愁：旅の愁い。
(三体詩)

宿嘉陵驛

嘉陵驛に宿す

唐

雍陶

離思茫茫正值秋

離思 茫茫として 正に秋に値う

每因風景卻生愁

風景に因る毎に 卻って愁いを生ず

今宵難作刀州夢

今宵 作し難し 刀州の夢

月色江聲共一樓

月色 江聲 共に一樓

【語釈】

嘉陵驛：嘉陵江（四川省を北から南に縦断し、重慶で長江に注ぐ川）にある宿場。離思：遠い故郷を偲ぶ気持。茫茫：果てしなく広いさま。值：会う。因：親しむ。刀州：四川省広元県。
（三体詩）

峽中行

峽中行

唐

雍陶

兩岸開盡水回環

兩岸 開き尽きて 水 回環す

一葉纔通石罅間

一葉 纔に通ず 石罅の間

楚客莫言山勢險

楚客 言うこと莫かれ 山勢 険なりと

世人心更險於山

世人の心は更に 山よりも険なり

【語釈】

峽中：両側の山の間。回環：回り廻る。一葉：一小舟。石罅：石の隙間。楚客：湖南省・湖北省の旅人。山勢：山の形勢。

邯鄲至夜思家

邯鄲至夜 家を思う

唐

白居易

邯鄲驛裏逢冬至

邯鄲驛裏 冬至に逢う

抱膝燈前影伴身

膝を抱きて 灯前影身に伴う

想得家中夜深坐

想得たり 家中夜深に坐し

還應說著遠行人

還た 応に 遠行の人を 說著するなるべし

【語釈】

邯鄲：河北省南部の都市、春秋時代の趙の都。家中：故郷の家の人。遠行人：遠く旅する人、作者。説著：話をする、著は助字。

旅懷

リよかい

唐

杜荀鶴

月華星彩坐來收

月華 星彩 坐來 収まる

嶽色江聲暗結愁

岳色 江声 暗に 愁いを結ぶ

半夜燈前十年事

半夜 灯前 十年の事

一時和雨到心頭

一時 雨に和して 心頭に到る

【語釈】

旅懷：旅中のおもい。月華：月明かり。星彩：星々のきらめき。坐來収：次第にうすれていく。坐來は：いながらにして。嶽色：山の色。江聲：川の流れる音。半夜：夜中。和雨：雨音にあわせて、和は調子を合わせるの意。心頭：こころ、心中に同じ。
(三体詩)

閑情

閑情 かんじょう

唐

孟遲 もうち

山上有山歸不得

山上に山有り 帰り得ず

湘江暮雨鷓鴣飛

湘江の暮雨 鷓鴣 飛ぶ

蘼蕪亦是王孫草

蘼蕪も 亦た是れ 王孫の草

莫送春香入客衣

春香を送りて 客衣に入らしむこと莫かれ

【語釈】

閑情：静かな心。山上有山：出の字を意味する隠語。湘江：現在の長江のこと。暮雨：夕暮れ時の雨。鷓鴣：きじ科の鳥。鷓鴣の鳴き声は「行不得也哥哥（行つてはいけない兄さん）」と聞こえる。蘼蕪：セリ科の植物。王孫草：楚辞「招隠士」にある「王孫遊兮不歸、春草生兮萋萋。」に基づく、不歸の隠語。客衣：旅人の衣、ここでは遠くにいる良人を意味する。
(三体詩)

回郷偶書

郷に回りにて偶たま書す

唐

賀知章 がちしやう

少小離家老大回

少小にして家を離れて老大にして 回る

郷音無改鬢毛摧

郷音 改まる無く 鬢毛 摧く

兒童相見不相識

兒童 相見て 相識らず

笑問客從何處來

笑つて問う 客は何れの処從り 来るかと

【語釈】

少小：若いとき。老大：老年。郷音：故郷の言葉。鬢毛摧：髪が白くなること。
(唐詩三百首)

回郷偶書其二

郷に回^{かえ}りて偶^{たま}たま書す

唐

賀^が知^ち章^{しょう}

離別家郷歲月多

家郷に離別して歲月多し

近來人事半消磨

近來人事半ばは消^{しょう}磨^ます

惟有門前鏡湖水

惟だ門前鏡湖の水のみ有りて

春風不改舊時波

春風改めず旧時の波

【語釈】

離別：はなれ別れる。家郷：故郷。近來：近頃。このごろ。人事：人の世の出来事。消磨：磨り減ること。唯有：ただ。だけがある。鏡湖：浙江省紹興市越城區にあった湖。舊時：昔の時。

淮上早發

淮上早に発^{つと}す

北宋

蘇^そ軾^{しやく}

澹月傾雲曉角哀

澹^{たん}月は雲に傾きて曉^{ぎょう}角^{かく}哀^{かな}し

小風吹水碧鱗開

小風水を吹いて碧^{へき}鱗^{りん}開^{ひらく}

此生定向江湖老

此の生定めて江湖に向^{むか}って老いん

默數淮中十往來

黙して数うれば淮中十たび往來

【語釈】

澹月：淡い光の月。曉角：曉を告げる角笛。碧鱗：緑色の鱗のようなさざ波。向：於いて。江湖：江南の江湖、世間を言うことが多い。
(漢詩大系17)

泊衡州

衡州に泊す

南宋

范成大

客裏仍哦對雨吟

客裏 仍に 哦す 對雨の吟

夜來星月曉還陰

夜來 星月 曉 還た 陰る

空江十日無春事

空江 十日 春事 無し

船到衡陽柳色深

船 衡陽に到れば 柳色 深し

【語釈】

衡州：湖南省衡陽市。客裏：旅中。哦：吟詠する。空江：何もない江上。春事：春の樂しいこと。衡陽：衡山（湖南省衡陽市にある道教の五岳の一つ）の南の地方。

劍門道中遇微雨

劍門道中微雨に遇う

南宋

陸游

衣上征塵雜酒痕

衣上の征塵 酒痕を雜う

遠游無處不消魂

遠游 処として魂を消さざるは無し

此身合是詩人未

此の身 合に是れ詩人なるべきや 未や

細雨騎驢入劍門

細雨 驢に騎って劍門に入る

【語釈】

劍門：四川省劍閣県にある山で、北方から関所があった。征塵：旅の埃消魂：心を烈しく動揺させること
(漢詩大系19)

庚子正月五日曉過大皋渡

南宋

楊萬里

庚子正月五日曉到大皋渡を過ぐ

霧外江山看不真

霧外の江山 見て真ならず

只憑雞犬認前邨

只だ 雞犬に憑つて 前村を認む

渡船滿板霜如雪

渡船の滿板 霜雪の如し

印我青鞋第一痕

印す 我が青鞋の第一痕

【語釈】

滿板：板の上一面。青鞋：わらじ

夜間風雨有感

夜 風雨を聞きて感あり

北宋

張耒

留滞招提未是歸

招提に留滞して未だ是れ歸らず

卧聞秋雨響疏籬

卧して聞く 秋雨の疎籬に響くを

何當粗息飄萍恨

何か 當に粗ほ 飄萍の恨みを息めて

却誦僧窗聽雨詩

却つて僧窓 聽雨の詩を誦すべき

【語釈】

留滞：留まる。招提：寺院。疏籬：疎らな籬。飄萍：漂える浮き草のような漂泊の身。却：故郷に帰って。

縦歩至董氏園亭

宋

陳與義 ちんよぎ

槐葉層層新綠生

かいよう そうそう
槐葉層々新緑生ず

客懷依舊不能平

客懷旧に依りて平かなる能わず あた

自移一榻西窗下

おの
自ずから一榻を移す西窓の下

要近叢篁聽雨聲

叢篁に近づきて雨声を聴くを要す

【語釈】

槐葉：エンジュの葉。層層：幾重にも重なっているさま。客懷：旅中の思い。榻：長いす。叢篁：竹藪。要：願う。

清明日舟次吳門

清明の日舟吳門に次る こもん やど

南宋

方岳 ほう かく

篷窗恰受夕陽明

ほうそう あたか
篷窓恰も夕陽を受けて明かなり

楊柳梨花半月程

楊柳梨花半月の程

老去不知寒食近

老い去りて知らず寒食の近きを

一篙烟水載春行

一篙の煙水春を載せて行く

【語釈】

清明：清明節、春分から十五日目。篷窗：舟の苫の窓。寒食：冬至から百五日目、この前後三日間は火を使うことを禁じた。一篙：棹一本ほどの長さ。烟水：霧の懸かった水。

曉行

曉行 ぎやうこう

宋

晁冲之 ちやうちゅうし

老去功名意轉疏

老い去りて 功名に意 転た疎なり うたそ

獨騎瘦馬取長途

独り 瘦馬に騎りて 長途を取る そうばの ちやうと

孤村到曉猶燈火

孤村 曉に到りて 猶お 灯火

知有人家夜讀書

知んぬ 人家に 夜書を読む 有るを

【語釈】

轉…いよいよ。疏…心がうとく熱心で無いこと。長途…長旅。

宿西門外

宿西門外

北宋

晁端友 ちやうたんゆう

寒林殘日欲棲鳥

寒林の 殘日 烏を棲ま^すんしめんと欲す へきり たちまろ

壁裏青燈乍有無

壁裏 青灯 乍 ち有無 へきり せいとう たちまろ

小雨愔愔人假寐

小雨 愔々として 人 仮寐す いんいん かりね

卧聽疲馬齧殘芻

卧^がして聴く 疲馬の 殘芻を齧^かむを そうば ざんすう

【語釈】

寒林…寒々として人氣の無い林。壁裏…壁に面する。有無…明滅。愔愔…安んじ和らぐさま。假寐…衣冠を着けずにねる。殘芻…残ったまぐさ。

無極道中

無極道中

金

劉

瞻

銀河淡淡瀉秋光

銀河 淡淡として 秋光を瀉ぎ

缺月梢梢挂晚涼

欠月 梢々 晚涼に挂かる

馬上西風吹夢斷

馬上 西風 夢を吹きて断つ

隔林烟火路蒼茫

林を隔つるの 烟火路 蒼茫

【語釈】

淡淡：水が一杯に満ちて静かに流れるさま。瀉：上からそそぎかける。缺月：片割れ月。梢梢：木の梢。挂：ひっかかる。蒼茫：青々として果てしなく広がるさま。

自鄧州幕府暫歸秋

金

元好問

鄧州の幕府より 暫く秋林に帰る

升斗微官不療飢

升斗の微官 飢を療せず

中林春雨蕨芽肥

中林の春雨に 蕨芽 肥ゆ

歸來應被青山笑

歸來 応に 青山に笑わるべし

可惜緇塵染素衣

惜しむべし 緇塵の 素衣を染むを

【語釈】

鄧州：河南省南陽市。幕府：将軍の本営。秋林：秋の（稔りのある）林。升斗：僅かの。緑。中林：林中。蕨芽：ワラビの芽、食用とする。被：……れる、られる。青山：青々とした山。緇塵：黒い色の塵、俗塵。素衣：白い衣。

南關

南関

金

元好問

風裏秋蓬不自由

ふうり しゅうほう 自由ならず

一生幾度過隆州

いっくたひ りゅうしゅう 隆州を過ぐ

無情團栝關前水

だんはく 無情なり 団栝 関前の水

流盡朱顏到白頭

朱顔を流し尽くして白頭に到る

【語釈】

風裏：風の中。秋蓬：秋の蓬、根から離れて漂う。隆州：四川省南充市一带。朱顔：少年の紅顔。

將赴金陵始出閶門夜泊

明 高啓

將に金陵に赴かんとして始めて閶門を出でて夜泊す

煙月籠沙客未眠

煙月 沙を籠めて 客 未だ眠らず

歌聲燈火酒家前

歌声 灯火 酒家の前

如何纔出閶門宿

いかに わずか 如何 纔かに 閶門を出でて 宿すれば

已似秦淮夜泊船

しんわい 已に 秦淮 夜泊の船に似たり

【語釈】

金陵：南朝の首都、南京。閶門：江蘇省蘇州市にあった城門の一つ。夜泊：夜舟を泊して眠る。煙月：おぼろ月。籠：蔽う。秦淮：金陵の近くの煙花風流の地。
(杜牧の「泊秦淮」による。)

初發白河

初めて白河を発す

明

歸有光 きゆうこう

邊風刮地起黃沙

辺風 地を刮けずって 黃沙こうさ 起こり

三月長安不見花

三月 長安 花を見ず

卻憶故鄉風景好

却かえって 憶おぼう 故郷 風景の好きを

櫻桃初熟正還家

櫻桃 初まめて熟して 正まに家に還かえらん

【語釈】

邊風：朔北の風。櫻桃：ユスラウメ。

竹枝詞

竹枝詞

明

何景明 なんけいめい

十二峰頭秋草荒

十二峰頭 秋草 荒る

冷烟寒月過瞿塘

冷煙 寒月 瞿塘を過くぐ

青楓江上孤舟客

青楓江上 孤舟せいかうこうじようの客

不聽猿聲亦斷腸

猿声を聴かざるも 亦た 断腸

【語釈】

竹枝詞：劉禹錫が、配流先の朗州の民謡にあわせて作った歌曲の一分類、男女の情を述べた物を期限とし、各地の人情、風俗を述べた物。十二峰：巫山の十二峰。冷煙：冷たい水上の靄。瞿塘：瞿塘峽（長江本流に位置する峽谷で、三峽の一つ）。青楓江：長沙の近くを流れる川の名、とされているが詩の内容と合わず、位置不明）。『水径注』常に高猿の長嘯有り、屬引すること凄異、空谷に伝響し、哀転久さしくして絶ゆ。故に漁者歌いて曰く：巴東の三峽巫峽長し、猿鳴三声涙裳を沾す。

淮西夜坐

わいせいやざ
淮西夜坐

明

袁凱
えんがい

蕭蕭風雨滿關河

蕭々たる風雨 関河に満つ

酒盡西樓聽鴈過

酒尽きて 西樓 鴈を聴きて過ぐ

莫怪行人頭白盡

怪しむ莫かれ 行人 頭白の尽するを

異郷秋色不勝多

異郷の秋色 多きに勝えず

【語釈】

淮西：淮水（淮河：長江・黄河に次ぐ第三の大河。黄河と長江の間を東西に流れており、下流にある湖で二手に分かれ、放水路は黄海に注ぎ、本流は長江につながっている。）の西の地方。蕭蕭：もの寂しいさま。關河：関所の山や川。頭白盡：頭髮が全く白くなること。異郷：他郷。秋色：秋景色。

自紅花埠至剡城道中作

こうかふ
紅花埠より剡城に至る道中の作

清

楊嗣震
ようししん

瀟瀟絲雨過剡城

瀟々たる 糸雨 剡城を過ぐ

土潤平田漸可耕

土潤いて 平田 漸く 耕すべし

却怪世情難饜足

却って怪しむ 世情の 饜足し難きを

居人求雨客求晴

居人は 雨を求め 客は 雨を求む

【語釈】

紅花埠：所在不明。剡城江省紹興市に位置する県級市。瀟瀟：糸の如き雨の盛んに降るさま。漸：だんだん。饜足：満足。

過黃州

黃州を過ぐ

清

張問陶
ちやうもんとう

蜻蛉一葉獨歸舟

蜻蛉せいらい一葉どくき獨歸の舟

寒浸春衣夜水幽

寒は春衣を浸し夜水幽なり

我似橫江西去鶴

我は江を横ぎり西に去る鶴に似て

月明如夢過黃州

月明に夢の如く黃州を過ぐ

【語釈】

黃州：湖北省黃岡市一帶。蜻蛉：とんぼ。一葉：小さな船。

旅夜書懷

旅夜書懷

唐 杜 甫

細草微風岸

細草 微風の岸

危檣獨夜舟

危檣 独夜の舟

星垂平野闊

星垂れて 平野闊く

月湧大江流

月湧いて 大江流る

名豈文章著

名は豈 文章にて著われんや

官應老病休

官は応に 老病にて休むべし

飄飄何所似

飄々 何の似たる所ぞ

天地一沙鷗

天地の一沙鷗

【語釈】

旅夜：旅の途中での宿泊。書懷：胸の思いを書きしるす。細草：細い草。微風：そよ風。危檣：高い帆柱。獨夜：ただひとりで自分だけ起きている夜。舟：小船。星垂：地の涯まで星空が見えるさま。闊：（見わたして）幅広である。湧：わき出る。大江：長江。名：名声。豈：どうして。だるうか、疑問・反語の助辞。文章：文学。著：あらわす。官：官職。應：当然。であるう。老病：年をとって病身であること。休：やむ。飄飄：風に吹かれて軽く上がるさま、さまようさま。何所似：何に似ているだるうか。何所：どこ、どんな、何、後に動詞を附けて、行為の目標または帰着するところをいう。天地：天地。沙鷗：砂浜にいるカモメ。

（唐詩選）

江南旅懷

こうなんりよかい
江南旅懷

唐

そ
祖
えい
詠

楚山不可極

そざん
楚山 極む可からず

歸路但蕭條

た
歸路 但だ蕭條たり

海色晴看雨

み
海色 晴れて雨を看

江聲夜聽潮

うしお
江聲 夜潮を聽く

劍留南斗近

劍は南斗に留まりて近く

書寄北風遙

書は北風に寄りて遙かなり

爲報空潭橋

爲に報ず 空潭の橋

無媒寄洛橋

なかつち
洛橋に寄せんに媒無しと

【語釈】

楚山：楚の国の山々。蕭条：物寂しいさま。海色：海の色。江聲：長江の波の音。
聽潮：潮騒の音に耳をすます。南斗：星の名。劍留南斗近：『晋書』卷三十六、張華
伝。書寄北風遙：李陵の「蘇武に答うるの書」(『文選』卷四十一)に「時に北風ほくふ
うに因り、復た德音ふくいんを恵せよ」(時因北風、復惠德音)とある。報：返事をす
る。空潭：人気ひとけのないふち。橋：たちはな。蜜柑の一種。媒：ここではたよ
りを伝えてくれる人。洛橋：洛陽の町を流れる洛水にかけられた橋。
(唐詩選)

歳暮歸南山

歳暮 南山に帰る

唐

孟浩然

375

北闕休上書

北闕 上書を休め

南山歸敝廬

南山 敝廬に帰る

不才明主棄

不才 明主に棄てられ

多病故人疎

多病 故人に疎んぜらる

白髮催年老

白髮 年老を催し

青陽逼歲除

青陽 歲除に逼る

永懷愁不寐

永懷 愁えて寐ねず

松月夜窗虛

松月 夜窓に虚し

【語釈】

北闕：天子の宮城。上書：君主、役所などに文書をたてまつること。南山：終南山。敝廬：あばらや、自分の家の謙称。故人：友人。年老：年老いること。青陽：陽春。歲除：大晦日。永懷：長年の心の思い。松月：松にかかった月。

（新釈漢文大系 詩人編 3）

太白山下早行至横渠鎮書崇壽院壁

北宋 蘇軾

太白山下早行して、横渠鎮に至り、崇壽院の壁に書す

馬上續殘夢

馬上に殘夢を續ぎ

不知朝日昇

朝日の昇るを知らず

亂山橫翠幃

亂山翠幃横わり

落月澹孤燈

落月孤燈澹わし

奔走煩郵吏

奔走郵吏を煩し

安閑愧老僧

安閑老僧に愧ず

再遊應眷眷

再遊応に眷々たるべし

聊亦記吾曾

聊か亦た吾曾を記せよ

【語釈】

太白山：陝西省の西南部にある山。横渠鎮：陝西省寶雞市眉縣東部。崇壽院：不明。殘夢：明け方近くになつてうとうとしながら見る夢。翠幃：緑の嶺。郵吏：宿場の役人。安閑：安らかで静かな暮らし。眷眷：心にとめて思う慕うさま

冬日移舟入峽避風

冬日舟を移して峽に入り風を避く

南宋

戴復古

棹入黄蘆浦

棹さし入る 黄蘆の浦

驚飛白鷺群

驚きて飛ぶ 白鷺の群

霜華濃似雪

霜華 濃やかなること 雪に似

水氣盛於雲

水氣 雲よりも盛んなり

市遠炭增價

市 遠くして 炭 価を増し

天寒酒策勳

天 寒くして 酒 勳を策す

同舟有佳士

同舟 佳士有り

擁被共論文

被を擁して 共に文を論ず

【語釈】

黄蘆：枯れた蘆。霜華：美しい霜。水氣：水から立ち上る靄。酒策勳：酒が寒さを防ぐのに役立つ。擁被：衣を被る。

年華

年華

宋

陳與義
ちんよぎ

去國頻更歲

国を去りて 頻りに 歳を更え

爲官不救飢

官となりて 飢えを救わず

春生殘雪外

春は生ず 殘雪の外

酒盡落梅時

酒は尽く 落梅の時

白日山川映

白日 山川 映じ

青花草木宜

青花草木 宜し

年華不負客

年華 客に 負かず

一一入吾詩

一一 吾が詩に入る

【語釈】

年華…年光、光陰。更…経る。

在武昌作

武昌に在りて作る

明

徐禎卿
じよていききやう

洞庭葉未下

洞庭葉未だ下らず

瀟湘秋欲生

瀟湘秋生せんと欲す

高齋今夜雨

高齋今夜の雨

獨卧武昌城

獨卧す武昌城

重以桑梓念

重ねて以う桑梓の念

凄其江漢情

凄其たり江漢の情

不知天外鴈

知らず天外の鴈

何事樂南征

何事ぞ南征を楽しむ

【語釈】

武昌：湖北省武漢市武昌区。洞庭：湖南省岳陽市。瀟湘：瀟水と湘水が合流して洞庭湖に流れ込む地帯。桑梓念：故郷を思う心。凄其：寂しいさま、其は助字。江漢：長江と漢水。南征：南に行く。

長安晩秋

ちやうあんばんしゆう

唐

ちやう
趙
か
嘏

雲物淒涼拂曙流

うんぶつ
雲物 淒涼として 曙を払って流る

漢家宮闕動高秋

きゆうけつ
漢家の宮闕 高秋に動く

殘星幾點雁橫塞

ざんせい
殘星 幾点 雁 塞を横たわり

長笛一聲人倚樓

しえん
長笛 一声 人 楼に倚る

紫豔半開籬菊靜

しえん
紫豔 半ば開いて 籬菊 靜く

紅衣落盡渚蓮愁

こうい
紅衣 落尽きて 渚蓮 愁う

鱸魚正美不歸去

ろぎよ
鱸魚 正に美なるも 歸り去らず

空戴南冠學楚囚

なかば
空しく 南冠を戴きて 楚囚を学ぶ

【語釈】

淒涼：物寂しいさま。宮闕：宮城の門。高秋：天高き秋。紫豔：艶やかなる紫。籬菊：籬の菊。紅衣：赤い蓮の花。鱸魚正美不歸去：晉の張翰が、故郷のスズキの膾が美なるを思つて官を辞して故郷に帰つた故事をふまえる。南冠・楚囚：晉に捕らえられた楚の囚人が、南方の冠を着けていた故事。楚囚のごとく故郷に帰りもせずに、長安に留まっているという意味。

(三体詩)

長安春望

長安春望

唐

盧綸

東風吹雨過青山

東風雨を吹いて 青山を過ぐ

卻望千門草色閑

却って千門を望めば 草色閑なり

家在夢中何日到

家は夢中に在って 何れの日か到らん

春生江上幾人還

春は江上に來りて 幾人か還る

川原繚繞浮雲外

川原 繚繞す 浮雲の外

宮闕參差落照間

宮闕 參差たり 落照の間

誰念爲儒逢世難

誰か念わん 儒と爲りて 世難に逢い

獨將衰鬢客秦關

獨り衰鬢を將て 秦關に客たらんとは

【語釈】

春望：春の眺め。千門：極めて多くの門、帝都のこと。草色：草のありさま。：のどかさ。繚繞：まつわりめぐる、曲がりくねり、からみついでいるさま。宮闕：宮城の門、転じて、宮城。參差：は不揃いである様。落照：夕日。世難：世の乱離。衰鬢：抜け落ちて薄くなった耳際の毛。秦關：関中の地、ここでは長安を指す。

(唐詩選)

八月七日初入贛過惶恐灘

北宋

蘇軾

八月七日 初めて贛に入り惶恐灘を過ぐ

七千里外二毛人

七千里外二毛の人

十八灘頭一葉身

十八灘頭一葉の身

山憶喜歡勞遠夢

山は喜歡を憶いて遠夢を勞し

地名惶恐泣孤臣

地は惶恐と名づけて孤臣を泣かしむ

長風送客添帆腹

長風は客を送りて帆腹に添い

積雨浮舟減石鱗

積雨は舟を浮かべて石鱗を減ず

便合與官充水手

便え合に官の與に水手に充てられるべくも

此生何止略知津

此生何ぞ止だ略ぼ津を知るのみならんや

【語釈】

贛：贛江、江西省を北へ流れ鄱陽湖に入る。惶恐灘：贛江を万安県から遡って贛県につくまでの難所の一つ。七千里：開封の都から偏謫の地惠州までの距離（実際は二千三百里）。二毛：頭に白髪が交じること。十八灘：難所の数。一葉：一つの小舟に乗ること。喜歡：「錯喜歛舖」のこと、旅人が山路がそこでなだらかになったと勘違いして喜ぶ場所にある舖（宿場）。勞：人に世話をかけること。遠夢：遠い地を夢見ること。孤臣：よるべを失った臣下。長風：遠くから吹いてくる風。積雨：長く降り続く雨。石鱗：流れる水が立てる鱗のような波。減石鱗：推量が増して危険な岩を深く沈めること。充：役目を与えらる。水手：水先案内人。津：渡し場（漢詩大系17）

下第過榆次

下第して榆次を過ぐ

金

歩元舉

栖遲零落未歸人

栖遲せいち 零落れいらく 未だ帰らざる人

已坐無成更坐貧

已に成す無きに坐し 更に貧に坐す

意氣敢論題柱客

意氣だいちゆう 敢えて論ぜんや 題柱かくの客

晨昏多負倚門親

晨昏しんこん 多く負く 倚門いもんの親

囊空漸覺錢餘貫

囊のう 空しくして 漸ようやく覺ゆ 錢かん 貫を余すを

衣敝翻饒蝨滿身

衣やぶ 敝れて 翻かえつて 饒おおし 蝨しつ 身に滿つ

遙望秦關獨惆悵

遙しんかんかに 秦關しんかんを望みて 独り惆悵しゆうちようす

一天風雨落花春

一天の風雨 落花の春

【語釈】

下第：科挙に不合格となること。栖遲：やすらう、ぐずぐずする。零落：おちぶれること。題柱客：立身出世しなければ帰らないと柱に書いた人。倚門親：他郷にある子の帰りを待ちわびる親、王孫買の母の故事、戦国策。餘貫：貫は錢差しの繩、錢が無くなり、繩のみが残った。秦關：秦の関所。惆悵：失望して悲しみ傷むこと。

遊子吟

遊子吟 ゆうしぎん

中唐

孟郊 もうこう

慈母手中線

慈母 手中いとの線

遊子身上衣

遊子 ゆうし 身上の衣

臨行密密縫

行こうに臨みて 密々縫う

意恐遲遲歸

意に恐る遅々として帰らんことを

誰言寸草心

誰か言う 寸草の心

報得三春暉

三春の暉に報い得んと

【語釈】

遊子吟：楽府題、旅立つ人の歌。漂上：江蘇省溧陽県。身上衣：ここでは旅立つ人の衣。

臨行：旅立ちに際して。密密：細かいさま。寸草心：僅かに伸びた野の草のような子のこころ。三春暉：春三ヶ月の太陽の光の恵み。母の慈愛のたとえ。

(唐詩三百首)

車 輶 輶

車 輶 輶

金

劉 りゅう

迎 げい

馬 虺 隤

馬 虺 隤 かいたい

牛 穀 觶

牛 穀 觶 かくそく

山 行 縈 紆 車 輶 輶

山 行 縈 紆 して 車 輶 輶 えいろう

路 旁 指 點 是 官 人

路 旁 指 點 是 是 れ 官 人 ろぼう してん

老 矣 一 翁 雙 鬢 禿

老 いた り 一 翁 雙 鬢 禿 禿 そうびん とく

汝 牛 幸 可 耕

汝 の 牛 幸 い に 耕 す べ し たがや

汝 馬 幸 可 騎

汝 の 馬 幸 い に 騎 す べ し き

有 此 可 載 琴 書 歸

此 の 琴 書 を 載 せ て 帰 る べ き 有 り きんしよ

胡 為 奔 走 東 西 道

胡 為 ぞ 東 西 の 道 に 奔 走 して なんすれ ほんそう

白 髮 刁 騷 被 人 笑

白 髮 刁 騷 して 人 に 笑 わ る る や ちようそう

【語釈】

輶輶：車のとどろく音。穀觶：牛の恐れながら歩くさま。縈紆：うねる、曲がる。輶輶：馬の疲れやむさま。琴書：琴と書物。胡為：「なんすれぞ」と読み、どうして、なぜ、と疑問形に訳す、多くは否定を伴う。刁騷：少なく寂しきさま。

悲歌

ひか
悲歌

明

こう

けい

386

征途險巖

せいと
けんざい
征途 險巖

人乏馬飢

ひつか
人乏れ 馬飢えたり

貧少不如富老

ふちは
貧少に如かず

美遊不如惡歸

びゆう
美遊は 悪歸に如かず

浮雲隨風

うげん
浮雲は 風に隨い

零亂四野

しや
四野に 零亂す

仰天悲歌

あめを
天を仰いで 悲歌すれば

泣數行下

なみだ
すうこう
泣 數行下る

【語釈】

征途…旅の途中。險巖…険しい。美遊…楽しい旅。惡歸…傷つき帰る喜び。零亂…乱れ落ちること。

(漢詩大系21)

◆ 征戒類

行軍九日思長安故園

唐

岑 參
しん じん

行軍にて九日 長安の故園を思う

強欲登高去

強いて高きに登り去らんと欲するも

無人送酒來

人の酒を送りて来る無し

遙憐故園菊

遙かに憐れむ故園の菊

應傍戰場開

応に戦場の傍にて開くべし

【語釈】

行軍：臨時の軍営。九日：重陽の節句。故園：ふるさと、長年住み慣れた地の意。強欲：無理にしようとする。登高：重陽の節句のならわし。去：動詞の後に添える助辞、動作が向こうへ向かうことを表す。憐：いとおしむ。故園菊：わが家の庭の菊。応：「きつとくであるう」、強い推量の意を示す。傍：くのそばに。開：花を咲かせていることだろう。

(唐詩選)

和張僕射塞下曲

張僕射の塞下の曲に和す

唐

盧綸

月黑雁飛高

月黒くして雁飛ぶこと高く

單于遠遁逃

單于遠く遁逃す

欲輕騎將逐

輕騎を將いて逐わんと欲すれば

大雪滿弓刀

大雪 弓刀に滿つ

【語釈】

張僕射：張延賞、僕射は尚書省長官で宰相。塞下曲：樂府題。塞下は、辺境の塞のあたりの意。月黒：新月で月が欠けて見えないために暗いこと、また、月が雲に覆われて暗いこと。單于：匈奴の王の称号。遁逃：こっそりかくれて逃げる。輕騎：機敏に動くよう輕装した騎兵。
(唐詩選)

征夫詞

征夫の詞

明

劉

績

征夫語征婦

征夫 征婦に語る

死生不可知

死生 知る可からず

欲慰泉下魂

泉下の魂を慰めんと欲せば

但視襖中兒

但だ視よ 襖中の兒を

【語釈】

征夫詞：出征していく夫の言葉。征婦：出征している人の妻。泉下魂：亡くなった人のたましい。襖中兒：襖：産着。幼兒に着せるかいまき。小兒の着物。兒：男の子、こども。

征婦詞

征婦の詞^し

明

劉^{りゆう}

績^{せき}

征婦語征夫

征婦 征夫に語る

有身當殉國

身有らば 当に 国に殉ずべし

君為塞下土

君 塞下の土となり

妾作山頭石

妾^{しやう}は 山頭の石と作らん

【語釈】

征婦詞：前出「征夫詞」の征夫に答えた征婦の言葉。有身：身命のある限りは。塞下土：辺塞に戦死して土に化する。山頭石：望夫山の石、出征した兵士を思った妻が、この山に登って夫の帰りを待つうち石になったという故事（『幽冥録』）。

涼州詞

りょうしゅうし
涼州詞

唐

おうかん
王翰

葡萄美酒夜光杯

ぶどうの美酒 夜光の杯

欲飲琵琶馬上催

飲まんと欲すれば琵琶馬上に催す

醉臥沙場君莫笑

酔って沙場に臥すも君笑うこと莫れ

古來征戰幾人回

古來征戰幾人か回る

【語釈】

葡萄美酒：西域産の葡萄酒。夜光杯：わずかな光で輝く、ガラス、白玉製の杯。催：せき
たてるように弾く。うながすという読み方もある。沙場：砂漠の土の上。征戰：戦に行く
こと。

(唐詩選)

涼州詞

涼州詞

唐

おうしかん
王之渙

黄河遠上白雲間

黄河遠く上る白雲の間

一片孤城萬仞山

一片の孤城 万仞の山

羌笛何須怨楊柳

羌笛 何ぞ須いん 楊柳を怨むを

春光不度玉門關

春光 度らず 玉門関

【語釈】

一片：ぼつんと一つあるさま。孤城：ぼつんと一つだけの城塞。萬仞：非常に高いこと。
羌笛：西方のチベット系の人の吹く笛。楊柳：『折楊柳』の曲調、別離の曲。
(唐詩選)

出塞行

しゅせいかいこう

唐

おうしやうれい
王昌齡

白草原頭望京師

はくそうげんとう
京師を望めば

黄河水流無盡時

黄河水流れて 尽くる時無し

秋天曠野行人絶

秋天 広野 行人絶ゆ

馬首東來知是誰

馬首 東來するは 知る是れ誰ぞ

【語釈】

出塞行：樂府題、塞を出ていくの歌。白草：白っぽい色の草、乾燥すると白くなる草。原頭：野原、原野。京師：みやこ、ここでは長安。行人：旅人。東來：東に向かつてやってくる。
(唐詩選)

從軍行

じゅうぐんこう

唐

おうしやうれい
王昌齡

秦時明月漢時關

秦時の明月 漢時の関

萬里長征人未還

万里 長征して 人未だ還らず

但使龍城飛將在

但だ 龍城の飛將をして 在ら使めば

不教胡馬渡陰山

胡馬をして 陰山を度ら教めず

【語釈】

明月：澄み渡った月。萬里長征：遙かに遠く遠征すること。龍城：匈奴の長が会合して天を祭る処、転じて、匈奴の地。広く朔北の地を指す。飛將：前漢の李廣。しばしば匈奴を破り、匈奴より「飛將軍」と呼ばれた。胡馬：匈奴の軍馬。匈奴の軍隊。陰山：陰山脈、漢はここを匈奴との国境とした。
(唐詩選) (唐詩三百首)

己亥歳

己亥の歳きがいでし

唐

曹松そうしやう

392

澤國江山入戦圖

沢國の江山たくこくこうざん 戦図に入る

生民何計樂樵蘇

生民せいみん 何の計あつてか 樵蘇を楽しまん

憑君莫話封侯事

君に憑うねが 語る莫れな 封侯の事を

一將功成萬骨枯

一將いしやう 功成つて 万骨枯る

【語釈】

己亥歳：879年（乾符六年）、唐末の黄巢の乱（875年～84年）の最中の作品。・沢國：池や沼の多い江淮の地（江蘇省、安徽省）を指す。江山：（祖国の）山河。戦図：交戦地域。作戦地帯。入戦図：作戦地図に入っている。戦鬪地として戦乱に巻き込まれたことをいう。生民：人民。計：計画する。楽：やすらか、ゆたか。樵蘇：薪を拾うことと草を刈ること、庶民の生計のことになる。憑：たのむ。お願いする。封侯：諸侯に封ぜられること。一將：ひとりの将帥。万骨：多くの兵卒の骸。枯：ひからびる、白骨となる。（三体詩）

塞下曲

塞下の曲

唐

常建

玉帛朝回望帝鄉

玉帛朝より回りて帝郷を望み

烏孫歸去不稱王

烏孫 帰り去りて王と称せず

天涯靜處無征戰

天涯 静かなる処 征戦 無く

兵氣銷爲日月光

兵氣 銷えて 日月の光と為る

【語釈】

塞下曲：楽府題、塞下は、辺境の塞のあたりの意。玉帛：宝玉と絹布、諸侯が天子に拝謁する時の献上品、ここでは、ここでは烏孫国王の献上品を指し、烏孫国王が唐朝に帰順したことを表す。朝回：朝廷から退出したあとも。帝郷：天子の都。望：仰ぎ望む。尊敬し慕う。烏孫：漢代から南北朝にかけて西域にいたトルコ系遊牧民族。帰去：国に帰ってからも、国に引き上げてからも。不称王：国王を僭称することはない。た、烏孫王が漢の天子に臣従し、諸侯となったことを指す。天涯：空の果て、非常に遠い所。静処：静かに治まって。安らかに治まって。無征戦：討伐のための戦いくさがないこと。兵氣：殺伐とした戦争の妖気。銷：消える。為日月光：太陽と月の光があまねく輝いている。天子の徳が行き渡り、平和な世の中となったことを指す。
(唐詩選)

塞下曲 其二

塞下の曲 其二

唐

常建 じょうけん

北海陰風動地來

北海の陰風地を動かして來たる

明君祠上望龍堆

めいくんしじょう 龍堆を望む

觸體皆是長城卒

觸體 尽く 是れ 長城の卒

日暮沙場飛作灰

日暮 沙場に 飛んで 灰と作る

【語釈】

塞下曲：同前。北海：北方にある湖。陰風：陰気な風。冬の北風のこと。動地來：大地を震動させて吹いてくる。明君：漢の元帝の宮女で美人の王昭君のこと、晋代、文帝（司馬昭）の諱を避けて「明君」「明妃」と呼ばれた。祠上：祠ほこらのあたり。王昭君の墓は、内モンゴル自治区フフホト市にある。墓の周りだけは青草が生えているので「青冢」と呼ばれる。竜堆：白竜堆の略称、今の新疆ウイグル自治区東部、ロプノール湖の東にある砂漠、地形の起伏するさまが臥竜のように見えるところから名づけられたという。長城卒：万里の長城のほとりて戦死した兵士たちのものである。沙場：砂漠。（唐詩選）

塞下曲 其三

塞下の曲 其三

唐

常建 じょうけん

因嫁單于怨在邊

ぜんぐ 單于に嫁するに因りて 怨み 辺に在り

蛾眉萬古葬胡天

蛾眉 萬古 胡天に葬むる

漢家此去三千里

漢家 此を去ること 三千里

青冢常無草木煙

せいちやう 青冢 常に 草木の煙 無し

【語釈】

單于：匈奴の王。蛾眉：美人。胡天：北方の未開民族の土地。青冢：王昭君の墓、内モンゴル自治区フフホト市にある。墓の周りだけは青草が生えているので「青冢」と呼ばれる。

隴西行

隴西行

唐

陳 陶

誓掃匈奴不顧身

誓って匈奴を掃わんとして身を顧みず

五千貂錦喪胡塵

五千の貂錦 胡塵に 喪う

可憐無定河邊骨

憐むべし 無定河辺の骨

猶是春閨夢裏人

猶お是れ 春閨 夢裏の人

【語釈】

隴西行：楽府題、隴西（甘肅省西部）の歌。掃：討ち滅ぼす。貂錦：美しい軍装の兵士。胡塵：異民族が攻めてくる土埃。無定河：内モンゴルオールドス砂漠から始まり、南に黄土峽谷と農地に流れ込む。下流部は天井川をなし、河道が移動して、流路が定まらないため（無定河）と呼ばれていた春閨：艶めかしい婦人の部屋（唐詩三百首）

隴西行

隴西行

唐

陳 陶

漢主東封報太平

漢主 東封 太平を報ず

無人金闕議邊兵

人の 金闕に 辺兵を議する無し

縱饒奪得秋胡塞

縦饒 秋胡塞を 奪い得るとも

瘠地桑麻種不生

瘠地 桑麻を種えて 生ぜず

【語釈】

隴西行：同前。東封：匈奴を東の国に封じ、和睦が成立したこと。金闕：宮城。邊兵：匈奴との戦い。縦饒：縦令と同じ、「たとい」と読み、「たとえくしても」。秋胡塞：匈奴の寨、位置不明。瘠地：痩せた土地。

夜上受降城聞笛

夜受降城に上りて笛を聞く

唐

李益

入夜思歸切

夜に入りて 帰るを思うこと切なり

笛聲寒更哀

笛声 寒く更に哀し

愁人不願聽

愁人 聴くを願わざるに

自到枕前來

自ら枕前に到り来る

風起塞雲斷

風起りて 塞雲断え

夜深關月開

夜深くして 関月開く

平明獨惆悵

平明 独り 惆悵す

落盡一庭梅

落尽くす 一庭の梅

【語釈】

受降城：モンゴル自治区包頭西北の黄河沿岸にあった城塞。枕前：枕元。塞雲：塞に懸かる雲。関月：関所（国境）に懸かる月、関山月。平明：夜明け。惆悵：嘆き悲しむ。

（三体詩、「聞笛」戎昱詩）

絶句

絶句

元

杜仁傑
とじんけつ

高燒銀燭照雲鬢

高く銀燭を焼きて雲鬢を照らす
うんびん

沸耳笙歌徹夜闌

耳に沸く笙歌夜に徹して闌なり
たけなわ

不念征西人萬里

念わず征西人万里
おも

玉關霜重鐵衣寒

玉関の霜重く鉄衣寒なり

【語釈】

雲鬢：美人のふさふさした髪の毛。人萬里：遙か彼方に出征している夫。玉關：玉門関。

雪中曲

雪中曲
せいちゅうきょく

明

李夢陽
りむよう

白登山寒低朔雲

白登山寒くして朔雲低る
しろとうざん

野馬黃羊各一羣

野馬黃羊各おの一郡
よまきやう

冒頓曾圍漢天子

冒頓曾て困む漢の天子
ぼくとつ

胡兒惟說李將軍

胡兒惟だ説く李將軍

【語釈】

白登山：山西省大同県の東にある山。朔雲：朔北辺地の雲。：匈奴の冒頭單于のこと。漢天子：前漢の高祖のこと、高祖は冒頭單于との戦いで包圍され、匈奴を兄とし、漢を弟とし、匈奴に貢ぎ物を送るという屈辱的な条件で包圍を解かせて脱出した。胡兒：蕃人の子供。李將軍：漢の名將李広（飛將）のこと。

凱歌

凱歌 がいか

明

沈明臣 ちんめいしん

銜枚夜度五千兵

ばい ぶく
枚を銜んで夜度る 五千の兵

密領軍符號令明

ひそ ぐんぶ りよう
密かに 軍符を領し 号令 明かなり

狹巷短兵相接處

きようこう たんべい あいせつ
狹巷 短兵 相接する処

殺人如草不聞聲

人を殺すこと 草の如く 声聞こえず

【語釈】

銜枚：馬に鳴き声をあげさせないように、枚（箸のようなもの）を含ませる。軍符：行軍に用いた割り符。狹巷：狭い街。短兵：短い兵器。

從軍行

從軍行 じゅうぐんこう

清

乾隆帝 かんりゆうてい

三邊烽火照軍營

ほうか ぐんえい
三辺の烽火 軍營を照らし

十萬丁男夜練兵

ていだん
十万の丁男 夜 兵を練る

但使腰閒懸寶劍

よつかん か
但だ 腰間に 宝劍を懸けしめば

丈夫何處不成名

じょうふ
丈夫 何の処か 名を成なさざらん

【語釈】

從軍行：樂府題、出征兵士や戦場のさまを詠う。・三辺：延綏、寧夏、甘肅の三つの国境守備地域。烽火：のろし火。軍營：軍隊の営所。丁男：成人した男子。但使：ただ、くでさえあれば。

寒外雑詠

さいざいざつえい
寒外雑詠

清

りんそくじょ
林則徐

裨海環成大九州

ひかい
裨海環り成す 大九州

平生欲策六鼉遊

へいぜい
平生六鼉に策ちて遊ばんと欲す

短衣攜得西涼笛

短衣携え得たり 西涼の笛

吹徹龍沙萬里秋

りゅうせ
吹き徹す 龍沙 万里の秋

【語釈】

裨海：滄海、あお海原。大九州：中国全土。平生：普段。策：むち打つ。六鼉：六匹の大亀。西涼：甘肅省安肅道の地方。龍沙：蒙古の大砂漠。

塞下曲

塞下の曲

唐 李白

塞虜乘秋下

塞虜 秋に乘じて下り

天兵出漢家

天兵 漢家を出ず

將軍分虎竹

將軍 虎竹を分ち

戰士臥龍沙

戰士 竜沙に臥す

邊月隨弓影

邊月 弓影に随い

胡霜拂劔花

胡霜 劔花を払う

玉關殊未入

玉關 殊に未だ入らず

少婦莫長嗟

少婦 長嗟すること莫ならんや

【語釈】

塞下曲：楽府題、塞下は、辺境の塞とりでのあたりの意。塞虜：辺境の異民族。辺境の夷狄。虜は、敵を罵っている言葉。乗秋下：秋の季節に乗じて侵入してくる。天兵：天子の軍隊、官軍。漢家：漢の朝廷。出：出兵する。虎竹：銅虎符と竹使符、ともに兵を発するとき用いた漢代の割り符。分：分け与えられる。竜沙：白竜堆の沙漠のこと、白竜堆は、今の新疆ウイグル自治区東部、ロプノール湖の東にある砂漠を指す。臥：寝起きする。邊月：辺境の地を照らす月。隨弓影：弓の影のあとに随う、要塞の上に傾く三日月が、手に持っている弓といっしょに細く冴えわたっている様子。胡霜：胡地（北方や西方の遊牧民族が住む地方）の霜。劔花：劔の刃やいばの美しい光。玉關：玉門関、甘肅省瓜州県の東に置かれた。未入：まだ入って来られるものではない、ここでは、後漢の名将、班超が西域都護として長く西域をあつたが、年老いたため、生きて玉門関に入りたいと帝に願った故事を踏まえる。少婦：年若い妻。長嗟：深くため息をついて嘆くこと。

(唐詩選)

廬州城下

廬州城下
ろしゅうじょうか

金

趙秉文
ちやうへいぶん

月暈曉圍城

げつうん
月暈 曉に城を囲み

風高夜斫營

ふうこうして 夜營を斫る

角聲寒水動

かくせい
角聲 寒水 動き

弓勢斷鴻驚

きゆうせい だんこう
弓勢 斷鴻 驚く

利鏃穿吳甲

りぞく igo なが
利鏃 吳甲を穿ち

長戈斷楚纓

ちやうか せえい
長戈 楚纓を断つ

回看經戰處

けいせん
經戰の処を 回看すれば

慘淡暮寒生

さんたん ぼかん
慘淡として 暮寒 生ず

【語釈】

廬州：安徽省合肥市一带。月暈：月の傘。斫：攻撃する。角聲：角笛の音。斷鴻：群れを失った雁。利鏃：鋭い矢じり。吳甲：南方の国（南宋）の兵の鎧。楚纓：南方の国（南宋）の兵の冠の紐。慘淡：薄暗くもの寂しいさま。

兵車行

兵車行

唐

杜
甫

車 燐燐 車 燐々

馬 蕭蕭 馬 蕭々

行人弓箭各在腰 行人の弓箭 各々 腰に在り

耶娘妻子走相送 耶娘 妻子 走つて相い送る

塵埃不見咸陽橋 塵埃に見えず 咸陽橋

牽衣頓足遮道哭 衣を牽き 足を頓し 道を遮りて哭す

哭声直上干云霄 哭声 直ちに上り 云霄を干す

道旁過者問行人 道旁 過る者 行人に問う

行人但云點行頻 行人 但だ 云う 点行 頻りなりと

或從十五北防河 或は 十五より 北河を防ぎ

便至四十西營田 便ち 四十に至つて 西 田を営む

去時里正爲裹頭 去る時 里正 為に頭を裹み

歸來頭白還戍邊 歸來 頭 白く 還た 邊を成る

邊廷流血成海水 邊廷の流血 海水を成し

武皇開邊意未已 武皇 邊を開くの意 未だ已まず

君不聞漢家山東二百州 君 聞かずや 漢家 山東の二百州

千村万落生荆杞 千村万落 荆杞を生ず

縱有健婦把鋤犁 縱い 健婦の 鋤犁を把る有りといへども

禾生隴畝無東西 禾は 隴畝に生じて 東西無し

況復秦兵耐苦戰 況んや 復た 秦兵 苦戦に耐え

被驅不異犬与鷄 驅られて 異ならず 犬と鷄と

長者雖有問

長者問う有りと雖も

役夫敢伸恨

役夫敢えて恨みを伸べんや

且如今年冬

且つ今年の冬の如きは

未休關西卒

未だ關西の卒を休めず

縣官急索租

縣官急に租を索む

租稅從何出

租稅何くより出でん

信知生男惡

信に知る男を生むは悪しく

反是生女好

反つて是れ女を生むは好し

生女猶得嫁比鄰

女を生まば猶お比鄰に嫁ぐを得ん

生男埋沒隨百草

男を生まば埋没して百草に随わん

君不見青海頭

君見ずや青海の頭

古來白骨無人收

古來白骨人の收むる無し

新鬼煩冤舊鬼哭

新鬼は煩冤旧鬼は哭す

天陰雨濕聲啾啾

天陰雨濕聲啾々

【語釈】

兵車行：樂府題、「兵車」は戰車。麟麟：車がガラガラと音を立てて進む音。蕭蕭：馬が嘶いなく声の形容。行人：出征兵士。弓箭：弓と矢。在腰：腰につけている。耶孃：父と母。相送：（出征兵士を）見送る。塵埃：土ほこり。咸陽橋：長安郊外の渭水にかかる橋で、咸陽と長安を結ぶ。牽衣：引き止めようとして、衣服を引っ張る。頓足：地団駄を踏む。關道：道をさへぎる。哭：大声をあげて泣く。哭声：その泣き声。直上：真つすぐに立ちのぼる。干雲霄：大空を突き刺すように響く。「雲霄」は、大空、「干」は、突き進む。道傍過者：道ばたを通りかかった人、杜甫を指す。点行：徵兵。從：「より」と読み、「くから」と訳す、「自」と同じ。北防河：北方の黄河の守りに連れて行かれた。便：そのまま。當田：屯田兵となる。去時：出征の時。里正：村里の長。裹頭：元服の儀式。戍辺：国境の守りに駆り出される。辺庭：国境付近。流血：流された血。成海水：海の水のようになる。武皇：漢の武帝、暗に唐の玄宗を指す。開辺：辺境を開拓して、国土を拡張すること。意未已：その意向はいっこうに止みそうもない。山東：華山（陝西省の東部にある）の東、中原地方を指す。千村万落：多くの村々のこと。荊杞：イバラとクコ、荒れ地に生える雑

草の総称。健婦：…しつかりしたけなげな嫁。鋤犁：…鋤や鍬。禾：…いね。穂を出す穀物の総称。隴畝：…田畑の畝うねや畦あぜ。田畑のこと。無東西：…あぜ道がわからないほど、作物が無秩序に乱雑に育っている様子。況復：…そのうえに。秦兵：…長安付近出身の兵士。耐苦戦：…苦しい戦いにも耐え忍ぶ。被駆：…駆り立てられる。長者：…なたさま、年長者に対する敬称、杜甫を指す。雖有問：…お尋ねではありませんが。役夫：…出征兵士である私。敢：…どうしてしよいか、いや、くしない。ここでは反語の意を示す。申：…充分に述べる。且如：…まずさしあたりこの場合は。関西：…函谷関以西、今の陝西省。卒：…兵士。休：…故郷に帰し、休息させる。県官：…県の役人。急：…厳しく。租：…穀物を納める税。索：…取り立てる。徙何出：…いったいどこから出せましようか。比隣：…隣近所。嫁：…嫁がせる。嫁にやる。埋没：…戦場の土に埋められる。随百草：…多くの雑草とともに朽ち果てる。青海：…今の青海省東部にある湖。頭：…辺り、すぐそば。古来：…昔から。無人収：…拾ってくれる人もないまま。新鬼：…最近死んだばかりの兵士の亡霊。煩冤：…もだえ苦しむ。旧鬼：…死んで久しい兵士の亡霊。哭：…泣き叫ぶ。天陰：…空が曇る。雨濕：…雨が降って湿っぽい。声：…亡霊たちの泣き声。啾啾：…小声で恨めしげに泣く声の形容。

(唐詩三百首)

◆ 閑適類

自遣

自ら遣る みづかや

唐

李 り

白 はく

對酒不覺暝

酒に對して 暝るるを覚えず

落花盈我衣

落花 我が衣に盈つ

醉起步溪月

醉起して 溪月に歩すれば

鳥還人亦稀

鳥は還りて 人亦た稀れなり

【語釈】

自遣：みづから 憂さを晴らす。對酒：酒に向かう。暝：日が暮れる。盈：（次第に多くなつて）みちる。醉起：酔いから醒める。溪月：谷川に出た月。
（漢詩大系 8）

罷相作

相を罷めて作る

唐

李適之

避賢初罷相

初めて相を罷ぜらる

樂聖且銜杯

聖を楽しみ且つ杯を銜える

爲問門前客

爲に問う門前の客

今朝幾箇來

今朝幾箇か来たると

【語釈】

避賢：賢人のために、自分は出世の道筋を避ける。ここでは賢人を「濁酒」にたとえ、腹黒い陰謀を避けるという意味をひそませている。聖：聖人の道、裏に「清酒」という意味をひそませている。銜杯：杯を口にあてる、一杯やる。為：さて、ところで。門前客：訪問客。今朝：今日。けさではない。幾箇：何人、俗語。
(唐詩選)

山館

山館

唐

皇甫冉

山館長寂寂

山館 長えに寂々とし

閑雲朝夕來

閑雲 朝夕 来たる

空庭復何有

空庭 復た何か有る

落日照青苔

落日 青苔を照らす

【語釈】

寂寂：ものさびしいさま。閑雲：静かに流れてゆく雲。空庭：人けのないさびしい庭。
青苔：青々とした色のコケ。

コメントの追加 [h1]:

山居雜詩

山居雜詩

金

元好問 げんこうもん

鷺影兼秋靜

ろえい しゅうせい
鷺影 秋靜を兼せ

蟬聲帶晚涼

せんせい
蟬聲は 晚涼を帯ぶ

陂長留積水

は
陂 長くして 積水を留め

川闊盡斜陽

ひろ
川 濶くして 斜陽を尽くす

【語釈】

山居：山中に住むこと。雑詩：興のおもむくままに作った、型にとられない詩。鷺影：サギの姿。晚涼：夕方の涼しさ。陂：堤。積水：海水、湖水などを謂う。闊：ひろい。

山中示諸生

山中 諸生に示す

明

王守仁 おうしゅじん

溪邊坐流水

溪邊 流水に坐す

水流心共閒

水 流れて 心 共に閑なり

不知山月上

知らず 山月の 上りて

松影落衣斑

松影 落ちて 衣に斑まだらなるを

【語釈】

溪邊：谷のほとり。坐流水：流水に臨んで坐る。

松關

松関 しょうかん

明

唐順之 とうじゆんし

月出照松關

月 いで 出 松関を照らし

松陰正滿地

松陰 しょういん 正 まに 地 ちに 満 みつ

恐有山僧歸

恐 おそらくは 山僧 さんそうの 歸 かへる 有 あらん

終夜不須閉

終夜 しゆうや 閉 めざるを 須 もといず

【語釈】

松關…松を植えて門の代わりとしたもの、松門。松陰…松におおわれているところ。不須……する必要がない。

山中與幽人對酌

山中にて幽人と對酌す

唐

李白

兩人對酌山花開

兩人對酌すれば 山花開く

一杯一杯復一杯

一杯一杯また一杯

我醉欲眠卿且去

我酔つて眠らんと欲す 卿且く去れ

明朝有意抱琴來

明朝意あらば 琴を抱いて来たれ

【語釈】

幽人：世を遁れた人、隱者。對酌：差し向かいで酒を飲む。卿：きみ。且：しばし、しばらく。

(漢詩大系8)

山中問荅

山中問荅

唐

李白

問余何意棲碧山

余に問う 何の意あつて 碧山に棲むと

笑而不答心自閑

笑つて答えず 心自ら閑なり

桃花流水杳然去

桃花流水 杳然として去る

別有天地非人間

別に天地の 人間に非ざる有り

【語釈】

何意：どういふ訳で。碧山：緑の色濃い山奥。碧山：緑の色濃い山奥。自閑：自然と落ちて着いている。自然とさわやかで静かである。杳然：はるかなさま。人間：俗世間。
(唐詩選)

與賈島閑遊

賈島と閑遊す

唐

張籍

水北原南草色新

水北原南草色新たなり

雪消風暖不生塵

雪消え風暖かにして塵を生ぜず

城中車馬應無數

城中車馬 応に無数なるべきも

能解閑行有幾人

能く閑行を解するは 幾人か有る

【語釈】

閑遊…のんびり遊ぶ。水北…川の北。原南…原野の南。能…出来る。閑行…心閑に歩く。

江村即事

江村即事

唐

司空曙

釣罷歸來不繫船

釣を罷め帰り来たりて 船を繫がず

江村月落正堪眠

江村 月落ちて 正に眠るに堪えたり

縱然一夜風吹去

縱然 一夜 風吹きて去るとも

只在蘆花淺水邊

只 蘆花の淺水の辺に在らん

【語釈】

江村…川辺の村。縱然…たとえ…であろうとも。吹去…吹き飛ばす。去…動詞の後に附いて、動作が遠ざかる、持続する感じを表す。…しきる。只在…ただ…にあるだけ。淺水…浅瀬。

〔三体詩〕

對酒

酒に對す

唐

白居易

蝸牛角上争何事

蝸牛角上何事をか争う

石火光中寄此身

石火光中此の身を寄す

随富随貧且歡樂

富に随い貧に随い且らく歡樂せん

不開口笑是癡人

口を開いて笑わざるは是れ癡人

【語釈】

蝸牛角上：カタツムリの角の上、小さな世界の意。
石火光中：火打ちの火花のように短い時間
(新釈漢文大系)

春日晏起

春日晏起

唐 韋 莊

近來中酒起常遲

近來酒に中りて起くること常に遅し

臥看南山改舊詩

臥して南山を看みて旧詩を改む

開戸日高春寂寂

戸を開けば日高くして春寂々たり

數聲啼鳥上花枝

数声の啼鳥 花枝に上る

【語釈】

晏起：朝おそく起きること。近來：このごろ。中酒：酒を飲み過ぎて、気分が悪くなる。
南山：終南山のこと、長安の南方にある山。寂寂：さびしいさま、静かなさま。啼鳥：鳴く鳥、さえずる鳥。

醉後題僧院

醉後題僧院

唐

杜牧

舩船一棹百分空

舩船一棹百分空し

十歳青春不負公

十歳の青春 公に負かず

今日鬢糸禪榻畔

今日鬢 禪榻の畔

茶煙輕颺落花風

茶煙 軽く颺る 落花の風

【語釈】

舩船：角で出来た舟の形をした大杯。一棹：ぐいつと一飲み（舩船と言ったので・百分…多くの憂い。或いは、すっかり全部。空：空になる。十歳：十年。不負公：誰にも負けない。鬢糸：白髪交じりの鬢。禪榻：禪寺の長いす。
（新釈漢文大系 詩人編9）

南堂

南堂

北宋

蘇軾

掃地焼香閉閣眠

地を掃い 香を焼き 閣を閉じて眠る

簞紋如水帳如煙

簞紋は水の如く 帳は煙の如し

客來夢覺知何處

客 来たりて 夢は覚む 知る 何れの処ぞ

挂起西窗浪接天

西窓を挂け起せば 浪 天に接す

【語釈】

南堂：黃州左遷時に蘇軾が住んでいた臨皋亭の小堂。閣：部屋を仕切る板。簞紋：敷物の模様。煙：霞み、もや。挂：しとみ戸のような窓を上に懸けあげる。
（中国詩人選集二―五）

溪陰堂

けいいんどう
溪陰堂

北宋

蘇軾
そしよく

白水満時雙鷺下

はくすいみつ
白水満る時 双鷺下る

緑槐高處一蟬吟

りよくかい
緑槐高き処 一蟬吟ず

酒醒門外三竿日

しゅせいもんがいさんかんに
酒は醒む門外三竿の日

臥看溪南十畝陰

ふ
臥して看る溪南十畝の陰

【語釈】

溪陰堂：『溪前堂』ともする、揚州儀真県の東、范氏の園の堂の名。白水：清らかな水。きれいな水。双鷺：つがいになつてゐるサギ。緑槐：青々としたくわい。吟：（セミが）鳴く。酒醒：酒が醒める意。三竿日：日が竹竿を三本つぎ合わせたほどの高さに上（のぼ）る。臥看：寝転んでみる。溪南：谷の南側。・十畝：10畝（ほ（ぼ））。約60アール。畝：1畝は約1.82アール。十畝陰：谷一帯の日陰の地を指す。
（漢詩大系17）

書湖陰先生壁

こいん
湖陰先生の壁に書す

北宋

王安石
おうあんせき

茆簷長掃靜無苔

ぼうえんつね
茆簷長に掃つて静かに苔無し

花木成畦手自栽

はなは
花木畦を成して手自栽ゆ

一水護田將綠繞

いっすい
一水 田を護つて緑を將つて繞り

兩山排闥送青來

りゅうざん
兩山 闥を排して青を送つて來たる

【語釈】

湖陰先生：楊徳逢の号、南京に隱棲した王安石の近くに住んでいた。茆簷：茅葺きの軒。長：とこしえに、ここは、いつもの意味。静：ニューアンスとして淨の意。畦：一区切りの畑。排闥：門を押し開く。
（中国詩人選集二：4）

冬夜聽雨戲作

冬夜雨を聴き 戯れに作る

南宋

陸游

繞簷點滴如琴筑

簷を繞ぐるの点滴 琴筑の如し

支枕幽齋聽始奇

枕を支えて 幽齋 聴きて始めて奇なり

憶在錦城歌吹海

憶う 錦城の歌吹海に在りて

七年夜雨不曾知

七年の夜雨 曾て知らず

【語釈】

點滴：雨だれの音。琴筑：琴と筑（楽器で十三弦あり竹で鼓す）。錦城：錦官城（成都）。歌吹海：歌舞音曲の盛んである場所。

雨中曉卧

雨中曉卧

明 高啓

井桁烏啼破曙煙

井桁 烏啼いて 曙煙を破る

輕寒薄被落花天

輕寒 薄被 落花の天

閒人晴日猶無事

閒人 晴日 猶 無事なり

風雨今朝正合眠

風雨 今朝 正に眠る合し

【語釈】

井桁：気を井字型に組み上げ、井戸の縁とした物。曙煙：朝靄。薄被：薄い夜具。閒人：暇な人。

（中国詩人選集二―10）

山中懶睡

山中懶睡
さんちゆだみん

明

王守仁
おうしゆじん

掃石焚香任意眠

石を掃いて 香を焚き 意に任せて眠る

醒來時 有客談玄

醒め来たりて 時に客の玄を談ずる有り

松風不用蒲葵扇

松風 用いず 蒲葵の扇

坐對青崖百丈泉

坐して對す 青崖の百丈の泉

【語釈】

談玄：老莊の理を論ずる。蒲葵扇：蒲葵（ビロウ）の葉で作ったうちわ。青崖：青い崖。

題灌山小隱

灌山の小隱に題す
かんざん しょういん

明

王守仁
おうしゆじん

一自移家入紫烟

一たび 家を移して 紫煙に入りて自り

深林住久遂忘年

深林 住すること久しくして 遂に 年を忘る

山中莫道無供給

山中 道うこと莫かれ 供給無しと

明月清風不用錢

明月 清風 錢を用いず

【語釈】

灌山：浙江省鄞県西南にある灌頂山。小隱：隱者のわび住まい。紫煙：紫色の霞。供給：求めに応じて物をあてがうこと。

閑興

かんきよう
閑興

明

ぶんちようめい
文徵明

酒闌客散小堂空

酒闌たけなにして客散かくじ小堂空し

旋捲疎簾受晚風

旋ようやく疎簾それんを捲たいて晚風を受く

坐久忽驚涼影動

坐ざ久しくして忽たちまち驚く涼影の動くを

一痕新月在梧桐

一痕いっこんの新月ことつ梧桐ことうに在り

【語釈】

閑興：閑居の楽しみ。旋：すぐさま。疎簾：まばらに編んだ簾。一痕：ひとつの、月などに使う。新月：三日月。あおぎり。

口占

こうせん
口占

清

こいぎよう
吳偉業

欲買溪山不用錢

欲けいざん買けいざん溪山けいざんを買わんと欲して錢ぜにを用いず

倦來高枕白雲邊

倦うみ來たりて枕まくらを高くす白雲の邊

吾生此外無他願

吾われが生せい此外そとの他たの願ねがひい無し

飲谷棲丘二十年

飲の谷やに棲す丘かみに棲むこと二十年

【語釈】

倦來：俗世間の生活に嫌気がさして此の地にやって来たこと。

終南別業

終南別業

唐

王維

417

中歳頗好道

中歳 頗る道を好み

晚家南山陲

晩に家す南山の陲

興來每獨往

興來れば 毎に独り往み

勝事空自知

勝事 空しく自ら知る

行到水窮處

行きて到る 水窮るの処

坐看雲起時

坐して看る 雲起こるの時

偶然值林叟

偶然 林叟に値い

談笑無還期

談笑して 還える期無し

【語釈】

終南：終南山。別業：別荘。中歳：中年。頗：いささか。道：ここでは仏教。晩：晩年。家：家を構える。南山：終南山。陲：ほとり、周辺。毎：常に。ことあるごとに。勝事：すぐれたこと。空：只の意。窮：おわる、水窮處は水源地。林叟：きこりの老人。

(新釈漢文大系 詩人編 3)

秋日盧龍村舍

秋日 盧龍村舍

宋 王禹稱

置却人間事

人間の事を置却して

閑從野老游

閑に野老に従って遊ぶ

樹聲村店晚

樹声 村店の晩

草色古城秋

草色 古城の秋

獨鳥飛天外

獨鳥 天外に飛び

閑雲度隴頭

閑雲 隴頭を渡る

姓名君莫問

姓名 君問う莫かれ

山木與虚舟

山木と虚舟と

【語釈】

人間：俗世間。置却：すておく、却は完了を示す助字。野老：農夫の老人。閑雲：閑に浮かぶ雲。隴頭：隴頭山（陝西省隴県にある山の名）。山木・虚舟：荘子の戒め、無用のことをしないこと。

即事

即事

北宋

王安石
おうあんせき

縦横一川水

縦横 一川の水
いっせん

高下數家村

高下 數家の村
こうか

靜憩鷄鳴午

静かに憩えば 鷄は午に鳴き
ひる

荒尋犬吠昏

荒に尋ねれば 犬は昏に吠ゆ
くろ

歸來向人説

帰り来たりて 人に向つて説く

疑是武陵源

疑うらくは是れ 武陵源なるかと
ふりようげん

【語釈】

縦横…真つ直ぐでなく、縦横に蛇行しているさま。高下…山の斜面に点在しているさま。
荒…荒地。武陵源…桃源郷のこと、武陵の地の傳説。

(宋詩選注 1 「即事」)

小隠自題

小隠自ら題す

北宋

林逋

竹樹繞吾廬

竹樹 吾が廬を繞ぐり

清深趣有餘

清深 趣 余り有り

鶴閑臨水久

鶴 閑にして 水に臨むこと 久しく

蜂懶得花疏

蜂 懶して 花を得ること 疏なり

酒病妨開卷

酒病 卷を開くを妨たげ

春陰入荷鋤

春陰 荷鋤に入る

嘗憐古圖畫

嘗 憐れむ 古図画

多半寫樵漁

多半は 樵漁を写すを

【語釈】

小隠：隠棲した住まい（孤山にある）。清深：清らかに奥深いさま。開卷：書を開いて読む。春陰：花曇り。荷鋤：鋤をになって耕す。樵漁：樵と漁夫（隠者の象徴）。

梵天觀雨

梵天に雨を観る

南宋

朱熹

持身乏古節

身を持して古節に乏し

寸祿久棲遲

寸祿久しく棲遲す

暫寄靈山寺

暫く寄す靈山の寺

空吟招隱詩

空しく吟ず招隱の詩

讀書清磬外

書を読む清磬の外

看雨暮鍾時

雨を見る暮鍾の時

漸喜涼秋遠

漸く喜ぶ涼秋の遠きを

滄洲去有期

滄洲去る期有り

【語釈】

梵天：梵天寺、杭州鳳凰山にある。古節：古人のような節操。寸祿：僅かな俸祿。棲遲：のんびりと暮らす、閑職に甘んず。靈山：神社や仏閣のある尊い山。招隱詩：左思の作、『文選』による。磬：金属や石で出来た「へ」の字型をした楽器。漸：次第に。滄洲：隠者の住むところ。

(註：「遠」は「近」の誤写?)

北山作

北山の作

南宋

劉克莊

骨法枯閑甚

こつぼう いかん かなは
骨法 枯閑 甚だし

惟堪作隱君

ただ 隠君と作るに堪たり

山行忘路脈

山行 路脈を忘れ

野坐認天文

野坐 天文を認む

字瘦偏題石

字 瘦せて 偏えに 石に題し

詩寒半說雲

詩 寒さむくして 半ば 雲を説く

近來仍喜曠

近來 仍ち 曠を喜ぶ

閑事不曾聞

閑事 曾て 聞かず

【語釈】

骨法：骨相。枯閑：貧素で寂しいさま。堪：くする事が出来る。隱君：隱者。路脈：道筋。天文：天体の現象。曠：耳が遠くなる。閑事：世間のつまらないこと。

曉行山間

曉に山間を行く

南宋

真山民 しんさんみん

出門誰是伴

門を出ずれば誰か是れ伴 はん

只約瘦藤行

只だ瘦藤に約して行く そうとう

一二里山徑

一二里の山経 さんけい

兩三聲曉鶯

兩三声の曉鶯 きようおう

亂峰相出沒

亂峰相出沒し らんほう あいしゆつぼつ

初日乍陰晴

初日乍ち陰晴 しよじつ たちま いんせい

僧舍在何許

僧舍 何れの許にか在る そうしゃ ところ

隔林鐘磬清

林を隔てて鐘磬清し しやうけい

【語釈】

瘦藤：瘠せた藤の杖。初日：朝日。許：処。磬：金属や石で出来た「へ」の字型をした樂器。

山中月

山中の月

南宋

眞山民 しんさんみん

我愛山中月

我は愛す 山中の月

炯然掛疎林

けいぜん そりん
炯然として 疎林に掛るを

為憐幽独人

ゆうどく
幽独の人を 憐れむが為に

流光散衣襟

いきん
流光 衣襟に散ず

我心本如月

我が心 本月の如く

月亦如我心

ま
月も 亦た 我が心の如し

心月兩相照

あいてら
しんげつ ふた
心月 両つながら 相照らし

清夜長相尋

あいたず
とこしな
清夜 長 えに相尋ぬ

【語釈】

炯然：光輝くさま。幽独人：隠者、ここでは作者。衣襟：衣服の襟。

香爐峰下新卜山居草堂初成偶題東壁

唐

白居易

香炉峯下 新たに山居を卜し 草堂初めて成る偶たま東壁に題す

日高睡足猶慵起

日高く睡り足りて 猶お起くるに慵し

小閣重衾不怕寒

小閣に衾を重ねて 寒を怕れず

遺愛寺鐘欹枕聽

遺愛寺の鐘は 枕を欹てて聴き

香爐峯雪撥簾看

香炉峰の雪は 簾を撥げて看る

匡廬便是逃名地

匡廬は便ち是れ名を逃るるの地

司馬仍爲送老官

司馬は仍お 老を送るの官たり

心泰身寧是歸處

心泰く身寧きは 是れ帰する処

故郷何獨在長安

故郷何ぞ独り長安にのみ在らんや

【語釈】

香爐峰：江西省九江県西南にある廬山の北峰。卜：家を建てる。

小閣：小さな建物。自宅の建物の謙譲語。遺愛寺：香炉峰の北方にある寺。欹枕：枕をかたむける。匡廬：廬山の別名、陶淵明の隱棲の地に近い。

司馬：刺史（州の長官）の補佐役。故郷：ふるさと、自分が住むべき地。

（新釈漢文大系 三）

秋宿虎丘寺數夕執以詩見貺因次元韻

北宋

蘇舜欽
そしゆんきん

秋、虎丘寺に宿すること數夕、執中、詩を以つて貺らる、因りて元韻にて次す

生事飄然付一舟

生事飄然として一舟に付す

吳山蕭寺且淹留

吳山の蕭寺且く淹留す

白雲已有終身約

白雲已に有り終身の約

醪酒聊驅萬古愁

醪酒聊か驅る万古の愁

峽束蒼淵深藏月

峽は蒼淵を束ねて深く月を藏し

巖排紅樹巧裝秋

巖は紅樹を排して巧みに秋を装う

徘徊欲出向城市

徘徊して出でて城市に向わんと欲するも

引領烟蘿還自羞

領を引く煙蘿に還た自ら羞す

【語釈】

虎丘寺：江蘇省蘇州市にある寺。執中：寺僧のしかるべき者。貺：賜う。生事：なりわい、官吏としての仕事。飄然：風に漂い動く。吳山：蘇州は春秋時代吳の都であったので、蘇州の山。蕭寺：普通の寺のこと。淹留：逗留すること。醪酒：良い酒。驅：追っ払う。峽：山あい。蒼淵：蒼い淵。引領：遠く眺めてその方に行こうとすること。烟蘿：靄の籠めた葛。

(漢詩大系 16)

幽居

幽居ゆうきよ

中唐

韋應物いおうぶつ

貴賤雖異等

貴賤きうけん等を異にすと雖えども

出門皆有營

門を出ずれば皆えい營有り

獨無外物牽

独り外物の牽く無く

遂此幽居情

此の幽居の情を遂ぐ

微雨夜來過

微雨 夜來過ぎ

不知春草生

知らず 春草の生ずるを

青山忽已曙

青山 忽ち已に曙あけけ

鳥雀繞舍鳴

鳥雀 舍を繞りて鳴く

時與道人偶

時に 道人と偶ぐし

或隨樵者行

或いは 樵者しやうしやに随したがうて行く

自當安寢劣

自から當に寢劣けんれつに安んずべし

誰謂薄世榮

誰か謂いう世榮せいを薄うすんずと

【語釈】

幽居：俗世間から逃れてひっそりと暮らすこと。貴賤：身分の高い人と低い人。等：等級。階級。出門：我が家を出れば。營：世渡りの営み。独：ただ自分だけは。外物：自分の外にある地位や名譽や財産など。牽：とらわれる。幽居情：隱遁生活の静かでのんびりとした心情。遂：存分に味わっている。微雨：小雨。こぬか雨。夜來：昨夜。不知：さだらうか。青山：幽居の周囲の。青々とした山。忽：いつの間にか。ふと気がつけば。曙：夜が明ける。鳥雀：雀などの小鳥。舍：小さい粗末な家、ここでは幽居の住まいを指す。繞：まわりを回る。時：時には。道人：道を修行している人。偶：連れ立つ。樵者：きこり。寢劣：動きが鈍く劣っている人、ここでは世渡りの才能がない人。安：満足する。世榮：俗世における名譽。薄：軽んじる。
(唐詩選)

安樂窩中吟

安樂窩中の吟

北宋

邵雍

安樂窩中春欲歸

安樂窩中 春帰らんと欲す

春歸忍賦送春詩

春 帰リ 賦するに忍びんや 送春の詩

雖然春老難牽復

然りと雖も 春老いて 牽復すること 難し

却有夏初能就移

却つて 夏初の 能く 就きて 移る有り

飲酒莫教成酩酊

酒を飲みて 酩酊を成さしむる 莫れ

賞花慎勿至離披

花を賞するに 慎しんで 離披に至る 勿れ

人能知得此般事

人能く 此の般の事を 知り得ば

焉有閒愁到兩眉

焉ぞ 閒愁の 兩眉に 到る有らんや

【語釈】

安樂窩：邵雍の書齋の名。春歸：春が過ぎ去る。牽復：引いて帰らす。離披：満開。般事：物の道理。焉：いづくんぞくや、と読み、反語。閒愁：そぞろにわき上がる愁い。
(漢詩大系16)

司馬君實獨樂園

司馬君実の独樂園

北宋

蘇軾

青山在屋上
流水在屋下
中有五畝園
花竹秀而野
花香襲杖履
竹色侵杯罍
樽酒樂餘春
棋局消長夏
洛陽古多士
風俗猶爾雅
先生臥不出
冠蓋傾洛社
雖云與衆樂
中有獨樂者
才全德不形
所貴知我寡
先生獨何事
四海望陶冶
兒童誦君實
走卒知司馬
持此欲安歸

青山屋上に在り
流水屋下に在り
中に五畝の園有り
花竹秀いでて野なり
花香杖履を襲い
竹色杯罍を侵す
樽酒余春を楽しみ
棋局長夏を消す
洛陽は古より多士
風俗は猶お爾雅
先生臥して出でず
冠蓋洛社を傾く
衆と楽しむと云うと雖も
中に独り楽しむ者有り
才全くして徳形れず
貴ぶ所は我を知る寡きを
先生独り何事ぞ
四海陶冶を望む
兒童も君実を誦んじ
走卒も司馬を知る
此を持ちて安くに帰らんと欲す

造物不我捨

造物 我を捨てず

名聲逐吾輩

名聲 吾が輩を逐う

此病天所赅

此の病 天の赅にする所
やまい しや

撫掌笑先生

掌を撫で先生を笑う

年來效暗啞

年來 暗啞に效うを
あんあ なら

【語釈】

司馬君實：司馬光、北宋の仁宗、英宗、神宗、哲宗の4代の皇帝の治世に活躍した官僚政治家。没後温国公に封ぜられた。王安石の行った新法に鋭く対決した『資治通鑑（しじつがん）』の著者。獨樂園：司馬光が相を罷めてから住んだ洛陽の別荘。杖履：杖と履、老人の持ち物。杯罍：玉爵（玉のさかずき）。爾雅：正しく美しく閑雅なるさま。冠蓋：冠と車の覆い、高位高官。傾洛社：多く集まること。才全徳不形：才能は内部では完全であるが、その徳が外に現れない。陶冶：善政を布いて、民を和して生をとげるしむる意。走卒：馬の先を走る僕卒。此病天所赅：名譽の病におかされるは、一種の天罰である、老荘思想。暗啞：口がきけない人。

（漢詩大系17）

◆ 尋訪類

題袁氏別業

袁氏えんしの別業べつぎょうに題す

唐

賀知章がちしやう

主人不相識

主人あいし相識あしらず

偶坐為林泉

偶坐りんざ林泉りんせんの為なり

莫謾愁沽酒

謾まんに酒さけを沽かうを愁しうること莫なかれ

囊中自有錢

囊中のうちゆう自おのずから錢ぜに有り

【語釈】

袁氏：未詳。別業：別荘。偶坐：主人と向かい合って座ること。林泉：袁氏の別荘の林や泉のこと、名園。謾：みだりに。沽酒：酒を買う。囊中：財布の中。
(唐詩選)

尋隱者不遇

隱者いんしやを尋たづねて遇あわず

唐

賈島かとう

松下問童子

松下しょうか童子どうじに問とうに

言師採藥去

言いう師しは藥やくを採ゆりに去ゆけりと

只在此山中

只ただ此こゝの山やま中に在あらん

雲深不知處

雲くも深ふかくして 処ところを知らず

【語釈】

尋隱：隱棲している人。松下：松の木の下。
(唐詩選) (唐詩三百首)

尋胡隱君

胡隱君を尋ぬ

明

高啓

渡水復渡水

水を渡り復た水を渡り

看花還看花

花を看還た花を看る

春風江上路

春風江上の路

不覺到君家

覺えず君が家に到る

【語釈】

胡隱君：胡という名前の隱者、詳細不明。

水：川。

(中国詩人選集二―10)

與盧員外象過崔處士興宗林亭

唐

王維

盧員外象と崔處士興宗が林亭に過ぎる

綠樹重陰蓋四鄰

綠樹の重陰 四鄰を蓋い

青苔日厚自無塵

青苔日に厚くして 自から塵無し

科頭箕踞長松下

科頭箕踞す 長松の下

白眼看他世上人

白眼にして看る 他の世上の人

【語釈】

盧員外象：員外郎（定員外の官である長官の補佐役）である盧象。崔處士興宗：官に使えないで民間にいる崔興宗。重陰：深い影。四鄰：あたり。青苔：青色の苔。科頭：冠や頭巾をかぶらないむき出しの頭。箕踞：両足を投げ出して座ること。長松：隠者の隠語。白眼：阮籍の故事に基づく、気に入らない俗物を見る目（他の世上の人にはそうであったので、尋ねて行った王維・盧象・裴迪・王縉には青眼で見た。）

（唐詩選）（新釈漢文大系 詩人編 3）

三日尋李九莊

三日李九の莊を尋ぬ

唐

常建

434

雨歇楊林東渡頭

雨は歇む 楊林 東渡の頭

永和三日盪輕舟

永和三日 輕舟を盪かす

故人家在桃花岸

故人家は 桃花の岸に在り

直到門前溪水流

直ちに到る門前 溪水の流れに

【語釈】

三日：陰曆三月三日、上巳の節句のこと。李九：作者の友人、不詳。雨歇：雨が止んだ。雨が上がった。楊林：渡し場の名、安徽省和県の東にある。永和三日：永和九年三月三日、王羲之が会稽郡の山陰県（今の浙江省紹興市柯橋区）の蘭亭で、流觴曲水の宴を行ったことをふまえる。輕舟：舟足の速い小舟。舟足の軽やかな小舟。盪：舟を漕ぎ動かして進んでゆくこと。故人：古くからの友人、李九を指す。桃花岸：桃の花咲く岸辺。直到：まっすぐに行き着いた。門前溪流：李九の家の門前を流れる溪流に沿って。

（唐詩選）

過鄭山人所居

鄭山人が所居に過る

唐

劉長卿

寂寂孤鶯啼杏園

寂々として 孤鶯 杏園に啼き

寥寥一犬吠桃源

寥寥として 一犬 桃源に吠ゆ

落花芳草無尋處

落花芳草 尋ぬる処無く

萬壑千峰獨閉門

萬壑千峰 独り門を閉ず

【語釈】

過…立ち寄る。鄭山人…未詳、山に住んでいる鄭氏。所居…住まい。寂寂…ひっそり。万壑千峰…多くの谷と峰。閉門…門をしめる、世間との交際を絶つたとえ。
(三体詩)

休暇日訪王侍御不遇

唐

韋應物

休暇日に王侍御を訪ねて遇わず

九日驅馳一日閑

九日 驅馳して 一日 閑なり

尋君不遇又空還

君を尋ねて遇わず 又空しく還える

怪來詩思清人骨

怪み來たる 詩思の人骨を清くするを

門對寒流雪滿山

寒流は門に対して 雪は山に滿つ

【語釈】

御…皇帝の側に使える人。驅馳…走り回ること(当時の役人は、9日働き、1日休暇であった)。怪來…あやしむ(「來」は助辞)。詩思…詩を作ろうと思う心。人骨…人
(三体詩)

城西訪友人別墅

城西に友人の別墅を訪ぬ

唐

雍陶

澧水橋西小路斜

澧水橋西 小路斜めなり

日高猶未到君家

日高くして 猶お未だ 君の家に到らず

村園門巷多相似

村園 門巷 多く相い似たり

處處春風枳殼花

処々の春風 枳殼の花

【語釈】

城西：城郭の西。別墅：別荘。澧水：湖南省に源を發し、洞庭湖に注ぐ川。村園：むらぎと。門巷：門とちまた。處處：あちらこちら。枳殼花：からたちの花

(三体詩)

初冬月夜過子俶

初冬の月夜 子俶に過る

清 吳偉業

月色破林巒

月色 林巒を破る

貧家共一灘

貧家 一灘を共にす

門開孤樹直

門 開いて 孤樹 直に

影逼兩人寒

影 逼って 兩人 寒し

淪茗誇陽羨

茗を淪て 陽羨に誇り

論詩到建安

詩を論じて 建安に到る

亦知談笑久

亦た知る 談笑 久しきを

良夜睡応難

良夜 睡り 応に難かるべし

【語釈】

子俶：周肇、太倉州の人。茗：茶。陽羨：茶の名産地。建安：後漢の年号、建安の七賢人、曹操、曹植等により、「建安体」の詩が作られた。

題張氏隱居

張氏の隱居に題す

唐

杜
甫

438

春山無伴獨相求

春山 伴無く 独り相求む

伐木丁丁山更幽

伐木丁々 山 更に幽なり

澗道餘寒歷冰雪

澗道の余寒 冰雪を歴

石門斜日到林丘

石門の斜日 林丘に到る

不貪夜識金銀氣

貪らずして 夜 識る 金銀の氣

遠害朝看麋鹿遊

害より遠ざかりて 朝看る 麋鹿の遊ぶを

乘興杳然迷出處

興に乗じて 杳然 出ずる處に迷い

對君疑是泛虛舟

君に対して 疑うらくは 是れ 虚舟に泛ぶかと

【語釈】

張氏：不詳。丁丁：木を伐採する音、伐木丁丁は詩経により、友を求める意。澗道：谷間の道。餘寒：春になつても残っている寒さ。歴：通る。石門：石で作った堰堤。斜日：夕日。林丘：木の茂る丘。不貪：無欲。金銀氣：土中に埋藏されている金銀から立ちのぼる気。害：世俗の名利の害。麋鹿：鹿の類い。乘興：感興のわくままに。杳然：奥深く遠いこと、ここでは特にぼんやりした気持ちになる様子。出処：ここでは帰路に迷うことと、出処進退に迷うこととをにかけている。虚舟：人の乗っていない舟。

(唐詩選) (杜甫全詩訳注)

◆ 仙釈類

開先寺

開先寺 かいせんじ

明

李夢陽 りむよう

瀑布半天上

瀑布 半天の上 ばくふ はんてん

飛響落人間

飛響 人間に落つ ひきよう じんかん

莫言此潭小

言うこと莫かれ此の潭小なりと な たん

搖動匡廬山

搖動す 匡廬山 きようどう かいろうざん

【語釈】

開先寺：廬山の南麓にあつた寺。半天：中空。人間：人間世界。潭：滝壺。匡廬山：廬山（江西省九江市南部にある名山。峰々が作る風景の雄大さ、奇絶さ、険しさ、秀麗さが古より有名。）。

芙蓉洞

芙蓉洞 ふようどう

明

王守仁 おうしゅじん

巖下雲萬重

巖下雲 万重 がんか ばんちよう

洞口桃千樹

洞口桃 千樹

終歲無人來

終歲 人の来たる無し しゅうさい

惟許山僧住

惟だ許す山僧の住するを た

【語釈】

芙蓉洞：所在地不明。雲萬重：雲が幾重にも重なるさま。

普陀寺

ふだじ
普陀寺

清

えん
枚

一寺蔵山凹

さんおう
一寺山凹に蔵れ

松竹淡如許

かく
松竹淡きこと許の如し

古佛坐無言

げん
古仏坐して言無く

流泉代作語

な
流泉代りて語を作す

【語釈】

山凹…山の凹なる所。淡…淡泊。如許…此の如し。

晚秋破山寺

はざんじ
晚秋破山寺

唐

こう
皎然

秋風落葉滿空山

くうざん
秋風落葉空山に満ち

古殿殘燈石壁間

かん
古寺の殘燈石壁の間

昔日經行人去盡

けいこう
昔日の經行人去り尽くし

閑雲夜夜自飛還

かんうん
閑雲夜々自ずから飛び還る

【語釈】

秋晚…秋の終わり。晚秋。破山寺…江蘇省常熟市の虞山の北嶺下にある。空山…人気がない寂しい山。殘燈…燃えつきかけたともしび。昔日…むかし、往時。經行…禪宗で、座禪中の疲れや、眠けをとるために一定の場所をゆっくり歩くこと。閑雲…しずかに空に浮かぶ雲。

題鶴林寺

題鶴林寺

唐

李

涉

終日昏昏醉夢間

秋日昏々たり 醉夢の間

忽聞春盡強登山

忽ち春尽くるを聞き強いて山に登る

因過竹院逢僧話

竹院に過ぎりて 僧話に逢うに因りて

又得浮生半日閑

又得たり 浮生半日の閑

【語釈】

鶴林寺：旧名・竹林寺。現・江蘇省鎮江の黃鶴山にあつた寺。昏昏：深く眠っているさま。醉夢：酒に酔い、眠つて見る夢、必ずしも本当に酒を飲んで酔っているとは限らない。忽聞：急に…と聞き。にわか…と聞き。春盡：春が尽きようとしている。強：無理に。むりやりに。因…：…という原因のため。過…：…によぎると読む場合は訪れる。竹院…：庭に竹を植えている書院。又…更に。閑…のんびり。
(三体詩)

晚宿山寺

晚に山寺に宿す

金

趙

颯

松間明月佛前燈

松間の明月 仏前の灯

庵在孤雲最上層

庵は 孤雲の最上層に在り

犬吠一山秋意靜

犬吠えて 一山 秋意 静かなり

敲門時 有夜歸僧

門を敲いて 時に 夜帰の僧 有り

【語釈】

秋意：秋の気象と景觀。

宿華頂寺

かちようじ
華頂寺に宿す

清

せんだいきん
錢大昕

442

竹瘦藤枯古石斜

竹^や瘦^せ藤^枯れ古^こ石^{せき}斜^めなり

白雲留護法王家

白^り雲^{ゆう}留^{りゅう}護^ごす法^{ぽう}王^{おう}の家

深山氣候元來別

深^{ふか}山^の気^き候^{こう}元^{げん}來^{らい}別^{べつ}なり

五月初開芍薬花

五^{いつ}月^{げつ}初^{しつ}め^て開^{ひらく}く芍^{しゃく}薬^{やく}花^か

【語釈】

華頂寺…所在不明。留護…留まり護る。法王家…華頂寺のこと。

過香積寺

香積寺に過ぎる

唐

王

維

不知香積寺

香積寺を知らず

數里入雲峰

數里雲峰に入る

古木無人逕

古木人徑無く

深山何處鐘

深山何処の鐘ぞ

泉聲咽危石

泉聲危石に咽び

日色冷青松

日色青松に冷やかなり

薄暮空潭曲

薄暮空潭の曲

安禪制毒龍

安禪毒龍を制す

【語釈】

香積寺：香積寺：長安の南、終南山山中にある寺。古木：冬枯れの木や林。雲峰：雲がかかっている高い峰。人逕：人の通う小径。危石：高くそばだっている石。空潭：人気がない淵。曲：ほとり。安禪：坐禅して雑念を去り、精神を統一すること。毒龍：人を害する龍のことで、人の心に住む邪念をいう

(新釈漢文大系 詩人編 3)

破山寺後禪院

破山寺の後の禪院

唐

常建

444

清晨入古寺

清晨 古寺に入る

初日照高林

初日 高林を照らす

曲逕通幽處

曲徑 幽処に通じ

禪房花木深

禪房 花木深し

山光悅鳥性

山光 鳥性を悦ばしめ

潭影空人心

潭影 人心を空しうす

萬籟此俱寂

万籟 此に俱に寂たり

惟聽鐘磬音

惟だ 聴く 鐘磬の音

【語釈】

破山寺：現在の江蘇省常熟市にある興福寺の別名。清晨：すがすがしい朝。初日：のぼったばかりの太陽。高林：高い林（のこずえ）。曲徑：曲がりくねった小道。幽処：奥深く、静かなところ。禪房：禅堂。山光：朝日を受けた山の色。潭影：深い淵の色。空人心：人の心から雑念を払いのけ、空寂の境地へ引き入れる。万籟：この世のすべてのものが発する音。鐘磬：鐘かねと磬。「磬」は石板を吊り下げてたたく、「へ」の字形の打楽器。

(唐詩選)

同魯直和普安院壁上蘇公詩

魯直と普安院の壁上の蘇公の詩に和す

北宋

晁補之

畏暑聊尋寺

暑を畏れ聊か寺を尋ね

追涼故遶池

涼を追いて故らに池を遶る

雨園鳩喚婦

雨園鳩婦を喚び

風徑燕將兒

風徑燕兒を將いる

散篆縈簾額

散篆簾額を縈り

留雲暗井眉

留雲井眉に暗し

龍蛇動屋壁

龍蛇屋壁に動く

知有長公詩

知る長公の詩有るを

【語釈】

魯直：黄庭堅。普安院：成都にあった寺のようであるが詳細不明。蘇公：蘇軾。聊：なんとなく。雨園：雨模様。庭園。風徑：風が涼しい小路。散篆：香のかおり。簾額：すだれ。井眉：井戸ばたの地。長公：蘇軾。

游山寺

山寺に遊ぶ

元

李^リ

材^{さい}

行行行復止

行き行き 行き 復^また 止まり

行到白雲間

行きて到る 白雲の間

見客意不俗

客を見て 意俗ならず

逢僧心便閒

僧に逢いて 心 便^{すなわ}ち 閑^{かん}なり

細泉分別澗

細泉 別澗^{べっかん}に分かれ

小徑入他山

小徑 他山^とに入る

擬借禪房榻

禪房の榻^とを借りて

追遊信宿還

追遊 信宿^{しんしゆく}して 還^{かえ}らんと 擬^ぎす

【語釈】

澗…谷川。榻…長いす、寝台。追遊…遊び続ける。信宿…再宿、二晩泊まり。

夜投西寺

夜西寺に投ず

明

高啓

447

江月上秋衣

江月 秋衣のほに上る

來敲遠寺扉

來りたた敲く遠寺の扉

栖禽驚客至

棲禽せいきん 客の至るに驚き

睡僕訝僧歸

睡僕すいぼく 僧の帰りしかと訝いぶかる

鐘度行廊盡

鐘は 行廊こうろうを度りて 尽き

燈留浴院微

灯は 俗院ぞくいんに留りて 微かすかなり

非無招旅館

招旅しょうりょの館 無あひきに非あひざるも

禪寂願相依

禪寂ぜんじやく 願わくば 相依そうよらん

【語釈】

栖禽：樹に住む鳥。睡僕：眠っている寺男。行廊：渡り行く廊下。浴院：俗人を泊まらせる寺院の坊。招旅館：客人を待っている旅館。禪寂：禅寺の趣のある寂しさ。

香山寺

香山寺

清

錢謙益

千峰匝匝更分明

千峰あんそう匝匝更あんそうに分明

磻複岡廻一徑清

磻かん複かさな岡めく廻りて一徑清し

天遠夕陽連海色

天遠くして夕陽せきよう海色かいしよくに連なり

山空晚院聚鐘聲

山空しくして晚院鐘聲あつを聚む

雲從石磴中間出

雲に従いて石磴中間より出で

月向香臺下界生

月は香台下界らんかんに向かつて生ず

萬壘煙巒欄檻外

万壘の煙巒欄檻らんかんの外

不知何處與身平

知らず何れの処か身と平かなる

【語釈】

香山寺：洛陽の竜門石窟に面する寺（白居易との関係で名高い）と思われる。匝匝：周り取り囲むさま。磻：谷川。海色：海の色。晚院：夕暮れの寺院。石磴：石段。香臺：香を焚く院。煙巒：霞みにかすむ峰々。

◆ 哀傷類

湖樓題壁

湖樓壁に題す

清

厲鶚

水落山寒處

水は落つ 山寒き処

盈盈記踏春

えいえい とうしゆん
盈々 踏春を記す

朱闌今已朽

しゆらん
朱闌 今 已に朽つ

何況倚闌人

いわ
何ぞ 況んや 闌に倚るの人

【語釈】

湖樓：湖畔の楼。盈盈：水の満ちているさま、美しく形作るさま。踏春：春の野遊び。朱闌：朱塗りの闌干。倚闌人：闌干に持たれていた人、亡くなった愛妾。

邙山

邙山 ほうざん

唐

沈佺期 しんせんき

北邙山上列墳塋

ほくほうざんじょう
北邙山上 墳塋列なり

萬古千秋對洛城

万古千秋 洛城に對す

城中日夕歌鐘起

城中 日夕 歌鐘起る

山上惟聞松柏声

山上 惟だ聞く 松柏の聲

【語釈】

邙山（北邙山）：洛陽の東北十里にある山、王侯公卿を始め多くの人の墓がある。墳塋：土饅頭の墓。萬古千秋：永遠に、長い時間。洛城：洛陽。日夕：夕方。歌鐘：歌と伴奏の鐘の音。松柏：松とコノテガシワ、墓地によく植えられる。
(唐詩選)

江樓書感

江樓にて感を書す

唐

趙嘏

獨上江樓思渺然

独り江樓に上ぼれば 思い渺然たり

月光如水水連天

月光是水の如く 水は天に連なる

同來翫月人何處

同に來たりて月を翫し 人は何れの処ぞ

風景依稀似去年

風景は依稀として 去年に似たり

【語釈】

江樓：川辺の高樓。渺然：果てしなく広がる。果てしないさま。如水：水のように
冴えわたたる。水連天：川の水は大空まで続いている。翫月：月を眺めて楽しむこ
と。依稀：はつきりしないがくだ。
(唐詩選)

哀孟寂

孟寂を哀れむ

唐

張籍

曲江院裏題名處

曲江院裏 名を題せし処

十九人中最少年

十九人中 最少年

今日風光君不見

今日 風光 君 見えず

杏花零落寺門前

杏花 零落す 寺門の前

【語釈】

孟寂：不詳、進士合格同期生？。曲江院裏：慈恩寺、科擧及第者は、曲江で宴を開き、慈
恩寺大雁塔に名を記する習慣があった。風光：景色。零落：凋んで落ちる。
(三体詩)

悼亡

悼亡 とうぼう

清

王士禛 おうししん

藥爐經卷送生涯

藥爐 經卷に生涯を送り

禪榻春風兩鬢華

禪榻の春風に 兩鬢りょうびんの華か

一語寄君君聽取

一語 君に寄す 君聽取ちようしゆせよ

不教兒女衣蘆花

兒女をして 蘆花きを衣せしめず

【語釈】

悼亡：先立った妻を悼んで、靈前に誓った詩。藥爐：薬を煎じる炉、転じて鬪病生活。經卷：お経、転じて仏教の信仰生活。禪榻：坐禅用の腰掛け、禪寺。鬢華：白髪混じりの鬢。一語：ひとこと。寄君：あなたに言っておく。聽取：耳を傾ける。聴き取る。蘆花：綿に似ているが本物の棉ほど暖かくない、安価な蘆の穂綿。結句は、再婚して、継子いじめはさせないという意。
(漢詩大系23)

◆ 図画類

倪雲林畫

倪雲林の画 げおうりん

明

卞 へん
同 どう

雲明見山高

雲明かにして 山の高きを見る

木落知風勁

木落ちて 風の勁きを知る つよ

亭下不逢人

亭下 人に逢わず

斜陽澹秋影

斜陽 秋影 澹し あわ

【語釈】

倪雲林：倪瓚、元代の画家、元末四大家の一人、江蘇省無錫の人。勁：強い。秋影：秋の日光の光。

惠崇春江晚景

えすう しゅんこうばんけい

北宋

蘇軾

竹外桃花三兩枝

ちくがいのとうかさんりょうし

春江水暖鴨先知

しゅんけいみずあたたかかも

蒹蒿滿地蘆芽短

りゅうこうは地に満ち蘆芽は短かし

正是河豚欲上時

まさにはれかとのぼるかとんと欲する時

【語釈】

惠崇：…宋初の画僧。建陽（福建省）の人。北宋山水画の三大家の一人で、特に雁・鷺・鳥などの絵を得意とした、また、詩人でもあり、九僧の一人としても知られる。竹外：竹の生えている向こう側。桃花：桃の花。三兩枝：二、三の枝。春江：春の川。水暖：水がぬるくなる。鴨：鴨の群れ。先知：…真つ先に感知する。蒹蒿：…よもぎの一種、フグの毒を消すという。鴨地：一面に生い茂る。蘆芽：蘆：あしの芽、フグの毒を消すという。短：…まだ短い。正是：ちょうど今である。河豚：フグ。欲上時：川をさかのぼってくる時期。（漢詩大系17）

書李世南所畫秋景

りせいなんのえがく所のしゅうけいにかきす

宋

蘇軾

野水參差落漲痕

やしずさんしやくちやうせんし

疎林欹倒出霜根

そりんきとうしつせん

扁舟一棹歸何處

へんしゅういつせういずこにかかへる

家在江南黃葉村

家は江南黄葉の村に在り

【語釈】

李世南：…北宋の画家、字は唐臣、山水画に巧み。野水：野中の流れ。參差：長短不揃いのさま。落：減る。漲痕：増水時、水が漲った時の痕かた。疎林：樹木のまばらな林。欹倒：…かたむきたおれたさま。敬：…かたむく霜根：霜の降りた。扁舟：小舟。棹：さお。江南：…長江下流の南側の地方。（中国詩人選集二―6）

題秋江圖

秋江の図に題す

明

倪瓚

長江秋色渺無邊

長江の秋色 渺として 辺無し

鴻雁來時水拍天

鴻雁 來る時 水 天を拍つ

七十二灣明月夜

七十二灣 明月の夜

荻花楓葉覆漁船

荻花 楓葉 漁船を覆う

【語釈】

秋色：秋景色。渺：遙かです。果てしないさま。鴻雁：秋に来る渡り鳥である雁、大なるを鴻、小なるを雁という。七十二：天地陰陽五行のなので数の多いことを言うのに使う。

題畫

画に題す

明

沈周

楚江秋淨水云云

楚江 秋 淨くして 水 云々

江上青山多白雲

江上の青山 白雲 多し

手把蘋花却惆悵

手に 蘋花を把りて 却つて 惆悵す

無人作伴賽湘君

人の 伴を作して 湘君に賽する 無し

【語釈】

楚江：長江下流、湖南、湖北省一帯の流れ。云云：水が盛んに流れるさま。蘋花：浮き草の花。惆悵：嘆き悲しむさま。湘君：堯帝の娘で舜の妃となった二人、舜の死を悲しんで、湘江に入水した、君山に祠がある。

沈華坪春江曉渡圖

沈華坪の春江曉渡の図

清

王文治

梅花落後杏花紅

梅花落つる後 杏花紅なり

輕暖輕寒二月中

輕暖 輕寒 二月の中

誰洗琉璃鋪萬頃

誰か 琉璃を洗い 万頃に鋪く

一颿如燕翦東風

一颿 燕の如く 東風を翦る

【語釈】

琉璃：七宝のひとつ、水の碧色に喩える。萬頃：広大な広さ。一颿：一帆。

樊圻畫

樊圻の画

清

王士禛

蘆荻無花秋水長

蘆荻 花無く 秋水長し

澹雲微雨似瀟湘

澹雲 微雨 瀟湘に似たり

雁聲搖落孤舟遠

雁声 搖落 孤舟遠し

何處青山是岳陽

何れの処の青山 是れ 岳陽

【語釈】

蘆荻：あしとおぎ。澹雲：淡く薄い雲。瀟湘：瀟水と湘水が合流して洞庭湖に流れ込む地域。揺落：揺れ落ちる。木の葉などが風を受けてひらひら落ちること。岳陽：湖南省岳陽市。

(漢詩大系23)

題畫

画に題す

清施閨章

老嬾何心汎五湖

老嬾ろうらい何の心ぞ五湖ごこに汎汎ぶ

山根時繫釣船孤

山根さんこん時に繫つなぐ釣船ちようせん孤こなり

白雲忽向前溪過

白雲たちま忽たちまち前溪ぜんせきに向つて過くぐ

屋角青山半有無

屋角の青山な半なかば有無

【語釈】

老嬾：年老いて懶い身。五湖：越王勾踐の軍師であつた范蠡が、世を避けて去つた湖。山根：山の麓。屋角：家の角。半有無：ほんやりとして、半ば、在るか無いかのように見えること。

題秋林放鶴圖

秋林に鶴を放つ図に題す

清黃任

我在林泉汝在陰

我は林泉りんせんに在り汝なんじは陰かげに在り

空山流水結知音

空山くうざん流水りうすい知音ちいんを結むすぶ

一聲清唳一長嘯

一聲せいいれいの清唳せいいれい一長嘯ちようしやう

各有丹霄萬里心

各おのおの丹霄たんしやう万里の心おの有り

【語釈】

汝：鶴のこと。陰：幽隱の所。空山流水：鐘子期が伯の弹琴を聴き、「高山流水の如し」とその美妙なる音を聞き分けて知つたと言う故事による。知音：知己。清唳：鶴の鳴き声。長嘯：長く声を引いて嘯く。丹霄：紅い色の大空。

題王安節畫

王安節の画に題す

清 李 漁

家住寒山過客稀

家は寒山に住して過客稀なり

一林風雨夢回初

一林の風雨夢 回る初め

道人日課無餘事

道人の日課 余事無し

了却彈琴便讀書

彈琴を了却すれば 便ち書を読む

【語釈】

王安節：王槩、清の康熙年間に南京で活躍した文人、画家。詩文・画・篆刻にすぐれ、画は大幅の山水画を得意とし、人物・花鳥画も善くした。過客：訪れる客。夢回：夢が醒める。道人：老仏の道を修めて悟った人。了却：終わる、却は完了を示す助字。

晁補之所藏與可畫竹

北宋

蘇軾

晁補之ちやうほしの蔵する所の與可よかの画竹に書す

與可畫竹時

與可よか 竹を画く時

見竹不見人

竹を見て 人を見ず

豈獨不見人

豈あに独り 人を見ざるのみならんや

嗒然遺其身

嗒然とうぜんとして 其の身を遺るや

其身與竹化

其の身 竹と化し

無窮出清新

無窮 清新を出す

莊周世無有

莊周は 世に有る無し

誰知此疑神

誰か知らん 此の疑神ぎようしん

【語釈】

晁補之：中国北宋の文人。蘇軾の門下となり、黄庭堅・秦觀・張耒とともに「蘇門四学士」と称された。與可：文同の字、北宋中期の官僚、墨竹画家、蘇軾の竹の絵の師。嗒然：我を忘れるさま。莊周：荘子のこと、心と物とが一体となることを説いたもの、疑神：神業。

(漢詩大系17)

◆ 詠物類

玩月

月を玩ぶもてあそぶ

清

許きよ
權けん

一種月團圓

一種の月だんらん
團圓

照愁復照歡

愁を照らし復た歡を照らす

歡愁兩不著

歡愁 両つながら着つけず

清影上闌干

清影 闌干のぼりに上る

【語釈】

團圓：丸いこと。闌干：…てすり。

梅花

梅花ばいか

北宋

王安石おうあんせき

牆角數枝梅

牆角しょうかく 數枝すうしの梅

凌寒獨自開

寒かんを凌しのぎて 獨自ひとりに開く

遙知不是雪

遙はるかに知る 是れ雪ならざるを

爲有暗香來

暗香あんこうの 来あたれる 有あるが為ためなり

【語釈】

牆角：垣根のかど。牆：垣根。凌：しのぐ寒：さむさ。獨自：じぶんひとり。遙知：はるかに離れていても分かる。不是：…はくではない。爲有：…があるため。暗香：どこからともなく漂ってくる香り。

(宋詩選)

獨柳

獨柳 どくりゅう

唐

杜 と
牧 ぼく

含煙一株柳

煙を含む 一株の柳

拂地搖風久

地を払い 風に搖ること久し

佳人不忍折

佳人 折るに忍びず

悵望回纖手

悵望して 纖手を回らす

【語釈】

獨柳：ぼつんと一本だけあるヤナギ。煙：霞や霧。拂地：柳の枝が風にゆれて、地面を掃き払うようなさまを謂う。悵望：悲しげに眺めやる。纖手：細い手。

旭日

旭日 きょくじつ

宋

太 たい
祖 そ

太陽初出光赫赫

太陽初めて出でて光 赫々 かっかく

千山萬山如火發

千山 万山 火の発するが如し

一輪頃刻上天衢

一輪 頃刻 天衢に上る けいこく てんく

逐却羣星與殘月

郡星と残月とを逐却す ちくきやく

【語釈】

赫赫：光の盛んに輝くさま。天衢：天の中央である日の経路。頃刻：僅かな時間。逐却：追い払う、却是完了を示す助字。羣星・残月：群雄に比す。

梅花絶句

梅花絶句

南宋

陸游

聞道梅花圻曉風

聞道きくならく梅花うすたか曉風あまねに圻ひらくと

雪堆遍滿四山中

雪はなん堆ほうくして遍あまねく滿しざんつ四山うちの中

何方可化身千億

何なんの方ほうか身みを千億ちぢに化して

一樹梅花一放翁

一樹いちの梅花ほう一放翁ほうなるべき

【語釈】

聞道：聞くところによれば。圻：開く。放翁：陸游の号。
(漢詩大系19)

雪梅

雪梅せつばい

南宋

方岳

有梅無雪不精神

梅有りて雪無ければ精神ならず

有雪無詩俗了人

雪有りて詩無ければ人を俗了す

薄暮詩成天又雪

薄暮詩成って天又雪ふる

與梅併作十分春

梅と併なわせて十分の春を作す

【語釈】

精神：生氣、光彩があつて美しいこと。俗了：俗化してしまう、無学、無風流なものとしてしまう。十分春：完全な春。
(漢詩鑑賞事典)

梅花

梅花 ばいか

元

王冕 おうべん

吹徹瑤笙鶴未還

ようしよう 瑤笙を吹き徹して鶴未だ還らず かえ

小橋流水碧潺潺

小橋流水 碧 潺潺 みどり せんせん

夜深夢醒推窗看

夜深く夢醒めて窓を推して看れば

白月無痕雪滿山

白月痕 無く雪山に満つ こん

【語釈】

吹徹：吹き尽くす。瑤笙：玉で作った笙の笛。潺潺：浅い水の流れるさま、さらさら。白月：冬の寒い月。痕：傷跡。

盆梅

盆梅 ほんばい

清

宋樹穀 そうじゆかく

數枝也復影横斜

數枝 也復影 横斜 またまた おうしや

惹得羈人鄉夢賒

羈人の郷夢を惹き得て 賒なり きじん きようむ ひ はるか

抛却西溪千樹雪

西溪 千樹の雪を抛却して ほっせやく

瓦盆三尺看梅花

瓦盆 三尺の梅花を見る がほん

【語釈】

羈人：旅人。郷夢：故郷を思う夢。抛却：抛つ、投げ捨てる、却は完了を示す助字。

折楊柳

せつやうりゅう
折楊柳

唐

ようきよげん
楊巨源

水辺楊柳翹塵糸

水辺の楊柳 翹塵の糸

立馬煩君折一枝

馬を立め 君を煩わして 一枝を折る

惟有春風最相惜

惟だ 春風の最も相惜しむ有り

殷勤更向手中吹

殷勤に更に手中に向って吹く

【語釈】

折楊柳：樂府題、「楊柳」は、やなぎの総称、もともと送別に際し、楊柳の枝を折って輪にし、贈る習慣があった。水辺：岸辺。翹塵糸：若芽を吹いた柳の細い枝が黄緑色の糸のように見えること。立馬：馬を駐とどめること。惟有：ただくだけである。春風最相惜：春風が柳の枝との別れを惜しむかのように。殷勤：ねんごろに。向手中：手の中で、「向」は、ここでは「く」にむかつて」の意ではなく、「くで」の意を表す。

隋堤柳

ずいてい
隋堤の柳

唐

と ぼく
杜牧

夾岸垂楊三百里

きょうがん すいりょう
夾岸の垂楊 三百里

祗應圖畫最相宜

た とうが
祗だ 応に 図画に 最も相宜しかるべし

自嫌流落西歸疾

みずか いと りゅうらく
自ら嫌う 流落 西歸の疾きを

不見東風二月時

見ず 東風 二月の時

【語釈】

隋堤柳：隋の煬帝が運河を開削し、黄河と長江を繋いでその兩岸に植えた柳。夾岸：兩岸、川を差し挟む岸の意。祗：まさしく。相宜：ふさわしい。西歸：長安に帰るの意。東風：春風。二月時：しだれ柳の最も美しい時期。
(新釈漢文大系 詩人編 9)

和春卿學士柳枝詞

春卿學士の柳枝詞に和す

宋

韓琦

樓前輕雪未全銷

樓前の輕雪 未だ全く 銷ぜざるに

偷得春光入嫩條

春光を偷み得て 嫩條に入る

似向東風猶旅拒

東風に向つて 猶お 旅拒するに似て

可能渾忘舞時腰

能く 渾て 舞時の腰を 忘るべけんや

【語釈】

柳枝詞：柳を詠ずる詞。銷：消える。偷：こっそり盗む。嫩條：柔らかい枝。旅拒：柔らかに媚びて美しいさま。

和孔密州東欄梨花

孔密州の東欄の梨花に和す

北宋

蘇軾

梨花淡白柳深青

梨花は淡白にして 柳は深青

柳絮飛時花滿城

柳絮 飛ぶ時 花城に満つ

惆悵東欄一株雪

惆悵す 東欄 一株の雪

人生看得幾清明

人生 看得るは 幾清明

【語釈】

孔密州：密州の刺史であつた孔宗翰。東欄：密州の官舎の東側の欄干。梨花：梨の花。淡白：淡い白色。深青：深い緑色。柳絮：柳の白い綿毛のついた種子。花滿城：町は花ですっかり埋まってしまう。城：城壁で囲まれた町。惆悵：嘆き悲しむこと。傷み悲しむこと。東欄：密州の官舎の東側の欄干。株雪：一本の梨の木の花を雪に喩えている。清明：二十四節気の一つ。春分から十五日目。看得：見ることができると。

(漢詩大系17)

曲江春草

曲江の春草

唐

鄭谷

花落江堤蔭暖煙

花落ちて江堤暖煙蔭る

雨餘草色遠相連

雨余の草色遠く相連なる

香輪莫輾青破

香輪青々を輾り破る莫かれ

留與遊人一醉眠

遊人に留与して一醉眠せしめよ

【語釈】

曲江：西安の東南にある池の名称。江堤：川のつつみ。暖煙：春のもや。雨餘：雨あがり。雨後に同じ。香輪：高貴な人の車。輾破：ひきつぶす。破は助字。青青：青く生茂つたさま。留與：とどめ残す、與は助字。遊人：職を持たず、遊び暮らす人。
(三体詩)

十日菊

十日の菊

唐

鄭谷

節去蜂愁蝶不知

節去り蜂愁うるも蝶は知らず

曉庭還繞折殘枝

曉庭還た繞ぐる折殘の枝

自緣今日人心別

自ずから今日人心の別なるに縁る

未必秋香一夜衰

未だ必ずしも秋香は一夜に衰えず

【語釈】

十日菊：重陽の節句の翌日の菊をいう。節去：重陽が過ぎたことをいう。蜂愁蝶不知：蜂は重陽が過ぎたことを知り、蝶は知らぬ。曉庭：明け方の庭。還繞：蝶が菊の周りを飛ぶ。折殘枝：重陽が過ぎ、折れ損なわれた菊のこと。人心別：重陽が過ぎると誰も菊に見向きもしないのは、人の節に重きをおくがためなり。菊が変わるわけではない。秋香：菊の香り。重陽が過ぎても菊の香りに変わりはない、一日過ぎたとしても十分に賞するに値する。

菊花

菊花

唐

白居易

一夜新霜著瓦輕

一夜新霜瓦に着きて輕し

芭蕉新折敗荷傾

芭蕉は新たに折れて 敗荷は傾く

耐寒惟有東籬菊

寒に耐うるは 惟だ 東籬の菊のみ 有りて

金粟花開曉更清

金粟の花は 開きて 曉更に清し

【語釈】

敗荷：枯れて破れた蓮の葉。東籬菊：陶潜の「飲酒其の五」に基づく。金粟…キンモクセイのことだが、ここでは菊の花の色。

放魚

魚を放つ

唐

寶翬

金錢贖得免刀痕

金錢 贖い得て 刀痕を免れしむ

聞道禽魚亦感恩

聞道く 禽魚も 亦た 恩に感ずると

好去長江千萬里

好し去れ 長江 千万里

不須辛苦上龍門

須いず 辛苦して 龍門に上るを

【語釈】

刀痕：刀キズ。ここでは、包丁で切られること。聞道：聞くところによれば。上龍門…龍門は黄河の上流にあり、鯉がそれを登ると龍になるといふ、「登竜門」の語源。

失鶴

鶴を失う

唐

陸龜蒙
りくきもう

養汝由來歲月深

汝を養う 由來 歲月 深し

籠開不見意沈沈

籠開きて 見えず 意 沈々

想應只在秋江上

想う 応に 只だ 秋江の上に在るべし

明月蘆花何處尋

明月 蘆花 何れの処にか 尋ねん

【語釈】

○由來…以来。○沈沈…心が憂鬱なさま。○應…「まさにすべし」と読み、「きつとくであるにちがいない」の意。

鷺鷥

鷺鷥
ろじ

唐

杜牧
と ぼく

雪衣雪髮青玉觜

雪衣 雪髮 青玉の觜
せつい せつぱつ し

羣捕魚兒溪影中

群れて 魚兒を捕らう 溪影の中
ぐん ぎよじ けいえい

驚飛遠映碧山去

驚き飛びて 遠く 碧山に映じて去る
おどろ へきざん

一樹梨花落晚風

一樹の梨花 晩風に落つ
りか

【語釈】

鷺鷥…さぎ。雪衣雪髮…頭の毛を含めて身が白いこと。觜…鳥のくちばし。溪影…谷に射す光。映…映える。
(新釈漢文大系 詩人編 9)

歸雁

歸雁 きがん

唐

錢起 せんき

瀟湘何事等閑回

瀟湘より何事ぞ等閑に回える

水碧沙明兩岸苔

水は碧に沙は明らかにして 兩岸苔むす

二十五絃彈夜月

二十五絃 夜月に弾ずれば

不勝清怨却飛來

清怨に勝えずして 却飛し來たる

【語釈】

瀟湘：瀟水と湘江。洞庭湖に南から流れこむ二つの川の名、ここでは、この二つの川の流域一帯を指す。何事：：どういうわけで。等閑：：心にかけない。水碧：：水は青く澄んで。沙明：：砂は白く輝いて。兩岸苔：：両方の岸にはみずみずしい苔が生じている。二十五絃：：二十五弦の瑟（おおごと）。清怨：：清らかで哀怨な調べ。清く哀れな音。不勝：：堪えきれず。却飛來：：南方の瀟湘から北方へ飛び帰ること。「來」は助辞、意味はない。
(唐詩選)

蘆雁

蘆雁

金

元好問 げんこうもん

江湖牢落太愁人

江湖牢落 太だ人を愁えしむ

同是天涯萬里身

同じく是れ天涯 万里の身

不似畫屏金孔雀

似ず 画屏の金孔雀

離離花影澹生春

離々たる花影澹として 春を生ずるに

【語釈】

江湖：世間。牢落：志を得ないこと。畫屏：絵を描いた美しい屏風。離離：花の美しさ。澹：やすらか、淡い。

喜雪

雪を喜ぶ

清

查慎行
さしんこう

雲氣低迷海氣昏

雲氣低迷して海氣昏し

窮陰連日暗孤村

窮陰連日 孤村に暗し

兒童起報夜來雪

兒童 起ちて報ず 夜來の雪

九十九峰齊到門

九十九峰 齊しく 門に到る

【語釈】

雲氣：雲のように空中に現れる気、雲。海氣：海の気、海霞。窮陰：年末におしせまつて曇ること。孤村：一つの離れた村。九十九峰：数多くの峰。

蚊

蚊

清

黃中堅
こうちゅうけん

斗室何來豹脚蚊

としつ なんらい ひょうきやく
斗室 何來 豹脚の蚊

殷如雷鼓聚如雲

いん 雷鼓の如く 聚ること 雲の如し

無多一點英雄血

多無き 一点英雄の血

閑到衰年忍付君

かん 閑に 衰年に到りて 君に付するに 忍びんや

【語釈】

斗室：一斗マスの程の狭さ。何來：何処からきたのか。豹脚蚊：豹のような脚のある蚊。殷：盛んに音楽を奏する。雷鼓：雷の音。無多：多くない（貴重な）。英雄：戯れて自分のことを言う。

廢宅

廢宅

唐

吳

融

470

風飄碧瓦雨摧垣

風は碧瓦を飄えして雨は垣を摧く

却有隣人爲鎖門

却つて隣人の為に門を鎖す有り

幾樹好花閑白晝

幾樹の好花白晝に閑かに

滿庭荒草易黃昏

滿庭の荒草黃昏なり易し

放魚池涸蛙爭聚

放魚池は涸れて蛙争い聚まり

棲燕梁空雀自喧

棲燕梁は空しくして雀自ずから喧し

不獨淒涼眼前事

独り淒涼眼前の事のみならず

咸陽一火便成原

咸陽一火便ち原と成る

【語釈】

飄：吹き落とす。碧瓦：青色の瓦。黃昏：たそがれ。放魚池：魚を放つべき池。棲燕梁：燕を棲ませるべき梁。淒涼：寂しいさま。咸陽：秦の都。一火：項羽が放った火は三ヶ月燃え続けた。

山園小梅

山園小梅 さんえんしょうばい

北宋

林逋 りんぼ

衆芳搖落獨暄妍

衆芳 搖落して 独り暄妍 しゅうほう しょうらくして ひとり せんげん

占盡風情向小園

風情を占め尽くして 小園に向こう

疎影橫斜水清淺

疎影橫斜 水清淺

暗香浮動月黃昏

暗香浮動 月黃昏

霜禽欲下先偷眼

霜禽下らんと欲して 先ず眼を偷み そうきん くだらんと 欲して 先ず 眼を ぬす

粉蝶如知合斷魂

粉蝶如し知らば 合に魂を断つべし まひ ごとく 魂を 断つべし

幸有微吟可相狎

幸いに微吟の 相狎るべき有り あいな 相狎るべき有り

不須檀板共金尊

須いず檀板と 金尊を共にするを もち だんばん と 金尊を共にするを

【語釈】

衆芳：多くのかがわしい花。暄妍：あたたかくうつくしい。横斜：斜めにのびた枝。暗香：どこからともなく漂ってくる香り。霜禽：霜がれどきの鳥、白い鳥。粉蝶：白い蝶。偷眼：ぬすみ眼でみる。斷魂：びつくりする。檀板：楽器。梅檀の木で作る歌の調子をとる板。金尊：黄金の酒樽、りっぱな酒樽。
(漢詩鑑賞事典)

梅花

梅花

明

高啓

瓊姿只合在瑤臺

瓊姿只合に瑤台に在るべし

誰向江南處處栽

誰か江南に向かつて処々に栽えたる

雪滿山中高士臥

雪満ちて山中高士臥し

月明林下美人來

月明らかにして林下美人來る

寒依疎影蕭蕭竹

寒は依る疎影蕭々の竹

春掩殘香漠漠苔

春は掩う殘香漠々の苔

何郎去自好詠無

何郎去つて自り好詠無し

東風愁寂幾回開

東風愁寂幾回か開く

【語釈】

瓊姿：清らかに美しい姿（梅のこと）、瑤台：仙人の住むうてな。江南：長江の南側の地方、江蘇、安徽、江西省の地域。高士：高尚な人（梅のこと）。美人：梅をさす。依：寄り添う。疎影：疎らな花の陰。蕭蕭：物寂しい様。殘香：花が落ちた後の香。漠漠：一面に広がっているさま。何郎：梁の詩人の何遜、揚州の官舎にあつた梅を見たいばかりに、転勤した。愁寂：寂しいこと。

（漢詩大系21）

漁翁

漁翁

南宋

陸游

473

江頭漁家結茆廬

江頭の漁家 茆廬を結ぶ

青山當門書不如

青山門に当たつて画も如かず

江烟淡淡雨疏疏

江煙 淡々として 雨疏々たり

老翁破浪行捕魚

老翁 浪を破り 行きて 魚を捕う

恨渠生來不讀書

恨むらくは 渠が 生來 書を読まず

江山如此一句無

江山 此の如く 一句無きを

我亦衰遲慚筆力

我も亦た 衰遲 筆力を慚ず

共對江山三嘆息

共に 江山に對し 三嘆息す

【語釈】

茆廬：茅葺きの粗末な家。江烟：川面にかかる霧。淡淡：うすくあつさりしているさま。
疏疏：まばらなさま。衰遲：老衰。

(漢詩大系 宋詩選)

猛虎行

もうこう
猛虎行

明
高啓

陰風吹林烏鵲悲

陰風 林を吹いて 烏鵲 悲し

猛虎欲出人先知

猛虎 出んと欲して 人 先ず知る

目光瞳瞳當路坐

目光 瞳々として 路に当たりて 坐す

將軍一見弧矢墮

將軍 一たび見て 弧矢 墮つ

幾家插棘高作門

幾家か 棘を 插みて 高く門と作す

未到日沒收豬豚

未だ 日沒に到らざるに 豬豚を收む

猛虎雖猛猶可喜

猛虎は 猛なりと 雖も 猶お喜ぶべし

横行只在深山裏

横行 只だ 深山の裏に在り

【語釈】

陰風：寂しく陰気な風。烏鵲：カラスとカササギ。瞳瞳：日の輝くがごとく光るさま。弧矢墮：一つの矢を放った（飛將軍李広をいう）。插棘高作門：荆棘を差し挟んで門を作り、虎の侵入を防ぐ。

日本刀歌

日本刀の歌

北宋

歐陽修
おうえうしゅう

昆夷道遠不復通

昆夷は道遠くして復た通ぜず

世傳切玉誰能窮

世に伝うる切玉誰か能く窮めん

寶刀近出日本國

宝刀近く出ず日本國

越賈得之滄海東

越賈は之を滄海の東に得たり

魚皮裝貼香木鞞

魚皮に装貼す香木の鞞

黃白閑雜鋤與銅

黃白閑雜す鋤と銅と

百金傳入好事手

百金伝えて入る好事の手

佩服可以禳妖兇

佩服し以て妖兇を禳うべし

傳聞其國居大島

伝え聞く其の國大島に居り

土壤沃饒風俗好

土壤沃饒にして風俗好し

其先徐福詐秦民

其の先に徐福は秦民を詐り

採藥淹留卅童老

藥を採り淹留し卅童老ゆ

百工五種與之居

百工五種は之と居り

至今器玩皆精巧

今に至るまで器玩は皆精巧

前朝貢獻屢往來

前朝は貢獻して屢しば往來し

士人往往工詞藻

士人は往々にして詞藻を工にす

徐福行時書未焚

徐福行く時書未だ焚けず

逸書百篇今尚存

逸書百篇今尚お存す

令嚴不許傳中國

令嚴にして中國に伝うるを許さず

舉世無人識古文

世を拳って人の古文を識る無し

先王大典藏夷貊

先王の大典夷貊に蔵し

蒼波浩蕩無通津

蒼波そうは 浩蕩こうとうし 津つに通ずる無し

令人感激坐流涕

人ひとをして 感激きんきし 坐まに 涕なみだを流さしむ

鏞溢短刀何足云

鏞せいじゆう溢の短刀たんとは何ぞい云うに足らん

【語釈】

昆夷：えびす。不復通：交易や往来がずっと途絶えている。・切玉：昆吾（こんご）産の宝刀の名。誰能：だれか。：がきようか、だれも：できまい。窮：つきつめたずねる。越賈：現・浙江省の商人。得之：これを手に入れる。滄海東：青い海の東の方。日本のことを指す。魚皮：鮫（さめ）の皮。鮫肌。香木鞞：香木のサヤ。閑雜：混ざる。鍮與銅：真鍮と銅。百金：大金。傳入：輸入する。好事手：好事家の手中。佩服身につける。（可以：…することができ。禳：神を祀って災いを祓う。妖凶：凶事。傳聞：伝え聞く（ところでは：だそうだ）。其國：その国、日本を指す。居：おく。大島：日本の国土を指す。沃饒：地が肥えて作物が多く採れる。其先：日本人の先祖。徐福：秦・始皇帝の時代の人物、仙薬を取りに行くと称して、東海に船出した。採藥：仙薬を採取する。淹留：久しくとどまる。舛童：髪をあげまきにした幼童、徐福が連れて行った児童を指す。百工：各種の職人。五種：五穀の種子。器玩もてあそび物。前朝：一つ前の王朝、唐。貢獻：みつぎ物をたてまつる。士人：学問・修養をつんだ人。往往：つねづね。工：巧みである。詞藻：文章の修辭。行時：出かけた時。書未焚：秦・始皇帝による焚書坑儒がまだ実施されていない時。逸書：昔の書物で世の中からなくなったもの。今尚存：今なお、（日本では）伝えられている。中國：文明中国。舉世：世の中こぞって。古文：中国の古い文字や文章。先王：古代帝王。大典：重要な書物。立派で部数の多い書物。夷貊：東北方の未開人、ここでは、日本を指す。蒼波：あおい波。浩蕩：水の広々としているさま。通津：渡し場。令人：人に：させる。坐：そぞろに、何とはなしに。流涕：涙を流す。鏞溢：さび、さびがつく。何足：…するに及ばない。

<http://www5a.biglobe.ne.jp/~shici/fusang08.htm>